平成 30 年度聖隷クリストファー大学大学院

リハビリテーション科学研究科　修士論文

障害を持った人の役割獲得に向けた支援方法についての一考察
―障害経験を活かした役割を持つ人へのインタビューを通じて―

リハビリテーション科学研究科

地域作業療法開発学

氏名　神田太一

論文要旨

障害を持った人の役割獲得に向けた支援方法についての一考察
―障害経験を活かした役割を持つ人へのインタビューを通じて―

リハビリテーション科学研究科 地域作業療法開発学
氏名　神田太一

【研究の背景】

障害を持った人にとって、障害が生じたことによる役割の喪失は、心理面への影響のみならず人生へも大きく影響するため、作業療法において、障害を持った人が役割を獲得していくことは治療の対象となっている。予備調査より、障害経験を活かした役割の創造が、障害をもった人にとって自己肯定感を持てる一つ方法であると考えた。

【目的】

障害経験を活かした役割の獲得に至った人を対象とし、障害を持つ以前の生活からはじまり、障害を持ち、障害経験を活かした役割活動に至るまでの語りを聴取し、その結果を分析することで、障害経験を活かした役割の獲得に至る過程を明らかにし、障害を持った人の役割獲得の支援方法についての考察を行うことを目的とした。

【研究方法】

障害経験を活かした役割を持つ 8 名の方を対象とし、障害を持つ以前の生活から障害経験を活かした役割獲得に至るまでの語りを聴取し、聴取した内容から逐語録を作成し、作成した逐語録から抽出したコンセプトの類似性と差異性の比較検討を行い、カテゴリを抽出した。抽出したカテゴリを時間軸と各カテゴリの関係性から、障害経験を活かした役割の獲得過程を表す、障害経験を活かした役割の獲得に至る過程まとめ図を作成した。

【結果】

障害経験を活かした役割を獲得する過程においては、障害を持った人は発症により役割や障害に対する否定的な認識を持ちながらも、役割に対する願望や肯定的な認識を持つことで役割の獲得に至っていたことが分かった。また、役割に対する願望や役割に対する肯定的な認識を持つようになる背景には、障害に対する願望や障害に対する肯定的な認識を持てたこと、他者・社会から肯定的な期待感や肯定的なサポートを受けていたことが分かった。一方、障害を持った人が役割を獲得することを困難にする背景として、障害に対する否定的な認識や他者・社会からのサポートが無いこと、他者・社会から否定的な期待感があることが分かった。他者・社会との関係については、障害を持った人は発症により他者・社会との関係に摩擦があると認識を持っていたが、役割を獲得する過程において、他者・社会への願望や肯定的な認識を持つように変化していたことが分かった。

【考察】

今回の結果は、役割獲得とは自己と他者・社会との関係から生まれ、その双方が持つ意図の調和から成るものであると言える、作業療法学における役割獲得の概念だけでは説明のできない、新たな視点であったといえるのではないか。この新たな視点とは、外的期待（社会や他者からの期待）が低いことで内的期待（個人が自らに求める期待）が高まらず役割を獲得することが困難になること。他者・社会からの外的期待に照準を合わせず、内的期待を高めることで役割獲得が可能となることだと考える。内的期待が高まらず役割を獲得することが困難になることについては、他者・社会が持つ低い外的期待との調整を図り、その低い外的期待に照準を合わせてしまうことで内的期待が低くなり、障害や役割に対して否定的な認識を持ってしまうことが、役割獲得の阻害因子となっているのではないだろうか。そして役割を獲得するためには、他者・社会が持つ低い外的期待との調整を図り、低い外的期待に照準を合わせないことが、役割獲得に必要なのではないだろうか。次に、内的期待を高めるには、障害経験による知識を他者へ伝えアドバイスができることや、障害経験による想いをもとに他者・社会に変革を起こせる可能性があることに価値を見出せることが効果的であり、障害経験による価値を見出せることで障害や役割に対する否定的な認識が肯定的な認識に変化する必要があると考える。また、他者・社会からの肯定サポートや肯定的な期待感があることでも、内的期待が高くなることから、障害を持った人は障害経験による価値を持っていることを他者・社会が認識し、障害を持った人に対して期待を持つことが必要であると考える。

作業療法士が障害を持った人の役割獲得に向けた支援を行う際は、障害を持った人の障害経験による価値を見出し、役割に結びつける支援を行うことが望まれると考えた。そしてその結果、社会全体が障害に対して肯定的な認識を持てるようになることで、障害を持った人に対して低い期待を持たない社会、つまりは障害経験による価値を認識した社会となることで、障害を持った人が豊かに暮らせる社会となることを目指すことが望まれるのではないだろうか。そして、障害を持った人が充実感を持って生活をするために、障害経験を活かした役割を持つことが一つの方法ではないかと考えた。

【結論】

障害経験を活かした役割を持つ 8 名の方を対象に、役割獲得に至るまでの語りを聴取し分析を行った。分析の結果、役割や障害に対する否定的な認識が役割や障害に対する願望や肯定的な認識に変化し役割の獲得に至ること、肯定的なサポートや期待感が役割や障害に対する肯定的な認識へ影響を与えていたこと、否定的なサポートや期待感が役割の獲得の阻害要因になっていたこと、他者・社会との摩擦が他者・社会への願望や他者・社会との肯定的な関係に変化していたことが明らかになった。

目次

第１章　序論
１．先行研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
２．作業療法の役割の視点で不足していると考えられる点・・・・・・・・・・・ 3
３．研究目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第２章　研究方法
１．対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
２．対象者の選定方法と対象者の一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
３．インタビューガイドの作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
４．データの収集方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
５．分析方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
６．研究における倫理的配慮・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
７．研究の意義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
８．用語の操作的定義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11

第３章　結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
１．障害経験を活かした役割の獲得に至る過程
１）Ａ氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
２）Ｂ氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
３）Ｃ氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
４）Ｄ氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
５）Ｅ氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
６）Ｆ氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
７）Ｇ氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 116
８）Ｈ氏・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 131
２．８人を合わせた障害経験を活かした役割の獲得に至る過程
１）役割に対する願望・認識における過程・・・・・・・・・・・・・・・・ 154
２）障害に対する願望・認識における過程・・・・・・・・・・・・・・・・ 158
３）他者・社会のサポート・期待感の過程・・・・・・・・・・・・・・・・ 163
４）他者・社会への願望・関係の過程・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 168
５）８人を合わせた障害経験を活かした役割の獲得に至る過程のまとめ・・・・ 173

第４章　考察

１．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 177
２．低い外的期待に照準を合わせないことが役割獲得において必要なのではないか 179
３．内的期待を高めるためにはどのようにしたら良いか・・・・・・・・・・・・ 180
４．作業療法士が行う役割獲得に向けた支援方法について・・・・・・・・・・・ 184
５．障害を持った人が充実感を持って生活をするために、
障害経験を活かした役割を行うことが一つの方法として良いのではないか・・ 187
６．リハビリ職の経験のある人と、リハビリ職の経験のない人とで分けた
障害経験を活かした役割の獲得の特徴から・・・・・・・・・・・・・・・・ 188
７．本研究の限界・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 188

第５章　結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 190

謝辞

文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 192

資料・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 194

第１章　序論

１．先行研究

１）社会学における役割概念

役割概念は社会学的分析における重要な分析概念である（岩田，1998）ことから、社会学における役割研究は作業療法学によるそれよりも歴史は古い。そして社会学における役割は、おおよそ相互作用論における役割概念と構造機能主義における役割概念の 2 つに大別されてきた。相互作用論における役割概念では役割を行う者の視点から役割を捉えており、ある行為を企画した後、その行為に対して他者の立場で自分を見つめ、その行為の企画の調整をすることで自己が形成されるとした（岩田，1998)。一方、構造機能主義における役割概念の立場である「Linton（1936）は地位と役割を対概念として用いて『地位なき役割はなく、役割なき地位はない』ことを主張し、役割は社会構造の基本的単位であるとした」（岩田，1998)。

このように社会学にける役割理論は、個人に焦点を当てたミクロな視点と、社会構造に焦点を当てたマクロな視点の双方が存在する。

また、安藤・児玉（1979）は「社会的役割は・・・社会的に期待され標準化された一連の行動様式として定義づけられる」（安藤他，1979，p40）と役割を定義しているとことから、地位に対する期待に応じた行動が役割であると説明できる。

役割の個別性については、安藤他（1979）が「行動様式は、さまざまな生活場面において経験され、学習され、取得され、個人的に型どりされて具現する。社会的役割には、この社会的期待としての普遍性と個人的具現としての個別性の両面がある。この二面性によって、個人が社会に構造化され、構造的単位として位置づけられるとともに、個人の欲求充足を可能にする根拠を求めることができる。」（安藤他，1979，p40）と述べていることから、期待に応じながらも個人ごとで役割の形式は異なることがあるといえる。

役割と患者の関係についてパーソンズ(1974)が、「病人とは、ひとつの地位であり、この地位には、通常ついている地位とは異なった役割期待が伴う。病人をめぐる期待の内容は次の通りである・・・周囲の人々は、病人が通常の役割期待通りに振る舞うことができなくても、そのことを問題視しないよう期待される。・・・病人が、病人の状態にあることに対する責任を問わないよう期待されている。」（Parsons，1951　佐藤勉訳，1974）とした。

このように社会学を中心とした役割概念は「地位（社会構造)」「役割（行動)」「期待」「個別性」を用いて説明をされており、次に述べる作業療法における役割概念に影響を与えてきた。

２）作業療法学における役割概念

作業療法学においては、役割は認識的側面（社会的地位や社会的関係におけるイメージ）と作業行為的側面（役割を果たすために要請される課題や活動役割）(吉川・宮前・水流・石橋・近藤，2000)を含み持つと説明されることや、役割は内的期待（個人が自らに求める期待）と外的期待（社会や他者からの期待）の双方の視点を持ち(Herd，1977)、「内面化された役割とは特定の社会的アイデンティティという広範な意識とそれに関連する義務（Kielhofner，1985)」(吉川他，2000）であり、自己同一性は自分の様々な役割のすべての自己認識を反映している(Kielhofner，2009　山田訳，2014)と説明されることがある。このように、自己と他者の期待により生み出された役割（認識的側面、作業行為的側面）を遂行することは自己同一性へ影響を与えながら、作業療法が対象とする対象者の社会生活の再構築において重要な要素であると言える。よってこの重要性から、作業療法学においては Reilly の時代から役割研究が始まり（B.Ros aline Johanna Miller,Kay W.Sieg,Ferol Menks Ludwing et al，1988　岩崎テル子監訳，1995)、多くの役割に関する研究が生み出されてきた。その中で現在の作業療法に影響を与えている役割獲得に関するものに、Herd（1977）の作業役割獲得モデル、Kielhofner（2009）の人間作業モデルがある。以下にその特徴を記述する。

（１）Heard の作業役割獲得モデルにおける役割概念

Heard は内的期待と外的期待の葛藤を調整、意志決定をすることによって、新しい作業役割遂行がなされると考えた。内的期待はそれに含まれる価値（value）を中心に、興味（interest)、技能（skill)、効力感（sense of efficacy）を反映して生まれ、外的期待は社会の規範や義務を反映するものであり、役割行動をとる場合、時に明確にあるいは暗黙のうちに外から求められるものとした。価値は特定の役割を獲得することを目標にし、その役割が何を要請しているかについての解釈であり、興味は外から求められた役割を自らのものとして内在化するかどうかを決めるものとした。また、義務や規範とは、社会がその人に対して役割定着に向けたフィードバックを行う際の基準であるとした（Heard，1977)。

（２）Kielhofner の人間作業モデルにおける役割概念

人間作業モデルにおける役割概念は、習慣化システムに位置づけられており、日常生活を作り上げる要素として捉えられている。習慣化と役割の関係について文献には「習慣化は、習慣と役割によって導かれ、時間的、物理的、社会的環境の日課の特性に合わせた行動の首尾一貫するパターンを示す取り入れられた準備状態である。・・・習慣化は、日常生活を作り上げる日課の行為を行うために、人と環境を協調させるものである。」(Kielhofner，2009 山田訳，2014 ，p56)と述べられている。また、役割同一性（他人が自分をある特定の立場をしめていると認識し、反応するときのみに生み出されるもの）と

いう表現を用いた説明では「『どのような役割同一性も社会が役割にあてがった特性とその人がその役割にあてがった個人的解釈の両者を取り入れることを意味する。』(Fein, 1990)」(Kielhofner，2009 山田訳，2014 ，p65)と述べており、役割に付随する自己同一性とは外的期待を含んだ内的期待を基に生成されると言える。

したがって、作業療法理論における役割獲得とは、自己と他者・社会との関係から生まれ、その双方が持つ意図の調和から成るものであると言える。

3）対象者の役割獲得を目指した作業療法実践

日本の作業療法実践における役割獲得に関する報告では、内的期待・外的期待と作業療法の関係について梅崎（2001）の報告症例が、役割再獲得を成功できたのは家族が期待する役割と本人が望む役割とが一致し、その役割を果たすための作業に作業療法士が関わることができたことによるとある。また、脳卒中後遺症により社会的・家庭内役割を一部実施、あるいは実施していない人は今後の展望に困惑を強く感じ（小林，2013)、役割の喪失については宮前（1997）が「自我を充足していた重要な役割を喪失したときには、その代わりとなる習慣化した作業が見つかるまで、または、少なくなった役割の状態に適応するまで、自我は不安定な状態におかれることになる」と述べている。

このように作業療法の実践場面においても役割獲得は治療対象として捉えられており、その役割の変化や喪失は、心理面への影響のみならず人生設計へも大きく影響していることから、対象者の役割獲得は作業療法の重要な要素であると言える。

2．作業療法の役割の視点で不足していると考えられる点

このように生活の構築を支援する作業療法士には、役割という視点から生活を評価して支援する立場が求められる。だが、この役割についての理解や研究が不十分ではないだろうかと考える。つまり、他者から期待される役割を自身の役割として内面化し、それを役割とする自己像が作業療法学の「役割」をめぐる概念や理論には描かれていること、障害経験を活かした役割について検討がなされていないことから、不十分ではないかと言うことである。

そのように考えるにいたった筆者自身の作業療法における臨床経験を以下に紹介する。

筆者の経験より、発症後のリハビリを行う際に、患者本人の家庭や社会での役割獲得について目標設定をし、実施することがあるが、その「目標設定」と「実施」の双方において難渋することが多い。目標設定においては、「自分にはできることがない。前と同じように出来ない。」と内的期待が低い発言が聞かれ、家族からは「家事は介護者が行うので、本人には身の回りのことだけをやってもらえれば良い。」と外的期待の低い発言が聞かれる。又、実施に至ったとしても作業効率や遂行度が低い場合は、家族から役割を取り上げられてしまうことがある。その背景には家族や社会からの外的役割期待が乏しいため、その低い外的

期待を本人が内面化するために役割の獲得が困難になっているのではないかと考える。先に述べた Heard(1977)の作業役割獲得モデルや Kielhofner（2009）の人間作業モデルに当てはめて考えると、外的役割期待、つまり社会や周囲が対象者に期待する役割と本人の内的役割期待との調整を行うなかで、かえって内的役割期待が低まってしまう結果に陥ってしまったと考える。

他方、役割の獲得に成功をした具体例を自身の脳卒中後遺症者への作業療法の経験から述べたい。

脳卒中後遺症患者である I 氏は、発症から 2 年間、身体機能の回復を望みリハビリに励んでいたが、思うように身体機能が回復をしないことに落胆と焦りを感じているようだった。又、生活上で満足のいく作業活動はないようであった。この経過の中 I 氏は利用を開始した通所介護事業所で、木工作業をはじめた。当初は本棚や小物入れを作成していたが、開始をして 1 ヶ月ほどで「自分と同じような片麻痺の人でも木工が行いやすくなる補助道具を作成したい」、「自分と同じように足が固くなる人のために傾斜台を作成したい」と、自身の障害経験を活かした役割を見出した。その頃から通所介護事業所利用時以外の自宅生活においても、作品の図面を作成するなど、自身の身体機能に落胆していた時間が減り、「楽しい、充実している」と思える時間が増えるようになった。つまり、自身の障害経験を活かした作業を通じて「自分にはまだ出来ることがある、自分にしかできないことがある」と自己効力感を抱き、前向きな気持ちで生活を送れるようになっていったのである。I 氏のように外的期待の取り入れは行う過程を経ず、自身の障害経験を活かした役割を創出することにより充実した生活を送れるようになるのではないだろうかと考えるきっかけとなった。

作業療法士であり障害当事者であるが、双方を踏まえた役割を「当事者セラピスト」と名付け、双方の立場を経験しないことには見えてこない様々な課題を明確化し、セラピスト側に問題提起することを企画し始めている方々がいる。「当事者セラピスト」であるが、これも「障害経験を活かした役割の創造」の側面が見て取れる。つまり障害を改善し、内的期待と外的期待の調和のとれた役割再獲得を目指す既存の作業療法学での役割理論の方向性とは異なり、むしろ、障害経験を活かしつつ、社会や制度、他者の変革を目論んだ意図を含み持つ役割の創造であることが伺われる。

つまり、上記の方の経験から考えられ得ることとして、「障害経験を活かした役割の創造」が障害当事者の役割獲得に際しては、本人の自己効力感を持てるためにも必要なことではないかということである。それは上記で述べた作業療法学における内的期待と外的期待の整合性を認めるかたちでの役割ではない。

これは吉川他（2000）の「障害をもった個人が、従来あるいは通常とは違う仕方で作業を行い、その作業が当人にとって意味のある重要な作業であるならば、さらに社会がその作業を行う意義を認めるならば、その作業の遂行者という役割を持つことが可能となる」との考えの中にある、通常とは違う仕方の作業を、障害経験を活かした作業にすることでも説明が

でき、吉川他（2000）の考えをより具体的にしたものとも言える。

しかし、障害を持った人は、様々な場面で障害を否定的に扱われるスティグマ体験を持つことが明らかにされており（Goffman，1970）、障害を肯定的に自己認識できる社会的経験を必要としていることが示唆される。

３．研究目的

障害を持った人にとって、障害が生じたことによる役割の喪失は、心理面への影響のみならず人生へも大きく影響するため、作業療法において、障害を持った人が役割を獲得していくことは治療の対象となっている。予備調査より、「障害経験を活かした役割の創造」が、障害当事者にとって自己肯定感を持てる最良の方法であると考えた。そこで本研究では、「障害経験を活かした役割活動」に至った人を対象とし、障害を持つ以前の生活からはじまり、障害を持ち、障害経験を活かした役割活動に至るまでの語りを聴取し、その結果を分析することで、「障害経験を活かした役割の獲得」に至る過程を明らかにし、障害を持った人の役割獲得の支援方法についての考察を行うことを目的とする。

第２章　研究方法

１．対象

障害経験を活かした役割を持つ 8 名とする。障害経験を活かした役割とは、障害をもった人が障害を持つ生活から得た経験知や経験知に基づいた知見について他者に求められ、伝達した経験を持つ人、またはそれを仕事としている人とする。

例えば、脳卒中後の片麻痺者が調理を行えるようになるだけでは障害経験を活かした役割とは見做さず、片麻痺者で調理を行えるようになった経験を活かして、他の片麻痺者に自身が獲得した調理方法を教示することは障害経験を活かした役割と言える（臼田，2003）。

２．対象者の選定方法と対象者の一覧

指導教員は障害をもった人の経験について研究を行ってきたため、上記のような障害経験を活かした役割を持つ障害当事者の知人が多い。そこで指導教員の知人で上記のような役割を持つ障害当事者のなかから、本研究の対象者であることと研究協力に同意し、1 時間程度のインタビュー調査に応じることの可能な身体状況の人を対象者として選定した。

選定した対象者 8 名の一覧を示す（表 1）。疾患や障害の内訳は、脳血管疾患 1 名、脊髄損傷 2 名、下肢切断 1 名、進行性の神経疾患 2 名、神経疾患 1 名、視覚障害 1 名であった。

障害経験を活かした役割については、障害を持った人が障害を持つ生活から得た経験知や経験知に基づいた知見について他者に求められ伝達する、またはそれを仕事としている内容であった。

表１．対象者一覧

ケース	性別	年齢	疾患	障害・生活状況	発症時期	障害経験を活かした役割	インタビュー日	インタビュー時間
A	女性	50歳代	脳血管疾患	失語症 半側空間無視 独歩	成人期	講演活動 高次脳機能障害者からの相談依頼 非常勤講師にて障害経験を話す	2017.1.20	56分40秒
B	男性	30歳代	副腎皮質ジストロフィー	杖歩行	成人期	障害者就労施設での管理業務 経営するインターネット販売会社での障害者雇用 民間の治療方法の広告塔に自らが立つ	2017.4.17	46分15秒
C	男性	60歳代	脊髄損傷(胸神経8)	車椅子移動	成人期	脊髄損傷者用の車椅子販売会社の経営	2017.5.23	87分56秒
D	男性	30歳代	下肢切断	義足を使用しての日常生活自立	成人期	義足を使用する義肢装具士	2017.7.1	93分38秒
E	女性	30歳代	重症筋無力症	電動車椅子生活 人工呼吸器装着(終日)	成人期	講演活動 非営利団体の代表	2017.8.2	108分36秒
F	男性	30歳代	シャルコマリートゥース病	両下肢短下肢装具 ロフストランド杖	小児期	講演活動 患者会活動 作業療法士	2017.8.20	168分53秒
G	男性	40歳代	脊髄損傷(Th4)	車椅子移動	成人期	障害者自立支援センター勤務	2017.9.26	84分07秒
H	男性	40際代	視覚障害	弱視	小児期	盲学校教諭を目指す学生への教育 点字機器の開発会社での勤務	2017.10.4	142分12秒

３．インタビューガイドの作成

予備調査として、なぜ障害を持った人が満足のできる役割を獲得し辛いのか、障害を持った人が満足できる継続した役割を獲得できる背景は何かについて検討をすることを目的に、「障害経験を活かした役割活動」を創出し、取り組む 2 名に対してグループインタビュー調査を行った。

インタビュー調査の結果として、抽出された 11 の概念と 2 つの概念関係図から、障害を持った人が満足のできる役割を獲得し辛いのは「内的期待が低いために役割の獲得が困難になる」こと、障害を持った人が満足できる継続した役割を獲得できる背景には「他者からの期待に依存をしない、障害経験を含んだ役割の獲得が内的期待を満たす満足のできる役割となる」ことがあると示唆された。

この予備調査結果において、本研究の目的である「障害経験を活かした役割」の意義について情報が得られたことから、この結果を基に以下のインタビューガイドを作成した。

【インタビューガイド】

＜障害を活かした役割を獲得する前について＞

・障害を持った時、その障害についてどのように感じましたか
・発障により失ってしまった役割はありますか
・発障により失ってしまった役割がある場合、失ったことをどのように感じましたか

＜障害による認識の変化について＞

・発障によって、貴方が貴方自身に対する期待に変化はありましたか
・発障によって、社会が貴方に対する期待に変化はあったと思いますか
・発障によって、社会が貴方に対する期待に変化があった場合、変化をどのように感じましたか

＜障害を活かした役割の創造について＞

・障害を活かした役割を始めた理由は何ですか
・障害を活かした役割に貴方が期待するものは何ですか
・障害を活かした役割を獲得した後、社会が貴方に対する期待に変化はありましたか

＜障害観について＞

・障害を活かした役割における障害の価値について、貴方はどのように考えますか
・障害を活かした役割活動をする以外で、普段、貴方にとって障害の価値はどのようなものですか

表２．予備調査結果における概念名と定義、具体例

概念名と定義	具体例
【外的期待の低下】 定義：周囲からの役割期待が低下していると感じた経験	「まわりの人は何もできなくても良いって言ってくれた」
【内的期待の低下】 定義:自己自身に対する、期待が低下していると感じた経験	「自己否定観が強かった」
【外的期待に対する期待】 定義：他者・社会が自身に対して期待を持って欲しい	「（自分が頑張れば）誰か声を掛けてくれるだろうと思っています」
【ウィークネスを自覚している】 定義：自身の障害に対する自覚	「皆と同じことができないと意味がない」
【喪失体験】 定義：障害発症時に感じた経験	「やっていたことがガシャーンってなくなった」
【漠然とした自身への期待】 定義：役割を獲得する前の経験	「何か自分でできることはないかなっていうのは凄く思っていた」
【自分への責任】 定義：役割を獲得する前の経験	「何かないとダメだなって思った」
【内的期待が先行し、外的期待が後からついてくる】 定義:自身の期待を基に役割を行った後に、周囲がそれを認め期待を掛けるようになった	「変な言い方だけど、世の中が俺の使い方を分かってきた」
【アイデンティティと役割の融合】 定義：現在、行っている役割と自己同一性の関係	「自分の体験をただ素直に表現すれば良い」
【障害を強みとして捉えられる役割】 定義：現在、行っている役割に対する意識	「自分のウイークネスがストレングスになればと常に思っている」
【肯定観を高めるのは誰かのために行う役割】 定義：役割に対する認識	「多分、役割って誰かの為に何かをしてあげるって方のが肯定感が強いと思う」

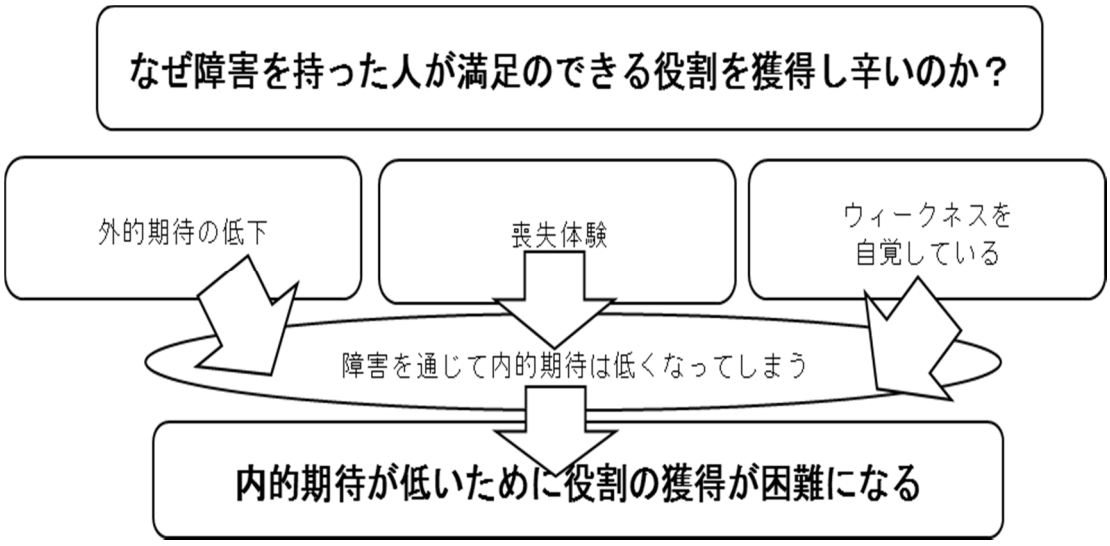


図１．予備調査結果 概念関係図 「障害を持った人が満足のできる役割を獲得することが困難な理由」

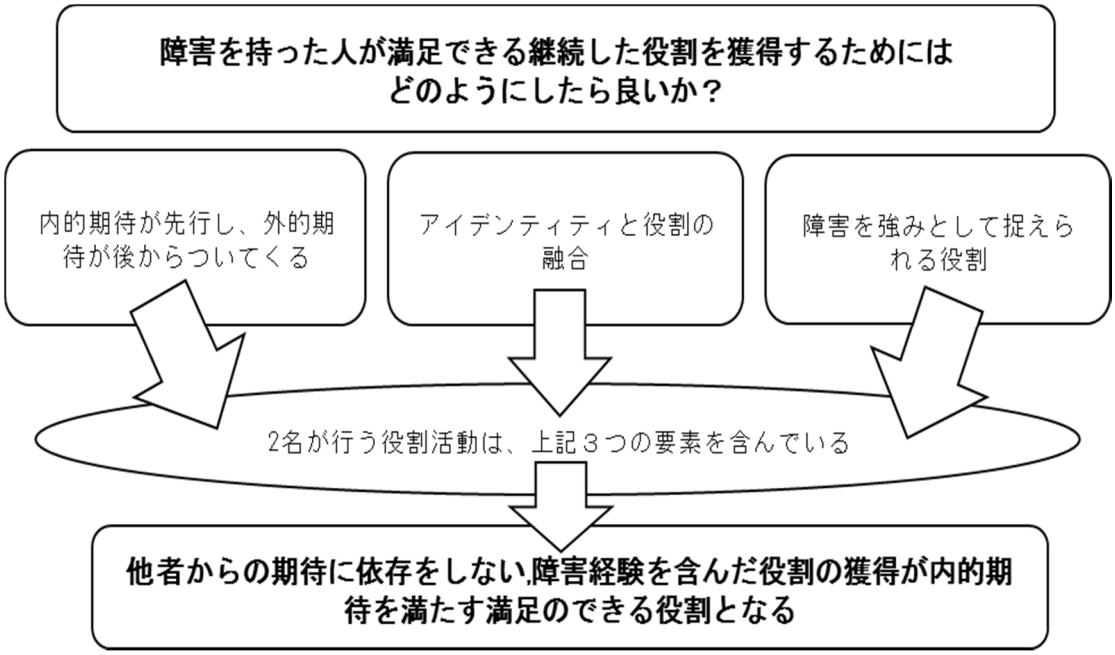


図２．予備調査結果 概念関係図 「障害を持った人が満足のできる継続した役割を獲得する要因」

４．データの収集方法

インタビューガイドを基にして、半構造的面接法による個別インタビュー調査を実施した。インタビュー内容はICレコーダーにて音声を録音した。また筆記による記録も併せて行った。

５．分析方法

分析手順を以下に示す。

（1）半構造的面接法で得られたデータで逐語録を作成した。

（2）逐語録から1事例ごとにカテゴリーとコンセプトを抽出した。

（3）研究の妥当性の確保として、コンセプトとカテゴリー化の方法は、萱間（2007）を参考にし、その過程について質的研究の経験のある指導者にアドバイスを受けながら分析を進めた。

６．研究における理論的配慮

本研究は、インタビュー対象者に研究目的、研究方法、倫理的配慮、個人情報の保護に関して文章にて十分に説明を行ったうえで同意を得た。倫理的配慮に関しては、研究への参加は自由意志であること、いつでも参加を中断出来ること、個人情報保護に関しては情報の厳守、得られたデータは研究以外では使用しないこと、学会発表など外部への持ち出し時には個人が特定出来ないように配慮を十分に行うことを紙面にて説明をした。研究における利益（自身の精神状態、研究方法を知る）と不利益（インタビューに際して時間を要する事、それに伴い精神的負担を与える可能性がある事）に関しては、紙面にて十分に説明し、理解して頂いた上で同意書に署名をして頂いた。同意書は2通作成し、1通はインタビュー対象者、1通は研究者が厳重に管理・保管した。本研究の実施に関して、聖隷クリストファー大学倫理委員会の承認を得てから実施した（承認番号16073）。

７．研究の意義

日本作業療法士協会が作業療法ガイドライン実践指針（2013年度版）の一部で「対象者の職歴や家庭での役割、趣味や楽しみなどの個人特性は、対象者がしたいと思う生活目標を設定する上で重要である。」と示している。また、厚生労働省による平成27年度介護報酬改定に関する審議報告（平成27年1月9日）の中で、International Classification of Functioning Disability and Health：国際生活機能分類（以下ICFとする）をもとに「在宅において高齢者が自立した生活を送るためには、生活機能の維持・向上を図るとともに、生活機能の低下を防ぐことが重要であり、リハビリテーションについては、＜心身機能＞へのアプローチのみならず、＜活動＞や＜参加＞といった要素を強化し、社会とのつながりが維持された在宅生活を継続できるように支援することが重要である。」と述べられている。

これらのことから、ICF の背景因子である＜環境因子＞＜個人因子＞に含まれる役割の獲得方法について明らかにすることは、国の施策に合った事柄であると言えるとともに、作業療法士が障害をもった人の役割獲得に向けた支援を行う際の一助となると考える。

８．用語の操作的定義

(1) 地位：「社会集団における立場、身分」（大辞林，1989，p1528）
(2) 役割：社会集団の地位に応じて期待されて行う行動様式（大辞林，1989）
(3) 作業行為的役割：役割を果たすために要請される課題や活動（吉川他，2000）
(4) 認識的役割：社会的地位や社会的関係におけるイメージ（吉川他，2000）
例えば、母親であれば「優しい」「安心する」という認識的役割がある
(5) 内的期待：個人が自らに求める期待（Heard，1977）
(6) 外的期待：社会や他者からの期待（Heard，1977）

(7) 障害：心身のはたらきや身体の構造変容により、活動の制限や参加の制約が生じている状態（石渡，2007）
(8) 障害経験：疾病等により身体や精神に障害を持つことで経験する、身体的・精神的経験
(9) 障害経験を活かした役割：障害経験を活かした地位に対する期待に応じた行動
例えば、脳卒中後の片麻痺者が調理を行えるようになるだけでは障害経験を活かした役割とは見做さず、片麻痺者で調理を行えるようになった経験を活かして、他の片麻痺者に自身が獲得した調理方法を教示することは障害経験を活かした役割と言える（臼田、2003）。

第３章　結果

１事例ごとに、半構造的面接法で得られたデータから抽出したカテゴリーとコンセプトを示した表と、障害経験を活かした役割の獲得に至る過程を示した図を呈示し後、出来事の詳細と障害経験を活かした役割の獲得に至る過程を示した図に配置されたカテゴリーについての説明を記述した。

カテゴリーとコンセプトについては、１事例ごとに、データから抽出したコンセプトごとを類似性、差異に着目し分類化しカテゴリーを抽出した。表中の表記としては、カテゴリー名の前に番号を表記した。

障害経験を活かした役割の獲得に至る過程を示した図については､抽出したカテゴリーを１事例ごとに、障害経験を活かした役割の獲得に至る過程を発症前・発症後・役割獲得期・役割創造期の 4 期に分節化し、各期における自己と他者・社会に関わる要点を表すマトリクスへ配置した。

マトリクスの横軸は、役割の獲得過程を明らかにすることが研究目的であることから、発症前・発症後・役割獲得期・役割創造期とし、抽出されたカテゴリーをその内容に応じて各時期に配置した。

マトリクスの縦軸は、カテゴリーごとを類似性、差異性に着目し分類化した結果、役割に対する願望、役割に対する認識－肯定－/－否定－、障害に対する願望、障害に対する認識－肯定－/－否定－/中立、サポート－肯定・有－/－否定・無－、期待感－肯定－/－否定－、他者・社会への願望、他者・社会との関係－摩擦－/－肯定－とした。また分類化においては、縦軸に８事例全てのカテゴリーが当てはまるように、縦軸の内容を指導者とともに見直しを繰り返した。

８人分の表と図の呈示、出来事の詳細とカテゴリーについての説明をした後、８人分の障害経験を活かした役割の獲得に至る過程を示した図の各期における自己と他者・社会に関わる要点を表すマトリクスを統合し、役割に対する願望・認識における過程、障害に対する願望・認識における過程、他者・社会のサポート・期待感の過程、他者・社会への願望・関係の過程ごとに呈示した。

そして、８人分の各期における自己と他者・社会に関わる要点を表すマトリクスから、障害経験を活かした役割の獲得に至る過程まとめ図を作成し、障害経験を活かした役割の獲得に至る過程における、役割、障害、サポート・期待感、他者・社会それぞれの関係性を呈示した。

１．障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

１）Ａ氏

（1） カテゴリーとコンセプト

Ａ氏の逐語録から抽出された 12 のカテゴリーと 28 のコンセプトを表 3 に示す。

表３．Ａ氏 カテゴリーとコンセプト

カテゴリー	コンセプト
1.障害を持った人に対して関わりを持ちたい	言語聴覚士の仕事は自分自身を捧げる一生の仕事だと思いなりたいと想った
	地域に戻った方が相談に来られるような、心が落ち着くようなところが必要だと思っていたこともあり、研究所を立ち上げることができた
2.障害を持ってもその人にしかできない役割がある	障害を持っても、その人にしかできない役割があると核心を持って想う
3.障害を持ったことで出来ないことがあるために感じる喪失感	教員としての役割が出来なくなり学内での期待の薄れを感じた
	教員としての役割が出来なくなり周囲に申し訳ないと思う
	大好きな仕事を失い寂しく思う
	発症により、家族の健康管理を完璧に管理することを心掛けていた主婦役割を失い寂しく想った
	研究者として、教育者として、華々しくやっていたところから、発症によりドーンと落とされて、マイナスからの出発となった
4.障害を持ったことを受け入れる	病気になってしまったことはしょうがない、上手くできないのは仕方ないという想い
5.発症前の知識や経験から障害を持っても自分であれば困難を乗り越えられる	過去の困難を乗り越えてきた経験から、発症によりマイナスの状態になっても、自分ならできると思った
	病気をしたことでどうなってしまうか分からないけど、色んな実例を見てきたこと、STとしての知識があったことから、一生懸命にやれば報われる、復職も主婦として家に戻ることも出来ると想った
	病気の知識を持っていてラッキーだったと想う
6.障害を持ったことによるワクワク感	自分に対する腹立たしさ、やるせなさ、他者に対する劣等感、失意、絶望の気持ちを持った一方で、ポジティブな気持ち（現実肯定感、期待感、他の研究者には体験できない経験ができるという期待感、無視の患者さんの世界を経験できるっていう知的好奇心、研究者の気持ち）を持った
	知りたいと思っていた無視の世界を経験したことで、研究者としてのワクワク感を感じた
7.障害のある私にしかできないことがある	語り部として生きなさいというメッーセジを受けた
	STを養成する教員として教える立場であったことから、脳卒中になった経験を学生に伝えたいと思い、直ぐに情報を音声や映像で残した
	自分の障害による経験を活かした教員に戻ることは、私にしかできない、私ならできるとことだと思った
	周囲の期待は時間が経てば取り戻せられると思った
	自分と周りの人のためにも教員役割を再獲得したいと思った
	自分自身の障害による経験を学生に伝えたいと発症直後に思った
8.夫からの支え	遠いところに車で連れて行ってくれたり、講演の時にはセットアップをしてくれたり、色んなことをしてくれる夫は、私に対して期待が高いと思う
9.障害を持った人とその家族と一般の人にアドバイスができる	障害を持った人とその家族に対して、アドバイスが出来ると思い、研究所を立ち上げようと思った
	一般の方向けに脳卒中にならないことが必要なこと、脳卒中の症状や脳卒中になった時の対応について話している
	研究所の活動には相談、臨床、講演活動がある
	脳卒中になった人に対して、やったら良いと思うことを分かるように書籍を書いた
10.患者やセラピストの役に立ちたい	人の為に自分が生きるということを良しとする考えから、研究所を通じて患者さんやセラピストの役に立ちたい、助けたいと思う
11.自分を頼りにしてくれる人がいる	研究所をはじめて色々と活動をする中で、フェイスブックで広がった友達から期待を感じていること、私の存在を頼りにしてくれる失語症患者がいる
12.障害のある自分に存在価値を感じる	障害を持った人の側にあって行う役割を通じて、自分の存在価値を考えられる

（2）障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

役割獲得に至る過程を 4 期に分節化し、各期における自己と他者・社会に関わる要点に表すマトリクスへのカテゴリーの配置を示した（図 3)。[発症前][発症後][役割獲得期][役割創造期]、各期における、出来事の詳細と配置されたカテゴリーについて説明をする。

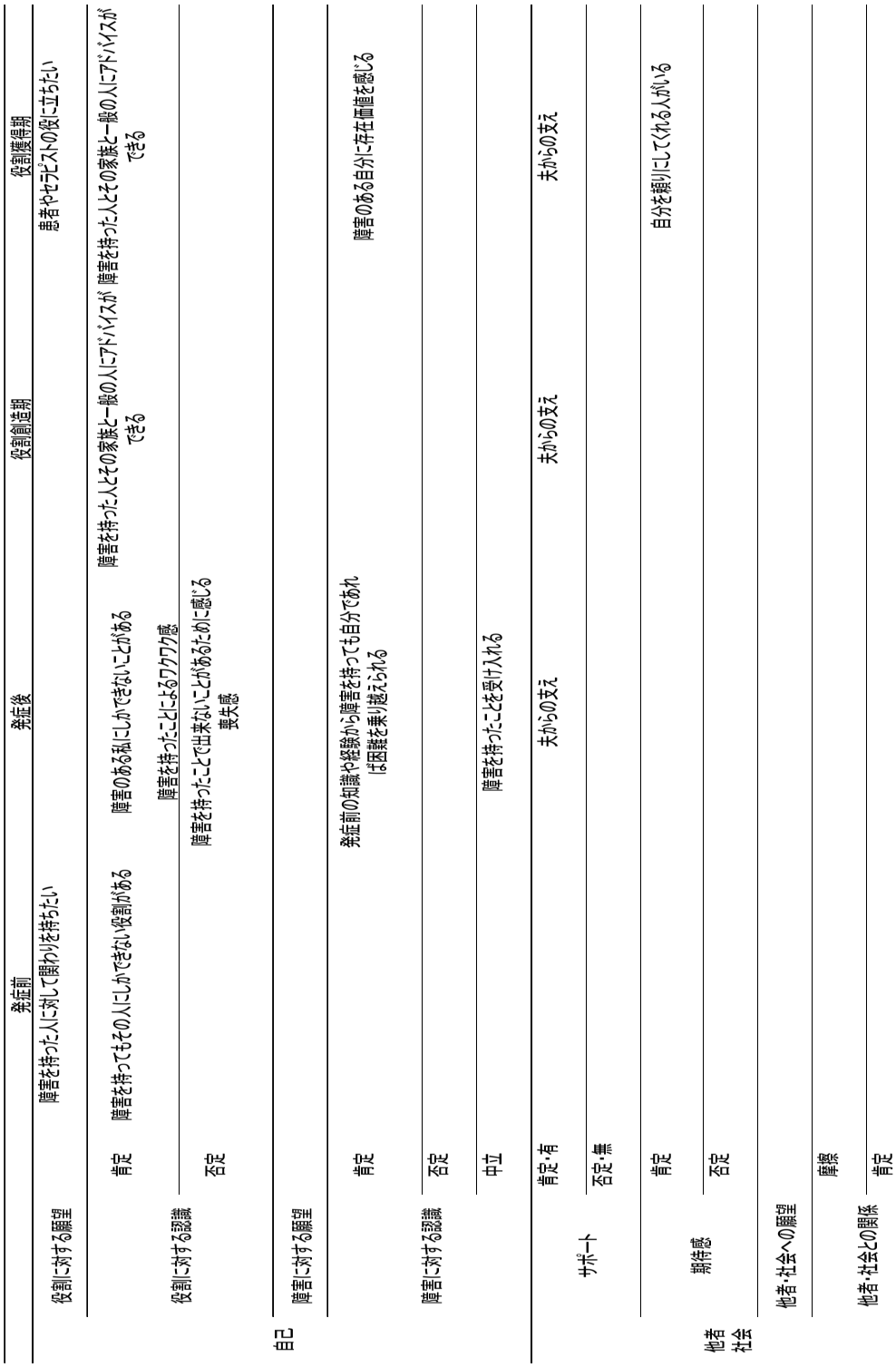


図3. A氏の障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

［発症前］

＜出来事＞

・言語学を学ぶ際に失語症患者と出会い Speech-Language-Hearing Therapist（以下、ST）を目指す。

・大学では言語聴覚士の育成と半側空間無視の研究を行うとともに、教務学生委員長や評議員を務めるなどの要職にあり、朝から夜遅くまで多忙な日々を過ごしていた。

・家庭では、家族の健康を管理するために 1 日 30 品目を料理する完璧な主婦を心掛けていた。

＜カテゴリー内容の説明＞

【障害を持った人に対して関わりを持ちたい】

A 氏は失語症の方と出会った際に、言語語聴覚士の仕事は自分自身を捧げる一生の仕事だと想い言語聴覚士を目指す。その後、言語聴覚士になった際には、病院から退院して地域で生活をする失語症の方が相談に来られる、現在の役割である研究所の立ち上げの構想を持つなど、【障害を持った人に対して関わりを持ちたい】考えがあった。

＜言語語聴覚士の仕事は自分自身を捧げる一生の仕事だと思いなりたいと想った＞

A：私は、言語学をやっていて、言語の問題は私にとってとても重要だったんですね、死体解剖のように、これ主語・述語・何とか・目的語とか、解剖するような作業をするより、生きた社会の中に、使われる言語について、知りたいと思っていた時なんですね、それで、その時に失語症の方と出会って、ウェルニッケのジャーゴンの方で、それを聞いた時、私、自分の知識と、自分自身を捧げる一生の仕事なんだと思いました、ということで、ST になったんです、その思いがずっと強くて、卒業するまでも、留学している間も○○銀行で仕事をしている間も、強くて、最終的に失語患者のセラピストになったんです

＜地域に戻った方が相談に来られるような、心が落ち着くようなところが必要だと思っていたこともあり、研究所を立ち上げることができた＞

A：病気になる前からです、ずーっと思っていた、立ち上げたいと、地域に戻った方が相談に来られるような、心が落ち着くようなところが必要だと思っていました、それで、そういうことが結実したと思います

【障害を持ってもその人にしかできない役割がある】

A 氏は教授職に就いていた際に書いた書籍の中で【障害を持ってもその人にしかできない役割がある】ことを述べるなど、発症前より障害を持った人の役割に対して肯定的な認識を持っていた。

＜障害を持っても、その人にしかできない役割があると核心を持って想う＞

A：私が書いた本を読んでいただければ分かるんですけどね、ロックインシンドロームになった方が、

パッチンしておばあちゃんっていう言葉の本の中で、パッチンしてコミュニケーションをとれるということで、それを通して、おばあちゃんのところに来た人が救われるっていう話があるんですね、ということから確信を持って、色んな人を見て、誰でも発信することによって、そういうことを、自分の存在意義を、感じさせるということが出来る役割を持っていると思います

A：病気仲間が自分がどういうふうに過ごそうかって、悩んでる悩みを聞くんですね、障害を持ってしまって、体を動かす、言葉がうまく喋れない、でも、活動できると私思うんです、その人にしかできない役割があるんですね

Q：それは、A さんは間違いなく核心を持って、どんな方であってもですか

A：核心をもっています、私の友達で脳幹損傷で四肢麻痺になっちゃって、○○さんっていう方なんですけど、そういう方でも発信することで、社会に役に立つ、最近彼は、新しいグループを立ち上げて、何か動けない人でも、そういう役割はあると思います

［発症後］

＜出来事＞

・教育者や研究者として脂がのり華々しく活動をしていたところから、発症により何もできなくなってしまう。

・完璧を心掛けていた主婦役割を失う。

＜カテゴリー内容の説明＞

【障害のある私にしかできないことがある】

A 氏は発症直後から自分自身の障害による経験を学生に伝えたいと思い、音声や映像の情報など自分の生活を刻銘に記録した。また A 氏は、死なずに生かされたという思いから「語り部として生きなさい」というメッセージを受けとったと感じ、障害による様々な経験を伝える立場を自身の役割として捉えた。そして半側空間無視の経験を活かした教員は自分にしかできないと思い、それを実現することで自身の仕事に対する周囲の人からの期待を取り戻すことが出来ると思った。

＜自分自身の障害による経験を学生に伝えたいと発症直後に思った＞

A：私は大学教員として PT や OT・ST とか育てる立場だったのでこれは良い機会だと思いました、この私の経験を伝えたいと思いました

Q：それはもう病気をして直ぐに思ったのですか

A：直ぐ、直後から、感じました

＜ST を養成する教員として教える立場であったことから、脳卒中になった経験を学生に伝えたいと思い、直ぐに情報を音声や映像で残した＞

A：自分の役割を感じた事、教員としての、教える立場だったから、こういう風になったから、学生に伝えたいと思って、直ぐに色々な情報、音声とか映像とか残しました

A：自分の役割を語り部としての使命感を感じ、自分の生活を刻銘に記録してきました、メモしたんですね

＜語り部として生きなさいというメッーセジを受けたこと＞

A：とにかく死なずに生かされたということで、符号するものを感じたんですね、自分が ST であり大学教員、養成校の大学教員であるという立場を考え併せて、語り部として生きなさいっていうふうに思う、そういうメッセージがあると思いました

＜自分と周りの人のためにも教員役割を再獲得したいと思った＞

A：復職をしたいという思いがありました、授業を続けたいっていう、再び、カリキュラムを作成するとかして、自分の役割を再獲得したいと思いました

Q：それは御自身が満たされる感覚と、周りに貢献したいっていう感覚と、両方ある感じなのですか

A：両方あります

＜周囲の期待は時間が経てば取り戻せられると思った＞

A：（周囲からの期待は）時間が経ったら取り返せられると思いました

Q：それだけやっぱり、今まで客観的にみていた半側無視の方の世界に自分が入り込めたっていうこと、ある種のワクワク感が強かったんですよね

A：強かったですね

Q：それはやはり研究者として一番経験をしたくてもできなかったことなんですよね

A：外からみたら分かんないですね、中の世界に入らなければ

Q：そこに入り込めたことがある種の喜びみたいなのがあったんですよね

A：はい、研究者として、良かったと思いました、それまで何度も何度も患者さんに聞いて、説明をしてもらっても、本人の内的世界が分かんないですからね、グルグル回っているような感じは分からなかったですよね

＜自分の障害による経験を活かした教員に戻ることは、私にしかでいない、私ならできるとことだと思った＞

Q：大学に戻られた時というのは、自分の経験を活かして教員に戻ることについては、A さんの言葉を借りれば、私にしかできないことだっていう感覚でしたか

A：ハートネット TV でも話ているんですけど、私にしかできない、私ならできるというふうに思いました

【障害を持ったことによるワクワク感】

A 氏は自らが研究対象としていた半側空間無視の世界を知りたいと思っていたため、自らが半側空間無視の症状を呈していることを知った際、半側空間無視の世界を理解する機会ができたこと、他の研究者には体験できない半側空間無視の経験ができることに、研究者として【障害を持ったことによるワクワク感】を感じた。

＜知りたいと思っていた無視の世界を経験したことで、研究者としてのワクワク感を感じた＞

A : セラピストとして他の誰もが、唯一無二の存在である、経験した人がはじめてであると思うので、それで、これから色んな経験をするだろうと思うこと、期待する気持ちとか、私、右半球損傷だっていうことが分かって、自分に無視があることを自覚したんですね、これまで 10 年近く無視の研究者としてやって来ましたけど、無視の患者さんは不可解な反応を示すんですね、どうにか無視の世界を知りたいと思っていたので、無視の患者さんの世界が分かるという、知的好奇心がありました、絶対、きっと分かると思ったんですね、無視を経験したということで、研究者としてワクワクするような気持がありました

＜自分に対する腹立たしさ、やるせなさ、他者に対する劣等感、失意、絶望の気持ちを持った一方で、ポジティブな気持ち（現実肯定感、期待感、他の研究者には体験できない経験ができるという期待感、無視の患者さんの世界を経験できるっていう知的好奇心、研究者の気持ち）を持った＞

A : 自分に対する腹立たしさ、自分が上手くできると思っていたのに上手くできない、自分に対する腹立たしさ、やるせなさ、全然上手くできないやるせなさ、劣等、人と比べて劣等感、失意、絶望の気持ちを持った一方で、ポジティブな気持ちです、なってしまったのだから仕方がないという現実肯定感、期待感、他の研究者には体験できない経験ができるという期待感、無視の患者さんの世界を知りたいってずっと思ってきたんですけれど、そういう世界を経験できるっていう知的好奇心、研究者の気持ちですね

【障害を持ったことで出来ないことがあるために感じる喪失感】

A 氏は発症により、研究者や教育者、主婦としての役割を失った。要職にあり活動に脂が乗っていたといえる教育者や研究者としての役割を失ったことで、周囲からの期待の薄れを感じ、役割を遂行できなくなったことを申し訳なく思った。また仕事が大好きだったことから、大好きな仕事を失い、寂しく思った。同様に、完璧な主婦を心掛けていたがその役割を失ったことも寂しく思った。

＜教員としての役割が出来なくなり学内での期待の薄れを感じた＞

A : 私、大学で非常に重要な役割を占めていたんですね、教務学生委員長であったり、大学の研究科の幹部であったり、大学の評議委員であったり、色んな、朝から晩まで会議会議で色々と駆けまわったり、書類を作ったり、文科省に対して色んな陳情をしたり、色々やってきたので、例えばある会議で議長をしていて、その時に教務学生委員長として新カリキュラムを作っていたんですね、それで、前に検

討したことが元に戻ったり、時間がちゃんと守れなかったり、凄くイライラして、上手く期限に間に合うかどうか、文科省から OK が出るかどうか、というふうな心配をしていましたし、A さんができるっていう学内の評価をされていましたし、こういう要職にあった自分に対する期待はきっと失墜したと思います、授業をして、会議をして、色んな要職にあったものを途中で遂行できなくなる、そういう状態に対して学内では、期待、「え～あの A さんが病気したんだって」っていうようなこと、期待が薄れるということを感じました

＜教員としての役割が出来なくなり周囲に申し訳ないと思う＞

A：申し訳ないと思いました、授業が続けられなくなったこと、役職が遂行できなくなったことに申し訳ないと思いました

＜大好きな仕事を失い寂しく思う＞

A：ちょっと寂しい、大好きだったものですから、大学へ戻れないような状態になってしまったということで

＜発症により、家族の健康管理を完璧に管理することを心掛けていた主婦役割を失い寂しく想った＞

A：主婦としての役割とか、私は完璧な主婦を心がけてたんです、ここにも書きましたけど、一日 30 品目という料理をすること、家族の健康を管理するということでベストの自分の役割を考えていたんですね、母として妻として

A：当然、手足が上手く動かないので、主婦として上手くやれるかどうか分からないと思いました、失ったことについて、寂しい思いをしました

＜研究者として、教育者として、華々しくやっていたところから、発症によりドーンと落とされて、マイナスからの出発となった＞

A：期待に変化はあったか、病気に変化はあったか、病気をする前の私は業績もあり、活動に油が乗っていた時期なんですね、絶好調の時期、それがストンと落とされて、研究者として、教育者として、ゼロからマイナスぐらいから出発するってことですから、自分に対する、ここに書いてあったと思うんですけで、その年の秋の学会に、私の指導者が大会長をされる学会の会長講演の司会をすることになっていたんですね、それもうまくいきませんでしたし、〇〇の審査官をしていました、その書類が山ほどいっぱいあったんですね、講演依頼とか原稿依頼とか、色々な依頼があって、そういうことの調整が必要になっていた、そういう状況だったんです、凄いバーンと華々しくやっていたところ、ドーンと落とされてしまって、そういう自分の役割に対して、かなり活動をしていたっていう自分がいて、何にもできなくなっちゃった自分がいて、そういうことの変化がちゃんと想像でるでしょうか

【発症前の知識や経験から障害を持っても自分であれば困難を乗り越えられる】

A 氏は発症したことで今後どうなってしまうか分からないと思ったが、発症前の言語聴覚士としての知識や経験から脳の可塑性を信じていたこと、学生時代の部活等、困難を乗り越えて来た経験から、発症によるマイナスの状態であっても自分であれば復職も主婦として家に戻ることも出来ると、自分に期待を持つことができた。

＜病気をしたことでどうなってしまうか分からないけど、色んな実例を見てきたこと、ST としての知識があったことから、一生懸命にやれば報われる、復職も主婦として家に戻ることも出来ると想った＞

A：私は、自分で自分を捉えている時に、教育者、研究者、臨床家っていう立場で考えていたんですね、それと主婦、妻、色んな面を持っている、人間として捉えていたんですね、折り合いがどうだったんでしょうかね、折り合いをどう捉えていたんでしょうね、どうなるか分からないけれど、だんだん頑張ってやっていけば復職もできるだろうし、主婦として家に戻ることができるだろうし、今まで脳の可塑性とリハビリの力を信じてきた、著書にも書いてあるんですけど、色んな実例を見てきましたから、ちゃんと自分のこれからを予測できるんですね、ということで、一生懸命にやれば報われるという気持ちがありました

＜過去の困難を乗り越えてきた経験から、発症によりマイナスの状態になっても、自分ならできると思った＞

A：私は今まで色々な困難を乗り越えてきたんですね、自分に対する自己評価は割と高いものがありました、何か大変なことでもちゃんと乗り越えてきた自分に期待するという期待感はありました、私は中高時代バレーボール部で朝練、放課後の練習、それで遠いところから通っていたんですね、六本木の、今をトキメク花、あんの学校に通っていました、3 時間ぐらいかかるんです往復、すごい時間が掛かって大変な思いをして、そういうことで時間が掛かる通学ということでも、バレーボールに対する想いがあって、勝ちたい強くなりたいっていう気持ちがあって、本当に大変な苦労をして、テストもちゃんと優秀な成績を残したし、色々工夫をしてうまくできないことに対して乗り越えてきたっていう自分に対する評価は高かったんですね、マイナスな状態になってからも私は自分が、自分ならできるっていうふうに思いました

＜病気の知識を持っていてラッキーだったと想う＞

A：（もしもこの研究所や今の役割が）無くなっちゃったら寂しいですね、正に一般の方の気持ちだと思います、私は本当にラッキーだったと思うんですね、知識や経験を持っていたので

【障害を持ったことを受け入れる】

A 氏は病気になったのは仕方がない、現実は正しく客観的に受け止め、上手くできないことは仕方がないと思った。

＜病気になってしまったことはしょうがない、上手くできないのは仕方ないという想い＞

A：なんでっていう気持ちより強かったのが、私はなってしまったのだから仕方がないって思いました、現実は正しく客観的に受け止めて、なってしまったのだからしょうがない、なったのはなったんだから仕方がない、上手くできないのは仕方がないって思いました

【夫からの支え】

A 氏の夫は、A 氏に対して遠いところまで車で連れて行ってくれたり、講演の時にはセットアップをしてくれたり、様々なサポートをしてくれることから、夫は自分に対して高い期待を寄せてくれていると感じている。

＜遠いところに車で連れて行ってくれたり、講演の時にはセットアップをしてくれたり、色んなことをしてくれる夫は、私に対して期待が高いと思う＞

A：夫はあたしに対して、期待が高い、期待をしていると思います、全て、遠いところには車で連れて行ってくれたり、講演の時にはセットアップをしてくれたり、色んなことをしてくれているので、私に対する期待は高いと思います

［役割創造期］

＜出来事＞

・大好きな仕事に復帰するためにリハビリを頑張った。

・入院中、他の脳卒中患者と関わるなかで、病院から退院して地域で生活をする失語症の方が相談に来られる、研究所の立ち上げの構想を強める。

＜カテゴリー内容の説明＞

【障害を持った人とその家族と一般の人にアドバイスができる】

A 氏は入院中に周りの脳卒中患者やその家族が悩んでいる姿を見て、病気の知識と経験がある自分なら脳卒中患者らの悩みに対してアドバイスができると思い、研究所を立ち上げようと思った。

＜障害を持った人とその家族に対して、アドバイスが出来ると思い、研究所を立ち上げようと思った＞

A：経過中（入院）、周りの方が脳卒中のリハビリの病期とか急性期が終わって回復期の病院へ行くことを知らずに、家族も本人も知らずにいたのを目にして、そういうことを私は分かっているのだから、アドバイスができると私は思ったんですね、色んな方が悩んでいて症状のこととか、これから先のこととか悩んでいるのを目にして、私はこういう研究所を立ち上げようと思った、日頃ずっと思っていたんです

［役割獲得期］

＜出来事＞

・大学の教員に復職を果たし、8ヶ月間勤務をする。

・相談、臨床、講演活動を行う研究所を立ち上げる。

＜カテゴリー内容の説明＞

【患者やセラピストの役に立ちたい】

A氏は人の為に自分が生きたいという思いから、研究所での役割を通して、患者やセラピストの役に立ちたいと考えている。

＜人の為に自分が生きるということを良しとする考えから、研究所を通じて患者さんやセラピストの役に立ちたい、助けたいと思う＞

Q：今の研究所の一番の役割として、今の自分に期待をしていることは何ですか

A：他の方のアドバイスとか臨床をして助けること

Q：助けること

A：役に立つこと、患者さんにもですし、セラピストに対してもです

【障害を持った人とその家族と一般の人にアドバイスができる】

研究所の活動には相談、臨床、講演活動がある。一般の方向けの講演や脳卒中になった人の家族と話す際には、脳卒中の症状や脳卒中になった時の対応等について話し、脳卒中になった人に対しては相談を受けることや書籍等で生活の情報を伝え、セラピストに対しては教育的な関わりを行なっている。

＜障害を持った人とその家族に対して、アドバイスが出来ると思い、研究所を立ち上げようと思った＞

A：経過中（入院）、周りの方が脳卒中のリハビリの病期とか急性期が終わって回復期の病院へ行くことを知らずに、家族も本人も知らずにいたのを目にして、そういうことを私は分かっているのだから、アドバイスができると私は思ったんですね、色んな方が悩んでいて症状のこととか、これから先のこととか悩んでいるのを目にして、私はこういう研究所を立ち上げようと思った、日頃ずっと思っていたんです

＜一般の方向けに脳卒中にならないことが必要なこと、脳卒中の症状や脳卒中になった時の対応について話ている＞

A：講演で良く言うことに、知識、病識、意識という大事な「識」がつく言葉ですね、知識が皆さんに欠けているので、今、色んな一般向けの講演で、脳卒中にならないことが必要ですよ、脳卒中になったらこういう症状が出ますよ、こういう対応がありますよってことをお伝えしたいと思って、色んなお話しをしているんです

＜研究所の活動には相談、臨床、講演活動がある＞

Q：割合とかはないと思うんですけど、同じ失語の患者さん向けの部分と、セラピストに対する教育と

いうイメージと両方あるんですよね

A：相談、臨床、講演活動ですね

＜脳卒中になった人に対して、やったら良いと思うことを分かるように書籍を書いた＞

A：こうやったら良いですよって、読んだ方が分かる情報を、特に二冊目は心掛けていました

【障害のある自分に存在価値を感じる】

A 氏は障害を持った人の側にあって行う役割を通じて、人の役に立つことができているという認識があり、【障害のある自分に存在価値を感じる】役割をしていると思っている。

＜障害を持った人の側にあって行う役割を通じて、自分の存在価値を考えられる＞

Q：役に立ちたい事が、A さんにとって、一番、満足することなのですか、人の役に立つということが、とっても満たされる、一番のことなのですか

A：はい、一番の喜び

Q：その感覚なんですね、まさに役に立つお仕事ですもんね

A：そうですね、クリスチャンであるということと、こっち側にあって、今、自分に自分が存在価値を考えられる、感じられる役割をしているということを話ました

【自分を頼りにしてくれる人がいる】

A 氏は障害経験を持った人としての発言や活動に対する周囲からの期待を感じ、【自分を頼りにしてくれる人がいる】と SNS や直接の関わりを通じて感じている。

＜研究所をはじめて色々と活動をする中で、フェイスブックで広がった友達から期待を感じていること、私の存在を頼りにしてくれる失語症患者がいる＞

Q：A さんにしかできない、唯一無二の仕事だろうなってのがあって、周りが感じていると感じますか

A：感じていると感じています、フェイスブックで色んな人のコメントを読むと、私に経験をした人でないと、出来ない発言ですねっていう意見もあります

A：フェイスブックで友達が広がり、自分の視野が広がり、色んな交流ができて、私も本当に楽しんでいます、ということで周りが、友達を作って色々活動をする中で、皆さんの期待を感じています、今朝も言語生活サポートセンターっていうところに、〇〇にあるんですけど、失語症者に特化したデイですけど、その失語症カフェが来月あるので、参加しますかって聞いて個人的に聞いてきた失語の患者さんがいます、私の存在を頼りにしてくれる人がいるっていうことですね

2）B 氏

（1）カテゴリーとコンセプト

B 氏の逐語録から抽出された 11 のカテゴリーと 27 のコンセプトを表 4 に示す。

表４．B 氏 カテゴリーとコンセプト

ｶﾃｺﾞﾘｰ	ｺﾝｾﾌﾟﾄ
1.病気であることを信じられなかった	最初は症状が出ていないことから、ショックはあったが不安はなかった
	発症当時は困っていなかったことから、病気が進行していくことを信じられなかった
2.人の役に立ちたい	自分の人生について考えた時、理学療法をやって病気になったことを考えると、自分が障害を持った人と関わるべきなのだと想う
	病気になった時、人の役に立ちたいと想った
	理学療法士になった時、人の役に立ちたいと想った
3.周囲からの期待がある	発症によってできなくなったことは多いが役割は変わらない
	親以外からの期待に変化はないと想う
	役割を通じて結果を求められていると想う
4.協力者がいる	役割に対して協力をしてくれる人がいる
5.病気を仕事に活かすことで病気になったことが肯定できる	自分で立ち上げた仕事をやりながら発症によるショックや悩みを解消した
	役割を通じて病気をポジティブに捉えられるようになった
	病気になって悲しいではなくて、病気になったことで稼ぐことができたら、病気になったことを納得できると想う
	自分が販売する商品の広告塔になれば、この病気も活きてくるとの想い
	障害を上手く使う、肯定する、利用する考え
6.周囲に気を使われたくない	誰かが僕を気にしていると常に感じ、出掛けることを面倒くさく想う
	周囲に迷惑を掛けたくないので、極力、関わりを少なくしたいと想う
	自分は物事を気にしやすい性格だと想う
7.家族を大切にしたい	座ってできるインターネットのネットショップを始める
	自分が動けなくなっても、家族を大切にすること、海外旅行へ行くことを叶えるためにも、会社を立ち上げる
8.病気になった人生の設計をする	理学療法士としての役割は失ったが、他にも仕事はあると体験して分かった
	経営している人達と話すことで、理学療法だけが仕事じゃないと思えたことは今後を考える上で大きかった
	病気になって自分の人生と向き合う機会があって、教授に成りたいと思うのは手段でしかないと気づいた
9.自分自身に期待が持てない	自分がいっぱいいっぱいで、物を運ぶ人助けはできない
	理学療法士として働き続けていたら出来ないことが目に見えてショックが大きかったと思う
	大学院へ行くことを諦め、できないことは増えることで、このままいっても意味ないじゃんと想い、自分自身に期待ができなくなる
10.病気と一緒に生きていかないといけない	病気と一緒に生きていかないといけない想い
11.一般企業で働いたら病気はマイナスでしかないと想う	一般企業で働いたら病気はマイナスでしかないと想う

（2）障害経験を活かした役割の獲得に至る過程図

役割獲得に至る過程を 4 期に分節化し、各期における自己と他者・社会に関わる要点に表すマトリクスへのカテゴリーの配置を示した（図 4）。[発症前][発症後][役割獲得期][役割創造期]、各期における、出来事の詳細と配置されたカテゴリーについて説明をする。

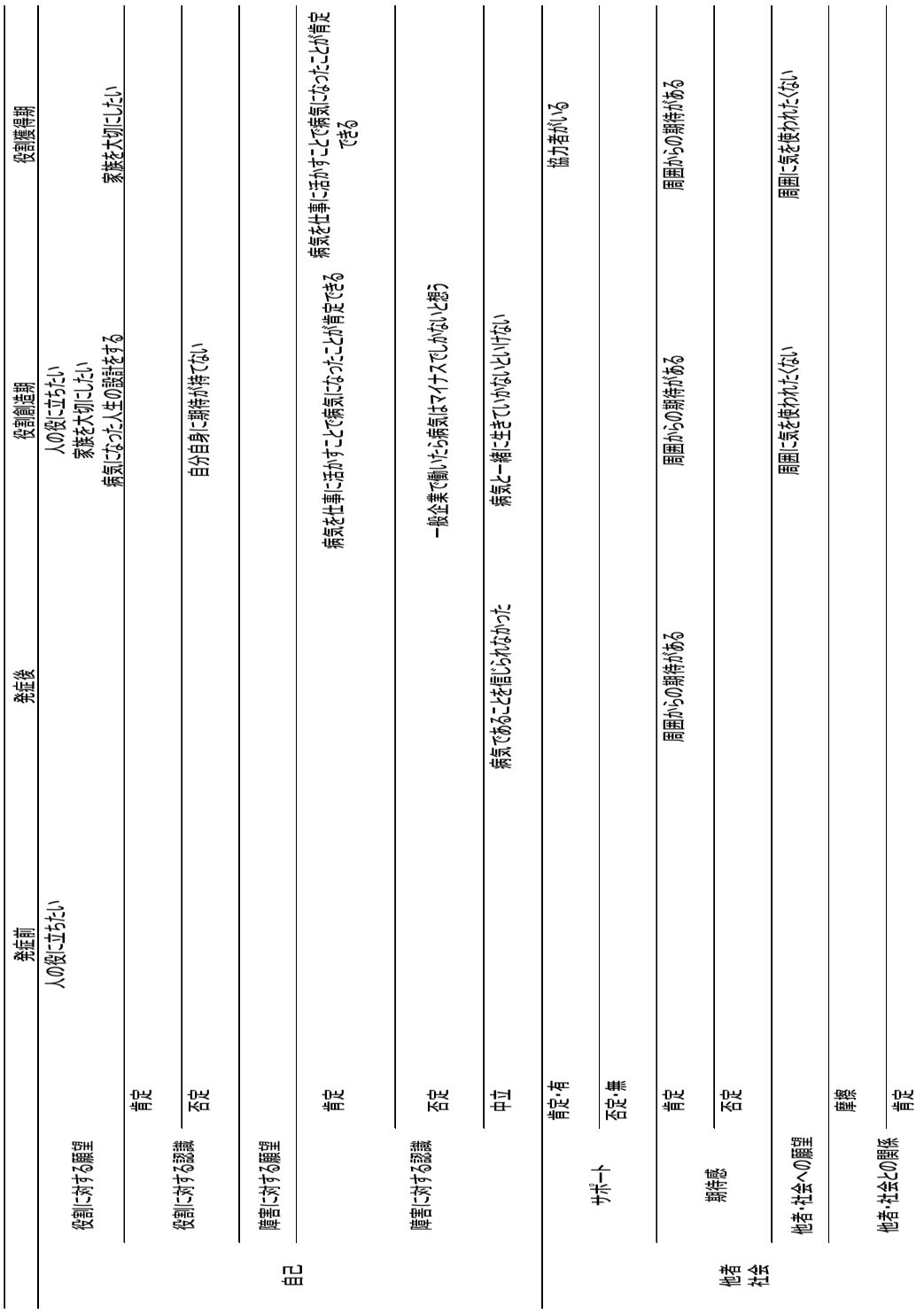


図4. B氏の障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

［発症前］

＜出来事＞

・理学療法士を目指し大学でリハビリ科を専攻する。

・大学時代から自分の身体でバビンスキー反射が陽性になることや、ランニング中に足が突っ張ることを経験し始める。

・理学療法士として病院に勤務する。

・大学の教員になる夢を持つ。

＜カテゴリー内容の説明＞

【人の役に立ちたい】

B 氏は理学療法士になった時、【人の役に立ちたい】と役割に対する願望を持った。

＜理学療法士になった時、人の役に立ちたいと想った＞

Q：もともと何か、人の役に立ちたいっていうのが強いのですか気持ちとして

B：これ（病気）になった時、理学療法士になった時も、まぁそういう

［発症後］

＜出来事＞

・理学療法士として働き始めた 20 歳代前半の時に病気の診断を受ける。

＜カテゴリー内容の説明＞

【病気であることを信じられなかった】

B 氏は病気であると知ってから、最初は病気の症状がないことや困ることがなかったことから、ショックはあったが不安はなく、【病気であることを信じられなかった】と、障害に対して肯定するでも否定するでもない、中立的な認識を持っていた。

＜最初は症状が出ていないことから、ショックはあったが不安はなかった＞

Q：病気になった時に障害や病気に対してどのように感じましたか

B：大丈夫だろうっていう、進行性なので、最初は全然、症状出てなかったんで、なんにもならないだろうってのが一番最初にありましたね

Q：なので、大丈夫だろうと

B：ショックはありましたけど、不安も分からないしし、その時は何にも出ていないので

＜発症当時は困っていなかったことから、病気が進行していくことを信じられなかった＞

Q：進行疾患っていうところ、進行していくことについてはどう思いましたか

B：凄いショックだったのは覚えているんですど、信じられなかったってのがあるかもしれないですけど、そう思っていたのとしては、そんなに当時も困っていなかったっていうのがあって

【周囲からの期待がある】

B 氏は発症によってできなくなったことは多いが役割は変わらない、親以外からの期待に変化はないと、発症後も【周囲からの期待がある】との認識を持った。

＜発症によってできなくなったことは多いが役割は変わらない＞

Q：発症によって失ってしまった役割はありますか

B：役割・・・でも、それほどないかなぁ、できなくなったことは多いですけど、役割としては、そんなに変わんないかなぁ

＜親以外からの期待に変化はないと想う＞

B：親以外はそんなに（期待に）変化はないかな

［役割創造期］

＜出来事＞

・診断を受けた後の約 3 年間は変わらずに理学療法士として勤務をしたが、診断から 2 年が経った時期に、このまま働いていても意味がないと想う。

・自分の人生と向き合う。

＜カテゴリー内容の説明＞

【自分自身に期待が持てない】

B 氏は病気の診断を受けてからの 2 年間は大学院への進学を考えるなど、自分に期待を持って働いていた。だができないことが増えることで、このまま働いていても意味がないと想い始める。また一般企業で働くことを考えた際には、病気はマイナスでしかないと想うことや、いっぱいいっぱいで身体を動かしていることから、身体を使った人助けは自分にはできないと想った。

＜理学療法士として働き続けていたら出来ないことが目に見えてショックが大きかったと思う＞

B：多分、病院で働いていたら、結構できないことが目に見えて凄いショックが大きかったと思うんです

＜大学院へ行くことを諦め、できないことは増えることで、このままいっても意味ないじゃんと想い、自分自身に期待ができなくなる＞

B：大学院へ行ったりとか、そうですね、できんことが増えるっていうところ

Q：それはどんな感じですか

B：当時はそうですね、期待できないっていうところにはなりましたね、もう諦めっていう

Q：それはどれくらい続きましたか

B：でも病気なって 2 年間は〇〇課長と一緒に研究とか学会発表とかもやって、その時は全然、期待はあったんですけど、その後ぐらいですかね、このままいっても意味ないじゃんって想いはじめたのが

＜自分がいっぱいいっぱいで、物を運ぶ人助けはできない＞

Q：出来なくなったというと何が浮かびますか

B：人助けをするっていうのは出来ないなっていうのは、気持ち的なところと、自分がいっぱいいっぱいなので今の状態だと、なので、前ほどは余裕を持って人にこれをしてあげようとか、これをちょっと運んであげようとか、手伝ってあげることが、最近、本当にない、言葉かけとかは前よりも減りました、大丈夫ですかっていうのも、いいかなってなっちゃいました、結局

Q：聞いて、荷物を運んでと言われても困りますもんね

B：それもありますし、そんな役にたたないだろうってのが実際のところかな

【病気になった人生の設計をする】

B 氏は様々な経営者と話しをすることや、病気になった自分の人生と向き合う機会を持ったことで、理学療法士だけが仕事ではない、死ぬ前に何をやりたいかと考えると教授に成りたいと思うのは手段でしかないことに気づく。そして、【家族を大切にしたい】、【病気を仕事に活かすことで病気になったことが肯定できる】と考えるようになる。

＜経営している人達と話すことで、理学療法だけが仕事じゃないと思えたことは今後を考える上で大きかった＞

Q：他に出来ることが、探せばあるなって感じになっていったのですか

B：そうですね、その時に色んな経営している人とかに会う機会が多くて、話を聞いたりすると、理学療法士だけじゃないんだって思えたところが一番大きいです、僕はずっと理学療法士で大学院っていう、教授っていうカテゴリーに限っちゃっていたので、そこを外れたのは大きいなとは、今、振り返ると思います

＜病気になって自分の人生と向き合う機会があって、教授に成りたいと思うのは手段でしかないと気づいた＞

B：病気になって自分の人生と向き合う機会があって、そこで考えると、一番はその毎回言っているかもしれないですけど、海外旅行に行くってのが一番、楽しいところではあって、よく考えてみると、教授に確かに成りたいけど、でも手段でしかないなってとこに気づいて、何か死ぬ前に何やりたいかって考えると、教授になってから死にたいかって言うと、別にそうじゃないなって思って、ていうところに気づいたんで、自分ができないってなって考えてみると

＜理学療法士としての役割は失ったが、他にも仕事はあると体験して分かった＞

B：仕事の役割は、そうですね、理学療法士としては失ったって形になりますけど、でも他に色々と仕事があるなってことは自分で体験して分かったので

Q：人助けと PT、今の人助けと PT なんですけど失ったことをどのように感じますか

B：他の方法を考えれば良いのかなっていうところですかね、最初でも僕は理学療法士で目指したいの

は大学院へ行って、学校の先生に成りたいってのはあったので

Q：それは病気をする前から

B：前からですね、研究も好きだったし、授業をしたりも好きだったので、そこのショックは大きかったんですけど、そういう社会としての役割を目指したいなってとこはあったんですけど、それがやれないってことは凄いショックではあったんですけどでも、今、考えると、できることを他にもあるからいいかなってというところはあるんですけど

【一般企業で働いたら病気はマイナスでしかないと想う】

B 氏は【一般企業で働いたら病気はマイナスでしかないと想う】と、障害に対して否定的な認識を持ち、病気をプラスにするには、病気を利用して稼ぐしかないと想った。

＜一般企業で働いたら病気はマイナスでしかないと想う＞

B：一般企業で働いて病気だったら、マイナスでしかないんで、プラスにするには、病気で稼ぐしかないかなと想ってというところが、一番、あれですけどね

【病気と一緒に生きていかないといけない】

B 氏は【病気と一緒に生きていかないといけない】と障害に対して肯定でも否定でもない中立的な認識を持った。

＜病気と一緒に生きていかないといけない想い＞

Q：自分の障害を活かしたっていうか、活かそうっていうか

B：活かすっていうか、病気と一緒に生きていかないと、という形ではあるので

【人の役に立ちたい】

B 氏は自分の人生について考えた時、理学療法をやって病気になったことを考えると、自分が障害を持った人と関わるべきなのだと想い、【人の役に立ちたい】と役割に対する願望を持った。

＜病気になった時、人の役に立ちたいと想った＞

Q：もともと何か、人の役に立ちたいっていうのが強いのですか気持ちとして

B：これ（病気）になった時、理学療法士になった時も、まぁそういう

＜自分の人生について考えた時、理学療法をやって病気になったことを考えると、自分が障害を持った人と関わるべきなのだと想う＞

B：自分の生涯を考えて、なんで生まれてきたのかっていうのを考えるんですけど、理学療法士やって、病気になったって考えると、これどういうことだって考えると、僕がそういうとこをやるべきなのかなっていう

Q：そういう使命感みたいな

B：使命感みたいなとこもあって、自分の精神を安定させるのか、病気なっちゃった悲しいじゃなくて、楽しいんじゃないかっていうふうに変えるためのあれなのかも分からないですけど、使命感的なあれでちょっとやっているってところで

【家族を大切にしたい】

B 氏は「一番の僕の優先順位は、家族を大切にすること」と話し、自分が動けなくなったとしても家族に迷惑が掛からない状態にすることが現状の目標としてある。こういった経緯から現状の身体能力でも出来る、ネットショッピングの会社を立ち上げる。

＜座ってできるインターネットのネットショップを始める＞

Q：その時はじめたのは

B：インターネットのネットショップみたいなことですね

Q：その仕事にした理由ってのはありますか

B：座ってできるってものっていうとこなんですけど

Q：今の自分でできることっていう

B：そうですね

＜自分が動けなくなっても、家族を大切にすること、海外旅行へ行くことを叶えるためにも、会社を立ち上げる＞

Q：会社を立ち上げるのですか

B：そうですね、それで生きていければいいかなぁっていう、一番の僕の優先順位は、家族を大切にすることと、あと、海外旅行へ行きたいっていう、2 つしかないので、会社は手段でしかないけど、それが叶えれば良いので、これ叶えるために、これちゃんとやらないと、自分が動けなくなった時も、良いような状態にするにはっていうところで、そこが現状の目標ではあるんですけど

【病気を仕事に活かすことで病気になったことが肯定できる】

B 氏は「病気になって悲しいじゃなくて、病気で稼ぐっていうのが出来たら、多分、自分も病気になったことを納得できる、ポジティブになれるんじゃないか」、「障害を上手く使うっていうところで、ポジティブってとこもありますし、肯定する、利用する、なっちゃったからもう利用する」と話す。

＜病気になって悲しいではなくて、病気になったことで稼ぐことができたら、病気になったことを納得できると想う＞

Q：病気になって悲しいじゃなくて、病気で稼ぐっていうのが出来たら、多分、自分も病気になったことを納得できる、ポジティブになれるんじゃないかなっていうところで、そこしか解決方法ないですよね

＜障害を上手く使う、肯定する、利用する考え＞

Q：自分の人生を振り返ってというか、自分の人生を全て肯定するみたいなのか

B：そうですね、障害を上手く使うっていうところで、ポジティブってとこもありますし、肯定する、利用する、なっちゃったからもう利用するみたいなところ

＜自分が販売する商品の広告棟になれば、この病気も活きてくるとの想い＞

Q：話せる範囲で良いので、どんな会社なのですか

B：会社でも、インターネットのやつを会社してないんで、会社にして、あと、rectile Dysfunction（以下、ED）関係の物を取り扱っていこうかなって、ED の人、今、バイアグラしかないんですけど、バイアグラが効かない人が 30%ぐらいいるんですけど、（それ以外の）30%ぐらいの人に効くっていうのが、その注射を打つっていうのがあるんで、それが大阪の先生と一緒にやっているという形で、なのでインターネットプラスそれでやれれば、そこも自分の病気をうまく使っていけるかなっていうところで、そこでそうですね、広める、自分が広告棟になれれば、この病気も活きてくるかなと想って

【周囲に気を使われたくない】

B 氏には常に誰かが自分を気にしているとの認識があることから、極力、他者と関わりを少なくしたい、出掛けることを面倒くさいと想っている。

＜誰かが僕を気にしていると常に感じ、出掛けることを面倒くさく想う＞

Q：普通の会社、普通の社会に出て行った時に、多少、周りの目が気になることはありますか、気を使わしちゃったみたいなのってありますか

B：常に

Q：常にあるのですか

B：常にありますよ、出掛けるのが面倒くさいってとかはそういう所です、常に誰かが僕を気にしているってところがあるんでね、期待の変化っていうとあれですけど、そういう所の変化は

Q：期待というか周囲の、周囲からの感じ方は、それがずっとあるのですね

B：そうですね

＜周囲に迷惑を掛けたくないので、極力、関わりを少なくしたいと想う＞

Q：周囲の目が、一般の会社だったらとか言う例えもありましたけど、何か迷惑をかけちゃうなと思うこと自体はどう思いますか

B：嫌ですね、極力少なくしたいので、関わりをしないようにするとか、関わりをなくしたいです、気持ち的には

＜自分は物事を気にしやすい性格だと想う＞

B：僕は凄い気にしいなんで

B : 気にしいがメインです、性格的なところは、これを消そうとして目立つとか、なんとなく見えないじゃないですか、これ見えちゃうんで、高校の時とかも性格的なあれなんで、凄い昔から考えすぎるとか、空回りするっていうのはあったんで、それを治そうとして、あとそういうふうに見られるとこあるんで、それをじゃあ変えないと、見た目変えるためにはこっちしかない、適当な感じに

［役割獲得期］

＜出来事＞

・就労支援施設での管理業務に就く。

・自ら立ち上げたインターネット販売業で障害を持った人を雇用する。

・Erectile Dysfunction(以下、ED)関係の商品の広告棟になる。

＜カテゴリー内容の説明＞

【病気を仕事に活かすことで病気になったことが肯定できる】

B 氏は自分で立ち上げた仕事や役割を通じて、発症によるショックや悩みが解消され、また病気をポジティブに捉えられるようになった。

＜自分で立ち上げた仕事をやりながら発症によるショックや悩みを解消した＞

B : 自分で多分、仕事を立ち上げたりとか、それをやりながら、多分そこで自分の悩みを解消したっていうところがあると思うんですけど

＜役割を通じて病気をポジティブに捉えられるようになった＞

Q : ちょっとは、病気をポジティブに捉えられるようになりましたか

B : そうですね

Q : 障害を活かした役割に対して、B さんが B さんに期待するものは何ですか、病気をポジティブにするとか、そういうとこですか

B : そうですね、そこがメインですかね

【協力者がいる】

B 氏は役割に対して【協力者がいる】と、他者からサポートを受けている認識がある

＜役割に対して協力をしてくれる人がいる＞

Q : B さんの場合、良いでよね、オーダーメイドで広げていけますもんね

B : むっちゃ協力をしてくれるんですよね

【周囲からの期待がある】

B 氏は役割を通じて結果を求められていると想っており、【周囲からの期待がある】との認識がある。

＜役割を通じて結果を求められていると想う＞
B：結構結果が、結果を求められるっていう最近、期限と、そこが出て来ったってのがあるんですけど
Q：普通に社会の中で、社会人として、普通に求められているんですよね
B：そうですね、気がします、僕が全部やるっていう、言っちゃうんで、あんまり期待は分からんですけど、本人に聞かないと、僕としては

3）C 氏

（1） カテゴリーとコンセプト

C 氏の逐語録から抽出された 10 のカテゴリーと 38 のコンセプトを表 5 に示す。

表５．C 氏 カテゴリーとコンセプト

カテゴリ	コンセプト
1.将来の生活のイメージができない	将来の生活のイメージが沸いてこない
	仕事のことは考えられなかった、動ける状態にならないと意味がない
	入院当初は先が見えないことから何も考えられず、頭は真っ白で日々過ぎていくだけだった
2.健常者との付き合いがなくなる	付き合い方が限られることから、同じ会社の仲間でも自然と離れていった
	排尿・排便の理解をしてもらうことが難しいことから、人付きあいが制限されてしまう
	脊髄損傷者は生活の中での制限が多く、健常者同士と同じ付き合い方、遊び方ができないことから、健常者は離れていく傾向にある
3.健常者とは無理に合わせなくても良い	健常者とは無理に合わせなくても良い
4.体調管理が困難	前職に復職するが、仕事の内容ではなく、失禁をよくすることで嫌になった
	会社は理解を示し色々とやってくれたが、体調が不安定なことから仕事を続けることは難しかった
5.脊髄損傷者への支援についての考え方が健常者と脊髄損傷者とで違う	会社は大丈夫ちゃんと面倒を見るからと言うが、段々と社会復帰ができ問題がないとなると、面倒を見るということは希薄になる
	健常者が考える提案と自分が思っていることとのギャップが大きい
	健常の車椅子業者の提案と、僕らの提案は違う
	会社は面倒みるよ何とかなるよと言うが、何がなんとかなるの、何をどう面倒みるの、何も具体的じゃないしと素直には聞けなかった
	顧客に対してもう少し何とかしてあげられるんじゃないかといつも感じていたが、組織の中では思ったことができないことから、自ら車椅子販売会社を始める
	自分だったらこうしてあげたいなというのがある
	健常者の車椅子販売業者の人は勉強をしているけど、脊髄損傷については分からない人が多い
6.健常者が脊髄損傷者用に用意した職場では働き難い	いつまでも親の脛をかじっていてはいけないと、所属する車椅子バスケットボールチームのメンバーが経営する、車椅子販売会社に再就職する
	自分の怠け心があったかもしれないが、職業安定所で仕事を探すものの、なかなか働ける環境はなく、気心の知れた仲間のところで働くことを選択
	職業安定所に紹介されて見学に行くが、法律上でしかたなしに雇用しますよというのが、みえみえだった
7.脊髄損傷者は脊髄損傷者が生活をするうえでの重要な情報を持っている	車椅子の人ばかりの環境に移り、何とかなりそうなイメージが沸く
	入院している病院に通院してくる脊髄損傷者から情報をもらう
	お互いを高めあうために脊髄損傷者同士での繋がりを求める
	脊髄損傷者と関わりながら自己管理ができる状態までもっていかないと、前に進まない
	自分の経験から、脊髄損傷者は心を広げると良い
8.脊髄損傷者に情報を伝えたい	利益や損得ではなく顧客に対して同じ脊髄損傷者仲間のところに参加して情報を得ることを薦めている
	脊髄損傷者は自分で培ってきた病院では教えてくれないことを教えることができる
	仕事を通じて知った、脊髄損傷者の生活上の工夫を、他の脊髄損傷者に伝える
	顧客である脊髄損傷者にメールを通じてトランスファーの仕方の情報を伝える
	せっかくここまでになったのだから、もうひと頑張りだと、自分達からは見える
	脊髄損傷者が日常生活をよくするためには、運動をすることが一番に良い
	自分達が持っている知識の中で、できるだけ良い物や生活に役立つアドバイスを提供することで、顧客が社会復帰できるまでに持っていきたい
9.より良い車椅子を提供したい	最初に働いた車椅子販売会社の時から、対象に合わせた車椅子を作りたい、良い車椅子を作ってあげたい、と他の車椅子販売業者を含めて話をしていた
	知識を広げる部分で良いのではないかとの考えを持ちながら、介護保険領域へ職場を移す
	車椅子使用者の多くが半身麻痺の方のため、脊髄損傷者を対象としている自分達は業界の中では隙間にあたる
	この年になっても、もっともっと知識を入れて、もっともっと良いもの目指したい、自分のところ独自の物を作りたい
	自分達が作った車椅子が認められたら幸せ
10.脊髄損傷者として関わることで信頼を得る	人付き合いの中で信頼関係を作り、充実感を得る
	脊髄損傷者として関わることで顧客は信頼をしてくれている

（2）障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

役割獲得に至る過程を 4 期に分節化し、各期における自己と他者・社会に関わる要点に表すマトリクスへのカテゴリーの配置を示した（図 5）。[発症前][発症後][役割獲得期][役割創造期]、各期における、出来事の詳細と配置されたカテゴリーについて説明をする。

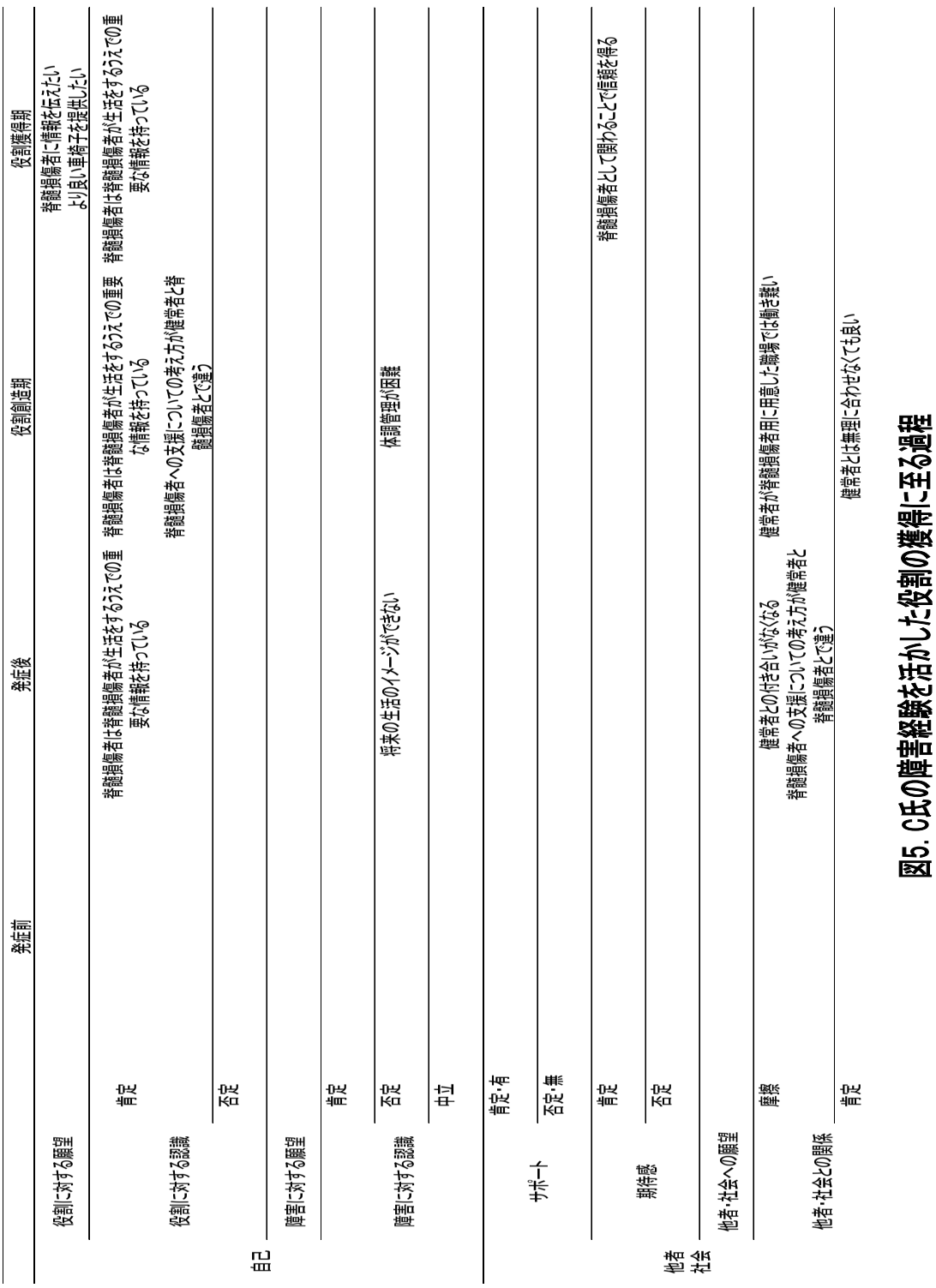


図5. C氏の障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

［発症前］

＜出来事＞

・設計関係の仕事に従事。

＜カテゴリー内容の説明＞

発症前のカテゴリーなし。

［発症後］

＜出来事＞

・事故から約 2 年間、入院をする。

・入院期間中は、身の回りのことを自身で出来るようになることに注力をした。

＜カテゴリー内容の説明＞

【脊髄損傷者は脊髄損傷者が生活をするうえでの重要な情報を持っている】

C 氏は急性期病院に入院中は､｢尿の管理とか便の管理とか色んなことが出来なくて｣と、今後、どうなってしまうのだろうと不安を抱えていた。しかし、転院したリハビリテーション専門の病院で、｢昔から、車椅子の人ばっかりやっているとこだったので、周りがそういう環境になっちゃったので、何とかなりそうなんやなっていう、自然にそういうイメージが沸いた」ことから、今後、｢何とかなりそう」なイメージが沸いたと話す。また、入院している病院に通院してくる脊髄損傷者から情報をもらうことができた。

＜車椅子の人ばかりの環境に移り、何とかなりそうなイメージが沸く＞

C：尿の管理とか、便の管理とか、色んなことが出来なくてですね、もう本当にどうなるんだろって、そんな感じでしたね、ただ、運良く、リハビリテーション専門の病院にじゃあもう転院しましょうって話になって、そこで専門のリハビリテーション病院に一応、入れたので、そこはもう昔から、車椅子の人ばっかりやっているとこだったので、周りがそういう環境になっちゃったので、何とかなりそうなんだなっていう、自然にそういうイメージが沸いたっていう感じですかね

＜入院している病院に通院してくる脊髄損傷者から情報をもらう＞

Q：実際に退院される間近の人とか、退院された人なんかも多分、情報があったのですかね

C：そうですね、交流がありますもんね、ずっと退院されても、通院されている方って、結構いるじゃないですか、そういう方との一応、リハビリの先生が、この人、色々と親切丁寧に教えてくれるから、教えてもらいなさいって言って、そういう情報をいただけたりするので

Q：身の回りの事ができるようになっていくなかで、また、そうやってやっている人を見ることで、安心をしていった感じですかね

C：そうですね

【将来の生活のイメージができない】

C 氏は入院当初、「将来の生活のイメージが、沸いてこない」と先が見えないことから、頭は真っ白で日々過ぎていくだけだったと話す。また、仕事に対しては、「仕事のことはあんまり考えられなかった、とりあえず今の職場に復帰できなくても、今、自分の動ける状態を作らないと意味がないので、そこばっかり考えていました」と話す。

＜将来の生活のイメージが沸いてこない＞

Q：歩けないと言われて、どんな感情が生まれましたか

C：真っ白っていうか、何も浮かんでこなかったですね、これからの将来の生活のイメージが、沸いてこないっていうか、どうするんだろうみたいな感じでしたね

＜仕事のことは考えられなかった、動ける状態にならないと意味がない＞

Q：2 年間、お仕事自体ができないこと、お仕事自体に対してはどんな感じだったのですか

C：正直言って、仕事のことはあんまり考えられなかったですね、とりあえず仕事を、今の職場に復帰できなくても、とりあえず今、自分の動ける状態を作らないと意味がないので、そこばっかり考えていましたね

＜入院当初は先が見えないことから何も考えられず、頭は真っ白で日々過ぎていくだけだった＞

Q：お怪我して入院されている時に、C さん自身が、自分に対して、自分に対する期待っていうんですかね、どういう期待を持たれていたのですか

C：期待は、入院した時はなかったですね、アハハハ

Q：どんな感じなのですか

C：だからもう本当に、何も考えられなかったっていうか、もう真っ白で、日々、過ぎていくだけっていう、そんな感じでしたね

Q：何でそんな感じになったと聞くのはあれかもしれませんけど

C：もう先が見えないっていうのが一番大きい原因だと思いますけど

【健常者との付き合いがなくなる】

C 氏は、「どっかに飲みに行くにしても、常に人の手を借りなければいけないとか、そういうので、自然とやっぱ離れて行きますかね」、「付き合いがどうしても制限されていっちゃうので、排尿、排便があるじゃないですか、そういうことを、理解してもらうってのは、なかなか、やっぱ難しいです」と、復職後に【健常者との付き合いがなくなる】経験をする。

＜付き合い方が限られることから、同じ会社の仲間でも自然と離れていった＞

C：仕事自体は別に問題なくできるとは思うんですけど、やっぱり最後の最後は、同じ会社の仲間でも、やっぱりどうしても付き合い方ってのが、僕らは限られちゃうので、どっかに飲みに行くにしても、常に人の手を借りなければいけないとか、そういうので、自然とやっぱり離れて行きますかね

＜排尿・排便の理解をしてもらうことが難しいことから、人付きあいが制限されてしまう＞

Q：復帰した後

C：そうですね、付き合いがどうしても制限されていっちゃうので、やっぱりね、ただ足が動かないだけだったら良いんですけど、排尿、排便があるじゃないですか、そういうことを、理解してもらうってのは、なかなか、やっぱ難しいです、僕らは別に足が動かないだけだったら、もっと、もっと、世界が広がっていると思うんですけど

Q：こっちが大きいんですね

C：やっぱ大きいですね、うん、そこがやっぱり大きいですね

Q：社会的な障害みたいな感じですもんね

C：そうですね

＜脊髄損傷者は生活の中での制限が多く、健常者同士と同じ付き合い方、遊び方ができないことから、健常者は離れていく傾向にある＞

C：生活の中で、実際の健常者の方と、他の社会的な話とかするのでも、どうしてもズレがでちゃうなとか

Q：普段の生活の中でそういうことってあるんですか

C：普段は別に、一番やっぱ、健常者の人って、例えば団体で飲みに行くぞって、階段があるけど全然そういうこと関係ないじゃないですか、やっぱ僕らって、ちょっとこう、また手伝ってもらわなきゃいかんのかって、思うじゃないですか

Q：いいよ、いいよって言われても

C：そうですね、いざ上がって行ったら、次はトイレしたい、またどっか連れて行ってもらわないかん、やっぱそういうので、どうしても制限されちゃうんで、同じ付き合い方ができないんですよね、だいたい僕らの周りの脊損の人も皆、そういう傾向がありますね、入院して、2年3年、退院して2年、3年間は健常者の人がよく来るんだけど、もう5年経ったら離れて行ったねって、そういう、たぶん、遊び方が違うんですよ

【脊髄損傷者への支援についての考え方が健常者と脊髄損傷者とで違う】

C氏は会社の人に対して、「会社の人は割りと冷静に、大丈夫だからちゃんと面倒をみるから」と言うが、「なんとかなるよって、何がなんとかなるの、何をどう面倒みるの、何も具体的じゃないし」と、【脊髄損傷者への支援についての考え方が健常者と脊髄損傷者とで違う】と感じ、素直に会社が言うことを聞くことはできなかった。

また、「自分が思っていることと、実際にやっていただくことのギャップが大きい」と、健常者が考える提案と自分が思っていることとのギャップが大きいと感じる。

＜会社は大丈夫ちゃんと面倒を見るからと言うが、段々と社会復帰ができ問題がないとなると、面倒を見るということは希薄になる＞

C：会社の人は割りかと冷静に、大丈夫だからちゃんと面倒を見るからっていう

Q：仕事中のお怪我ですもんね、そういうことになるんですよね

C：最初のうちはみんなそう言うんですけどね、段々時が経って、段々僕が社会復帰ができてきて、別に問題ないじゃんって話になったら、それはそれで、薄くなるっていうか

Q：家族も

C：家族はあれです、家族はいつも身近だから、会社の方はちょっと薄くなりますよね、どうしてもね、ちゃんとやってあげるよって言っていたのが、別に大丈夫じゃんみたいなそんな雰囲気で、なっていきますよね

＜会社は面倒みるよ何とかなるよと言うが、何がなんとかなるの、何をどう面倒みるの、何も具体的じゃないしと素直には聞けなかった＞

Q：会社の方はでも普通に何とかなるよ手伝うよって言ってくれて、そのこと自体はどう思ったのですか

C：うん、でも、素直には聞けなかったですね、何とかなるよって、何がなんとかなるのって、会社が面倒みるよって、何をどう面倒みる、何も具体的じゃないし、だけどまぁその時点で具体的にどうしろって言っても、そりゃ無理は無理なんだけど、口だけっていうのが、素直に受け取れないっていうのが、そういう部分だったかも分かんないですね

＜健常者が考える提案と自分が思っていることとのギャップが大きい＞

C：やっぱり、健常者の方が考えて下さっている、そういう色んな提案が、やっぱり僕もまだ脊損素人だし、分かってない部分があって、その自分が思っていることと、実際にやっていただくことのギャップが大きいっていうか、そういうのを一番感じたんですかね

［役割創造期］

＜出来事＞

・前職に復職するが、体調管理が困難なことを理由に半年で退職を選択する。
・退職後、入院中から行っていた車椅子バスケットチームの人達との情報交換や、体を動かすことを通じて、自己管理ができる状態を目指す。
・30 歳を過ぎた時に、職業安定所を通じて就職活動を行うが、同じバスケットボールチームに所属をする車椅子販売を経営している方にお願いをして、その会社に就職をする。
・12 年程、車椅子販売業者に勤務した後、車椅子のことを勉強したいという想いから、車椅子メーカーへ転職。その約 5 年後には、同会社の介護保険関係の事業の立ち上げに合わせて、その事業へ籍を移す。

＜カテゴリー内容の説明＞

【より良い車椅子を提供したい】

C 氏は、最初に働いた車椅子販売会社に勤務をしている時から、対象者に合わせた車椅子を作りたい、良い車椅子を作ってあげたいと、他の車椅子販売業者を含めて話をしていた。また、【より良い車椅子を提供したい】という想いから、車椅子メーカーへ転職し後、更に知識を広げたいとの考えから介護保険領域へ職場を移す。

＜最初に働いた車椅子販売会社の時から、対象に合わせた車椅子を作りたい、良い車椅子を作ってあげたい、と他の車椅子販売業者を含めて話をしていた＞

Q：それは本当に、C さんだから思えたことなのですかね、そういうのは、最初の車椅子屋さん 30 歳ぐらいの時に働いていた時も思っていたのですか

C：それは思っていましたね、けっこうライバル皆、あのダサイ車椅子作りやがってみたいな、お互い言い合ったりする、もうちょっと合わせてやれよとか、同じ脊損の中でも状態が違うので、座位バランスがどの程度までとれる人なのかとか、そういうので全部、幅とか背もたれの高さとか、機能性を、前後差を付けたりとかするので、そういうので、お互いに、あの子のやつ合ってねえぞオメェとか、そういう話を、お互いが貶し合ってって言っちゃあアレですけど、もうちょっとみんな良い物を作ってあげようねみたいな、そっから始まっていくので

＜知識を広げる部分で良いのではないかとの考えを持ちながら、介護保険領域へ職場を移す＞

Q：介護保険の方に行ったのは

C：また違った世界っていうかね、それも一つの、知識を広げる部分でも良いんじゃないかなっていうもあったので

【脊髄損傷者は脊髄損傷者が生活をするうえでの重要な情報を持っている】

C 氏は入院中から行っていた車椅子バスケットの人達とのコミュニケーション（情報交換）や、体を動かすことを通じて、自己管理ができる状態を目指した。

＜お互いを高めあうために脊髄損傷者同士での繋がりを求める＞

Q：脊損の方達って、脊損の方達同士のスポーツとかコミュニティが、全国規模であるじゃないですか、それっていうのも、今伺ったようなことが背景にあるのでしょうか

C：やっぱりお互いを高めあうっていうんですかね、そういう部分では繋がりを求めますね

＜脊髄損傷者と関わりながら自己管理ができる状態までもっていかないと、前に進まない＞

C：自己管理が出来ないと、仕事は出来ないなっていう気持ちになったんですね

Q：（仕事を辞めた後）、3 年ぐらい色々と落ち着かないと伺いましたけど、（仕事を）やめる時に、見通しみたいな、どういうふうに、どれくらい、どうなったら落ち着くかなみたいな、どんな感じだったのですか

C：それはなかったんですけど、退院して仕事復帰をする前からバスケットとかをやっていたので、それで周りの人とのコミュニケーションしながら、そっちの勉強をしてっていう感じで、だんだんそういう感じも出来てくるようになってくるので、だから、そっちの方とりあえず、自己管理が出来る状態まで、とりあえず持っていこう、それからじゃないと、前に進まんなぁっていう気持ちではありましたね

【脊髄損傷者への支援についての考え方が健常者と脊髄損傷者とで違う】

C 氏は健常の車椅子販売業者の方に対して、「僕らがちょっと提案する考え方と、やっぱちょっと違う」、「腕力で支えるっていうのがどういうふうなのかってのが、なかなかその分からない部分があるみたいで、そういう違いをやっぱり感じたりしますね、意外と安易に形をきめちゃうんだな」と、【脊髄損傷者への支援についての考え方が健常者と脊髄損傷者とで違う】と思った。

そして、「もう少しなんか、もうちょっと、俺やったらこうしてあげたいな」、「組織の中で思ったことができないっていうのが、やっぱありましたかね、何か違うんじゃないのって、やっぱり有り合わせの物をポンポンポンこの持っていって、やる仕事はもう一つやな」と、顧客に対してもう少し何とかしてあげられるんじゃないかといつも感じていたが、組織の中では思ったことができないことから、自ら車椅子販売会社を始めることになる。

＜健常の車椅子業者の提案と、僕らの提案は違う＞

C：同じ車椅子屋さんがあって、健常者の人が提案する考え方と、僕らがちょっと提案する考え方と、やっぱちょっと違うなと、生活の中で、ここはこうゆうふうにしなあかんなとか、車の乗り移りはこうゆうふうだよなとか、部屋の中の動きはこうゆうふうだよねとか、トイレに移る、お風呂に移る動作はこうゆうふうだから、こうゆうふうにしなあかんなとか、そういうのを感じながらいつも仕事をしているんで、そこらへんが、なかなか健常者の方って、たぶん色んな、半身麻痺の方で、ちょっと立ったりできるとか、そういう人のがやっぱり多いんで、そっちの方が知識の方に行っているかなと

Q：やっぱり本当に分かんないですよね

C：両足、本当に腕力で支えるっていうのがどういうふうなのかってのが、なかなかその分からない部分があるみたいで、そういう違いをやっぱり感じたりしますね、意外と安易に形をきめちゃうんだなとか

＜健常者の車椅子販売業者の人は勉強をしているけど、脊髄損傷については分からない人が多い＞

Q：同じ脊損者用の車椅子を健常な人が売っている会社も、普通にあるのですか

C：ありますね、多分、それでもけっこう勉強はされていると思いますけど、病気の症状において、ただもう脊損なんかになると、たぶん分からないってのが多いですね、分からないっていう人が多いですね、同じ業者の中でも

＜顧客に対してもう少し何とかしてあげられるんじゃないかといつも感じていたが、組織の中では思ったことができないことから、自ら車椅子販売会社を始める＞

Q：自分でやろうと思った切っ掛けっていうのは

C：けっきょく、組織の中で思ったことができないっていうのが、やっぱりありましたかね、何か違うんじゃないのって、やっぱり有り合わせの物をポンポンポンと持っていって、やる仕事はもう一つやなっていう

Q：メーカーのものに限られちゃうとか

C：そうですね、僕らの気持ちとしては、例え、半身麻痺の人でも、どんな病気の人でも、採寸して合わせてあげたいよね～みたいな、ただ、有り合わせの物を、モジュラー持って行って改造して、収めるんじゃなくて

Q：C さんの立場だから思うことなんですよね、オーダーメイドの必要があるっていう感覚

C：そうですね、もうちょっと合わせられるんじゃないかっていう、もう少し何とかしてあげられるんじゃないかっていうのを、いつも感じながらやっていて

＜自分だったらこうしてあげたいなというのがある＞

Q：同じ障害を持たれている方だからこそ、親身に感じられる、考えられるってことですかね

C：もう少しなんか、もうちょっと、俺やったらこうしてあげたいなみたいな、そういうのがあって

Q：それってもしかしたら、もともとのcさんの設計士っていう、しっかり採寸するというベースもあるんですかね

C：うん、利用者を見て、自分が感じたデモ品の車椅子を持っていって、これで一回乗ってもらって、慣れてもらって、それでもう少しじゃあこういうイメージで作りたいねとかっていう、自分でこうちょっと思いながら、一応すすめているんですけど

【体調管理が困難】

C 氏は退院後、前職に復職するが、仕事の内容ではなく失禁・尿路感染・発熱をすることなど、体調が不安定なことから仕事を続けることが難しくなる。

＜前職に復職するが、仕事の内容ではなく、失禁をよくすることで嫌になった＞

Q：復職して半年間働いた時は、どんな気持ちで働いていたのですか、体調が悪かったとかもあったり

C：そうですね、病気に慣れていなっていうか、正直言って仕事の内容っていうよりも、自分との管理の戦い、失禁をよくするので、それで嫌になってってのが、正直なところですね

＜会社は理解を示し色々とやってくれたが、体調が不安定なことから仕事を続けることは難しかった＞

Q：お仕事に復帰されて、実はそこでまた、どれくらい働かれたのですか

C：それはやっぱり短かったですね、半年ぐらい

Q：そんなに短かったのですか、それはさっき言った理由とかで

C：そうですね、会社としては、理解してくれて、色々とやってくれているつもりだったんですけど、僕もまだ病気の経験も浅いし、その当時って、退院しても、3 年間ぐらいは体調不安定になるんですよ、熱発したり、尿路感染とか、体温調節うまいこといかないとか、色んな原因で、どうしても 3 年ぐらいは色々、熱発したりとか、結構、期間の間にやってたりするので、そういう部分で、復帰後、色々、難しかったかなっていうのがありますね

【健常者が脊髄損傷者用に用意した職場では働き難い】

C 氏は退職後に行っていた体調の自己管理を進める中で、「やっぱり自立をしないといけないので、いつまでも親の脛をかじっとってもいかんもんで」と再就職を考えるようになる。そして、「職安さんなんかに通って、あちこち探してみたけど、結果、ここら辺は自分が怠け心があるんか分からんけど、気心知れた仲間の中に」と、所属する車椅子バスケットボールチームのメンバーが経営する車椅子販売会社に再就職をする。

職業安定所で紹介された職場に対しては、「法律上で、何パーセント雇用をしなきゃいけないとか、決まっているから、まぁしかたなしに、やってますよってのがけっこう、みえみえっていうか、積極的じゃないなって、ほんで、別に良いんだけど、何かその、辞めてもらっても良いよみたいな、なんかそういうのが、みえみえっていうか、そういうのを感じることがけっこうありましたね」と、【健常者が脊髄損傷者用に用意した職場では働き難い】と思った。

＜いつまでも親の脛をかじっていてはいけないと、所属する車椅子バスケットボールチームのメンバーが経営する、車椅子販売会社に再就職する＞

Q：車椅子の、それはどういった経緯なのですか

C：それはやっぱりスポーツですね、バスケットの中に車椅子屋さんをやっている人がいて、そこの会社に入ったっていう

Q：それは、誘われたのですか

C：誘われたっていうか、お願いしたというか、そんな感じですね

Q：その時に、お願いした思いというか

C：やっぱり自立をしないといけないので、いつまでも親の脛をかじっとってもいけないんでっていう感じでしたね、その頃 30 ですから

＜自分の怠け心があったかもしれないが、職業安定所で仕事を探すものの、なかなか働ける環境はなく、気心の知れた仲間のところで働くことを選択＞

Q：職種として、車椅子の販売を選んだっていうのは

C：なかなかそういう環境がなかったっていうのがあるかも分からないですね

Q：他に選択肢がってことですかね

C：あったのかも分かんないですけど

Q：その時に他に悩んだりとか、比べたものとかあったのですか

C：職安さんなんかに通って、あちこち探してみたけど、結果、ここら辺は自分に怠け心があるんか分からんけど、気心知れた仲間の中に

Q：一回、半年間の経験がありますからね

C：そうですね

Q：職安の時は、車椅子を条件で働けるところっていうことで探していたのですか

C：勿論そうです

Q：その時は、そんなに無いんですかね

C：やっぱり、けっこう冷静っていうか、最初の会社のイメージですね、ちゃんとしてあげるよっていざ行ってみたら、全然違うじゃない

Q：見学にも行かれたのですね

C：そうですね

Q：その時は、設計関係だったりしたんですか

C：いえ、ラインの中に入るとか

＜職業安定所に紹介されて見学に行くが、法律上でしかたなしに雇用しますよというのが、みえみえだった＞

C：そうですね、手先だけだったら別に良いので、そうなんですけど、うん、なかなかやっぱり、どう言ったらいいんですかね、今、法律上で、何パーセント雇用をしなきゃいけないとか、決まっているから、まぁしかたなしに、やってますよってのがけっこう、みえみえっていうか、積極的じゃないなって、ほんで、別に良いんだけど、何かその、辞めてもらっても良いよみたいな、なんかそういうのが、みえみえっていうか、そういうのを感じることがけっこうありましたね

Q：気持ちとしては、のらないですよね

C：のらないですね、えぇ

【健常者とは無理に合わせなくても良い】

C 氏は健常者に対して、「離れて行くっていうか、自然に関係が違ってくるので、お互い合わせるのも、無理するのも、無理しなくていいんじゃないって逆に思っちゃうんですよね」と、【健常者とは無理に合わせなくても良い】との認識を持った。

この認識を持った後の退職後に、入院中から行っていた車椅子バスケットチームの人達とのコミュニケーションや、体を動かすことを通じて、自己管理ができる状態を目指すようになる。

＜健常者とは無理に合わせなくても良い＞

Q：離れて行っちゃう健常の人よりも良いですよね

C：そうですね、離れて行くっていうか、自然に関係が違ってくるので、お互い合わせるのも、無理する

のも、無理しなくて良いんじゃないって逆に思っちゃうんですよね

［役割獲得期について］

＜出来事＞

・C 氏が設立した会社で、脊髄損傷者用の車椅子や備品等を販売している。

＜カテゴリー内容の説明＞

【脊髄損傷者に情報を伝えたい】

C 氏は、「（脊髄損傷者は）病院では教えてくれないことを、いっぱい教えてくれる」「（脊髄損傷者）仲間の情報網を自分から駆使して探していくっていう気持ちが（脊髄損傷者には）本当は欲しい」と、脊髄損傷者同士での情報交換の必要性を自らの経験を通じて感じており、利益や損得なしで、脊髄損傷者に、「こうして下さい、こうした方が良いですよ」と自分自身の経験、仕事を通じて知った脊髄損傷者の生活上での工夫を伝えている。また、「自分達が持っている知識の中で、できるだけ良い物や生活に役立つアドバイスを提供することで、顧客が社会復帰できるまでに持っていきたい」と、顧客の生活動作の確立だけではなく、社会復帰が出来るように関わりたいと考えている。

＜利益や損得ではなく顧客に対して同じ脊髄損傷者仲間のところに参加して情報を得ることを薦めている＞

C：僕らも、本当はですね、仲間の情報網を自分から駆使して探していくっていう気持ちが本当は欲しいですね、だから、どうしても○○さんも家族との関係とか色々そういうのが難しいのかも分からないけど、結果、ちょっと、外とのコミュニケーションもう少し取れれば

Q：受け身だとダメなんですね

C：もう、ダメですね、僕は入院して直ぐは全然受け身で、どうのこうのでしたけど、やっぱり 2 つ目の病院に行って、全然やっぱり変わってきたと思うので、そういうふうにしないと、やっぱり自分から、同じ仲間のところにも、飛び込むぐらいのアレがあると、今でもたぶん、教えてくれる人いっぱいいると思うし、なかなか外からその人に、最初のうちは問いかけるんですよ、こうして下さい、こうした方が良いですよとか、働きかけるんですけど、返答が返ってこなかったら、まぁいいじゃん、そういうふうになっていっちゃうんですね、だから、そこは利益とか、損得でやっているわけじゃなくて、本当にもったいない、そのまま埋もれて行っちゃうの、もったいないなっていう気持ちがあって

Q：お客さんで会う人とか

C：お客さんにも言っていますよそれは、だからできるだけ、そういう同じ仲間のところに参加しなって

Q：スポーツだったり

C：そうです、はい

＜脊髄損傷者は自分で培ってきた病院では教えてくれないことを教えることができる＞

Q：脊髄損傷の方達ってそういう、同じ御病気の方達同士で関わることの効果というか、そういうのが特に強いですよね

C：とても大きいと思いますね、病院で治療するよりも、逆に大きいんじゃないかと思うぐらい、病院では教えてくれないことを、いっぱい教えてくれるので、

Q：それって、内容にもよるのでしょうけど、何でだって言えますか

C：今の病院さんって例えば入院中に怪我をしないように安全に安全にってやるじゃないですか、僕らもやっぱ当時っていうのは、怪我をしたら、病院だから治療すれば良いじゃないみたいな、逆に感覚があって、だからそういう、階段を降りるとか、危ないことも

Q：階段を降りていたのですか

C：階段、降りますよ、手すりとかがあればの話ですけどね、手すりに掴まって、とんとんとんとんっと、エスカレーターに乗るようなイメージで降りていくんですけど、そういうことを、こうちょっと危険なことでも、やらしてあげるじゃない、昔はそうだったんですよ、そういうところで次元が違うので、病院以外のことでも教えてくれるってのは、そういうことなんですよ、そういう生活の中の、あれでも

Q：知恵というか

C：自分で培ってきたものってあるじゃないですか、そういうものを伝えてあげられるので

Q：病院で教えていることっていうのが、本当にちょっと限られているってことになりますよね

C：そうだと思いますね、プッシュアップで移乗するとか、後、排尿管理とか、排便管理とか、それぐらいのイメージになっちゃうと思うんですけど

Q：本当に僕も関わらせてもらいながら、本当にそれぐらいになっちゃいますもんね

C：生活の中でこうゆうふうにしたら良いよとか、こういう道具あるよとか、色んなことを教えてあげられるし、教えてもらえるし、だからやっぱ仲間の関わりって凄く大事だなっていうのが

＜仕事を通じて知った、脊髄損傷者の生活上の工夫を、他の脊髄損傷者に伝える＞

C：同じように痙性が良くでるとかどうのこうのとかっていう、僕はここのポイントを抑えると痙性止まるんだよねとかね、どういう姿勢にしたら痙性がなくるよとか、そういうのは人それぞれ違ったりするので、僕らが車椅子を考える時も、そういうことも考えなきゃいけないんだなとか、あと、そうですね、車椅子以外の知識のこととか、例えば、乗り移りの仕方が僕らと全然違う方法で乗り移っているとか、実際にやってみせてよって言ったら、本当にスゲー珍しくて、そういう乗り方をする人もいるんだなとか

Q；そういうのってやっぱり、Cさんの中でも知りたいことなのですか

C：やっぱ知りたいですよね、そういうふうな話を聞いていたら、こういうやり方をやっている人もいますよっていう、アドバイスができるんですよ、だから、僕らみたいな、いつも同じようなやり方ではなくて、ちょっとこのポジションを変えるとか、ちょっとこう前後にポジションを変えるとか、そ

ういうので力の入り方が違っていたりして、こういうふうにやっている人もいますよとかって、教えてあげられたり

＜顧客である脊髄損傷者にメールを通じてトランスファーの仕方の情報を伝える＞

C：○○さん何かでも、ちょっとメールで何回か送ったりしても、ちょっと返事が来ないとかね、ユーチューブにこういうの載っているから、トランスファーの仕方が、こうゆうことやっているからっていって、動画で送ったりとか、無反応だから、そこらへんの部分で、ちょっとこう、時間が経ったら心を開くのかなとか思うんですけど、やっぱりあまりにも入院期間が短くて、そういう余裕がないのかなと思いつつ

＜せっかくここまでになったのだから、もうひと頑張りだと、自分達からは見える＞

C：せっかくここまでになったんだったら、もうひとがんばりやんみたいなところが、僕らから見てあって、僕らもまだがんばらなあかんのかなとは思っているんですけど

＜脊髄損者が日常生活をよくするためには、運動をすることが一番に良い＞

C：僕らも、スポーツをやれっていう意味じゃなくて、とりあえず、その日常生活をよくするためには、何をしなあかんかっていうのを思った時に、運動をするのが一番だと思うんですよ、何でもいいんですよ、身体能力、筋力とか、そういう、バランス能力とか、そういうのを鍛えるのは、運動することが一番だと思っていて、それが自然に身のこなしが出来るようになるんですよね、だからそのバスケットをやれとか、テニスをやれとか、そういう話じゃなくて、そのバスケットをやる、テニスをやることが、運動であって自分の日常生活を向上させるためのリハビリになっているんだっていうふうに考えてくれると、非常に良いのかなって思うんですけど

＜自分達が持っている知識の中で、できるだけ良い物や生活に役立つアドバイスを提供することで、顧客が社会復帰できるまでに持っていきたい＞

Q：障害経験を活かした役割における障害の価値をどう考えますか、障害は本当は辛いことだと思うんですけど、お仕事をすることにおいて、身体的・社会的障害っていうのは、どんなふうに捉えていますか

C：とりあえず、僕らの考えているのは、今自分達が持っている知識の中で、もう本当に、利用者さんに、できるだけ本当に良いものをっていう、その一念だと思いますけどね、当然、その予算とか、金額の面の範囲だとか、そういう部分にはなっていくんですけど、やっぱり、せっかく、社会復帰ができる能力を持っているのに、埋もれてしまうんじゃなくて、ちゃんと社会復帰できるように、なんかそういう器具とか、他のそういう生活に役立つアドバイスとか、物が出来るように、せっかく社会復帰できるのに、その次元まで持って行ってあげたいよねっていうのが、気持ちの

Q：本当に根底にあって

C：えぇ

【より良い車椅子を提供したい】

C 氏は、「自分に期待することですか、やっぱり、まだこの年でも、もっともっとこう何か知識を入れて、もっともっと良いもんを目指したいと思っていますね」、「できたら、自分ところ独自の物を作りたいですね」、「僕らが作った物が、たくさん出れば、認められているっていうか、そういうふうになると、幸せかなって」と、顧客に対して【より良い車椅子を提供したい】想いを持って働いている。

＜車椅子使用者の多くが半身麻痺の方のため、脊髄損傷者を対象としている自分達は業界の中では隙間にあたる＞

Q：この業界自体は同じお怪我をしている脊損の人の方が多いのでしょうか

C：10 分の 1 ですからね、半身麻痺とかの人に比べたら 1 割しかいないんですよねで、全体の流れが半身麻痺の方の人に、で、そこら辺の隙間が、ちょっと僕らがやっているようなイメージになるんですかね

＜この年になっても、もっともっと知識を入れて、もっともっと良いもの目指したい、自分のところ独自の物を作りたい＞

Q：実際、今やられているお仕事自体に、C さんが期待をするものって何ですか、自分に期待することって

C：自分に期待することですか、やっぱり、まだこの年でも、もっともっとこう何か知識を入れて、もっともっと良いもんを目指したいと思っていますね

Q：自分の成長に繋がるものっていうか

C：そうですね、できたら、自分ところ独自の物を作りたいですね

＜自分達が作った車椅子が認められたら幸せ＞

Q：その理由なんて、ないですよね

C：やはり、僕らが作った物が、たくさん出れば、認められているっていうか、そういうふうになると、幸せかなって、、アハハハ

Q：そうですよね、認められたら、承認されたら、やりがいみたいなものですよね

【脊髄損傷者は脊髄損傷者が生活をするうえでの重要な情報を持っている】

C 氏は［発症後］［役割獲得期］から【脊髄損傷者は脊髄損傷者が生活をするうえでの重要な情報を持っている】と捉えていることから、情報を受けいれるために、「（脊髄損傷者には）心を広げていただけたら」と話す。

しかし、「どういったら良いのかな、よく、けっこう受け付けない人って多いんですよ」、

「何も考えられないというか」と、脊髄損傷者には心理面の難しさがあることも話す。

＜自分の経験から、脊髄損傷者は心を広げると良い＞

Q：Cさんの中で、もっと採寸してあげて、どうしたらもっと乗りやすくなるだろうなっていう思いがあるってうかがいましたけど、脊損の人に対して、色々アドバイスをしたいというか、同じ仲間として、もっと、生活しやすくなるように関わりたいってのがベースにある

C：そうですね、心を広げていただけたら

Q：心を広げていく

C：どういったら良いのかな、よく、けっこう受け付けない人って多いんですよ

Q：なるほど、○○さんも言っていたんですよね

C：僕が一回目に入院した時のイメージになっちゃうのかな、何も考えられないというか、受け付けられないというか

【脊髄損傷者として関わることで信頼を得る】

C 氏は脊髄損傷者として、健常の車椅子販売会社の人とは違うやり方で顧客と関わることで、「信頼してくれている人は、信頼をしてくれていると思う」と、【脊髄損傷者として関わることで信頼を得る】ことができている。

また「人とのコミュニケーションで、付き合いの中で、信頼関係を作って、自分がこう充実していっている」と、人との信頼関係が出来ることで仕事上での充実感を得ている。

＜人付き合いの中で信頼関係を作り、充実感を得る＞

Q：C さんの中で、C さんが仕事なのでお金を貰うっていうことは当然のことである中で、それと同じぐらい、その人と関わること自体が、重みというか、大切さというか

C：結局なんか、他の世界でもやっぱそうなんじゃないですかね、その人付き合いがちゃんとこうやれるかどうか、何かそういう人とのコミュニケーションで、付き合いの中で、信頼関係を作って、自分がこう充実していっているっていうか

Q：C さん自体も充実していっている感じ

C：うん、勿論、もうそうですね

＜脊髄損傷者として関わることで顧客は信頼をしてくれている＞

Q：お客さんなんかは、同じ脊損の C さんがやられているから良いなって思って、来てくれる感じはしますか

C：僕らが例えば、これだとバランス取り難いでしょっていったら、うんうんうん、これぐらいだったらとれるとかいって、そういう話をしながら、角度を決めたりとかやっていくので、ちょっとこう、やり方が違うんですよね、だから、そういう部分で、たぶん、信頼してくれている人は、信頼をしてくれていると思うんですけど

Q：僕らからしても、本当に、真っ先に C さんの会社に言ったほうがいいって思うんですよ、僕らの期

待としては、同じ脊損の方のが分かるよねって言って、僕ら分からないので、たぶん

C：医学的なところは先生方の方がよく詳しいから、そのあれだと思うんですけど

Q：感覚みたいなところは分かんない

C：感覚の世界になっちゃったりする時あるんで

4）D 氏

（1）カテゴリーとコンセプト

D 氏の逐語録から抽出された 11 のカテゴリーと 30 のコンセプトを表 6 に示す。

表６．D 氏 カテゴリーとコンセプト

カテゴリー	コンセプト
1.周囲の支えがあり悲観的にはならなかった	友人や家族の怪我に対する受け入れが良く、何かを失ったと喪失感を感じることはなかった
	入院中に他患者と悩みを共有した
	周囲の支えがあり、またその周囲に悲観的に見られたくないと思ったことから、鬱や悲観的になることはなかった
2.どこまで生活が戻るのか考えられない	どこまで生活が戻るのか考えられない
3.生きていて良かったと思うレベルの事故だった	生きとって良かったなと思うレベルの事故だった
4.障害による経験を顧客にフィードバックすることが自分の役割であり強みである	切断者の話を聞き、フィードバックをするのが自分の役割
	色んな運命的なものが結びついてなるべくしてPOになったような気がする
	義足のPOに自身が救われた経験からも、仕事を通じて対象者の支えになることができたら、POの仕事は凄く意義があると思い働いている
	治療に関わっているという面で、凄くやりがいがある仕事だと思う
	分かってもらえる人にやってもらいたいよねと言われ、そういったところを強みだと思う
5.自分が使う義足の知識を得るために義士装具士になる	医療系での職業経験と物作りが好きなことを活かしつつ、自分の体にフィードバックができると考え義肢製作所でアルバイトを始める
	PTよりもPOの方が装具に関する情報を持っている
	自分の体に付いている自分が扱う義足だから、自分が知識を持っていないとうまくコントロールできないと思った
6.出来ることと出来ないことを理解して工夫することで生活が確立した	入院中の生活やリハビリを通じてではなく、退院してからの環境に戻って生活することで、生活ができそうだなと思えた
	経験を重ねるうちに、ここまではできるけど、ここまではできないっていう線引きが出来てくることで、どうやってやるかっていうのを工夫するようになる
	自分の生活を取り戻すためには、悲観的な部分にとらわれるのではなく、前に進まなければいけない
	生活の中で出来ることと出来ないことを理解しないと、生活は確立できない
7.障害があることを大変だとは思わない	生活レベルは完全に持ち直している
	人前に出ることに抵抗感はあったが、今は抵抗感ない
	切断者以外からは大変そうだと見られることが多いけど、そこまで大変だとは思っていない
	悩みとしては健常者と変わらないと思う、自分の悩みを障害によるものだと思ったら、自分で壁を作ってしまったことになる
	自分をそこまで障害者だと思っていない、眼が悪くて眼鏡を掛けているのと同じ感覚
	ほとんど完全に近いぐらい障害があることは消化されている
8.義足使用者になったことで得られた生きがい感	僕の持っている障害は、自分と人を繋ぐ手立て
	義足が引き付けてくれた人が凄く多い
	全国障害者技能大会で2位になる
	勤務先にいる自分の義足を作ってくれた人が世界の技能大会で金賞を取っており、自分もそれを目指していることは人生の一部だと思う
9.障害と仕事と生活のバランスがとれている	僕の場合、障害と仕事と生活が密接していて、切っても切り離せない
	障害と仕事と生活のバランスがとれている
10.義足を使用しているPOの社会復帰をしている姿を見たことがPOを目指す大きな切っ掛け	義足を使用しているPOの歩いている姿、社会復帰をしている姿を見たことが、POを目指す大きな切っ掛けとなった
11.分かってもらえる人にやってもらいたいよねと言われる	分かってもらえる人にやってもらいたいよねと言われ、そういったところを強みだと思う

（2）障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

役割獲得に至る過程を 4 期に分節化し、各期における自己と他者・社会に関わる要点に表すマトリクスへのカテゴリーの配置を示した（図 6）。[発症前][発症後][役割獲得期][役割創造期]、各期における、出来事の詳細と配置されたカテゴリーについて説明をする。

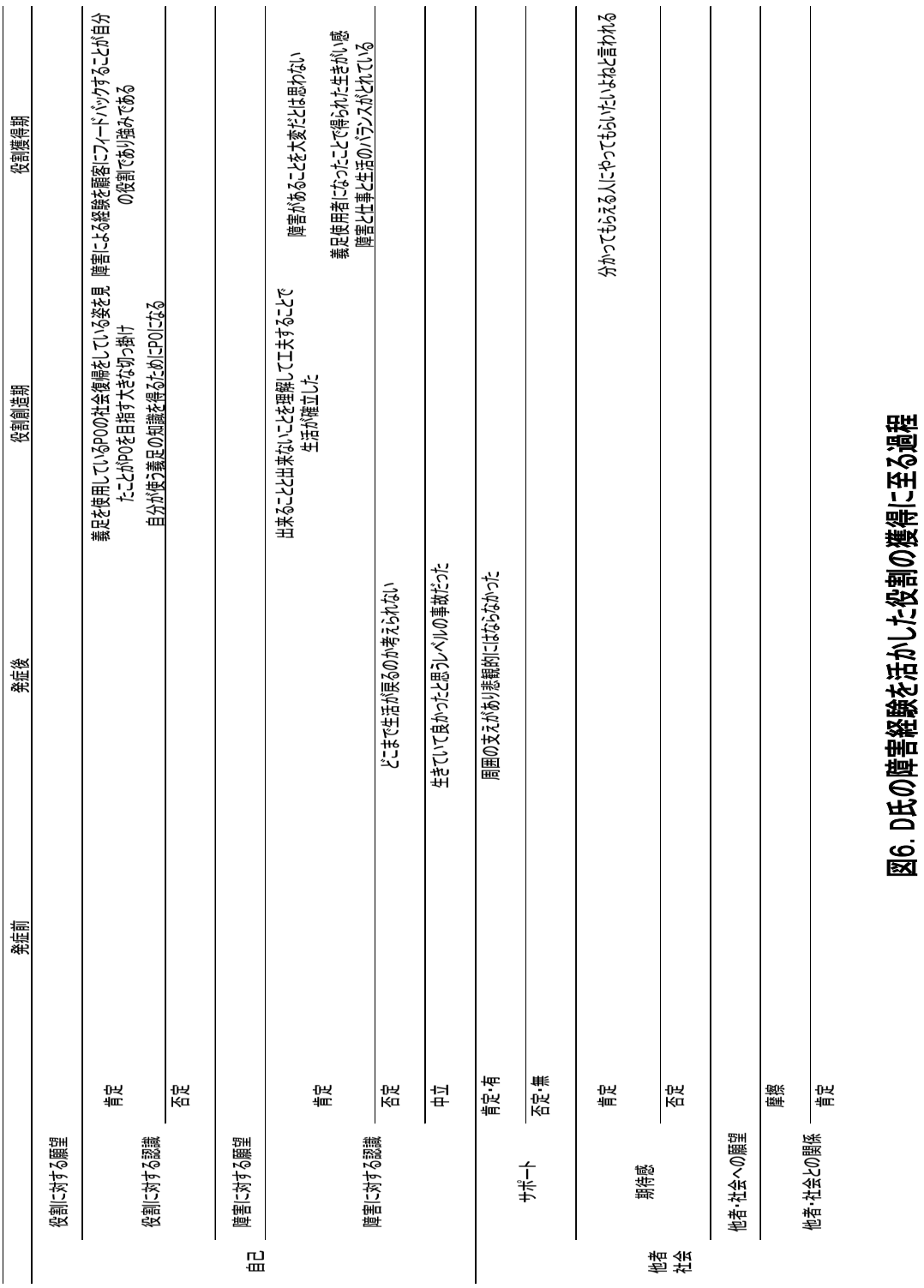


図6. D氏の障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

［発症前］

＜出来事＞

・木工関係で働く父親の影響を受け、物作りに興味があったことから、一度は美術系大学への進学を考える。

・大学卒業後は介護・看護助手の仕事に就き、約 3 年間、介護医療の職に従事する。その後に転職を行い、電気工事師として働く。

＜カテゴリー内容の説明＞

発症前のカテゴリーなし。

［発症後］

＜出来事＞

・自転車走行中にトラックに跳ねられ足を轢かれる事故に遭う。そして事故から 3 日目に敗血症のリスクがあることから、緊急で大腿の 2 分の 1 を残し下肢を切断。切断を選択する時は、その判断が生死に関わっており、必要に迫られていたことから、ショックを感じている場合ではなかった。

＜カテゴリー内容の説明＞

【どこまで生活が戻るのか考えられない】

D 氏は入院当初、「とりあえず、どこまで生活レベルが戻せれるっていうのが、考えられない状態」だったと話し、切断をした身体での生活のイメージが持てなかった。

＜どこまで生活が戻るのか考えられない＞

Q：その時（入院当初）、もう、自分の社会的な不安とかは一回、置いておいてみたいな感じなのですか、どんな感じなのですか

D：とりあえず、どこまで生活レベルが戻せれるっていうのが、考えられない状態ですもんね

【生きていて良かったと思うレベルの事故だった】

D 氏は事故について、「生きとって良かったなぁってレベルだと思う」と話す。

＜生きとって良かったなと思うレベルの事故だった＞

Q：一回、期待っていうのはマイナスになっちゃいましたか、人生もう終わりだみたいな、何にもできない人になっちゃったとか

D：でもそこまでではないですね、生きとって良かったなぁってレベルだと思うので

【周囲の支えがあり悲観的にはならなかった】

D 氏は、友人や家族の怪我に対する受け入れが良かったこと、入院中に他患者と悩みを共有することができたことから、「鬱になっちゃうとか、絶望的だとかって、悲観的な状況にはならなかった」、「何かを失ったという喪失感に関しては、人によるのでしょうけどね、僕

の場合はなかったですね」と話す。また、「落ち込む前よりも、周りの人間に悲観的に見られるのを僕が嫌だったっていうのが、一番大きいかもしれないですね、これでたぶん自分が落ち込んだら、周りにどう思われるかとか、僕がモチベーションをそのところで下げちゃうと、周りの人間ももっと悲観的になるだろうし、っていうのが一番おおきいでしょうね」とも話し、【周囲の支えがあり悲観的にはならなかった】。

＜友人や家族の怪我に対する受け入れが良く、何かを失ったと喪失感を感じることはなかった＞

Q：仕事以外、友人関係とか家族との関係とか、ギクシャクしたような

D：っていうのは、これ有り難いことに、自分も福祉学部を出てたってのもあるので、結構、友人等では受容がスムーズっていうか、抵抗なく接してくれる人が多かったってのがありすね、意外と身内の人間はそんなに

Q：結構そうみたいですね、良くも悪くも言わないみたいですね

D：意外と多分、多分どの障害を持ったとしても、意外とそういうものに関しては身内って寛容というか、仕方ないよねって、生きとったから良いじゃないの、ですからね、何かを失ったという喪失感に関しては、人によるのでしょうけどね、僕の場合はなかったですね

＜入院中に他患者と悩みを共有した＞

Q：入院中、受容といいますか、心が整っていくっていうのですかね、そういうのって、どういう関わりというか、切っ掛けというか

D：切っ掛け、僕の場合、特に入院期間が長かったので、同じ人はいないのですけど、障害は違うけど、抱えている問題はそれぞれで、越えていかないといけない壁も多分それぞれ何ですけど、悩みは結局一緒じゃないですか、生活に戻れるのかなっていう、いつまで入院しとりゃいいのかなっていうところなので、そういう中での病院内でのコミュニティっていうのが大きいですよね

＜周囲の支えがあり、またその周囲に悲観的に見られたくないと思ったことから、鬱や悲観的になることはなかった＞

D：一番落ち込んだっていうのは、2 回目のオペの時だと思うんですね、だからもう、戻れるのっていうところだと思うので、本当にこれ戻せるのっていうところになるので、多分一番、切断した時よりも多分その時の方が一番へこんでいますもんね、リハビリも多分、逆戻りですから、その時点でリズムとしては下がる所までは行ってないんですよね、切断したっていうのに関しても、下がりきっちゃって鬱になっちゃうとか、絶望的だとかって、悲観的な状況にはならなかった状態なので

Q：ならなかったのは何でですかという質問はあれですけど、脊損の人は、鬱になって、家に籠る人っていっぱいいるみたいなんですよね、脳卒中の後の人も鬱になったりとか

D：それはやっぱり、周りの支えが大きかったですね、事故自体が凄く大きかったので、心配して来てくれる人が凄く多かったってのがあるので、こんな状況でも支えてくれる人がいるんだなっていうのに、僕も結び付いたので、これだったら生活に戻しても、普通にたぶん接してくれるだろうなってい

うところの支えが、一番、大きかったからっていうふうにしか僕も言えないですかね、落ち込む前よりも、周りの人間に悲観的に見られるのを僕が嫌だったっていうのが、一番大きいかもしれないですね、これでたぶん自分が落ち込んだら、周りにどう思われるかとか、僕がモチベーションをそのところで下げちゃうと、周りの人間ももっと悲観的になるだろうし、っていうのが一番おおきいでしょうね

［役割創造期］

＜出来事＞

・義足の義肢装具士に、自身の義足を作成してもらう。
・担当の義肢装具士が働く、義肢装具製作所でアルバイトをする。
・義肢装具士の養成学校へ通う。

＜カテゴリー内容の説明＞

【義足を使用している PO の社会復帰をしている姿を見たことが PO を目指す大きな切っ掛け】

D 氏は、「具体的に自分がどの辺でレベル、自分のレベルがどの辺で戻せれるのかっていうとこの象徴みたいな人がそこにいることになるので、義足を実際に使っている人を見る機会がない状態だったわけなのですね、僕の中で大腿義足を使用していて、社会復帰している人を見るのがその人が初めてだったので、この人歩いている、普通に仕事をしているってところからが切っ掛けですもんね」と、【どこまで生活が戻るのか考えられない】状況の時に義足を使用して社会復帰をしている義肢装具士と出会ったことが、義肢装具士を目指した切っ掛けだと話す。

＜義足を使用している PO の歩いている姿、社会復帰をしている姿を見たことが、P0 を目指す大きな切っ掛けとなった＞

Q：PO さんになられるじゃないですか、そのストーリーを聞きたいところなのですけど

D：はい、ストーリー的には、自分の義足を作らないといけないってなった時に、半年経ってから義足の方を作ったのですけど、その後も、縫合部が不全を起こしちゃって、再オペをしないといけないって状態になったので、そこから 2 か月 3 ヶ月もう義足を作れないって状態になって、もう一度、装着してって形だったのですけど、2 回目制作する際に、弊社の○○義肢製作所の方に行って作るっていう過程になったのですけど、その時に作ってもらった人が、実際にその人も義足の人でっていうのが切っ掛けの大きいとこですね

Q：その人との関わりの中で感じたのですか

D：具体的に自分がどの辺のレベル、自分のレベルがどの辺まで戻せれるのかっていうとこの象徴みたいな人がそこにいることになるので、義足を実際に使っている人を見る機会がない状態だったわけなのですね、僕の中で大腿義足を使用していて、社会復帰している人を見るのがその人が初めてだったので、この人歩いている、普通に仕事をしているってところからが切っ掛けですもんね

【自分が使う義足の知識を得るために PO になる】

D 氏は、「自分の扱う義足だから、自分が知識を持っていないとうまくコントロールで出来ないだろう」、「勉強して自分の体の方向にフィードバックできる」と、義肢装具士になることで自分の障害に関する知識が得られると考えた。

また、義足に関する情報については、「PT の人も勉強をされているけど、実際に扱うってなると、P0 のが全然もうやっぱり持っている情報量が違う」との認識を持った。

＜医療系での職業経験と物作りが好きなことを活かしつつ、自分の体にフィードバックができると考え義肢製作所でアルバイトを始める＞

Q：退院した直後は、直ぐ、お仕事とかではないでよね

D：ただ退院してもう 2 ヶ月後にはもう弊社の○○義肢製作所の方に、一応アルバイトっていう形で、やらしてもらっていたのですけど、満足に仕事は回せない状態ですよね

D：医療系やっていたってのもありますし、作るのが好きだったっていうのもあったので、それで何か密接したもので医療業ないのかなっていうところで、なお且つ自分の足のもん何で、そうなってくると、そっちの方、勉強して自分の体の方向にフィードバックできることやった方が、あれ何かなっていう、理由でって形ですね

＜PT よりも PO の方が装具に関する情報を持っている＞

Q：リハに相談することもあったのですか

D：リハ…そうですね…リハビリに関しては筋力トレーニングですよね、自分として生活としてこの辺が必要だと思うのですけどどうしたら良いですかっていうのですね、実際に僕の場合は、補装具を付けて、どう自分の体をコントロールするかっていうとこ何で、関係しているのが、もう PT の方と、PO がメインって形になってくるので、あともう PO の人、PO の人の力がかなり大きいことがありあすね、経験値的にそっち人の方が、実際、PT の人も勉強をされているけど、実際に扱うってなると、PO のが全然もうやっぱり持っている情報量が違うので

＜自分の体に付いている自分が扱う義足だから、自分が知識を持っていないとうまくコントロールできないと思った＞

Q：仕事にしたいと思ったのは

D：もう、本当に自分も作ることが好きでしたし、根本からいうと自分の体に付いているものって、自分も理解を深めないと、多分良いものを作れないだろうっていうところでですね、自分の扱う義足だから、自分が知識を持っていないとうまくコントロールで出来ないだろうとか、うまく良いもの作れないだろうとか、そういうところですね

【出来ることと出来ないことを理解して工夫することで生活が確立した】

D 氏は、「自分をどう理解して、ここまでは出来るよね、ここまではできないよねっていうところのとこだと思う」、「(生活をすることで) ここまではできるけど、ここまではできないっていう線引きがある程度、出来てくるので、じゃあできないならできないなりに、どうやってやるかっていうのを工夫するようになってくる」と話し、【出来ることと出来ないことを理解して工夫することで生活が確立した】との認識を持っている。

＜入院中の生活やリハビリを通じてではなく、退院してからの環境に戻って生活することで、生活ができそうだなと思えた＞

Q：見通しが経ってきたなっていうのは、生活ができそうだなって思ったからですか

D：生活ができそうだなってなったのは、退院してからですね、退院してからだと思います、以外と病院内でやっているレベルのことって、やっぱり普通の一般生活に戻ると想像を超えてくるレベルじゃないですか、やっぱり一般生活って、一応、その範疇に入れてリハビリも考慮してやっていますけど、でもやっぱり自分の置かれている環境に戻って生活するっていうふうになると、やっぱり見守ってくれる人もいないですし、こうしたらどうしたら良いってのも別に答えてくれる人もいないじゃないですか

Q：退院の目途は、何だったのですか

D：退院の目途は一応もう、本当に多分、義足を装着して、自分である程度できるよになったっていうところですね、そこからの方が大変だったのですけど、実際問題

Q：何が大変でした

D：実際の、やっぱり病院生活で体が慣れちゃっているので、長距離が歩けなくなっていますよね、最初のうちは 50M 歩くだけでも息切れしちゃって動けないとかそういうレベルでだったので

Q：それは退院してから

D：退院してからですね、やっぱり義足の方も、今はもうほぼ 1 日フルで、仕事も回せるようになったのですけど、最初のうちは義足の装着っていうのが、実際にそれ正解なのか分からない状態じゃないですか、自分に知識もないので、これ痛いのだけど良い痛みなのか、我慢した方が良いのか、どうなのかっていうのも分かんない、これ履いとって良いのかなってところから始まっていたので

＜経験を重ねるうちに、ここまではできるけど、ここまではできないっていう線引きが出来てくることで、どうやってやるかっていうのを工夫するようになる＞

Q：最初の頃は生活できるかっていう不安だったり

D：そうですね、だから、それもやっぱり経験じゃないですか、経験を重ねるうちに、ここまではできるけど、ここまではできないっていう線引きがある程度、出来てくるので、じゃあできないならできないなりに、どうやってやるかっていうのを工夫するようになってくるので、だからもう、しょうがないっていうところで収めるので、受容していくしかない状態ですもんね

＜自分の生活を取り戻すためには、悲観的な部分にとらわれるのではなく、前に進まなければいけない＞

Q：周りが悲観をすると、自分も悲観してっちゃう人もいると思うのですけど

D：それじゃ何にも良いことないですよね、もとに戻れないですし、僕も何年生きるかは知らないですけど、何年か生きてかないといけないのに、そんな悲観的な考え方をしていても、どうしようもないじゃないですか、少なくとも１年入院しててっていうのにしても、そこ僕の生活をする場所じゃないので、僕の生活をする場所はやっぱり家に戻って自分の生活を戻さなきゃいけないっていうところが自分のベースの部分なので、そこを考える時は一時的なものですからね、そこに悲観的な部分にとらわれるよりは、前に進んでいかなきゃいけないことなのでという気持ちがたぶん一番おおきいところ、そういう意味が役割としてってところに結びついてくるのかなぁと思うんですけど、教科書中に書いてある、そういう浮き沈みというのは、統計的に見てこうなんだろうなっていうものだと思うのですね、僕も多分、自分で勉強をしていて思うんですけど、そこで多分、僕の接してきた障害者の人って悲観的な人いっぱいいますけど、でもやっぱり自分の生活をしていかないといけないとか、自分のベースの部分で持っている人って絶対っていうか、それが大多数だと思うんですよね

＜生活の中で出来ることと出来ないことを理解しないと、生活は確立できない＞

Q：生活っていう感覚と、自分は自分だみたいな

D：自分は自分っていう受容をしないと、自分の中の生活って確立できないじゃないですか、これを多分、さっきの脊損の話でもないですけど、やっぱりそれを自分が理解しないと、結局、何ともなんないベースの部分なので、他人がどう思うじゃないじゃないですか、生活をしいるのは自分ですし、一番向き合っている時間も自分が一番長いはずなので、そこで自分をどう理解して、ここまでは出来るよね、ここまではできないよねっていうところのとこだと思うんで、それが多分、僕は受容って思うんですよ

［役割獲得期］

＜出来事＞

・義肢装具士として働く。

＜カテゴリー内容の説明＞

【障害による経験を顧客にフィードバックすることが自分の役割であり強みである】

D 氏は義肢装具士としての自分の役割について、「フィードバックするのが自分の役割として出来るってことが一番大きいですかね」「困る部分、大変だよねって思われる部分を、どうこう良い方に持って行こうかって考えるのも、相談することが多いし、相談されることが多い」と話す。

また、「健常者の方よりは、やっぱり、細かい時、言いやすいんでよね、ここって分かってくれますよねっていうところの話だと思うんで、一番、言えて言えない部分の細かい

部分って、凄く生活の中でデリケートで物凄く重要な部分だと思うんですよね、そこを聞いてフィードバックできるっていうのは強みなのかなとは思う」と話し、切断をした当事者同士にしか分からない患者の言葉にできない気持ちを汲み取りながら、自分の経験をフィードバックできることを強みであると認識している。

＜切断者の話を聞き、フィードバックをするのが自分の役割＞

Q：御自身が御自身に期待をすることってどういうことですか、この仕事を通じて、自分にはどういうことが得られると思っていますか

D：何て言うんですかね、自分自身、聞けない環境って凄く多いんですよね、障害者ってやっぱり、自分の環境に戻ったとして、聞ける人がいないとか、今時、どうしているんだろうっていうのが、やっぱり凄く多いんですよね、自分、コメディカルスタッフっていう形でもとに戻って、フィードバックする場所が凄く多いんですよ、この時どうしてるんです、困るんですけどどうしていいんですかっていうのに、フィードバックするのが自分の役割として出来るってことが一番大きいですかね

Q：それは、同じ会社の方でも、切断してない方もいるじゃないですか、D さんの方が良いんですかね

D：やっぱり、言い方変ですけど、切断レベルって、障害のレベルからするとそん何なんですよ、どこまで本人が引き戻せられるかということに限ると思うんですけど、もっと重い障害なんていっぱいあるはずなんですよ、モチベーションとしてはそのレベルで僕いっているつもりなんで、その中で困る部分、大変だよねって思われる部分を、どうこう良い方に持って行こうかって考えるのも、相談することが多いし、相談されることが多い

＜色んな運命的なものが結びついてなるべくして PO になったような気がする＞

Q：自分も PO になるって決めた時に、自分も会社の方のような立場になって、逆に患者さんにフィードバックできるなっていう思いが、最初からあったんですね

D：ありましたね

Q：プラス、物作り好きだみたいな

D：そうですね、だから、なるべくしてなったような気もするんですけどね、この仕事自体色んな運命的なものが結びついて僕の今いる環境っていうのが出来ている状態なんで

＜義足の PO に自身が救われた経験からも、仕事を通じて対象者の支えになることができたら、PO の仕事は凄く意義があると思い働いている＞

D：活かしてっていうと僕も烏滸がしい感じがするので、そこまでじゃないですけど、経験談として僕もそういう状況で救われている人間なんで、それの礎というか、支えになれる程度のことでってなると、その仕事って凄く僕としは意義のあるものなのかなってところで、やっている仕事なので

＜治療に関わっているという面で、凄くやりがいがある仕事だと思う＞

D：一応、全部トータルには勉強もしなきゃいけないし、できなきゃいけないっていうものなので、そ

ういう意味では面白い仕事だと思いますね、だから医療系統の知識を持ちながらも、それに対して具体的にアプローチを掛けていくのが僕らの仕事なので、治療に関わっているっていう面では、凄くやりがいがある仕事ですからね

Q：介護とか准看やっていた時のもどかしさみたいなのもありましたもんね

D：ありましたね、正直まだ准看っていう、施設職員っていうのは、どちらかというと慢性期に近い形だったので、回復して退院していくっていう方がほとんどいない、もう、自宅に戻るっていうことがほとんど多分いない状況っていうもどかしさがあってっていうのもありしたし、クリニックっていう所はクリニックなので、病気だから来て回復したら帰っていくってとこなんで、長期的に入院しても帰る場所がある方しかいない状況なんですね、自分が奮起してやれば結果がみえるっていうところで考えると、回復する方向をやっていた方が、僕としてもモチベーションが高くなるっていうのがありしたからね、色々な理由で離れてしまったんだけど、結局、そっちの方も僕のいま仕事をやっている意義というか、そういうところには結びついている

＜分かってもらえる人にやってもらいたいよねと言われ、そういったところを強みだと思う＞

Q：例えばDさんと、普通のPOが来た時、相談の量が違う、視線が違う

D：ありますよ、あると思いますよ、ここ僕どう判断をして良いか分からないですけど、自分が対ユーザーとして作って貰わなきゃいけないってなると、健常者の方よりは、やっぱり、細かい時、言いやすいんでよね、ここって分かってくれますよね、っていうところの話だと思うんで、一番、言えて言えない部分の細かい部分って、凄く生活の中でデリケートで物凄く重要な部分だと思うんですよね、そこを聞いてフィードバックできるっていうのは強みなのかなとは思うので、実際、自分のお会いするユーザーの方なり患者さんっていうのでは、やっぱりもう率直に分からん人間より分かってもらえる人にやってもらいたいよねっていうのを言われるので

【障害があることを大変だとは思わない】

D氏は、「健常者よりも多分、負っている部分がちょっと多いだけで、そんなに悩みとしては他の人と変わらないと思うんです、それを結局、障害だって思うのも本人次第だと思うんですよ、そこを障害だって思っちゃったら、自分で壁を作っちゃっている話だと思う」と話す。また、「（生活レベルは）完全に持ち直している」、「僕の中では完全に、ほとんど完全に近いぐらい消化されている」との認識があることから、障害があることを大変だとは思っていない。

＜生活レベルは完全に持ち直している＞

D：出来なくなった、今考えれば、比較的そこまでの生活レベル自体が下がっている状態では僕はないので、完全に持ち直しているので

＜人前に出ることに抵抗感はあったが、今は抵抗感ない＞

D：受容する前ですね、受容する前って人前に出るっていうのことに抵抗感が多少はありましたよね、僕凄い温泉とか好きなので、温泉とか、もう、自分の身体をさらさなきゃいけないっていう状況になると、どう見えているのだろうなって、色々、そういうのを考えることはあったのですけど、今はもう銭湯とかも普通に入って行くので

＜切断者以外からは大変そうだと見られることが多いけど、そこまで大変だとは思っていない＞

D：目に見えて分かる障害じゃないですか、切断って、内臓疾患とか麻痺とかっていうのだと、ついてるもんついてる状態だけど、何とか生活しなければという状態なんですけど、どちらかと言うと切断者って、ない物を補っているような状態で生活をしているから、凄く大変そうだよねって見られることが多い、でも実施に生活をしている僕の場合、若い年齢の方多分そだと思うんですけど、そこまでだと思ってないんです以外と、ここまで出来るんだけど、この人達なんでこんなに心配するのかなって、そんなレベルで考えているんで

Q：その辺を、切断者という立場から、フィードバックして

D：そういうもんじゃないんだよ、大丈夫ですよってところからっていうのもありすね

Q：切断した人自体もそう思っちゃいすもんね

D：そうですね、状況から見ると悲観的なものなのかもしれないですけど、本人、多分、そんなに思っている人はいない、意外と思っていない

＜悩みとしては健常者と変わらないと思う、自分の悩みを障害によるものだと思ったら、自分で壁を作ってしまったことになる＞

D：よく使い古されている言葉でいう、障害は個性だみたいな、あんまり、僕もそんな綺麗な言葉であんまり好きじゃないですけど、そんなに綺麗なものじゃないと思うので、多分、普通の人と変わらないと思いますよ、苦労しているのなんて変わりないじゃないですか、レベルが違うだけで、健常者でも仕事が大変だなとか、この日大変だなとか、育児が大変だなとか、家に帰りたくないなとか、上司嫌だなとかっていうのを周り周って苦労しながら生活しているっていう部分の延長線みたいなものだと思うんですよね、障害って結局、多分、脛に傷が人より多いくらいなんですよね、健常者よりも多分、負っている部分がちょっと多いだけで、そんなに悩みとしては他の人と変わらないと思うんです、それを結局、障害だって思うのも本人次第だと思うんですよ、そこを障害だって思っちゃったら、自分で壁を作っちゃっている話だと思うので

＜自分をそこまで障害者だと思っていない、眼が悪くて眼鏡を掛けているのと同じ感覚

D：僕が出来るんだから出来て当たり前でしょっていう感覚なので、健常者なのに何で出来ないのっていうとこのやつなので、僕こうやってできるっていう感覚なので、自分をそこまで障害者だと思ってないですし、だからなんでやらないのとか、そういう感覚なので、障害の程度でみると重いかもしれ

ないですけど、目悪いとかって人、多いじゃないですか、眼鏡掛けてるいとかも障害だと思うんで、眼鏡掛けているのと同じ感覚なんですよね

＜ほとんど完全に近いぐらい障害があることは消化されている＞

Q：普段、生活だけで言うと、足のことだけで言うと、プラスマイナスゼロみたいな、どんな感じですか、困ることも含めて

D：僕の中では完全に、ほとんど完全に近いぐらい消化されているくらい

【義足使用者になったことで得られた生きがい感】

D 氏は、「義足が引き付けてくれた人っていうのが凄く多い、事故を切っ掛けにして、知り合いの方が増えた」「僕の持っている障害っていうのは、人との端子みたいなもので、繋ぐ手立てみたいなとこ」と義足使用者になったことで人との繋がりが増えたとの認識をもっている。

また、勤務先にいる自分の義足を作ってくれた方が世界の障害者技能大会で金賞を取っており、「僕の追っかける、目指すとこはそこの人なので」「（技能大会で金賞を取ることを目指すことは）生活の一部であり、僕の歩んでいる人生の一部なので」と、義足使用者になったことで得られた生きがい感を持っている。

＜僕の持っている障害は、自分と人を繋ぐ手立て＞

Q：聞き方を変えると、今の仕事において、D さんの切断したお体っていうのは、どんな価値がありますか

D：価値、難しいですね、価値って、僕の中では、僕の持っている障害っていうのは、人との端子みたいなもので、繋ぐ手立てみたいなとこだけなので、人よりもそれが多くなるぐらいだけなんですよね

Q：なるほど、患者さんと関わる時も、コネクトする部分が一個多いみたいな感じ

D：多いっていう感覚ですもんね、そういう意味ではプラスなのかもしれない

＜義足が引き付けてくれた人が凄く多い＞

Q：仕事の延長かもわかんないですけど、何かこれで増えた感じがある

D：そっちの方が多いと思いす

Q：仕事とコネクトする部分が多いようですけど、生活でも繋がるとこがある

D：結局、僕の中では義足が引き付けてくれた人っていうのが凄く多い、事故を切っ掛けにして、知り合いの方が増えたとか、そういう人と話す機会が増えたとか

＜全国障害者技能大会で 2 位になる＞

D：そうです、去年一応それで大会に出させていただいて、一応、全国で銀賞を

Q：全国で 2 位ってことですか、凄いですね

D：一応、そうですね、障害者の中でという形なので、多分やっている人は、健常者の人が多いんで、そっちの技能試験の大会の方、健常者がやっている方に格上げしても良いじゃないかって話が出ているぐらいなので、やっている人は多いんです、実際に作っている人は多いんだけど、僕の場合は障害者で技能をやっている人っていうくくりなので

＜勤務先にいる自分の義足を作ってくれた人が世界の技能大会で金賞を取っており、自分もそれを目指していることは人生の一部だと思う＞

D：一昨年ぐらいに、弊社の自分の義足を作ってくれたその人が世界大会で金賞を取っているんです、だからもう世界一になっているので、僕の追っかける、目指すとこはそこの人なので

Q：なるほど、ちょっと分かってきました、じゃあやっぱり今の、こういったのも含めて、凄く広がったってところが、凄いですね

D：そうです、そうです、僕も必然的に望んでとか望んでないとかいうよりも、僕もそっちの道を歩むように、謎の力に引っ張られているっていう状態で、自分の生活がある状態なので

Q：もう本当に一部ですね

D：そうです、生活の一部であり、僕の歩んでいる人生の一部なので

【障害と仕事と生活のバランスがとれている】

D 氏は、「僕の場合は障害と仕事と生活っていうのが、かなり密接しているものなので」と話し、その 3 つのバランスについて「良いバランスがとりえていると」との認識を持っている。また、障害と仕事と生活が密接していることについては、「感覚的に行き切ると、そこだと思うんですよ、どの人もそうだと思うんですよ、障害者って」との認識も持っている。

＜僕の場合、障害と仕事と生活が密接していて、切っても切り離せない＞

D：僕の場合は障害と仕事と生活っていうのが、かなり密接しているものなので

Q：障害と仕事と生活が、凄いですね、障害を置いていくこともないですしね

D：僕、感覚的に行き切ると、そこだと思うんですよ、どの人もそうだと思うんですよ、障害者って

Q：仕事に障害が含まれているっていうのも、ちょうど良いのですかね、全く、仕事が今の仕事じゃなかった時に、感覚って今、違ったりするのですかね、仕事が PO じゃなくて、事務仕事に就いた、足は関係ない事務仕事に就いて、「障害と生活」というくくりと「仕事」で分かれますもんね、どんな感覚になりそうですか、3 つならちょうど良いけど

D：僕の感覚では、結局、そこって切っても切り離せないじゃないですか、どの仕事をしていても、自分が障害者であるってことは変わらない、絶対に変わらない、どうひっくり反っても変わらない、その部分で、仕事として相手の方もみると思うんですよね、この人障害者だからこのへんの仕事しかできないだろうって思われても、僕できますよって言えばそれだけの話だと思うので、線引きをするっていうところで言うと、どこでも変わらない

＜障害と仕事と生活のバランスがとれている＞

D：普通の人っていうのって色々たぶん、自分も普通の人なんでしょうけど、たぶん、健常者もあれだと思うんですけど、生活、自分のプライベートと仕事ってバランスの中に生きているじゃないですか、その要素が一個増えるだけなんですよね、やっぱり仕事だけになっちゃうと、プライベートが小さくなってたぶん、バランスがとれなくなる、でもプライベートが大きくなれば収入がない分、どうしていいのかなっていう状態になると思うので、そこの全部のバランスが整っている状態が一番大事、なかなか難しいのですけどね、でもやっぱりそこってコントロールしていかないといけない部分ですし、障害ばかりにとらわれちゃうとアレだしっていうところで、良いバランスがとれているのでしょうね

【分かってもらえる人にやってもらいたいよねと言われる】

D 氏は「自分のお会いするユーザーの方なり患者さんっていうのでは、やっぱりもう率直に分からん人間より分かってもらえる人にやってもらいたいよねっていうのを言われる」と話し、仕事を通じて他者から期待を受けているとの認識がある。

＜分かってもらえる人にやってもらいたいよねと言われ、そういったところを強みだと思う＞

Q：例えば D さんと、普通の PO が来た時、相談の量が違う、視線が違う

D：ありますよ、あると思いますよ、ここ僕どう判断をして良いか分からないですけど、自分が対ユーザーとして作って貰わなきゃいけないってなると、健常者の方よりは、やっぱり、細かい時、言いやすいんでよね、ここって分かってくれますよね、っていうところの話だと思うんで、一番、言えて言えない部分の細かい部分って、凄く生活の中でデリケートで、物凄く重要な部分だと思うんですよね、そこを聞いてフィードバックできるっていうのは強みなのかなとは思うので、実際、自分のお会いするユーザーの方なり患者さんっていうのでは、やっぱりもう率直に分からん人間より分かってもらえる人にやってもらいたいよねっていうのを言われるので

5）E 氏

（1）カテゴリーとコンセプト

E 氏の逐語録から抽出された 18 のカテゴリーと 54 のコンセプトを表 7 に示す。

表 7．E 氏 カテゴリーとコンセプト

カテゴリ	コンセプト
1.病気になったことを重大に感じなかった	病気だとわかった時は、障害っていう考えじゃなくって、病気の症状として捉えていた、治療すれば良くなると考えていた
	筋無力症だよってサラッと言われて、それほど重大な感じではなく、ああそうなんだって思った
	症状を気のせいかもしれないと思っていたから病名が分かって安心した
2.充分に仕事ができないと判断し入院を選択した	自分が担当をするよりも他の人がリハビリをした方が良くなるんじゃないかと思い、自分の中で作業療法を続けられなくなり入院治療を選択する
	障害があるからと体に負担が掛からないように7割8割の力で働いたら患者さんは困ると思う
3.自宅で生活できること以外は望まなかった	とりあえず家で生活が出来れば良いと思った
	自分に対して期待はなくて、それ以上のことは何も求めなかった
4.身体を良くしたい	治療を開始したけど全然良くならないじゃんって思った
	治療法がもしも見つかったらという期待が全くないかって言ったら、そうじゃなくて、若干、期待はあるけど、諦めもあるみたいな感じだった
5.身体が元通りにならない状態になり障害だとはっきりと思った	気が付いたら呼吸器に繋がれていて、呼吸器を付けて生活していくしか道がなくなった
	呼吸器を付けたあたりから元通りに戻らないとなんとなく思いはじめ、先生にこれ以上治療法はないと言われて障害だなとはっきりと思った
	ー生声出せませんよ、機能的にも無理ですよと言われて、どうやっても戻らない状態になったことで、障害だなと吹っ切れて思った
6.声が出せなくなり感情が伝わらなくなることに抵抗があった	文字では感情が伝わらなくなってしまうから、声を出せなくなることに凄く抵抗があった
7.インターネットを使えば障害に関係なく情報を発信できる	自由に動けなくて出来ることは限られるけど、インターネットとかを使えば健常者も障害者も関係なく、同じ立場で情報発信ができる
8.周囲から期待をされないことがあり傷ついたりく悔しく思った	自分は思っていないが、父親の主治医や地域の人から、娘や家族の中でのキーパーソンとしての機能が果たせないと思われ、イラっとしたり、悔しかったりした
	キーパーソンとしてやることはやってるから、そこは評価してよって思う
	母親達が近所の目を凄く気にしているのを感じていたから、母親達から期待をされていないと思っていた
	自分のやりたい生活に付き合っていられないとヘルパー事業所に徹底された
	母親・ヘルパー・看護師に対して自分が勝手に思って傷ついたりはけっこうあるんだと想う
9.楽しいことがやりたい	NPOの活動では、何かをしなければいけないというのはなくて、人同士が繋がる機会になっていること等、楽しいことがやりたいと思っている
	障害があるとかないとか、全部フラットにして、楽しみたい
	面白そうじゃんっていうレベルで実行委員は集まっている
	期待されているから重身の子達を呼ぼうじゃなくて、重身の子達、呼んじゃおうよ、いいじゃん、いいじゃん、誰か面倒見るでしょが先
	本物のように嚥下食を作れることが楽しくて、出来た嚥下食を自慢したくなった
	講演で1回は絶対に笑いをとるという目標がある
	NPO活動は遊びでしかない
10.障害当事者の目線を大事にしたい	担当の相談員さんとヘルパーの時間数を伸ばしてもらったりとか、市と交渉したりした
	NPOを作るのだったら当事者目線を大事にしたい、それを表現できるとしたら、私が代表になるのが、一番、表現できるだろう
	障害者にとって住みやすい街にするってことは、高齢者だったり、怪我している人だったり、子育て中の両親だったりとか、誰にとっても住みやすい街になるってことだと想う
	健常者の障害者寄りの考えでやろうと思っても、結局は寄りでしかない、完全に障害者目線にはならない
	栄養士やSTから作った嚥下食の情報発信をすることを勧められブログを書きはじめる
11.自分が持つ情報に需要があると思い情報を発信した	開始したブログを通じて、自分が言っていることも役に立つんだなと思い、もっと専門職とか仕事をしているレベルの人達に話したいと思った
	OTが嚥下障害になって作った嚥下食のレシピだったら、多分、需要が結構あると想って、発信するようになった
12.家族の協力がある	今は家族が近所の目を気にすることはないと思う
	家族は協力をしてくれていると思う
13.当事者の気持ちや経験をセラピストの視点の変えて話すことが自分にできるOT	OTを続けてはいけないと思ったけど戻れるのだったら戻りたい、でも実際には無理だから自分ができるOTをみつけることの方が現実的だと思う
	講演では当事者性とセラピスト性が合わさっていることを価値みたいに感じて受け取ってくれていると思う
	依頼された内容によって、OTの割合と当事者の割合の配分を変えている
	何かを感じとってくれたら良いなと思って講演を行っている
	講演活動はOTとしての自分の役割がちょこっと入っていて、報酬を貰っているから仕事的な意味合いが凄く強い
	これから臨床に出て行く人達に講演で伝えて、伝えたことが臨床に反映されるっていうのが、私にとってのOT
	講演活動で期待されることは、当事者の気持ちや経験をセラピストの視点の言葉に変えて話す通訳的な役割だと思う
14.自分達がやりたいようにやったことを社会が勝手に評価してくれる	自分達のやりたいようにやって、それを周りが評価してくれたらそれで良いし、自分達が想っている効果と、社会が目指している効果が一致する必要はないと想う
	自分達が楽しみたくてやったことを、社会は勝手に社会が求めていたことだと受け止めてくれている
	社会は勝手に期待をして勝手に評価をしてくれている
	NPO活動での障害の価値は社会が勝手に付けている
15.障害者としての意見を必要とされている	担当の相談員さんにEさんが在宅の生活とか話すことで、こういう人もいるよって知る切っ掛けになるから、どんどん外に行って活動をして欲しいと言われた
	講演は全て依頼により行っている
	障害者としての意見を聞きたいと社会から必要にされている
	当事者セラピストと名乗ることで存在をイメージしやすくなり、社会から発見され やすくなった
16.障害は自分の生活を制限する邪魔なもの	障害は自分の生活とかやりたいことを制限する邪魔なもの
17.障害をブランドとして売りにしている	NPO活動では障害を自分のブランドとして使っている
	講演活動での障害の価値は、障害を自分で売りにしている
18.障害を負ったことによって出来た人間関係がいっぱいある	障害を負ったことによって出来た人間関係がいっぱいある

（2）障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

役割獲得に至る過程を 4 期に分節化し、各期における自己と他者・社会に関わる要点に表すマトリクスへのカテゴリーの配置を示した（図 7）。[発症前][発症後][役割獲得期][役割創造期]、各期における、出来事の詳細と配置されたカテゴリーについて説明をする。

			発症前	発症後	役割創造期	役割獲得期
自己	役割に対する願望				楽しいことがやりたい 障害当事者の目線を大事にしたい	楽しいことがやりたい 障害当事者の目線を大事にしたい
	役割に対する認識	肯定			自分が持つ情報に需要があると思い情報を発信した インターネットを使えば障害に関係なく情報を発信できる	当事者の気持ちや経験をセラピストの視点に変えて話すことが自分にできるOT 自分達がやりたいようにやったことを社会が勝手に評価してくれる
		否定				
	障害に対する願望			身体を良くしたい		
	障害に対する認識	肯定			自宅で生活できること以外は望まなかった	障害をブランドとして売りにしている 障害を負ったことによって出来た人間関係がいっぱいある
		否定		声が出せなくなり感情が伝わらなくなることに抵抗があった	障害は自分の生活を制限する邪魔なもの	障害は自分の生活を制限する邪魔なもの
		中立		病気になったことを重大に感じなかった 身体が元通りにならない状態になり障害だとはっきりと思った		
他者社会	サポート	肯定・有				家族の協力がある
		否定・無				
	期待感	肯定			障害者としての意見を必要とされている	障害者としての意見を必要とされている
		否定			周囲から期待をされないことがあり傷ついたり悔しく思った	
	他者・社会への願望					
	他者・社会との関係	摩擦				
		肯定				

図7. E氏の障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

［発症前］

＜出来事＞

・作業療法士として勤務。

＜カテゴリー内容の説明＞

カテゴリーなし。

［発症後］

＜出来事＞

・作業療法士として働く 20 歳代前半の時に、重症筋無力症を発症。初めは夕方だけ複視が出たことから、疲れているせいだと想っていた。次第に絨毯で躓くようになり、眼瞼下垂や若干の構音障害などもみられたことから、病院で一緒に働く医師から神経内科の受診を勧められ診断に至る。当初は、2 週間集中的に治療をして、1 ヶ月後に職場復帰をするという計画での入院であったが、症状が重く実際の入院期間は 2 年半にも及んだ。入院 2 か月後に胸腺を摘出。摘出後には歩行や嚥下が困難になり、寝たきりとなる。その後、血漿交換と免疫療法を行う中、入院 8 ヶ月目に呼吸筋麻痺になり、人口呼吸器を装着。人工呼吸器は、気が付いたら付いており、装着は自己決定によるものではなかった。

また、意識はあるけど身体は動かすことができない、閉じ込め症候群を、人工呼吸器装着後と口頭分離術後の麻酔から覚めた後に経験した。

＜カテゴリー内容の説明＞

【充分に仕事ができないと判断し入院を選択した】

E 氏は、「自分が担当をしていたら、他の人がやった方が良くなるんじゃないかっていうのがあって、何か自分の中で続けていけられなくなっちゃって」と想い、【充分に仕事ができないと判断し入院を選択した】。

＜自分が担当をするよりも他の人がリハビリをした方が良くなるんじゃないかと思い、自分の中で作業療法を続けられなくなり入院治療を選択する＞

Q：療法士としてそこはまずいなって感じに

E：落としちゃったりしてもいけないし、職場としては忙しいし、続けて欲しいっていうのもあって、寝たきりの患者さんとか、移乗が必要ない歩ける患者さんとか、そういう負担が少ない患者さんとかばっかりを担当させてくれたりとか、人数とかもちょっと少な目にしてくれたりとか、けっこう配慮はしてくれていたんだけど、それでも自分の中で、患者さんの将来が変わるのに、自分が担当をしていたら、他の人がやった方が良くなるんじゃないかっていうのがあって、何か自分の中で続けていけられなくなっちゃって、気持ち的に無理になってきちゃって、だからちょっともう無理だなって想って、病院の先生に最近、病状が進んじゃってさぁって、続けるのがしんどいんだよねって言っていたら、入院して集中的に 2 週間とか治療をして、で、在宅でちょっと休んで、1 ヶ月ぐらいで復帰するっていうプランで、入院治療に変えようかっていう話になって、仕事を調整して 1 ヶ月休みをもらって入

院をした、そっから、先生達も想ってなかったと想うんだけど、どんどん進んでっちゃって、治療のペースが追いつかないぐらいになっちゃって、結局その入院が 2 年半になる、2 週間の予定が 2 年半

＜障害があるからと体に負担が掛からないように 7 割 8 割の力で働いたら患者さんは困ると思う＞

E : それが専門家っていうやつだよね、何か、精一杯のところ、最大限のところ提供できないっていうのは、結局、ゼロと一緒かなというような感じかな、何かあなたは障害があるから 8 割で良いよっては、なんないでしょ、自分達の仲間内ではさぁ、体に負担が掛からないように 7 割ぐらいでいいよみたいな感じでさ、皆が言ってくれたとしてもさ、患者さんは 7 割じゃ困るわけじゃん、ちゃんと 10 割提供しろよって想うでしょ

【身体を良くしたい】

E 氏は入院して治療を開始するが「全然、良くなんないじゃん」と思う。しかし、「一時のことだと想っていて、大丈夫、直ぐに良くなるわ」と思っていた。

そして、国立療養所で過ごす際は、「難病だから、難病って治療法が確立されていないってのがあるでしょ、だから、その治療法がもしも見つかったら、良くなるかもしれないっていう期待が全くないかって言ったら、そうじゃなくって、若干、期待はあるけど、諦めもあるみたいな感じ」だったと話す。

＜治療を開始したけど全然良くならないじゃんって思った＞

E : 何か 2 週間って言われて、だけど最初の 1 週間は検査とかばっかりして、これ 2 週間じゃ帰れないじゃんってなって、想っていて、早く治療に入ってよってみたいな感じだったんだけど、でもとりあえず 1 ヶ月休みがあるから、3 週間入院して、1 週間休んでそれからで良いかって想って、治療を開始したんだけど、全然、良くなんないじゃんってみたいな感じで、1 回、途中で熱出しちゃって、そうしたらそっからドーンって悪くなっちゃって、歩けなくなっちゃって、だけど一時のことだと想っていて、大丈夫、直ぐに良くなるわって想っていたんだけど、そうしたら何か次は呼吸に来ちゃって、で、それで胸腺摘出の手術を受けるかっていう話になって

＜治療法がもしも見つかったらという期待が全くないかって言ったら、そうじゃなくて、若干、期待はあるけど、諦めもあるみたいな感じだった＞

E : 残りの最後の 3 ヶ月だけ、国立療養所の難病病棟に 3 ヶ月だけは居た、だからその時が一番、障害を意識した時、だけど一応、難病だから、難病って治療法が確立されていないってのがあるでしょ、だから、その治療法がもしも見つかったら、良くなるかもしれないっていう期待が全くないかって言ったら、そうじゃなくって、若干、期待はあるけど、諦めもあるみたいな感じもあって、でも今はほとんど障害って捉えているけど、若干、病気の症状かなっていうのもあるから、何かそこは難しかったね

【声が出せなくなり感情が伝わらなくなることに抵抗があった】

E 氏は口頭分離術を行う際の想いについて、「声が出ないと、生活の中でどれだけ不便かっていうのを知っているから、だから何か、その声が出せなくなるっていうことに凄い抵抗があって、何か自分の想いを伝えられなくなるとか、文字版を使って伝えるのって、何か自分の感情まで伝わらないよね」、「意志伝達ができないっていうのが、私の中で一番、大きくって、他の機能を失うより、意志伝達の方法がなくなるっていうのが、一番、嫌だなって想ったと想う」と話し、【声が出せなくなり感情が伝わらなくなることに抵抗があった】。

＜文字では感情が伝わらなくなってしまうから、声を出せなくなることに凄く抵抗があった＞

E：たぶん普通に喋っている人が、あんた喋れなくなりますよって言われるのと、私みたいに病気の症状として声が出なくなったり、呼吸器を付けているから声が出しにくかったりとかいうのがあるから、何かそこまでショックじゃないっていうか、今までの時点で半分失っているようなもんだから、だからね、だけどその声が出ないと、生活の中でどれだけ不便かっていうのを知っているから、だから何か、その声が出せなくなるっていうことに凄い抵抗があって、何か自分の想いを伝えられなくなるとか、文字版を使って伝えるのって、自分の感情まで伝わらないよね、文章っていうか文字にしちゃうと、それがどのくらい怒っているのかとか、どのくらい嬉しいのかとか、そういう感情表現にはならなくて、ただの意志の伝達でしかなくなっちゃうから、何かそういうことに対しては凄い抵抗があった、言葉にして自分の声で伝えられないっていうことが、どれだけ自分の感情が伝わるかっていうところに繋がっているから、その感情が伝わらなくなっちゃうっていうので、抵抗が凄くあった

Q：歩けるとかと比べるものじゃないですけど、声の方が多きそうですね

E：歩けるとか、けっきょく、車椅子とかって、一応、認知されているじゃんね、だけど、歩けないっていう代替の手段だけど、何か、意志伝達ができないっていうのが、私の中で一番、大きくって、他の機能を失うより、意志伝達の方法がなくなるっていうのが、一番、嫌だなって想ったと想う

【病気になったことを重大に感じなかった】

E 氏は病気だとわかった時、「障害っていう考えじゃなくって、病気の症状として捉えていた」、「治療すれば良くなるもの」と考えていた。また、医師に筋無力症だとサラッと言われたことから、病気であることをそれほど重大に感じず、「ああそうなんだ」と思ったと話す。

＜病気だとわかった時は、障害っていう考えじゃなくって、病気の症状として捉えていた、治療すれば良くなると考えていた＞

E：まだ、その時は障害っていう考えじゃなくって、病気の症状として捉えていたから、その時はまだ障害って全然、意識していなくって、だから何か、治療すれば良くなるものみたいな、考えだったと想う、だから、薬飲んで、そのまま臨床とかも続けていけるだろうなって想っていたと想う

＜筋無力症だよってサラッと言われて、それほど重大な感じではなく、ああそうなんだって思った＞

Q：凄いスピードでですね、最初の症状ってどんな症状が出るのでしたっけ

E：最初は複視、物がダブって見えるようになったから、全然、しかも夕方だけとか、疲れている時だけで、朝になると治っているから、疲れているのだなって想って、そのまま過ごしていて、でなんか、だんだん、階段とかが駆け上がれなくなってきて、何かおかしいぞってなっていって、絨毯の上で躓いたりとか、なんかおかしいなっていうのが続いていて、眼瞼下垂とか出てきて、でたぶん夕方とかになると、若干構音障害とかがたぶん出ていて、周りの人も何かおかしいよねみたいになってきて、で、リハビリ病院だから、リハビリドクターがいるんですけど、その人が神経内科のドクターだから、「おまえそれ神経内科の疾患だろ」って言って、ちょっと病院行って来いってなって、大学病院へ行って、そうしたら、「あぁ、みたいな」、行った時点でたぶん先生的には、「あぁこれだろうな」みたいなのがあって、じゃあとりあえず血液検査だけでしましょうって、その日はなったんだけど、たぶん、その時もう抗体とかのチェックとかもされていたから、先生的には分かっていて、次、見た時に、テンシロンテストっていって、その症状に効く短時間作用の薬を打って、改善されるかっていうのを診るんだけど、それをやったら、良くなって、軽くなって、治ったじゃんと想って、それが 5 分ぐらいで切れちゃうやつだから、ああみたいな感じで、そうしたら、「筋無力症だよ」って言われて、そうなんだみたいな、なんかそれ、さら～っと言われたから、そんな重大な感じではなく、ああそうなんだって

＜症状を気のせいかもしれないと思っていたから病名が分かって安心した＞

Q：それ 3 ヶ月経ったぐらいですか

E：経ったぐらい、自分、何かおかしいなと想っているから、検査結果見て、そこではっきり病名が分かって、何か安心するっていうか

Q：そういう安心があったんですね

E：そう、何か、気のせいじゃないっていうか、そういうのがあったから

【身体が元通りにならない状態になり障害だとはっきりと思った】

E 氏は、呼吸器を付けたあたりから元通りに戻らないとなんとなく想いはじめ、先生にこれ以上治療法はないと言われて障害だなとはっきりと思った。そして、口頭分離術を受ける際について、「今までは治療したら良くなるかもしれないっていう、戻る可能性あるでしょ、だけどもう一生声出せませんよ、機能的にも無理ですよって言われて、完全に失うっていうことは、戻らないじゃんどうやっても、だから戻らないっていうところがたぶん一番、大きかった」、「そこで一番、吹っ切れた」と話し、【身体が元通りにならない状態になり障害だとはっきりと思った】。

＜気が付いたら呼吸器に繋がれていて、呼吸器を付けて生活していくしか道がなくなった＞

E：何か気づいたら呼吸器に繋がれていて、だかから何か私って、呼吸器を付けるか付けないかってい

う選択は自分ではしていなくて、緊急処置として、呼吸器を付けたら呼吸筋麻痺が良くならずに、そのまま外せなくなっちゃったっていうタイプだから、気づいたらもう呼吸器を付けて生活していくしか道がなくなっていたっていう感じ

＜呼吸器を付けたあたりから元通りに戻らないとなんとなく思いはじめ、先生にこれ以上治療法はないと言われて障害だなとはっきりと思った＞

Q：障害として捉えるようになるみたいなところってあるのですか

E：結構、早いうちから、仕事とかに戻るのは無理だなって想っていて、全然、何でって根拠とかは何もないのだけど、元通りにはならんっていうのがけっこう早いうちから、呼吸器付けたあたりから、それくらいから何となく想っていて、で、障害だなってはっきり想ったのは、先生にこれ以上治療法ないよって言われて

Q：本を渡されたところとかですか

E：その治療法全部やっているけど、だけど効くは効くけど、また戻っちゃうから、その治療は、そんなに医学的に考えると効果があるとは言えないよね、もっと悪化した時、本当に閉じ込め症候群じゃないけど、それくらいまで行った時に使った方が良いんじゃないかみたいな話になって、確かにそうだなっと想って、治療としてはそれが成功しているかって言ったら、それは自己満足のためみたいな感じになっている、1 週間 2 週間で治療の効果が切れちゃっていたから、やったら良くなるけど、やめたら戻るっていうのを繰り返していて、それがちょっとずつでも上がっていくだったら良いけど、ずっと平行線だから、確かに治療の効果はないって言われて、それでもう一端、やめようっていう話になって、その時かな

＜一生声出せませんよ、機能的にも無理ですよと言われて、どうやっても戻らない状態になったことで、障害だなと吹っ切れて思った＞

Q：障害として捉えるようになったあたりから、普通に感情としては、どういう感情だったのですか

E：もうその時は、OT として臨床で働くのは諦めていたし、完全に吹っ切れて、何か障害だなって想ったのは、やっぱり口頭分離術をやった時が一番大きくって自分の中では、こうやって今、喋っているけど、一生声が出せなくなりますよって、声帯通らなくなるから、分けちゃうから、だから一生声が出せなくなりますよって言われて、声を出せなくなるのを取るのか、誤嚥性肺炎を繰り返すのをとるか、どっちかっていう選択になって、で、結局のところ、誤嚥性肺炎を繰り返していると、救命率も下がってくるから、だから手術を受けてって話だったんだけど、そこで一番、吹っ切れたっていうか

Q：吹っ切れた感じなんですね

E：うん、何かもう戻れない、戻れないっていう感覚はあったね、今までは治療したら良くなるかもしれないっていう、戻る可能性あるでしょ、だけどもう一生声出せませんよ、機能的にも無理ですよって言われて、完全に失うっていうことは、戻らないじゃんどうやっても、だから戻らないっていうところがたぶん一番、大きかったのかなって想う

［役割創造期］

＜出来事＞

・退院後の 2 年間はほぼ自宅内だけ過ごす。

・肺炎により入退院を繰り返す。

・母親と嚥下食を作り始める。

・母親と作った嚥下食をブログで紹介し始める。

＜カテゴリー内容の説明＞

【楽しいことがやりたい】

E 氏は、「嚥下食ってすごく限られた物しかない、で、そばが食べたくて、でもどこ見てもそばの嚥下食って売ってなくて」と、自ら嚥下食を作りたいと想う。そして、「本物のように出来るから楽しくなってきちゃって、何か工作感覚で、作っていても楽しいし」と、母親と一緒に楽しみながら嚥下食を作った。

＜本物のように嚥下食を作れることが楽しくて、出来た嚥下食を自慢したくなった＞

Q：自分でアレンジしたいと想った理由は何でですか

E：嚥下食ってすごく限られた物しかない、で、そばが食べたくて、でもどこ見てもそばの嚥下食って売ってなくて、売ってないじゃんって言って、じゃあうちがソバ何とかしてやろうって想って、で、病院で勝手に妄想して、こうやってこうやってやれば、こうなるんじゃないかみたいな、勝手に妄想をして、家に帰った時に、お母さんにこれさあって言って、トロミを付けたら食べられると想うから作ってって言って、作ってもらったのがトロミソバで、で、卵焼きとかもラップに包んで巻いていく、で本物のように出来るから楽しくなってきちゃって、何か工作感覚で、作っていても楽しいし、見た目をけっこう本物に近い感じで作ったりとかして、ちょっとうまくないみたいな、自慢したい感じで、見て見てみたいな

【障害当事者の目線を大事にしたい】

E 氏は、「NPO を作るのだったら当事者目線を大事にしたい」、それを表現できるとしたら、「私が代表になるのが、一番、表現できるだろう」と思った。

また、NPO の立ち上げに関しては、障害当事者の目線でヘルパーの時間数を伸ばしてもらう等の市との交渉を担当相談員と行ったことから、その担当相談員から「他の困っている利用者さん達に対しても、そうやって市と交渉したりとかして、やってあげたい」と言われたれたことが立ち上げの切っ掛けであった。

＜担当の相談員さんとヘルパーの時間数を伸ばしてもらったりとか、市と交渉したりした＞

E：相談員さんとはけっこう協力して、ヘルパーの時間数を伸ばしてもらったりとか、市と交渉したりとかずっとやってきていたから、そういうことを私に対してだけじゃなくて、他に困っている人達にも広めたいってのがあって、他の相談員さんじゃなくて、他の困っている利用者さん達に対しても、そうやって市と交渉したりとかして、やってあげたいっていうのもあって、だけど制度の溝があって

そうやってできない時もあるから、NPO として関わりたいってのがもとで、最初は始まった

＜NPO を作るのだったら当事者目線を大事にしたい、それを表現できるとしたら、私が代表になるのが、一番、表現できるだろう＞

E：NPO をせっかく作るのだったら、当事者目線を大事にしたいって皆想っていて、それをみんなが一番、表現できるとしたら、私が代表になるのが、一番、表現できるだろうということで、私が代表をやることになったのだけど、何か他の支援団体っていっぱいあるの障害者の、だけどそれって全部トップが健常者の人ばっかりで、そうじゃなくて障害当事者が、当事者目線で発信をするのっていうのが大事じゃないのっていうのが、うちの団体のコンセプト

【障害者としての意見を必要とされる】

E 氏は栄養士や ST から、「嚥下食を利用者の立場で作っている人って、あんまりいないから、じゃあそれを発信したら」と言われたことを切っ掛けに、母親と作った嚥下食の情報を発信するブログを開始する。また、担当の相談員さんに E さんが自身の在宅生活について話すことで、こういう人もいるよって知る切っ掛けになるから、NPO の活動を通じて、どんどん外に行って活動をして欲しいと、【障害者としての意見を必要とされる】。

＜担当の相談員さんに E さんが在宅の生活とか話すことで、こういう人もいるよって知る切っ掛けになるから、どんどん外に行って活動をして欲しいと言われた＞

E：地域の相談員、計画書を作ってくれる事業所、介護保険で言うとケアマネージャーさんで、NPO 手伝うわみたいな感じになったんだけど、いざスタートしたら私が代表ってなっていて、そうやって E さんが在宅の生活とか話すことで、こういう人もいるよって知る切っ掛けになるから、だからどんどん外に行って活動をして欲しいと

＜栄養士や ST から作った嚥下食の情報発信をすることを勧められブログを書きはじめる＞

E：ブログに書こうと想ったのは、嚥下食を作っていて、で、結構、栄養士さんと ST さんとかから褒められていて、きっと嚥下食を利用者の立場で作っている人って、あんまりいないから、じゃあそれを発信したら、その情報を求めている人ってきっといっぱいいると想うよって言われて

【自分が持つ情報に需要があると思い情報を発信した】

次第に E 氏は開始をしたブログを通じて、「何か自分が言っていることも役に立つんだなっていうのを想って、だから何か、もっと専門職とか、OT とか介護士さんとか仕事をしているレベルの人達に話たいな」と想うようになる。

＜開始したブログを通じて、自分が言っていることも役に立つんだなと思い、もっと専門職とか仕事をしているレベルの人達に話したいと思った＞

Q：ブログに書こうと想ったのは何でですか

E : ブログに書こうと想ったのは、嚥下食を作っていて、で、結構、栄養師さんと ST さんとかから褒められていて、きっとこれを作っている嚥下食を利用者の立場で作っている人って、あんまりいないから、じゃあそれを発信したら、その情報を発信したら、その情報を求めている人ってきっといっぱいいると想うよって言われて、ブログとかやってみたらって言ってもらえて、じゃあやってみるってブログで発信をしだして、そうしたら日々、想っていることとか、何か日記的な感じで、最初は本当に発信したいというより、ただ今日こんなことがあって、こんなこと想ったみたいな程度のことを書いていたんだけど、それに対して、向うが解釈して、そういう想いとか持っているんだみたいな感じで、コメントをくれたりして、何か自分が言っていることも役に立つんだなっていうのを想って、だから何か、もっと専門職とか、OT とか介護士さんとか仕事をしているレベルの人達に話たいなって想って

＜OT が嚥下障害になって作った嚥下食のレシピだったら、多分、需要が結構あると想って、発信するようになった＞

E : 何だかんだ、そういうふうに作ったり、これはここにトロミを付けた方が良いんじゃないかとか、そういうのって OT の嚥下に対する知識とか、結構反映されて出来ているのね、何だかんだ言って、だから OT が嚥下障害になって作った嚥下食のレシピだったら、多分、需要が結構ある、だからそういうのとか想って、発信するようになったのが最初で

【インターネットを使えば障害に関係なく情報を発信できる】

E 氏はインターネットを使った情報発信について、「自分は自由には動けないし、出来ることって凄く限られているけど、発信することってけっこう自由なのね、今はインターネットとか使えば健常者も障害者も関係なく、同じような情報が発信できる」、「障害があるからっていうのじゃなくて、同じ立場で出来るって言ったら、発信することは同じ立場でできることなんだよね」と話し、インターネットを使えば障害に関係なく情報を発信できるとの認識を持った。

＜自由に動けなくて出来ることは限られるけど、インターネットとかを使えば健常者も障害者も関係なく、同じ立場で情報発信ができる＞

E : 自分は自由には動けないし、出来ることって凄く限られているけど、発信することってけっこう自由なのね、今はインターネットとか使えば健常者も障害者も関係なく、同じような情報が発信できる、だから、何かするとしたら、発信するっていうことに特化することが、一番、自分の障害を感じさせずに、普通の健常者と同じレベルで出来る、障害があるからっていうのじゃなくて、同じ立場で出来るって言ったら、発信することは同じ立場でできることなんだよね

【自宅で生活できること以外は望まなかった】

E 氏は退院をする頃の心境について、「病院の先生とかは、将来的なことを考えると、一生病院で過ごすか、施設で過ごすかって言われたこともある」、「期待とかは何にもなくて、とりあえず家で生活できたらそれで良いと想っていたし、それ以上のことも何にも求めてない感じ」だったと話す。

＜とりあえず家で生活が出来れば良いと思った＞

E：もう完全に道を断たれたみたいな感じに想った時が、一番、どん底の状態で、その時は、何かもう自分の役割とかどころじゃなく、とりあえず家で生活が出来れば良いやみたいな、病院の先生とかは、将来的なことを考えると、一生病院で過ごすか、施設で過ごすかって言われたこともあるし

＜自分に対して期待はなくて、それ以上のことは何も求めなかった＞

Q：自分に対してあれもできない、これもできないとか、そういう期待とか、生活ができないっていう不安はあったのか、どんな感じなのですか

E：期待とかは何にもなくて、とりあえず家で生活できたらそれで良いと想っていたし、それ以上のことも何にも求めてない感じで

【障害は自分の生活を制限する邪魔なもの】

E 氏は障害について「障害は自分の生活とかやりたいことを制限する邪魔なもの」だと話す。

＜障害は自分の生活とかやりたいことを制限する邪魔なもの＞

E：だけど何か自分の生活とかやりたいことを制限する邪魔なものっていう関係もある

【周囲から期待をされないことがあり傷ついたり悔しく思った】

E 氏は、父親の主治医や地域の人から、娘や家族の中でのキーパーソンとしての機能が果たせないと思われ、イラっとしたり、悔しく想ったりした。また、家族が自分のことを近所の人に「知られたくないっていうか、合わせたくないっていう気持ちがあっただろうし」と想うなど、「(自分が) 勝手に想って傷ついていたりはけっこうあるんだと想うな、お母さんに対してもそうだし、ヘルパーさんだったり、看護師さんだったり」と話し、【周囲から期待をされないことがあり傷ついたり悔しく思った】。

＜自分は思っていないが、父親の主治医や地域の人から、娘や家族の中でのキーパーソンとしての機能が果たせないと思われ、イラっとしたり、悔しかったりした＞

E：社会的な感じで言うと、娘としての立場って私にとっては全然変わっていないんだけど、だけど、社会から見ると、そうは見られていない

Q：深いですね

E：何か例えば、父親が入院した時に、私はお母さんよりも医学的な知識はあるから、介護者としてはお

母さんだけど、キーパーソンとしては私っていう関係になるよね、で、手続きとかをするにも、私がほとんどやっていたから、キーパーソン的な立場は私なんだけど、で、家族面談とかで、私が中心に話てワーカーさんともうこう話しをして段取りを決めて、じゃあこうして行きましょうねってなった、で、じゃあ分かりましたってなったのに、終わって、しばらく経ったら、そのワーカーさんが、看護師さんに「本当にあの娘さんで大丈夫なの？」任せて大丈夫なのみたいなことを言われていたりとかして、だから何か、向うから見れば、障害があるのにキーパーソンとしての役割が果たせられるのみたいな感じで見られいてる、だからたぶん障害者として見ているから、何か娘としてとか、キーパーソンとしてっていうのは見られてないなっていう感覚があって、だからそれが失った役割っていうか、自分的には失ってないけど、周りから見て失った想われている、そう見られなくなった、そういう意味では、失った役割が娘としての役割とかそういう所になるかな

Q：家の中とか関係性では変わんないはずなのに、社会に出たら娘とみられないみたいな

E：娘としての機能を果たせないと想われているっていうか

E：あの人は無理だろうって最初っから相手に期待をされていないんだけど、いつも入っている訪問看護の看護師さんとかうちの関係性を良く分かっているから、私がキーパーソンだよって言っても、ああそうだよねってなるんだけど、そういううちの関係性をよく分かっていない、入院した先の先生達とか地域の人達とかにとっては、そうは見られない

Q：それってでも、発言内容とかじゃないですもんね

E：もう、私がどれだけ理路整然と説明して、こうしますこうしますって手続きも全部やりますって言っても、で、もしも手続きも全部やってきたとしても、あの人、娘としてこういうの任せちゃって大丈夫なのかなっていう気持ちはたぶん消えないから、それが消えない限り、ずっとそうは見られないってのはあるな、ある程度、意識の問題

Q：そのこと事態、娘として社会に見られないっていうことに対してはどんな感情が沸きますか

E：けっこうイラッとする、何かさっきまでさぁ、凄いちゃんと話てたじゃんって、もうそっちも納得して、次までにやってきますねってなったじゃんって、お願いしますねって、なったじゃんって、そっからまた全部、振り出しに戻すのみたいな

Q：あの、イラッなんですよね

E：イラッとする、残念とか悔しいとか、どっちかっていうと悔しいかな、まあでも、イラッとするね、何だよあいつみたいな

＜キーパーソンとしてやることはやってるから、そこは評価してよって思う＞

Q：役割の複雑さですよね、本当はできるはずなのに、そう想われないっていう

E：やっているはずなのに、そこを評価してもらえないっていうか

Q：言っても、僕らも、患者さんの受け入れのその会議とかに出る人なんですけど、確かにキーパーソン、例えば、60 歳ぐらいの患者さんで、40 歳ぐらいの人がキーパーソンで、無職で家事手伝いですって言った時に、大丈夫かこの人ってなりますもんね

E：そこがさあ、あれじゃん、人口呼吸器ユーザーで車椅子で無職ってなっていたら、介護するの大丈夫ってゆう心配はあっても、この娘がキーパーソンとかそういう無茶なこと言うやんみたいになるでしょ

Q：言いますね

E：でも自分も逆の立場だったら、想うと想うよ、だけど現実問題、やることはやってるから、だからそこは評価してよって想う

＜母親達が近所の目を凄く気にしているのを感じていたから、母親達から期待をされていないと思っていた＞

Q：社会が貴方に対する期待に変化はあったと想いますかというと、さっきは一つあって、キーパーソンとして見られないっていうのが一つありましたよね、そのような経験とか、家族とかはどういうふうに想われていたと思いますか

E：最初は外に出したがらなかったんだよね、今は全然そういうことはないんだけど、最初の頃は車で出掛けてお父さんとお母さんと私でね、出掛けてじゃあスーパーに寄って行こうってなった時に、近所のスーパーだと、車で待っていて、直ぐに買い物してくるからみたいな感じで、車に残されるんだけど、ちょっと遠くの、あんまり知っている人が来ないようなスーパーだと、中まで連れて行ってもらえるみたいなのがあって、お母さん達、近所の目を凄い気にしているんだなみたいなのを凄く感じていて、何かそれもあって、あんまり外に出なかったっていうのもあって、だからあんまり家族からは期待されてないっていう感じ、だから全然期待されていないと想っていた

＜自分のやりたい生活に付き合っていられないとヘルパー事業所に徹底された＞

E：関わる人、今は自分の好きなように生活をしているから、それに付いてこられなくて、付き合ってらんない、みたいな感じで、ヘルパー事業者に撤退されたりとか

Q：何か複雑ですね

E：何か、自分達の障害者、利用者像と、私がちょっとかけ離れすぎちゃって付いていけないみたいな、利用者さんは自分達の想っている感じの中の生活をしている人みたいなのが、あるんじゃないかな、ある人には

＜母親・ヘルパー・看護師に対して自分が勝手に想って傷ついたりはけっこうあるんだと想う＞

E：ここじゃなくて、直ぐ近く、ほとんど直ぐのところね、だから何か、噂話っていうか凄い勢いで広がるよね、○○さんところの○○ちゃん、病気になって人口呼吸器らしいよみたいなのがバーンって広がっちゃうみたいなところに住んでいたから、一人の人に話たら、皆が知っていたみたいなところだから、だから知られたくないっていうか、会わせたくないっていう気持ちがあっただろうし、だから、分からんでもないとは想うんだけど、ちょっと外に出たい時に、電車朝 7 時ぐらいに乗って行くっていったら、その時間は電車は通勤ラッシュでしょって言って、あんた車椅子で乗ったら迷惑だよって、

何か凄く迷惑とか邪魔とか、何かそうやって思われているのかなっていうのはあったかな

Q：別に嫌じゃないけど

E：確かにそうなんだけど、別にその、通勤ラッシュの時間帯にどうしても出かけなければいけなかったらしかたがないじゃんって、そこ言われても、私どうしよもないしみたいな、だけどあんた、そんなの邪魔だよとか、結構、言われていたね、あと、全然、お母さんも一生懸命、見てはくれてんの、でもふとした時にお母さんのタメ息とか聞こえるの、タメ息ってけっこうね、けっこう殺傷能力が強くって、何かそういうの全然向うがそんなこと意図してないかもしれないけど、こっちが勝手に想って傷ついてたりはけっこうあるんだと想うな、お母さんに対してもそうだし、ヘルパーさんだったり、看護師さんだんだったり、何か複雑すぎてよく分からんくなったり

［役割獲得期］

＜出来事＞

・母校である作業療法士の養成校から講演の依頼を受ける。

・雑誌の連載を開始。

・雑誌の連載を読んだ人から講演依頼を受ける。

・NPO 法人の代表を務める。

＜カテゴリー内容の説明＞

【楽しいことがやりたい】

E 氏は、NPO の活動では、何かをしなければいけないというのはなくて、人同士が繋がる機会になっていること等、楽しいことがやりたいと思っている。また、「私にとってあれ（NPO の活動）は遊びでしかない」と話す。

また、講演活動では、「一回は、絶対に笑いをとるっていうのが目標、絶対に笑わさないと気が済まない」と話す。

＜NPO の活動では、何かをしなければいけないというのはなくて、人同士が繋がる機会になっていること等、楽しいことがやりたいと思っている＞

Q：NPO の方の活動、役割に対して御自身が御自身に対する期待ってどんなところですか

E：あんまりね、そっちに対してはね想っていなくて、何かをしなきゃっていうのは全然、想っていなくて、ただ楽しんでやっているだけなんだよね、だって運動会にしてもさ、何か楽しいことがやりたいだけだもん、で、こんな運動会やったら楽しくない、みたいに皆に言ったら、やるやるって、じゃあ楽しそうだからやってみようよみたいな、ノリで集まっているの、だから何か障害者のこと知ってほしいから、こうゆうふうでこうゆうふうでっていうのではない、後付けだもん、企画書とか書く時はそうしなきゃいけないからさぁ、後付けて作るけど、だけど実際は、じゃあこういうことやりたいんだってみたいな

Q：映画祭なんかも、いろんな人が来て結果的に楽しそうだなみたいな感じ

E：楽しい、結局、何か全然、関係なかった人同士が繋がったりとかして、そういう機会になっているの

が楽しい

Q：自分以外の人達を見ていても

E：私を通して皆集まっているんだけど、関係なかったこっちの知り合いと、こっちの知り合いが繋がって、見ていると楽しい

＜障害があるとかないとか、全部フラットにして、楽しみたい＞

Q：そこでしか味わえない楽しさがあるって感じなのですか

E：別に障害があるからとか、障害者だからとか、全部フラットにして、楽しもうじゃんっていう

Q：人との関係だから、障害は関係ないですもんね、

E：結局のところ自分が障害者ってのがあるから、障害がある人とない人が関わる切っ掛けになったりとかはしているから、後付けとしてさ、インクルーシブな場になったよとかそういう時は言っているけど、どっちかっていうとフラットな感じ、皆が接して、一緒になった方が楽しいかなっと想って

＜面白そうじゃんっていうレベルで実行委員は集まっている＞

Q：集まってくる人達もきっと、楽しいだろって想って来る

E：なにそれ面白そうじゃんっていうレベルで集まっている実行委員会は、だから実行委員会とかグチャグチャなの

＜期待されているから重身の子達を呼ぼうじゃなくて、重身の子達、呼んじゃおうよ、いいじゃん、いいじゃん、誰か面倒見るでしょが先＞

Q：重身の子達の親達からすると、E さんとやってくれて良かったなって想っているでしょうねきっと普通に、楽しいの半分と、ありがとうって感じなんでしょうね

E：何か多分ね、そうやって一緒に過ごす場があって良かったみたいに、想ってくれたお母さん達がいたりとか、後付けなんだよね、期待されているから重身の子達を呼ぼうじゃなくて、重身の子達、呼んじゃおうよ、いいじゃん、いいじゃん、誰か面倒見るでしょうみたいな、こんだけ人、多ければ誰か見るでしょうみたいな

＜講演で 1 回は絶対に笑いをとるという目標がある＞

E：講演は一回は、絶対に笑いをとるっていうのが目標、絶対に笑わさないと気が済まない、一回笑ってくれたら、良し今日も気分良く帰れるみたいな、今日は良くやったみたいな

＜NPO 活動は遊びでしかない＞

Q：自分自身に対しては

E：一応、OT としての自分の役割はそこにちょっと入っているわけで、だから何か仕事的な、関係はある、NPO は多分、社会的に行ったら NPO も仕事して人は扱うと想う、NPO の代表をやっているのを仕事として見るかもしれないけど、私にとってあれは遊びでしかない

【障害当事者の目線を大事にしたい】

E 氏は、「障害者にとって住みやすい街にするってことは、高齢者だったり、怪我をしている人だったり、子育て中の両親だったりとか、そういう怪我している人とか、誰にとっても住みやすい街になるってことだなと想う」ことから、NPO の活動を通じて、バリアフリーの社会の実現に向けた発信をしたいと考えている。

また、「何か健常者の人でも、障害者寄りの考えでやろうと思っても、結局は寄りでしかない、完全にその目線にはならないし、やってあげようみたいな、障害者目線で考えてやるよみたいな感じがあるから」との観点からも、【障害当事者の目線を大事にしたい】と考ええている。

＜障害者にとって住みやすい街にするってことは、高齢者だったり、怪我している人だったり、子育て中の両親だったりとか、誰にとっても住みやすい街になるってことだと想う＞

Q：NPO 自体で発信したいこととしては、さっきも伺いましたけど

E：インクルーシブ社会みたいなところなんだけど、障害者にとって住みやすい街にするってことは、高齢者だったり、怪我をしている人だったり、子育て中の両親だったりとか、そういう怪我している人とか、誰にとっても住みやすい街になるってことだなと想うけどね、例えば段差一つをとっても、障害者のためにスロープを付けましょうってなったら、誰にとっても住みやすい街になっていくっていうことだと想うから、それが一番、分かりやすいのが、障害者に対してバリアフリーにしていくことっていうのが一番、視覚的に分かりやすいと想う

Q：ステッカーを配っている

E：ステッカーは、お店にお手伝いしますっていう一覧が、声を変えてくれたら手伝うって言ってくれるお店ってけっこういっぱいあると想うのね

Q：それが貼ってあるお店は、お店の人が手伝ってくれるよっていう

E：そのお手伝いしますっていう店が、一覧表でお店に貼ってもらって、可視化することで、困っている人が、ここのお店だったら手伝ってもらえるって、「スイマセン手伝って下さい」って、言いやすくする

＜健常者の障害者寄りの考えでやろうと思っても、結局は寄りでしかない、完全に障害者目線にはならない＞

Q：逆に社会の中で NPO の活動を、ゴチャマゼ運動会を行う活動以外では、障害があるないっていうのは、ずっと付いて回っちゃうんですよね、それをなしで楽しめることがないっていうことなんですよね、しかも健常の人が作ったのは面白くないんですよね

E：何か健常者の人でも、障害者寄りの考えでやろうと思っても、結局は寄りでしかない、完全にその目線にはならないし、やってあげようみたいな、障害者目線で考えてやるよみたいな感じがあるから

【当事者の気持ちや経験をセラピストの視点に変えて話すことが自分にできる OT】

E 氏は自身の講演活動について、当事者の気持ちや経験をセラピストの視点の言葉に変えて話す通訳的な役割だと認識している。そして通訳をする際は、「OT の割合と、当事者の割合を、その依頼された内容によって配分を変えている」と話す。

また、講演活動に対して、「一応、OT としての自分の役割はそこにちょっと入っているわけで、だから何か仕事的な、関係はある」、「講演活動っていうのが私にとって仕事だね、それで、話すことによって報酬を貰っているから、お金のやり取りがそこで発生しているっていうのがあって、仕事的な意味合いが凄く強い」「これから臨床に出て行く人達にそれを伝えて、それが臨床に反映されるっていうのが、私にとっての OT だから」との認識を持っており、講演活動には E 氏にとっての作業療法士としての仕事的な意味合いがある。

＜OT を続けてはいけないと思ったけど戻れるのだったら戻りたい、でも実際には無理だから自分ができる OT をみつけることの方が現実的だと思う＞

Q：OT ができなくなったことはどのように感じますか

E：今までずっと自分が回復期で、身体障害の人とかずっと見てきて、けっこう、一生懸命やっていたから、臨床で患者さんの治療することが自分の中の OT をするっていうことだったね、OT をやるっていうのは患者さんの治療とかをどれだけ出来て、OT なんだっていうところがあって、だから患者さんの将来を左右するから自分が OT やっていちゃいけないって想って、臨床から離れることにしたんだけど、だけど、完全に戻るのは無理だっていう今の状態になると、じゃあ OT って何なのっていうふうに今度は逆になって

Q：そこはすんなりそういう感じになった

E：直ぐにはならない、やっぱり臨床に対する未練はあるし、今でももし戻れるんだったら、戻りたいっていう気持ちが全くないかって言ったら、そうじゃないけど、だけど、実際問題無理だから、現実として考えたら、自分ができる OT をみつけるっていう方が現実的だからね

＜講演では当事者性とセラピスト性が合わさっていることを価値みたいに感じて受け取ってくれていると思う＞

Q：当事者性みたいなところですか

E：当事者が障害者になった、支援する側から支援される側に変わったとか、そういう変化については凄く話すけど、多分、私が話すことに対して周りの人は、当事者性だとか、セラピストと当事者性が合わさっている内容にはなっているから、だからそういうふうに受けとるのは、当事者セラピストとしての価値みたいなのは感じて、受け取ってくれているとは思うけど

＜依頼された内容によって、OT の割合と当事者の割合の配分を変えている＞

Q：少しずつ OT の目線を入れながらやっているのですか

E：そうそう、OT の割合と、当事者の割合を、その依頼された内容によって配分を変えている、どっち

より、どっちよりって、こっちがセラピストで、こっちが当事者だったら、自分は今どのあたりかみたいな、ちょっとずつ変えて喋っているかな

＜何かを感じとってくれたら良いなと思って講演を行っている＞

Q：そこで自分自身が当事者セラピストに期待することって何になるのですか、NPO は楽しみたかったけど

E：それは自分が言うことに対して、何か感じとってくれたら良いなみたいな、何かを伝えたいっていうより、自分が伝えたことに対して相手がどう受け取るかっていうのはこっちじゃ操作ができないことだから、何か感じとってくれたら良いなぐらいにしか想ってないけど

＜講演活動は OT としての自分の役割がちょこっと入っていて、報酬を貰っているから仕事的な意味合いが凄く強い＞

E：一応、OT としての自分の役割はそこにちょっと入っているわけで、だから何か仕事的な、関係はある

E：講演活動っていうのが私にとって仕事だね、それで、話すことによって報酬を貰っているから、お金のやり取りがそこで発生しているっていうのがあって、仕事的な意味合いが凄く強い

＜これから臨床に出て行く人達に講演で伝えて、伝えたことが臨床に反映されるっていうのが、私にとっての OT＞

Q：E さんなりの OT ですもんね

E：そう、何かこれから臨床に出て行く人達にそれを伝えて、それが臨床に反映されるっていうのが、私にとっての OT だから、だからそっちは仕事、NPO は遊びっていう感じで

＜講演活動で期待されることは、当事者の気持ちや経験をセラピストの視点の言葉に変えて話す通訳的な役割だと思う＞

Q：当事者セラピストに対して社会が期待することってどんなことですか

E：多分それは、当事者目線を臨床に反映するっていうことだと想うけどな、結局、当事者セラピストって、当事者の気持ちとか経験をセラピストの視点の言葉に変えて話すっていうところが、一番、大事なとこだと思うから、多分、通訳的な役割

【自分達がやりたいようにやったことを社会が勝手に評価してくれる】

E 氏は NPO の活動について、「自分達は自分達のやりたいようにやって、それを周りが評価してくれたらそれで良いし、自分達が想っている効果と、社会が目指している効果が一致する必要はないかな」との認識を持っている。そして実際に、自分達が楽しみたくてやったことに対して、「障害の壁を越えてどうたらこうたらって言っていると想うよ、インクル

ーシブ教育とか絶対に言ってくると想うよ」と、社会はNPOの活動内容を社会自らが求めていたことだと勝手に受け止めてくれていると認識している。

＜自分達のやりたいようにやって、それを周りが評価してくれたらそれで良いし、自分達が想っている効果と、社会が目指している効果が一致する必要はないと想う＞

Q：NPOに関しては、始めてから、Eさんが想っているところとは違うかもしれないけど、社会からは色々期待をされるじゃないですか

E：けっこう社説とかで書いているけど、障害差別解消法の主旨の具現化になっているんじゃないかみたいな、とっても凄い活動をやっている団体のような書かれ方をしていたけど、周りからそうやって期待されるのは仕方ないかなとは想っているけど、社会からどうやって期待をされていても、自分達は自分達のやりたいようにやって、それを周りが評価してくれたらそれで良いし、自分達が想っている効果と、社会が目指している効果が一致する必要はないかなって想って、勝手に解釈して満足しているんだったらそれで良い、何か一致させようっていう気持ちが全くなくて、たぶん運動とかやったら周りの人は、障害の壁を越えてどうたらこうたらって言っていると想うよ、インクルーシブ教育とか絶対に言ってくると想うよ

Q：そういうのはどうでも良い

E：どうでも良い、楽しかったらそれで良い

＜自分達が楽しみたくてやったことを、社会は勝手に社会が求めていたことだと受け止めてくれている＞

Q：完全に社会に引っ張られてやっていないですもんね、社会に求められていることをやっているつもりもないっていうか

E：たぶん、結果的にやっていることが勝手に私が求めていたことだみたいな感じで、受け止めてくれている

Q：それがもう、社会的には役割になりますね、勝手に

E：たぶん、うちはこんなやったら面白くないっていうレベルなの、車椅子でパン食い競争とか、喋っちゃいけない借り物競争とかあったら面白くないっていうレベル

＜社会は勝手に期待をして勝手に評価をしてくれている＞

Q：定義的には、役割っていうのは、期待されて期待に対して応えることなんですよ、構図としては違うんで、何と言うのかな

E：勝手に期待して、勝手に評価してくれているみたいな、こっちが勝手に納得してくれているから、いいやっていうか

Q：本人達も期待というか、楽しいからやっていることが

E：やったら、こんなに楽しかったね、だけなの

Q：動機がそうですもんね

E：なんか面白ければいいじゃんって、だけど楽しんでやっていると、けっこう周りからいっぱい人が集まってくれて

＜NPO 活動での障害の価値は社会が勝手に付けている＞

Q：それは何の抵抗もなく使っているのですか

E：ない、何か、向うが勝手に価値を付けてきていることだから、それでいいんじゃないみたいな、勝手にあんた達が想っているじゃんみたいな

Q：強いですね

E：確かに最初は抵抗あるよ

Q：担がれちゃったみたいな感じもあるかもしれないですもんね

E：何か知らない間にそうされちゃったみたいなには最初あったけど、代表なっちゃったし、市民活動の集まりとかに行ってもスゲー目立つの、どこいっても目立つわけ

【障害をブランドとして売りにしている】

E 氏は自身の障害の価値について、「NPO の方としては、障害の価値っていうか、障害を自分のブランドとして使っている」、「当事者セラピストの方は、こっちが障害を上手く使っていると想う」と話す。

＜NPO 活動では障害を自分のブランドとして使っている＞

Q：障害経験を活かした役割が 2 つありましたけど、障害の価値についてどう考えますか

E：NPO の方としては、障害の価値っていうか、障害を自分のブランドとして使っている、だから、多分、普通のおじさんが代表をするより、私がやった方が何かインパクトが強い、新聞に取り上げてもらったりとかも、インパクトだし、そういう意味ではブランドとして使っている

＜講演活動での障害の価値は、障害を自分で売りにしている＞

Q：当事者セラピストの方の価値は

E：当事者セラピストの方は、こっちが障害を上手く使っていると想う、NPO の方は周りが勝手に担ぎ上げている、勝手に価値を理解して、勝手に想ってくれているんだけど、当事者セラピスとの方は障害を自分で売りにしている

【障害を負ったことによって出来た人間関係がいっぱいある】

E 氏は自身の障害の価値について、「人間関係のツール、障害を負ったことによってできた、人間関係ってあるじゃん、だからそういうのを作るためのツールじゃない」と話す。

＜障害を負ったことによって出来た人間関係がいっぱいある＞

E：障害の価値ね、なんだろう、人間関係のツール、障害を負ったことによってできた、人間関係ってあるじゃん、だからそういうのを作るためのツールじゃない、障害を通して出来ている関係がいっぱい

あるから、それを作ったのは多分、障害になるから、関わることになったっていうのがあるから、それは使っているかな

【障害は自分の生活を制限する邪魔なもの】

E 氏は障害について「障害は自分の生活とかやりたいことを制限する邪魔なもの」だと話す。

＜障害は自分の生活とかやりたいことを制限する邪魔なもの＞

（役割以外での障害についての捉え方について）

E：だけど何か自分の生活とかやりたいことを制限する邪魔なものっていう関係もある

【家族の協力がある】

E 氏は家族に対して、「口出しはしてこないけど、どっか行かなきゃいけない時に、介助者がいなかったら、付いてくれるし、協力はしてくれていると思う」と【家族の協力がある】との認識を持っている。

＜今は家族が近所の目を気にすることはないと思う＞

E：今は全然、前と変わらずって感じで、別に、あたしなんてめちゃくちゃ目立っているしこの辺じゃ、NPO とかやってめちゃくちゃ目立っちゃっているし、新聞とかも載っちゃっているしね

＜家族は協力をしてくれていると思う＞

Q：家族さんとかどうなのですか

E：やりたいんだったら勝手にやればみたいな

Q：ある意味応援しているみたいな

E：口出しはしてこないけど、どっか行かなきゃいけない時に、介助者がいなかったら、付いてくれるし、協力はしてくれていると思う

【障害者としての意見を必要とされている】

E 氏の講演活動は全て依頼により行っている。また、依頼者からは、「障害者としての意見を聞きたい、障害者だったら見てどういう感じなのかっていうのが求められている」との認識を持っている。

＜講演は全て依頼により行っている＞

E：結局、講演とかは全部向うから依頼が来たから、やっているってだけで

＜障害者としての意見を聞きたいと社会から必要にされている＞

E：あとは何か、社会の不便さを図る物差しっていうかさ、今までの健常者の時の物差しとは、今は違うじゃん、でその物差しが社会にはけっこう必要とされとるわけ、障害者としての意見を聞きたい、障

害者だったら見てどういう感じなのかっていうのが求められているから、そういうような価値があるのかなと想う

＜当事者セラピストと名乗ることで存在をイメージしやすくなり、社会から発見されやすくなった＞

Q：当事者セラピストになってから、役割を社会から求められるようになったみたいな感覚ありますか、例えば、当事者セラピストがなかったら、社会から求められることがないとか

E：多分、変わってはいないだろうけど、周りから分かり易いよね、当事者セラピストっていう言葉にされた方が、何かどっちの視点も持っている人みたいに言われてもさあ、イマイチピンと来ないだろうけどさ

Q：社会から分かり易いっていうことがありますね

E：そう、どういう人なのかっていうのが

Q：期待されやすくなったというか

E：あと、発見されやすくなった

6）F 氏

（1）カテゴリーとコンセプト

F 氏の逐語録から抽出された 20 のカテゴリーと 65 のコンセプトを表 8 に示す。

表８．F 氏 カテゴリーとコンセプト

カテゴリー	コンセプト
1.周囲や社会から障害者に仕立てられる	障害を持っている奴だと言われた時に、障害を持っているのかもしれないと思った
	同級生と同じことができないと思い始めたくらいから障害を意識するようになった
	歩き方が変、皆と同じことができない、調子に乗っているとイジメにあう
	身体障害者手帳を取得したことを通じて、社会が僕を障害者に仕立て上げてくるという違和感を感じた
	大人になるにつれて障害者と言われることが増えて、自分もそうだなと思ってしまい、障害者と言う単語に飲み込まれた感じが凄くあった
2.期待に応えたい承認されたい	私立へ行って良い大学へ行って頭で稼げる仕事に就けっていう親の期待には応えたい、イジメてきた人達を見返したいと思い私立中学校へ進学をする
	自己否定観が強かったことから承認欲求が強くあって、承認欲求を満たすための発言や行動をしていた
	ネガティブなところで特別扱いされるんだったら、ポジティブなところでも特別扱いしてほしいと凄く思っていた
3.自分を理解してもらわなくても良い	障害って感じではなく、生まれつきだからしょうがないじゃんっていう感覚だった
	理解れてくれるのは数人でいい、分からない人がいてもしかたがないし分かってもらおうとは思わない、変なら変って言っていればいいという感覚だった
	弱音を吐かない、弱みを見せない、金銭的に自立していて、周りに誰もいなくても良い大人になりたいと思っていた
	親と一緒で幼馴染にも、僕の本心を言ったらこの人達は困るだろうって凄く思っていて、社会的に閉じていた
4.自分の身体のことを親に申し訳なく思った	僕の身体のことで親が喧嘩をするのをよく見ていたから、辛いとか足が痛いとかイジメにあっているとかは言わないでおこうと凄く思っていた
	親が思っている健康的な子どもとしての役割をなくしてしまった感じがあって、親に対してすいませんと思っていた
5.周囲の期待に応えられなかった	自分の身体のせいで家族がバラバラになるっていう感覚や、F家の三代目としての将来を渇望された感覚の崩れがあって、もう家族から期待されないんだなと思っていた
	掲示板に書せられてくる質問に答えられず、社会的な役割を与えられているのに期待に応えられなかった
6.（確定診断前）役割を担うことや存在を認めてもらう経験を経たことで障害者だと意識することはなくなった	周りの人は気にしないことから社会的に障害者呼ばわりされることは減った、しかし身体的に自分が障害を持っていることにかきつくなってきた
	様々な形で役割を担える良い経験ができた
	中高6年間は任せられることがあり、自分が障害者だということはほとんど意識しなかった
	あしなが育英会のミーティングの中で、人と比べるから不幸を感じるのではないかと気づくことがあり、小学校からの体験がパンって嫩に落ちて、すごく楽になった
	18年かけて私は私になった
	初めて僕の存在を全て肯定する言葉を掛けられて、今までの承認欲求が全て満たされた
7.確定診断により大きなショックを受ける	18年かけて私が完成してからの確定診断を受ける
	確定診断を受けて、ショックを受け、否認して、怒り狂って、引きこもって、解決の努力をするけどまたショックに戻るなど、大きなストレスを受ける
	今までの人生が嘘だと言われた感じがした
8.父親は子どもを否定することと期待することが一緒になっていた	父親は子どもを否定するのと期待するのが一緒になっていた
9.自分の気持ちを家族に伝えたことで家族の気持ちと向き合うことが出来た	休学する時に初めて実は今までシンドかったこと両親に伝えると、父親は辛いことを辛いと言ってくれて親として安心した、これからは楽に生きて欲しいと言い、初めて過度な期待をしなかった、初めて特別扱いをしなかった
	父親の優しさに向き合うことができ、バラバラになりやすかった家族がちょっと枠良くなった
	姉は弟のために一生懸命な人だった
10.自分の意識が変わることで障害が障害ではなくなる	1人旅を通じて人と関わり、おじさんの死に触れ、旅の最後に奥さんのところに行くという経験をしたことで、1人で生きていてはいけない、引きこもりから抜けよう、新しい価値を入れないといけないと思った
	今まで1人で生きてきたふうだったけど、色んな人に支えられていることを知り、嘘だと言われた18年間をうまく詰めることができ、今までの18年間もあった上で、これからは歩いてくのだなと思えた
	18年間を否定されたけど、自分が18年間を否定してはいけないと思い、新たに受容過程に入った感じ
	価値観をもっと積み重ねなければいけないと思って、色んな人と飲みに行ったりした
	バイトによる労働経験を通じて、生きるためにはちゃんと稼げないといけないと思い、OTとして働く覚悟ができたことで復学を決意する
	疾病に関しては治療に頼らないといけない、障害に関しては自分の意識や環境で変わるし、障害が障害じゃなくなることはけっこうある
11.患者の経験値や困っていることを通訳して医療界に伝えたい	患者の経験知を医療界に繋ぐこと、医学モデルでしか考えていないドクター達には社会モデルのところで困っているんですよということを発信するのが自分の役割
	当事者のことはセラピストに分からないから、繋ぎ役や通訳とかになって真ん中から見ようと思った
	聴講者が臨床で活かせられるように、経験をただ伝えるのではなく、経験を専門的に分析して伝えている
12.ピアサポートを通じて生活や社会におけるサポートをしたい	1人旅を通じて人と関わり、おじさんの死に触れ、旅の最後に奥さんのところに行くという経験をしたことで、1人で生きていてはいけない、引きこもりから抜けよう、新しい価値を入れないといけないと思った
	確定診断を受けたことで孤独を感じ、CMT患者に会いたいと思ったこと、作業療法士としても他のCMT患者の役に立ちたいと思ったことからネット上での掲示板を立ち上げる
	人に自分の経験を喋ることで自己肯定感を得て次のステップに行ける、そういったピアサポートのプロセスを患者会の中で作って行きたい
	誰かとの繋がりで自分の問題を解決できる場を患者会で担いたい
	周りの人の価値観と自分の価値観をもっと擦り合わせられる機会が患者会にあると良い
	疾病の部分はドクター任せなので、生活のし辛さとか社会的なものに向かってのサポートは患者会が何とかしなければいけない
	患者会はライフワークであり、自分自身がピアサポートを受ける場
13.患者に寄り添える感覚を医療従事者に持ってもらいたい	リハビリの現場で分かる〜って言われると、凄くカチンてなることが多かった、当事者ではないのだから、絶対に分かるはずがないと思う
	医療従事者には患者に寄り添えるような感覚を持って欲しい
14.確定診断から30歳前後くらいまでは自分に自信がなかった	確定診断から30歳前後くらいまでは自分に自信がなかった
15.講演活動を通じて承認欲求が満たされる	講演活動を通じて承認欲求が満たされる
	講演で自分の半生を語ることで、18年間の否定的なものを肯定してもらえるから、喋れば喋るほど気が楽になる
	講演活動は社会的な役割と仕事をする父親役割となっている
16.患者とOTと講演者という3つの立場の関係性の中に将来が見えてきた	精神科に勤めたことで障害と仕事が切り離れ、生活がうまくいった
	患者とOTと講演者という3つの立場の関係性の中に将来が見えてき
17.患者の経験があることでの発言を認められる	統合失調症やうつ病の症状とかではなく、社会的な障害や社会的な障害から感じたメンタルの共感は凄く出また
	患者から同じ病気ということではなくて、すごく理解の近いところに居てくれた、優しいことも厳しいことも両方言ってくれるのはFさんだけだったと言われた
	看護学部の先生から、私が言ったら問題だけど、当事者としての経験があるFさんが言うからサラっと入ってくると言われた
18.障害は疎ましい	障害は疎ましいものだと思っている
19.障害による経験や人の繋がりや感情というのは凄い宝物	障害に付随する経験とか人の繋がりとか感情というのは凄く宝物だと思う
20.健常者の医療関係者に対して違和感を持つ患者を減らしたい	9割9分ぐらい分からない人が多い中で僕だけでも分かりたい、患者の経験がある人がリハビリをする方が患者からも寄りやすいという感覚があった
	健常者の医療関係者に対して違和感を持つ患者を減らしたい、僕にしかできないセラピー感がある
	患者さんが進めなくなっている時とか、セラピストとの関係性が膠着している時とかに、自身の障害経験を伝えることで患者さんの近くに寄りやすくなる
	小さい頃から医療関係者に囲まれていたことや人間の心理が気になっていたことから、医学関係者か臨床心理になりたいと思った
	誰かを治すとかじゃなくて、治す過程とか、喜怒哀楽を共感できることをしたいと思い、作業療法士を目指す
	健常者のPTやOTよりも近い距離で患者を支えられるような、患者が倒れたら自分も一緒に倒れてそこから患者と一緒に立ち上がるようなことをしたいと思った
	心理学が好きなこと、自分の身体と向き合わなくて良い職種だと思ったことから、精神科OTに就職をする
	障害による経験をした人でないと患者さんに近寄れない部分があると思う

（2）障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

役割獲得に至る過程を 4 期に分節化し、各期における自己と他者・社会に関わる要点に表すマトリクスへのカテゴリーの配置を示した（図 8）。【発症前】【発症後】【役割獲得期】【役割創造期】、各期における、出来事の詳細と配置されたカテゴリーについて説明をする。

			発症前	発症後	役割創造期	役割獲得期
自己	役割に対する願望			期待に応えたい承認されたい	患者の経験値や困っていることを通訳して医療界に伝えたい	患者の経験値や困っていることを通訳して医療界に伝えたい
					健常者の医療関係者に対して違和感を持つ患者を減らしたい	
					ピアサポートを通じて生活や社会におけるサポートをしたい	ピアサポートを通じて生活や社会におけるサポートをしたい
				確定診断から30歳前後ぐらいまでは自分に自信がなかった	確定診断から30歳前後ぐらいまでは自分に自信がなかった	確定診断から30歳前後ぐらいまでは自分に自信がなかった
	役割に対する認識	肯定				講演活動を通じて承認欲求が満たされる
						患者とOTと講演者という3つの立場の関係性の中に将来が見えてきた
						患者の経験があることでの発言を認められる
		否定		周囲の期待に応えられなかった	周囲の期待に応えられなかった	
	障害に対する願望			自分を理解してもらわなくても良い		
	障害に対する認識	肯定			（確定診断前）役割を担うことや存在を認めてもらう経験を経たことで障害者だと意識することはなくなった	
					自分の意識が変わることで障害が障害ではなくなる	自分の意識が変わることで障害が障害ではなくなる
		否定		自分の身体のことを親に申し訳なく思った		
				確定診断により大きなショックを受ける		
				障害は疎ましい	障害は疎ましい	障害は疎ましい
		中立				
他者社会	サポート	肯定・有				
		否定・無				
	期待感	肯定		父親は子どもを否定することと期待することが一緒になっていた		
						患者の経験があることでの発言を認められる
		否定		父親は子どもを否定することと期待することが一緒になっていた		
	他者・社会への願望				患者に寄り添える感覚を医療従事者に持ってもらいたい	患者に寄り添える感覚を医療従事者に持ってもらいたい
	他者・社会との関係	摩擦		周囲や社会から障害者に仕立てられる	周囲や社会から障害者に仕立てられる	
		肯定			自分の気持ちを家族に伝えたことで家族の気持ちと向き合うことが出来た	障害による経験や人の繋がりや感情というのは凄い宝物

図8. F氏の障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

［発症前］

＜出来事＞

・F 氏は 4～5 歳の時に、上手に歩けない何が変だなと想い、病気を意識し始める。その後、小学校 1 年生の時、同級生達から「変だ」「障害野郎」と言われ、もしかして障害者なのかと想うようになる。当時の診断名は先天性内反足だった。

＜カテゴリー内容の説明＞

カテゴリーなし。

［発症後］

＜出来事＞

・小学校 2 年生、3 年生と筋移行術を施しても、皆と同じように体育ができないことや、遊びについていけないこと等から、障害に対する意識は強くなっていく。そして皆と同じではないという同級生が持つ違和感は、イジメにつながっていく。

＜カテゴリー内容の説明＞

【期待に応えたい承認されたい】

F 氏は、「親の期待には応えたいな、私立へ行って良い大学へ行って、頭で稼げる仕事に就けっていう、そこには応えたい気はある、子どもとして、役割を失いつつも、でもなるべく親の理想に近い形で生きていきたいなっていう気持ちもあったかもしれない」と、私立の学校へ行く時の親に対する気持ちを話す。また、「ピンポイントで良いからいっぱい評価してほしいってのいうは凄くあった、凄く自己否定観が強かったので常に、承認欲求は凄くでも強かった」と、学校生活での気持ちを話す。

＜私立へ行って良い大学へ行って頭で稼げる仕事に就けっていう親の期待には応えたい、イジメてきた人達を見返したいと思い私立中学校へ進学をする＞

F : 色々理由はあるんだけど、メンツを変えたい、バカ達と一緒の学校には行けないっていう当時、あと親が、身体で稼げないんだから頭で稼げ、良いと行け、自分が大学出てないからっていうのも本人も言っていたけどっていうとこと、あとは、それでも親の期待には応えたいな、私立へ行って良い大学へ行って、頭で稼げる仕事に就けっていう、そこには応えたい気はある、子どもとして、役割を失いつつも、でもなるべく親の理想に近い形で生きていきたいなっていう気持ちもあったかもしれない、これぐらいかな、見返してやりたいっていうのもあったし

＜自己否定観が強かったことから承認欲求が強くあって、承認欲求を満たすための発言や行動をしていた＞

F : 学級委員とかも普通にやれていたんだけど、何か意見ある人～って言って、皆がシーンってなってから、的確なことをパーンって一言言って、「おお F」ってやればポイント上がるんだろみたいな、これで一目置いてくれるだろう、このタイミングで発言をした方が良いだろうとか、凄く思っていた、皆

がはいはいはいはいってやっているんじゃなくって、皆が発言終わって、もう誰もいないかっていう時に、はい、それは何何です

Q：それって、評価が普段、低いと自分で感じていて

F：ピンポイントで良いからいっぱい評価してほしいってのいうは凄くあった、凄く自己否定観が強かったので常に、承認欲求は凄くでも強かった、そういうのがまた調子に乗っているって想われていた、だれも手伝わないことを、先生、それ僕が運びましょうか、だれだれ君と一緒に、おおありがとうF、良く気が付くね、まぁね、普通だけどね、調子に乗っていたと思う

＜ネガティブなところで特別扱いされるんだったら、ポジティブなところでも特別扱いしてほしいと凄く思っていた＞

F：そうかもしれない、マイナスなネガティブなところで、特別扱いされるんだったら、ポジティブなところで特別扱いしてほしいって凄く思っていた

Q：ネガティブなところで、そういった扱いをされちゃうこと自体、何となく甘んじて受け入れていた

F：もうしかたねえかなって、でもそれよりも僕ここ活かせますんでっていう、それこそストレングスの理論みたいなところは自然にあったかもしれない、それこそ死んでしまえば良かったのにって言った幼馴染達の同窓会で最近会うと、やっと人間らしくなったねって、やっと年相応ねって、今の方が若いねって言われる、あの時はほんとうにどうかしちゃっていたよね、小学校の時に、1人だけ凄く遠くに居た、それは本当に幼馴染の女の子の言葉だけど、凄く遠くにいた、あんなに一緒に、ランドセルじゃんけんをやっていたのに、高学年にいくにつてれて、病気がしんどいなって想いはじめたぐらいから、凄く遠くにいる大人の人みたいな、って想われていた、友達ともほとんど遊んでなかったし、塾へ行くか、習字へ行くかみたいな、何でですかね

【周囲の期待に応えられなかった】

F氏は、「自分のせいで、自分の身体のせいで、家族がバラバラになるなっていう感覚が凄くあったので、多分、F家の三代目としての将来を渇望された感覚も崩れてくっていうか、もう期待されないんだな」と、【周囲の期待に応えられなかった】との認識を持っていた。

＜自分の身体のせいで家族がバラバラになるっていう感覚や、F家の三代目としての将来を渇望された感覚の崩れがあって、もう家族から期待されないんだなと思っていた＞

F：自分のせいで、自分の身体のせいで、家族がバラバラになるなっていう感覚が凄くあったので、多分、F家の三代目としての将来を渇望された感覚も崩れてくっていうか、もう期待されないんだなとか

【自分を理解してもらわなくても良い】

F氏は、「(小学校) その頃から思っていたのは、本当の理解をしてくれるのは数人でいいなって、他の人達は分からなくてもしかたがないな、分かってくれなくてもしかたがないな、

分かってもらおうとは想わない、変なら変って言っていればっていう感覚」や、「幼馴染にも親と一緒で、僕の本心を言ったらこの人達は困るだろうって凄く思っていた」ことから、【自分を理解してもらわなくても良い】と想っていた。

また、「誰とも交わらない、誰も周りにいなくても良いって凄く思っていた、大人になったら一人で生きていけるぐらいの強さがあれば良いって思っていた」と話す。

＜障害って感じではなく、生まれつきだからしょうがないじゃんっていう感覚だった＞

Q：その時は診断名は付いていましたか

F：先天性内反足、先天性で生まれつきだよって言われていたので、障害って感じではなかったかな、生まれつきなんだなっていう感覚、生まれつきだからしょうがないじゃんっていう、目見えないとか、髪の毛が茶色いとか、肌が白いとか、その系統だろうなっていうぐらいかな

＜理解をしてくれるのは数人でいい、分からない人がいてもしかたがないし分かってもらおうとは想わない、変なら変って言っていればいいという感覚だった＞

Q：その社会、小学校での社会を、どうゆう感じでした、何を思っていました

F：その頃から思っていたのは、本当の理解をしてくれるのは数人でいいなって、他の人達は分からなくてもしかたがないな、分かってくれなくてもしかたがないな、分かってもらおうとは想わない、変なら変って言っていればっていう感覚、何人かの幼馴染とかは、理解しないまでも近くに居てくれたし、僕に合わせたルールで一緒に遊んでくれたり、ソフトボールで僕が打って、反対のバッターボックスの奥に友達がいて、売ったらタッチする、そうしたら走ってくれるとか、そういうルールを決めてくれる友達とか幼馴染は凄くいたので、この人達だけがいればいいやとか、後、口は悪いですけど、この学校に居る人達は大概バカなんだなって思っていたし

Q：そんなに嫌とかそういうのでもなかったのですか

F：嫌だったけど、しかたかがないんだろうなって、どうせ分からないんでしょって、足変えてみる、とかよく思っていた、この足、変えてあげようかって、そしたらきっと分かるよみたいなことも言っていた

＜弱音を吐かない、弱みを見せない、金銭的に自立していて、周りに誰もいなくても良い大人になりたいと思っていた＞

Q：その頃からは、さっきちらっと早く大人になりたいって言ったけど、どんな大人になりたかったのですか

F：創造力は貧困だけど、弱音を吐かない、弱みを見せない、金銭的に自立していて、誰とも交わらない、誰も周りにいなくても良いって凄く思っていた、大人になったら１人で生きていけるぐらいの強さがあれば良いって思っていたかな

＜親と一緒で幼馴染にも、僕の本心を言ったらこの人達は困るだろうって凄く思っていて、社会的に閉じていた＞

F：本当に 12 歳で卒業をする時に、じゃあまた 4 月ねって言われて、ハイって、ぷんって僕、消えて、皆があれいないってなって、20 歳の時、成人式であったけど、僕がもうすぐ帰ったから、会話もなく、30 過ぎて、こないだ久しぶりに会って、久ぶり元気だったっていう後に、本当に本当に言わせてもらうんだったら、死ねって想った、裏切られたって想ったって何人かに言われて、僕、意外と想われていたんだって、ディスられているよねいまだにね、幼馴染にも親と一緒で、僕の本心を言ったらこの人達は困るだろうって凄く思っていたの、僕がしんどいとか言ったらたぶん、だからお見舞い来て手術直後で、縫った直後でも、油汗を流している状態で、無邪気に来たお見舞いに、F くん元気、みたいな、千羽鶴持ってきたよって、（しんどくて）ダァーなっているんだけど、いや本当にありがとう、本当にありがとう、いいからいいから帰って帰ってみたいな、であとから枕を載せて泣く、痛い、痛い、っていう感じ、閉じていたね、社会的に

【確定診断から 30 歳前後ぐらいまでは自分に自信がなかった】

F 氏は、「たぶん 15 から 18 歳ぐらいの時がいちばん自分が自分だっていう自信があったと思う、ずーっとそれ以降は自信がないですね、30 歳前後ぐらいまで、大丈夫か、ダメかもしれない、でもやれるかもっていう、常にグルグルしていた」と、【確定診断から 30 歳前後ぐらいまでは自分に自信がなかった】。

＜確定診断から 30 歳前後ぐらいまでは自分に自信がなかった＞

F：18 歳までの自分のことを、他人だってその時は思っていたと思う、18 歳までの自分と、19 歳からの自分みたいな感じだったと思う、最近までけっこう近かったと思う、高校の頃、迷ってなかった自分が凄く羨ましいとか、そういうふうに思っていた、18 歳の時、たぶん 15 から 18 歳ぐらいの時がいちばん自分が自分だっていう自信があったと思う、ずーっとそれ以降は自信がないですね、30 歳前後ぐらいまで、大丈夫か、ダメかもしれない、でもやれるかもっていう、常にグルグルしていた、だめかも、だめかも、でもできるかも、ダメが 7 で出来るが 3 ぐらいかな、たいがいしかたないっていう

【自分の身体のことを親に申し訳なく思った】

F 氏は、「僕の身体のことで親が喧嘩をするのはよく見ていた」、「健康的な子どもっていう、親が思っている、健康的な子ども、私達の子どもは健康的でこうゆう理想的な子どもだっていう役割を無くしちゃった感じはあったかもしれない、それは感じていた、すいませんねってちょっと思っていた、こんな感じでゴメンねっとは思っていたかな」と話し、【自分の身体のことを親に申し訳なく思った】。

＜僕の身体のことで親が喧嘩をするのをよく見ていたから、辛いとか足が痛いとかイジメにあっているとかは言わないでおこうと凄く思っていた＞

F：失ってしまった役割はありますか、に近いかもしれないんですけど、僕の身体のことで親が喧嘩をするのはよく見ていたので、病院連れてく、連れていかないとか、うちの父親は僕のことを可哀想可哀想、不憫だ不憫だって言っているし、うちの母親はそんなことは言わなかったし、うちのじいちゃんも何にも言わなかったし、うちのおばあちゃんは可哀想可哀思って言っていて、家族が真っ二つに割れていて、僕がそこでしんどいとか、何か辛いとか言わなかったら、この摩擦は起こらないから、言わないでおこう、学校でいじめられても、どれだけ足が痛くても、痛いとかシンドイとか言わないでおこうって凄く思っていたので、当時の日記とかを見ると、早く大人になろうとか、早く自立した生活をできるようになろうとか、大人なんか皆、消えてしまえば良いのにとか書いてある

＜親が思っている健康的な子どもとしての役割をなくしてしまった感じがあって、親に対してすいませんと思っていた＞

F：健康的な子どもっていう、親が思っている、健康的な子ども、私達の子どもは健康的でこうゆう理想的な子どもだっていう役割を無くしちゃった感じはあったかもしれない

Q：それは感じていたのですか

F：それは感じていた、すいませんねってちょっと思っていた、こんな感じでゴメンねっとは思っていたかな

Q：しかもゴメンねって思っていたんですね

F：ゴメンねとは思っていたかもしれない、また喧嘩になって、お母さんゴメンねって、お父さん死んじゃえば良いのにみたいな、極端に言うと、一生懸命動いてくれているお母さんに、何もしないお父さんがそんなことを言うなんておかしい、じゃあ黙ってようとか

【確定診断により大きなショックを受ける】

F 氏は、18 歳の時にシャルコマリートゥース病（以下、CMT）の確定診断を受け、「ショック受けて、否認して、怒り狂って、引きこもってみたいな、解決の努力をするけどもう一回戻ってっていう段階かな、言われて学校に行くのが直ぐに嫌になって、もう授業とか体のことなんか勉強できないな、理論なんか何言っているか分からない、特に整形とか神経内科の授業なんか出れないし、気持ちが悪くて、何を言っているか分からないし、人の声が入ってこない」、「鬱に近かった、なんだろう、大きなショック、ショック期」、「心的なストレスが大きすぎて、まあ閉じたんじゃないかな、防衛的に」と、【確定診断により大きなショックを受ける】。

＜18 年かけて私が完成してからの確定診断を受ける＞

F：やっと 18 年かけて F が完成形に近づいてきているところでの、確定診断

Q：まいりましたねそれは

F：アレってなった、こんなに血反吐を吐きながら、人を傷つけながら、傷つきながら来たのに、授業中に急に CMT だねって突然、生理学の先生に言われるっていう、え、あれあれって

＜確定診断を受けて、ショックを受け、否認して、怒り狂って、引きこもって、解決の努力をするけどまたショックに戻るなど、大きなストレスを受ける＞

F：簡単に言うと、上田先生のショック期から始まり、あそこの過程に本当にきれいにこう、ショック受けて、否認して、怒り狂って、引きこもってみたいな、解決の努力をするけどもう一回戻ってっていう段階かな、言われて学校に行くのが直ぐに嫌になって、もう授業とか体のことなんか勉強できないな、理論なんか何言っているか分からない、特に整形とか神経内科の授業なんか出れないし、気持ちが悪くて、何を言っているか分からないし、人の声が入ってこないってこういうことだなっていうか

Q：鬱みたいってことですか

F：鬱に近かった、なんだろう、大きなショック、ショック期

Q：PTSD じゃないけど、凄い

F：心的なストレスが大きすぎて、まあ閉じたんじゃないかな、防衛的に

Q：もう入ってこないですよね

F：入ってこなかった、もうご飯とかもぜんぜん食べられなくなって、食べなくていいやって、ごはんを作るの面倒くさいし、お風呂も嫌だし、人と喋るのも嫌だし、学校も行きたくないし

＜今までの人生が嘘だと言われた感じがした＞

Q：CMT っていう病気に驚いたとかじゃなくて、全部違ったっていう感じの方が強かった

F：そっちの方が、もう自己否定的な感じが、存在を全否定された感じかな、時々、当時のノートとかを見るけど、今までの人生が嘘だと言われた感じがする、とか凄く書いてある

【障害は疎ましい】

F 氏は、「障害あること自体は、障害っていうもの自体は、やっぱり疎ましいと思っています」と話し、【障害は疎ましい】と想っている。

＜障害は疎ましいものだと思っている＞

F：障害あること自体は、障害っていうもの自体は、やっぱり疎ましいと思っています、障害に付随する経験とか人の繋がりっていうのは凄く宝物だと思う、障害だったら身体でも社会的なものでもない方が良いです、疎ましい、凄く疎ましいです、邪魔まで行かないけど、疎ましい、でもただ障害から来る経験とか繋がりとか、感情っていうものは凄く財産だなって思う

【父親は子どもを否定することと期待することが一緒になっていた】

F 氏は、「(父親は)自分の子どもを否定するのと期待するのが一緒になっていた」と話し、父親から、肯定的な期待感と否定的な期待感を受けていた。

＜父親は子どもを否定するのと期待するのが一緒になっていた＞

F：自分の子どもを否定するのと期待するのが一緒になっていた、母親はそんなことなかったんですけどね、そういう身体で生まれてきちゃった貴方は私の息子だからみたいな、好きなことがやれるよう

に努力しようっている人だったけど、父親はその足が可哀想だからっていう前提の話ばっかり

【周囲や社会から障害者に仕立てられる】

F 氏は、「身体の違和感は障害だって思ってなかったけど、障害を持っている奴だって言われた時に、障害を持っているのかもしれないってこう想ったかな、人にこう名札貼られた感じ」、「(障害を) 意識していくようになったのは、手術も終わって、やっぱり皆と同級生と同じことができないなって想い始めたぐらい」、「(身体障害者手帳をとって) ここで社会から障害者って初めて言われる、手帳を取ったのが切っ掛けだったけど、社会が僕を障害者に仕立て上げてくるなって違和感もあって」と話し、【周囲や社会から障害者に仕立てられる】との認識を持っていた。

＜障害を持っている奴だと言われた時に、障害を持っているのかもしれないと思った＞

Q : その時は自分の身体の障害を感じたのか、友人から何かを感じたのかっていうと

F : 身体の違和感は障害だって思ってなかったけど、障害を持っている奴だって言われた時に、障害を持っているのかもしれないってこう想ったかな、人にこう名札貼られた感じ、F 君、障害持っている

＜同級生と同じことができないと思い始めたぐらいから障害を意識するようになった＞

Q : そこから（障害が）進んでいく中で、もっと強烈に障害だって意識してくようになるのは

F : 意識していくようになったのは、手術も終わって、やっぱり皆と同級生と同じことができないなって想い始めたぐらい、例えば体育が出来ないとか

＜歩き方が変、皆と同じことができない、調子に乗っているとイジメにあう＞

Q : イジメを

F : 陰湿な感じ、それももう全体ではないけど、まあ何割か、半分以下の人だと思うけど、変だよね

Q : 変だよねって言われる、見られ方をするっていうイジメっていうか

F : 足変形して歩き方、変だし、皆と同じことできないし、あと先生達は気を使ってくれているんだろうけど、特別扱いされて目立っているのも多分きにくわなかったと思う、あと勉強が出来た、体育できないのに勉強ができた、生意気だ

Q : 口は立つみたいな

F : よく言われたのは調子に乗っているっていう言われ方をした、調子に乗っちゃいかんのかって言い返してボコられるみたいな、感じかな

＜身体障害者手帳を取得したことを通じて、社会が僕を障害者に仕立て上げてくるという違和感を感じた＞

F : あともう一個、ちょっと戻っちゃうんだけど、その専門学校決まった、で、車椅子バスケをやるやらないのところで、バイクの免許を取りに行った話ってしましたっけ、バイク、ずーっとバイク好きで、

バイクの免許を取りに行こうと想ったら、足が悪いと乗れないから、一回、身体障害者手帳を取って、平針に相談に行ってきてって言われて、取って平針の相談に行ったら取れないよって言われて、いやいや手帳とってきたら免許貰えるって聞いたんだけどって言ったら、いやそんなことない、足が悪い子はバイクの免許取れないからってなって、おかしいおかしいって、そこで、強く社会的な障壁を感じるっていう、今までは自分と周りの関係だったのが、ここで社会から障害者って初めて言われる、手帳を取ったのが切っ掛けだったけど、社会が僕を障害者に仕立て上げてくるなって違和感もあって

＜大人になるにつれて障害者と言われることが増えて、自分もそうだなと想ってしまい、障害者と言う単語に飲み込まれた感じが凄くあった＞

F : 障害が個性ですっていう人は、ちょっと僕は分からない、障害は個性じゃないよね、そこが全面じゃないよね、障害はやっぱり一部だと思う、with のところだと思うんで、それに僕が障害だとは想わなかったら、18 歳の時なんか自分、無敵だと思っていたから、障害者だって思ってなかったし、ただ、大人になるにつれて障害者って言われることが増えて、自分でもそうだなって想っちゃって、障害者って言う単語に飲み込まれた感じが凄くあったんで、障害は疎ましいなって、ないならない方が良いと思っていますね

［役割創造期］

＜出来事＞

・中学生の頃から、リハビリや看護を受けてきた経験から、医療関係職か臨床心理士になりたいと F 氏は考え、高校卒業後の進路として作業療法士の養成校を選ぶ。
・作業療法士の養成校 2 年生の前期の授業中に、生理学の先生から「CMT だね」と突然に言われ、「存在を全否定された、今までの人生が全て嘘だと言われた、鬱に近かった」、と大きなショックを受けた。このような状態の中で F 氏は病院実習へ行くが、自分の病気に対する想いと患者の想いを重ねてしまい悩んだことから、休学をすることになる。そして休学中の、旅行・パラリンピック観戦・バイトの経験を経て復学する。
・F 氏は CMT の確定診断直後、同じ CMT 患者に会いたい想いと、自分が持っている専門的な知識を活かしたい想いから、インターネットの掲示板を立ち上げ、同じ CMT 患者との交流を始める。

＜カテゴリー内容の説明＞

【患者の経験値や困っていることを通訳して医療界に伝えたい】

F 氏は、当事者のことはセラピストに分からないから、繋ぎ役や通訳とかになって真ん中から見ようと、【患者の経験値や困っていることを通訳して医療界に伝えたい】と想った。

＜当事者のことはセラピストに分からないから、繋ぎ役や通訳とかになって真ん中から見ようと思った＞

F : 当事者セラピストに近い言葉は、その多分、高校生の頃から使っていて、当事者セラピストってはじ

めて言ったのは、○○と最初に組んだ時で、その時も、○○とよく言っていたのは、やっぱりセラピスト、当事者のこと分からないんじゃないっていう、あの子のあの世間を斜めに捻じれて見ている感覚からで、確かにそうだねって言って、じゃあ僕ら真ん中から見ようねって、その頃から繋ぎ役とか通訳とか二人で言っているんで、そこかな、でも、その後、僕けっこうこうチグハグになっていて、当事者セラピストって言ったから、患者会で当事者セラピストって言えるかっていったら、きょとんとされるし、研究班で当事者セラピストって言うと、何かうーんって感じになるし、研究班の先生は当事者セラピストは凄くストレングスだって言ってくれていて、当時から、会議とかだと、当事者の視点、CMT 患者として F さんどう思うって言われた後に、OT としてどう思う、って 2 段階で聞かれたりとか

【健常者の医療関係者に対して違和感を持つ患者を減らしたい】

F 氏はリハビリ等の医療を受けてきた自身の体験から、「健常者の人がリハビリをやってくれるよりも、何かそういう体験があった人が、怪我でも何でもいんだけど、やってくれた方が、より患者からも寄れるっていう感覚もあった」、「違和感を持つ人を減らしたいっていうか、他のセラピストが出来ないことって、絶対に僕できるとか、ちょっと違うな、僕にしかできないセラピー感があるっていう感覚かもしれない」と話し、【健常者の医療関係者に対して違和感を持つ患者を減らしたい】との想い持ったことから、作業療法士の養成校へ進学を決める。

＜9 割 9 分ぐらい分からない人が多い中で僕だけでも分かりたい、患者の経験がある人がリハビリをする方が患者からも寄りやすいという感覚があった＞

F : 分かってくんなかった友達たちに対する想いも、今振り返ったらあるかもしれない、分かってくれない人が世の中にはいっぱい、9 割 9 分ぐらい分からない人が多い中で、僕だけでも、1%でも分かりたい、これべつに○○くんとかに言っているわけじゃないけど、何かリハビリやっていて、健常者の人がリハビリをやってくれるよりも、何かそういう体験があった人が、怪我でも何でもいんだけど、やってくれた方が、より患者からも寄れるっていう感覚もあったので

＜健常者の医療関係者に対して違和感を持つ患者を減らしたい、僕にしかできないセラピー感がある＞

F : そういう違和感を持つ人を減らしたいっていうか、他のセラピストが出来ないことって、絶対に僕くできるとか、ちょっと違うな、僕にしかできないセラピー感があるっていう感覚かもしれない、専門学校に入った時は同級生のこと若干見下している感じはあった、皆、ど素人でしょ、ちょっとぐらい怪我したかもしれないけど、僕、色んな経験を持っているからって言って、ちょっと鼻高々だったと思う

＜患者さんが進めなくなっている時とか、セラピストとの関係性が膠着している時とかに、自身の障害経験を伝えることで患者さんの近くに寄りやすくなる＞

F：20 歳過ぎからでいうなら、やっぱり障害経験があることは患者さんの近くにはまず寄りやすいかっていうのがあったので、精神科での勤務でしたけど、時々体のことを患者さんに告白することはありました、鬱でも統合失調症でも遅滞の人でも何でもですけど、何かふとした時に、患者さんがちょっと進めなくなっているとか、セラピストとの関係性とかが膠着しちゃっている時とかに、実はさあって言って、足を見せたりとか、手見せたりとかして、実は僕もこういうふう何だけどっていう体験を少し重ねてもらってっていうか、共感しやすい形で出して、で僕は何とか社会に出て行きたいと思って今ここに居るんだけどねっとか、そういう何だろうな、関係作りの中で、共感っていうものを使う時はあったか、それは臨床家としてですね

＜障害による経験をした人でないと患者さんに近寄れない部分があると思う＞

Q：それやりながら自分では自分に対してどんな感覚だった、その役割に対して F さん自身が期待することって何ですか

F：やっぱ他のセラピストが経験をしたことがないから、こういう経験をした人じゃないと近寄れない部分ってあるよなって思っていたかな、小学校とか中学校で感じた近くにっていうのとはちょっと違うけどでも、あながち間違ってないなっていつも思って接していたかな

＜小さい頃から医療関係者に囲まれていたことや人間の心理が気になっていたことから、医学関係者か臨床心理になりたいと思った＞

Q：中高はそういうかんじで、そこで OT を目指すっていうストーリーを聞いても良いですか

F：まず中高であったのが、小学校の 4 年生ぐらいからずっと理学療法士にかかっていて自費で、○○先生っていう、自費リハです、1 時間半ぐらいで 5 千円、その先生が 3 ヶ月に 1 回ぐらいかな、自宅でリハをやってくれていて、それが 18 歳まで続いたんですけど、高校生の時は半年に 1 回ぐらいだったけど、メンテナンスをしてくれる先生が居て、僕が医療職に興味を持つ切っ掛けは、医者が居て看護師が居て、歩き難い身体を痛いことするけど綺麗な足にしてくれる先生、凄く尊敬していて、痛みがある身体を痛くなくしてくれる看護師はほんとに神のような存在で、当時は理学療法士が歩行訓練をやってくれていたけど、病院の理学療法士は凄い人で、その○○先生はゴッド、もっと上、大ゴッドみたいな感じだったかな、そういう人達に囲まれていたから、凄く自然に、ちっちゃい頃から身体が弱かったから、お医者さんていうのは凄い畏敬の念を持っていたってのもあるけど、医学的なところには凄い興味があって、それともう一つは心理学っていうか、人間の心理が凄く気になっていて中学校ぐらいから、なるんだったら医療関係者か臨床心理士みたいなとこに行きたいなっていうのを思って、おっきな切っ掛けとしては、小学校の時に阪神大震災があって、高校生になった時に、あしなが育英会っていう、あしなが学生募金っていう、震災の遺児とか、交通事故とか癌の遺児の子達の奨学金を出している団体に所属をして、結構、拠点のリーダーとかをやっていて、僕は○○の高校生

拠点リーダーだったんだけど

＜誰かを治すとかじゃなくて、治す過程とか、喜怒哀楽を共感できることをしたいと思い、作業療法士を目指す＞

F：で、そういう気持ちがあって、心理学やりたいなと、この体験がある前後で、他にも色々あったんだけど、○○先生のとこに行って、臨床心理士か、リハビリテーションの仕事に就きたい、切ったり縫ったりは僕は嫌だ、患者さんが痛いから、看護師って感じでもない、僕、理学療法士になりたいって言ったら、いやいや無理無理、優し過ぎるから、厳しいことをちゃんと伝えなければいけない仕事だから、我々は、出来る出来ない、出来ないこととか、後は痛いこともしないといけないし、その人の将来を考えて、これをやらないといけないって言わなければいけない、お前には無理、へなちょこだからって言われて、でもそれだけ心理学に興味があってリビリに興味があるんだったら、何がやりたい、僕は共感が出来る人になりたい、誰かを治すとかじゃなくて、治す過程とか、喜怒哀楽を共感したいって言ったら、じゃあまあ作業療法だな、リハビリテーションっていう、その治るか治らないものに関わるっていうのは良い選択で、さらに人の心だとか共感がしたいって凄く強く思うんだったら、理学療法士じゃない、作業療法士だと、じゃあどうするってなって、やあ僕はもうちっちゃい頃からの体験で、共感がたくさんできる作業療法士になりたいですっていうのが決定打かな

＜健常者の PT や OT よりも近い距離で患者を支えられるような、患者が倒れたら自分も一緒に倒れてそこから患者と一緒に立ち上がるようなことをしたいと思った＞

Q：良かったね、治ったねっていう気持ち、オレも分かるぜみたいなことを含めて

F：含めて、そういう体験、僕もあったあった、口に出すかどうかは分からないけど、とにかく直す側、支える側にまわりたかった、いわゆる健常者で順調に、OT とか PT とかになる人達よりも、もっと下手したらもう重なっちゃうくらいペタペタの距離で、ゼロ距離ぐらいで支えられるような、倒れた人に理学療法士が、じゃあ立ちましょうかって言って肩を貸すんじゃなくて、一緒に一回、倒れちゃう、一緒に倒れちゃって、よっしゃ一緒に立ち上がりましょうか、どこから立ち上がります、みたいなことを一緒にやりたい

＜心理学が好きなことと、自分の身体と向き合わなくて良い職種だと思ったことから、精神科 OT に就職をする＞

F：そういえば心理学好きだったな、人の心って面白いなって、そういえば自分の身体に向き合わないで良い、四六時中向き合わないで良い仕事って精神科かも、身障行ったら絶対向き合うんで、それで思って、僕、精神科に勤めてみようと想いますって言って、就職が内定してからはけっこうするするっと元気になっていったかな

【ピアサポートを通じて生活や社会におけるサポートをしたい】

F 氏は、「患者会を作って、作業療法士としても、当事者としても役に立ちたい」、「情報もない時代だったので、専門学校にあった資料をまとめてホームページに載せるとか、イギリスの文献を引っ張ってきて日本語訳してホームページに載せるとかは自分の役割だと思っていたんで、下手したら相談も受けられるんじゃないか、受けられるわけがないのに、バカかって、今だったら当時の自分に言ってやるけど」との想いから、インターネットの掲示板を立ち上げ、同じ CMT 患者との交流を始める。

＜1 人旅を通じて人と関わり、おじさんの死に触れ、旅の最後に奥さんのところに行くという経験をしたことで、1 人で生きていてはいけない、引きこもりから抜けよう、新しい価値を入れないといけないと思った＞

F：やっぱり俺一人じゃ駄目だってなった、これ障害関係ないかもしんないけど、一人で生きていちゃいけないんだなっていうエピソードが凄いここにたぶん入っていて、一人旅で、他人に触れて、おじさんの死に触れて、親戚の輪の中に行って、で奥さんとこ戻るみたいな、もう絶対、人と交わらなきゃダメだって思って、引きこもりから抜けようと想ったかな、で凄く重い話になっちゃたけど、けっこうこれが体験だったかもしれない、何か新しい価値観を入れなけゃいけないってその旅で、トータルで 3 週間ぐらいの旅だったけど、誰かからいっぱい価値観を貰わなきゃいけないって凄く想った、今までの 18 年間の価値観が全部、崩されたから、もう新しく作らなきゃって、それこそ上田先生の新しい価値の転換とかそのへんなのかなって凄く想いながら

＜確定診断を受けたことで孤独を感じ、CMT 患者に会いたいと思ったこと、作業療法士としても他の CMT 患者の役に立ちたいと思ったことからネット上での掲示板を立ち上げる＞

Q：何で始めたのですか

F：その時は、孤独だったっていうか、CMT の人がいなかかったし、インターネット上にも CMT の掲示板が一個もなかった、当時、BBS がめちゃめちゃあったのに、CMT の BBS だけでなかった、じゃあ作ろうって思って作ったら、すごい人が来た、そこでちょっと自分、作業療法学生なんですよって、これもしかしたら皆の役に立てるかもしれないですって書いたら、倍増になって、大変になった、死ねみたいに感じになった、そこで、第一の当事者セラピストの挫折経験が来る

Q：当事者セラピストとして、セラピストの卵として、当事者団体をやるっていうのがちょっと変わっているんですよね

F：そこがたぶん、当時の自分は、二つの気負いがあって、誰かに会いたいっていうネガティブなところから発信したものと、患者が集まれば、自分が持っている専門知識が活かせれるっていうところもあったんで、OT になりたいっていうのが最初の切っ掛けだったら、その、患者会を作って、作業療法士としても、当事者としても役に立ちたいっていうのが、第 2 の当事者セラピスト活動かもしれない、OT になるっていうのが多分、第一で

Q：2 つが、OT の知識を患者会に役立てたい

F : そうそうそう、とにかく、情報もない時代だったので、専門学校にあった資料をまとめてホームページに載せるとか、イギリスの文献を引っ張ってきて日本語訳してホームページに載せるとかは自分の役割だと思っていたんで、下手したら相談も受けられるんじゃないか、受けられるわけがないのに、バカかって、今だったら当時の自分に言ってやるけど

【周囲の期待に応えられなかった】

F 氏は、自らが立ち上げた CMT の掲示板に寄せられてくる質問に答えられず、社会的な役割を与えられているのに期待に応えられなかったとの認識を持った。

＜掲示板に寄せられてくる質問に答えられず、社会的な役割を与えられているのに期待に応えられなかった＞

F : 患者会絡みだと、最初そういうふうで、人が集まり始めたら、まあ抱えきれなくなって、死ねとかなってきて、作業療法士のクセにみたいなのはよく言われていて、じゃあもう、作業療法を伏せてやりたいなって思う時期もあったり、一患者の F ですってやっていたけど、前より減ったけど、やっぱりバッシングはあって、期待、社会的な期待に対して応えられないって感じかな、役割を与えられているけど、抱えきれない

Q : 期待っていうのは、情報をくれっていうか

F : 情報をくれ、質問したことに答えて欲しい、リハビリは何がありますか、どこの先生に行けばいいですか、オペはやったことがありますか、薬はありますか、3 歳の息子が発症したんですけどどうしたら良いですか、みたいな、そんなの知らないし、でも答えなきゃ、答えないと死ねって言われるっていう状態が凄く続いていて、で 24 とか 25 の時、結婚した後ぐらいに、掲示板の中心メンバーが集まって、じゃあもう F の個人的な負担をとって、組織化しようっていう動きが出てきてかな、で 2008 年に患者会としてやっと組織する、8 年間くらいはずっと一人でやっていた、7 年間ぐらいか

【確定診断から 30 歳前後ぐらいまでは自分に自信がなかった】

・(前述した)。

【(確定診断前) 役割を担うことや存在を認めてもらう経験を経たことで障害者だと意識することはなくなった】

F 氏は中高一貫校での経験について、77 人が毎年少しずつ入れ替わる形で 6 年間を過ごしたことで、F 氏に対する理解者が多く出来たこともあり、「F 君にはあれは難しいぞ、F 君はこれは得意だから任せよう」という関係性がクラスメイトとの間に出来た。これらの経験から、「どんなポジションでも役割は担えるんだなって凄く想ったので、そこは凄く良い経験だったかな」と思えたと話す。また、「結構リーダーシップ発揮できていたので、リーダーシップ発揮できているし、体育やれないけど、まぁ勉強そこそこだし、いいんじゃないですかっていう存在、何か尖っていた存在が、普通になったっていうか、皆がもっと尖ってい

るから、そんなに尖ってない、だから周りからこう何か、社会的に障害者呼ばわりされることは減った」と話し、【役割を担うことや存在を認めてもらう経験を経たことで障害者だと意識することはなくなった】との認識を持った。

＜周りの人は気にしないことから社会的に障害者呼ばわりされることは減った、しかし身体的に自分が障害を持っていることこがきつくなってきた＞

Q：中学の時は障害っていうものに対して何を思っていた

F：周りの人は気にしないんだな、この人達は気にしないんだなって、だけどまた変形が強くなったりとか、やっぱりちょっとついていけないところがあったんだけど、私立で進学校だったから、そんな体育も一生懸命やんないし、何かこう、20kmウォーキングとか、早朝マラソンとかあったけど、そんな時も別にFルール、オレFルール作るけど皆いいか、別にイイっすよみたいな感じだったし、学校にも変な特別扱いされなかったし、結構リーダーシップ発揮できていたので、リーダーシップ発揮できているし、体育やれないけど、まぁ勉強そこそこだし、いいんじゃないですかっていう存在、何か尖っていた存在が、普通になったっていうか、皆がもっと尖っているから、そんなに尖ってない、だから周りからこう何か、社会的に障害者呼ばわりされることは減った、でも自分の身体がシンドイので、ちょっと身体的に自分が障害を持っているってとこが、きつくなってきている

＜様々な形で役割を担える良い経験ができた＞

F：中高一貫だったから、6年間クラス持ち上がり何だけど、2クラスで、77人がミックスして、（毎年）ちょこちょこっと変わる、そうすると何となく理解してくれる人が多いっていうか、Fあれやれないぞみたいな、これは得意だから、Fに任せようぜって言って役割をもらったり、文化祭近づいてきたからじゃあFお願い、あぁやりますとか、卓球経験者、Fしかいないんだけど、キャプテンやりますとか、動けないけど口だけ出しますとか、どんなポジションでも役割は担えるんだなって凄く想ったので、そこは凄く良い経験だったかな

＜中高6年間は任せられることがあり、自分が障害者だということはほとんど意識しなかった＞

Q：2クラスの中の社会では、しっかりと成立していたっていうか

F：Fっていう存在はちゃんとあったかな、それが、それ以外のところでも広がっていたので、そういう想いが、他の学校の子達に部活繋がりでも、Fさんに任せようとか、ボランティアの団体とかでもFにやらせようとか、全然、身体気にしなくて、何か中高6年間は自分が障害者だっていうのはほとんど意識していなかったと思う、身体のこと以外は

＜あしなが育英会のミーティングの中で、人と比べるから不幸を感じるのではないかと気づくことがあり、小学校からの体験がバンって腑に落ちて、すごく楽になった＞

Q：不幸と不運の違いは

F：運が悪かったなってずっと思っていたんだけど、その子達はちょっと不幸かもしれない、親を亡くし

ちゃったっていう、そこがちょっと分からなくなって、けっこうモヤモヤしている状態で、何か交流イベントが遺児の子達とかと、ボランティア達の交流イベントとかが、遠足とか合宿とかあって、その中で○○くんっていうお父さんを癌で亡くした子に凄く絡まれることが何年も続いて、何でそんなに絡んでくるんだって話になったら、両親が健在なのにこういうグループにボランティアに来てヘラヘラしているお前がムカつくと、こっちもカチンとなって、おまえは五体満足で、やりたいことを本当はやれるクセに、俺らがお金を集めて活動をしているのに、ロクなこと言わないって話になって、両方ともブチンってなって、喧嘩になるんだけど、何回も喧嘩しているんだけど、仲良しになるんだけど、週刊少年ジャンプのような展開ですけど、そういう○○くんとのやりとりの中で、その幸不幸っていうか、幸せ不幸の基準が分からなくなって、結局、自分なんじゃないの、みたいなことをミーティングの中とかで、僕は親がいませんとか、僕は足が悪いですとか、私は別に何にもないですみたいな子達とミーティングをやる中で、人と比べているから不幸なんじゃないの、みたいな話になって、わぁ、本当だって、凄く、小学校からの体験がそこでバンって腑に落ちて、人と比べているからだ、ですごいそれが楽になって

＜18 年かけて私は私になった＞

Q：そこまでは中高でなんとなく整って、自分がこんな風に生きていきたいみたいなのが決まって

F：18 年かけて私は私ってなった

＜初めて僕の存在を全て肯定する言葉を掛けられて、今までの承認欲求が全て満たされた＞

F：もし発症してなかったら、どんな素晴らしい人になっていたかもしれないし、今、ここにいないかもしれないし、みたいなことを言われて、今までの人生が全て障害とか色々あったから、今ここに居てくれているんだよねみたいな、言葉に初めて出してくれた人、僕の存在を全て肯定する言葉を掛けてくれたのがあの人だったんです、それって本当になくて、F 先輩の運命は重くありませんって言う女の子はいたりとしたけど

Q：微妙に違いますもんね

F：多分、重いな、と、そういう状態で生まれてきて、今ここに居てくれてありがとうみたいな言い方をされたのが本当に初めてだったので、その時にちゃんとスイッチが入ったっていうか、F 完成しましたポン、っていう感覚は凄くあったんですよ、今までのダメなとこもイイとこも全部認めて、F っていう人がここに居てくれてありがとうみたいなことを言われたんで、付き合ってもいないくせに、凄く存在肯定をされて、今までの承認欲求を全部そこで満たされちゃうような、この人はじめて受け入れてくれたかもしれない、で勘違いして付き合いましょうって言うんだけど、そんな気サラサラなかった

【自分の意識が変わることで障害が障害ではなくなる】

F 氏は CMT の確定診断によるるショックを受けたが、一人旅の経験、色んな人と話した経験、バイトをした経験等から、「(18 年間を) 否定はされたけど、でも自分が否定しちゃダメだな」、「今までの 18 年間もあった上で、今から歩いてくのだな」と想うことができ、「障害ってやっぱ自分の意識でも変わるし、環境でも変わるし、周りと自分とその原因の関係性が、それこそ ICF の中でグルグル回っていれば、障害が障害じゃなくなることってけっこうある」と、【自分の意識が変わることで障害が障害ではなくなる】経験をした。

<u>＜一人旅を通じて人と関わり、おじさんの死に触れ、旅の最後に奥さんのところに行くという経験をしたことで、一人で生きていてはいけない、引きこもりから抜けよう、新しい価値を入れないといけないと思った＞</u>

F : やっぱり俺一人じゃ駄目だってなった、これ障害関係ないかもしんないけど、一人で生きていちゃいけないんだなっていうエピソードが凄いここにたぶん入っていて、1 人旅で、他人に触れて、おじさんの死に触れて、親戚の輪の中に行って、で奥さんとこ戻るみたいな、もう絶対、人と交わらなきゃダメだって思って、引きこもりから抜けようと想ったかな、で凄く重い話になっちゃたけど、けっこうこれが体験だったかもしれない、何か新しい価値観を入れなけゃいけないってその旅で、トータルで 3 週間ぐらいの旅だったけど、誰かからいっぱい価値観を貰わなきゃいけないって凄く想った、今までの 18 年間の価値観が全部、崩されたから、もう新しく作らなきゃって、それこそ上田先生の新しい価値の転換とかそのへんなのかなって凄く想いながら

<u>＜今まで一人で生きてきたふうだったけど、色んな人に支えられていることを知り、嘘だと言われた 18 年間をうまく諦めることができ、今までの 18 年間もあった上で、これからは歩いてくのだなと思えた＞</u>

F : 大叔父さんなんだけど、それが何か死ぬ前に俺に会いたかったってずっと言っていたらしくってというのもあって、血の繋がりとかもあって、一人で生きてないな、この人達いなかったら、死んでたしとかっていうのも思って、でこう帰ってきて、この人と、うちの奥さんとこれから、また新しい繋がりを作っていくんだなっていう覚悟もそこで決まったし、で今間まで一人で生きてくきたふうだったけど、こんなに色んな人に支えられていてっていう、振り返りで 18 年間をうまく諦められたっていうか、諦めたっていうと変だけど

Q : まぁ、違う解釈になったっていうか

F : 今までの 18 年間もあった上で、今から歩いてくのだなっていう感じなのかな

<u>＜18 年間を否定されたけど、自分が 18 年間を否定してはいけないと思い、新たに受容過程に入った感じ＞</u>

Q : 捨てる必要はないって想った感じなんですかね

F : そうそう、否定はされたけど、でも自分が否定しちゃダメだなって、CMT って言われた時に、全部、

何か捨てなきゃって想ったし、嘘だって言われた感じがしたけど、でも、その上で新しく作っていけばいいんだなっていう感じが凄くあったので、価値の転換、上塗り、何かな～、もう一回だから受容過程に入ったって感じなのかもしれないし、そこうまく言えないんですけど、そんな感じなんです

＜価値観をもっと積み重ねなければいけないと思って、色んな人と飲みに行ったりしたバイトによる労働経験を通じて、生きるためにはちゃんと稼げないといけないと思い、OT として働く覚悟ができたことで復学を決意する＞

F：何故か、もっと人の価値観を入れ、その時は価値観をもっと積み重ねなきゃってすごく思っていて、色んな人と飲みに行ったりとか、それこそ○○校長と 2 人でよくさし飲みをしに、OT の話なんか一言もしたことないんだけど、生きるっていうのはねとか、私がコロンビア大学に行った時はねとか、そういう話ばっかりなんだけど、凄く楽しくて、色んな価値観がある、色んな人生が、で、バイトを始めるんですよ

＜疾病に関しては治療に頼らないといけない、障害に関しては自分の意識や環境で変わるし、障害が障害じゃなくなることはけっこうある＞

F：疾病体験は大概ね、要らないです、シンドイし、ネガティブな発想ばっかりになるんで、他人任せなところがあるじゃないですか、疾病に関しては、自己免疫力と、治療に頼らなければならない、障害ってやっぱ自分の意識でも変わるし、環境でも変わるし、周りと自分とその原因の関係性が、それこそ ICF の中でグルグル回っていれば、障害が障害じゃなくなることってけっこうあるので

【障害は疎ましい】

F 氏は、「障害あること自体は、障害っていうもの自体は、やっぱり疎ましいと思っています」と話し、【障害は疎ましい】と想っている。

【患者に寄り添える感覚を医療従事者に持ってもらいたい】

F 氏は、「当事者として、当事者の F、CMT 患者の F が、あなたたちが僕に関わってくれた時に、僕は助かるし、僕以外の人達もきっと助かると思うから、僕らのような人達に、ありきたりな言い方だけど、寄り添えるような、感覚を持って欲しい」との想いがあり、講演活動を行っている。

＜リハビリの現場で分かる～って言われると、凄くカチンってなることが多かった、当事者ではないのだから、絶対に分かるはずがないと思う＞

F：小学校の同級生とか、小学校に限らないけど、世の中で良く言う、女子高生とかが言う、分かる～って言うのをリハの現場で使われると、凄くカチンってなることが多くて、過去ずーっと、今もそうだし、同じ職場の同僚とかが、患者さんに分かるって言ったら、絶対に分かるって言ったら、絶対に分かるはずがない、だって当事者じゃないんだもん、近い想いはしたことはあります～でしょみたいな、

ちょっとのニュアンスの違いだけど、そういうのに似た体験を私もしたことがあります、でしょ、で、色んな社会っていうか、周りに対する違和感があったからこそ、なりたいなって想ったかもしれない、でいうなら、やっぱり障害経験があることは患者さんの近くにはまず寄りやすいかっていうのがあったので、え～っと、まあ精神科での勤務でしたけど、時々体のことを患者さんに告白することはありました、鬱でも統合失調症でも遅滞の人でも何でもですけど、何かふとした時に、患者さんがちょっと進めなくなっているとか、セラピストとの関係性とかが膠着しちぇっている時とかに、実はさあって言って、足を見せたりとか、手見せたりとかして、実は僕もこういうふう何だけどっていう体験を少し重ねてもらってっていうか、共感しやすい形で出して、で僕は何とか社会に出て行きたいと思って今ここに居るんだけどねっとか、そういう何だろうな、関係作りの中で、共感っていうものを使う時はあったか、それは臨床家としてですね

＜医療従事者には患者に寄り添えるような感覚を持って欲しい＞

F：当事者として、当事者の F、CMT 患者の F が、あなたたちが僕に関わってくれた時に、僕は助かるし、僕以外の人達もきっと助かると思うから、僕らのような人達に、ありきたりな言い方だけど、寄り添えるような、感覚を持って欲しい

Q：自分が最初に想った時のように

F：そうそうそう、僕はこうしてもらうと楽です、他の人達はこうかもしれませんって皆さんの現場だとどうですか、それぞれで考えてみてもらえたら良いかなと想います

Q：実は自分がやりたかったことなんですかね、中学の時、共感したいっていう想いのちょっと違うバージョン

F：確かにでもそうかも

【周囲や社会から障害者に仕立てられる】

・(前述した)。

【自分の気持ちを家族に伝えたことで家族の気持ちと向き合うことが出来た】

F 氏は CMT の確定診断後の休学をする時に、「はじめて実は今までシンドかった」と、18 年間で初めて親に告白した。そして父親から、「自分の子どもを追い込んでしまったことが悪かったから、ちょっと仮面を外して楽になってくれて、助かったっていうか、良かった、辛いことを辛いって言ってくれて親として凄く安心した、だからこれからは楽に生きて欲しい」と言われる。F 氏はこの時、「はじめて父親の優しさ、始めてじゃないけど父親のやさしい所をちゃんと、僕も向き合えたかな」と、【自分の気持ちを家族に伝えたことで家族の気持ちと向き合うことが出来た】。

＜休学する時に初めて実は今までシンドかったこと両親に伝えると、父親は辛いことを辛いと言ってくれて親として安心した、これからは楽に生きて欲しいと言い、初めて過度な期待をしなかった、初め

て特別扱いをしなかった＞

F：両親は楽になって欲しいって言っていた

Q：それは何だろう、前はそんなこと言ってなかった

F：面と向かっては言ってなかった、僕も辛いって言わなかったんで、休学する時にはじめて実は今までシンドかった、18 年間で初めて親に告白して、で凄くシンドくって、今こう確定診断、18 年かけて作ってきた自分が今、気迫になってしまったから、学校を休みたいっていうことを言うために、全部、告白をした、で親に泣かれるみたいな

Q：楽になって欲しいってどういう感覚なんだろう

F：何かその、父親的には無理をさせてしまったとか、何かあのいつも無理をしていることはズーット見ていた、ちっちゃい頃から仮面をかぶっていた感じがしていたっていう事は言われたので、そういうふうに自分の子どもを追い込んでしまったことが悪かったから、ちょっと仮面を外して楽になってくれて、助かったっていうか、良かった、辛いことを辛いって言ってくれて親として凄く安心した、だからこれからは楽に生きて欲しいって言われたかな、何か初めて父親が過度な期待をしなかったとか、僕の特別扱いを始めてしなかった日だと思う

＜父親の優しさに向き合うことができ、バラバラになりやすかった家族がちょっと仲良くなった＞

F：もっと早く、自分もそう、自分にもね、自分にももっと、その時はじめて父親が、何かラジオで聞いたこの曲を聞いて欲しいって言って、もってきた CD があった、凄くびっくりした、小林タケキっていう人の、祈りっていう曲が、本当にこう悩まないで欲しい、全部答えは自分の中にあるから、もう外に頑張って向けなくても良いみたいな、歌詞の曲を突然ボンってシングルで持ってきて、これに俺の気持ちが全部詰まっている、何この人、で聞いて、ボロボロ泣きながら帰ってくのだけど僕も、はじめて父親の優しさ、始めてじゃないけど父親のやさしい所をちゃんと、僕も向き合えたかな、で、その時に、今までいっぱいお金を稼いでくれてありがとうとかもちゃんと言って、F 家けっこうバラバラになりがちだったんですけど僕のせいで、その時からちょっと仲良くなったかな、ようやく 20 年かけて、ちなみに姉もいます、4 人で喋りました

＜姉は弟のために一生懸命な人だった＞

Q：それも障害を持っている弟だからこそ、まあ私が我慢するみたいな

F：障害のところを見ていたかは分からないけど、とにかく弟のために一生懸命な人で、僕が一人暮らし専門学校の時にしたいって言った時も、お母さんあの子絶対に一人りじゃダメだわって言って、私一緒に大学行っているから、通学しているけど 1 時間半かけて、私も一緒に住むわって言ったのはたぶんあの人だし、あの子ごはん食べないと思うから、三食わたし作るわって、ちょっと頑張りすぎちゃう人なんだけど、言ったのもたぶん姉だった

［役割獲得期］

＜出来事＞

・CMT の患者会を立ち上げる。

・精神科に勤務をしている時期から、講演活動を始める。

＜カテゴリー内容の説明＞

【患者の経験値や困っていることを通訳して医療界に伝えたい】

F 氏は患者会で自分がやりたいこととして、「医学モデルでしか考えていないドクター達に僕らは社会モデルのところで困っているんですよっていのを発信する役割は僕だと思っている、生活をもっと見てみもらいたい」と考えている。

また、講演活動については、聴講者が臨床で活かせられるように、経験をただ伝えるのではなく、経験を専門的に分析して伝えたいと考えている。

＜患者の経験知を医療界に繋ぐこと、医学モデルでしか考えていないドクター達に僕らは社会モデルのところで困っているんですよということを発信するのが自分の役割＞

Q：今現在、F さんが F さん自身に、患者会を通じて期待することありますか

F：CMT の治療に関するとこの、ドクターとの橋渡しは、自分でやらなきゃいけないかなって凄く思う、その患者さんが蓄積している経験値みたいな、経験知識、経験による知識っていうところを、医療界、医学会とかに繋いでいかなきゃいけない、よく〇〇とかは通訳っていうけど、あの子は社会との通訳って言うけど、僕は例えば HALE の経験談とかを挙げなければいけないだろうし、その治験レベルじゃないっていうかその、研究レベルじゃない症状とかを挙げたりとか、後は凄くおっきなことを言うと、ビッグマウスなことを言うようだけど、その医学モデルでしか考えていないドクター達に僕らは社会モデルのところで困っているんですよっていのを発信する役割は僕だと思っている、生活をもっと見てみもらいたいですって、大学病院の先生はしかたないですけどね、病気を診るのが仕事なので、ただその病気の先に僕らは社会生活があるんで、人生があるので、そこをイメージしつつの治療に当たってもらうと良いなというのは、毎回、学会に行くたびに言っている、リハの人にもドクターにもナースにも皆言っている、あの病気の CMT の F じゃないのでといつも言っている

＜聴講者が臨床で活かせられるように、経験をただ伝えるのではなく、経験を専門的に分析して伝えている＞

F：ただ経験知を伝えるだけだったら、別に僕じゃなくていいと思う、けどそういう人達って言いっぱなしになるので、そうじゃなくて、あくまで一事例として喋って、しかもそこを専門的にちょっと分析をしたりとか、理由を付けるっていうのは、当事者セラピストだからかな、当事者性だけ発揮する喋りっていうのは、喋って終わりだと思うんだけど、何か届けて終わりっていうか、私はこういう経験をしてきました、こういう経験をして、こういう物を得て、これからはこういうふうに生きていこうと想います、ああお疲れさま、ありがとうございました、良い話でしたみたいな、24 時間テレビみたいな感じになるんだけど、僕は小さい頃こういう経験をしました、それはきっとこういうことに基づ

いていることだと想います、次にこういうふうになったんですけど、これは前回と比べて、こういうふうになってきたと想います、最終的にこうなっていくので、これは社会的に言うとこういうことですよね、で、専門家の方達はっていう、分析的に経験を喋れることと、あとは、それを噛み砕いて、専門的に、専門用語で喋れることと、あとは、僕、これ独特の言い回しかもしれないけど、お土産を持たせられるっていうか、参加した医療者の人達に、セミナーとかでもそうじゃないですか、最後、お土産を持たされるっていうか、じゃあこれを臨床で活かして下さいねとか、こういうことが臨床場面でもしかしたらあるかもしれませんとか、そういう、セラピストが、自分の問題解決に使えるような、落とし所を、ちゃんと最後に渡すようにしている、そこはやっぱり専門家なのだろうなっていうか、言いっぱなしにしない、ちゃんとお土産をたせ持たせる、問題定義で終わっても良いと思っている

【ピアサポートを通じて生活や社会におけるサポートをしたい】

F 氏は患者会の活動内容について、「周りの人の価値観と自分の価値観をちょっと擦り合わせられる機会が患者会にあると良い」、「誰かとの繋がりで、自分の問題を解決できるっていう場になって欲しい、それは自分がそうだったからだって思う」、「生活し辛さとかそっちは患者会が何とかしなくちゃいけない、患者会の役割ってその、うちの患者会はピアなので、社会的なものに向かってのサポートが多い」と話し、【ピアサポートを通じて生活や社会におけるサポートをしたい】と考えている。

＜人に自分の経験を喋ることで自己肯定感を得て次のステップに行ける、そういったピアサポートのプロセスを患者会の中で作って行きたい＞

Q：その頃、自分は何を思っていた、最初は会いたい、活かせるっていう所から

F：えっと、せっかく、組織化したので、なんだろう、正しいことをやる団体で居てほしいっていうか、お涙頂戴の、私辛いんです、分かります、私も辛かったですっていうのとか、国に対して私達は圧力かけるぞってことはやってほしくなかった、それよりも人が集まることで発生するエネルギーが使いたかったって凄く思っていた、ピアサポートの本質を体現化したかった、他の人に自分の経験を喋ることで、その人が自己肯定感を得て、次のステップに行けるっていうプロセスを患者会の中で作って行きたかった、その CMT になったことで役割を喪失している人達に、患者会に参加することで役割をもう一回持ってもらいたかった、患者会に行くとひとまずすっきりするぞと、最初自分のこと、僕が指針で出しているのは、一回目はとにかく似ている人を探して下さい、二回目はとにかく誰彼構わず自分のことを喋って下さい、三回目は聞いてみて下さい、誰かの話を、四回目は噛み砕いてまた喋ってみて下さい、四回来ると世界は変わります、そうすると、その、最初その発散、一回目で、発散、繋がりが出来て、2 回目で発散出来て、誰かの役に立てたって誰かが参考になったって言ってくれたら、自己肯定感が来て、で、自分は新しく入ってくるメンバーさん達の話を聞いて自分の体験を語るんだっていう役割を、最終的はその人達が負ってくれて、出向かえられていた人が、出向かう側になるっていう、その役割の変化を患者会の中で作っていきたかった

＜誰かとの繋がりで自分の問題を解決できる場を患者会で担いたい＞

F：僕は感覚で言ったらピアサポートっていう言葉は後付けて、とにかくうちの患者会は誰かとの繋がりで、自分の問題を解決できるっていう場になって欲しい、それは自分がそうだったからだって思う、最初にあった患者さんとかはもう車椅子の人口呼吸器付けているお兄さんで、ヤバイ違うって 20 歳ぐらいで想ったし、21 ぐらいかな、おんなじ CMT だけど重度の人だった、違う、この人とは共感できない、その後に、鹿児島でたまたま会った女の子は、すごく似ているプロセスで 20 歳まで過ごしてきている

Q：患者会を始めた後

F：掲示板の時、その子とは凄く共感が出来た、この二人と会って、違和感のある人と、違和感がない人、でもおんなじ CMT だって、でもこの人達と一緒のお皿の上に乗りたいって想ったから、じゃあ、それぞれから僕は吸収するものがあったから、車椅子になっても自立生活しているお兄さんと、同じようなことで悩んでいる女のこと、この人達が縮図で、これが何千人ってオボンの上に乗ったとしても、皆がそれぞれの生き方を見て、解決できるような団体になれば良いっていう想いが中心にあったので

＜周りの人の価値観と自分の価値観をちょっと擦り合わせられる機会が患者会にあると良い＞

F：結局、色んな価値観がなくって、病気になった障害を負ったっていう自分の価値観だけで生きようとするからしんどいんだよ、周りの人の価値観と自分の価値観をちょっと擦り合わせられる機会が患者会にあると良いよねっていう活動を掲示板の中でやっていたら、それってピアサポートだねって言ってくれた先生が居て、あ、本当だ、ピアサポートだね、じゃピアサポートの定義を調べて、ちょっとリンクする所があるか言葉をつなげていこうってしていて、何年間かやっていったらさっきの段階の構図が出てきて、1 回目はとか 2 回目はとか、1 回目はあの人、黙っていたけど、2 回目急に自分のこと喋り始めたじゃんって言って、3 回目来たら聞き役に徹していたよねって、4 回目来たら、凄く頼もしくなってないって、あっこれだって思って、患者の中での役割が変わっている、僕がその人生で、その役割が変わってきたのと、同じように、患者会に参加したことで、役割が変わる人って凄くたくさんいたので、で、最終的には役員になっている人とかもいるので、そこは患者としての自分と OT としての自分の両方かな

＜疾病の部分はドクター任せなので、生活のし辛さとか社会的なものに向かってのサポートは患者会が何とかしなければいけない＞

F：社会と患者会を繋ぐ場合、パスを持っている人が役員になると良いな～って感じかな、結局、社会なんだろうなと思う、疾病の部分じゃないんでね、患者会なんか疾病の部分はドクター任せなので、生活し辛さとかそっちは患者会が何とかしなくちゃいけない、患者会の役割ってその、うちの患者会はピアなので、社会的なものに向かってのサポートが多いですね

＜患者会はライフワークであり、自分自身がピアサポートを受ける場＞

Q：あとは純粋にピアサポートをここで体験しているのは

F：そうですね

Q：F さんにはピアがいるのか要らないのか要るのか分からないけど

F：まあ必要かな、何か一見、やっぱ気丈にしてないと患者会の代表としてはダメだけど、その中でもやっぱり年の近い子達で集まった時は、凄く助けてもらっているし

Q：ピアの要素がありますもんね

F：凄くある、凄く助かっているかな、まあちょっとライフワークみたいなところもありますからね

Q：リズムみたいなところ、それはあるかもしれないですね

F：患者会の中でまあリーダーシップ、ずーっと 10 数年出してきているので、そこはもう何か外せないかな、疲れているけどね、凄く疲れているけど、なくなったら困る気もするな

【講演活動を通じて承認欲求が満たされる】

F 氏は講演活動について、「僕の存在、認めてよって、僕喋るの得意だし、頭、良いしみたいな、本当は人付き合い凄く好きだしってところとか、やっぱり誰かに認めて欲しいなとか、別に拍手を求めているわけではないけど、そこの承認欲求は満たされている」と話し、【講演活動を通じて承認欲求が満たされる】との認識を持っている。また、「自分の半生を語ることで、18 年間の否定的なものを肯定してもらえるから、喋れば喋るほど気が楽になる」ことや、「子ども達の前で堂々と喋るっていう、その父性っていうか、父のプライドを見せ、父としての威厳」を見せることができていると話す。

＜講演活動を通じて承認欲求が満たされる＞

F：講演、何か、喋るのは凄くしっくり来ている、ちっちゃい頃からの承認欲求っていうか、認めてよっていうところ、僕の存在、認めてよって、僕喋るの得意だし、頭、良いしみたいな、本当は人付き合い凄く好きだしってところとか、やっぱり誰かに認めて欲しいなとか、別に拍手を求めているわけではないけど、そこの承認欲求は満たされているかな

＜講演で自分の半生を語ることで、18 年間の否定的なものを肯定してもらえるから、喋れば喋るほど気が楽になる＞

F：自分の半生を語るじゃないですか、それって 18 年間を否定されたことを、そこをまた肯定するっていうか、こういうふうになって、ダメになっちゃったんですけど、でも今こうして良くなったんでっていう、そこは本当に本気で保管しているかもしんない、18 年間の否定的なものを、もう一回、受け入れる作業、だから喋れば喋るほど、僕すごい最近、気が楽、それこそ○○くんが研究を始めてくれてからぐらいから、本当に喋ることって増えたけど自分のこと、何か自分のことを振り返って喋ることを、そういうことがあったから F そういうふうになったんだねって、うちの 20 歳の頃の奥さんみたいに、そういうことがあったあなただから今ここに居るんだよねみたいな、本当に肯定してもらえ

る作業が喋りな気がする、さすがに人の人生を否定する人っていないじゃん、そんな聞きにきて、おまえ 18 歳の時にそういうことがあったからダメなんだ、みたいなこと言わないじゃないな、ちっちゃい頃、そんなお父さんのことバカとか言ってお前最低だなとか言わないじゃない、そこはだから喋れば喋るほど、もう本当に何か F さん凄い人生を歩んできたんだねって、本当に今日来てくれてありがとうみたいなことを言われると、本当にホテルに帰ってから一人で泣いている、今日も認めてもらえた、ちなみにこないだ京都はちなみにうち娘二人が付いてきたんだけど、何かそうやって、自分の父の半生を聞かせて、聞いていたかどうか知らないけどっていうのもいいかなっていう

＜講演活動は社会的な役割と仕事をする父親役割となっている＞

F：社会的な役割がちゃんとあるじゃないですか、大学の先生に呼ばれて、80 人の看護師の前でって、しかも子ども達の前で堂々と喋るっていう、その父性っていうか、父のプライドを見せ、父としての威厳もちゃんと見せ、その時は三人で行ったんですよ、奥さんなしで、そういうところでも、父と旅行に行って、父の仕事を見てっていうところも、こないだの京都は凄く良い旅だったし、生活、そうですね、次、たぶんもう繋がるし

【患者と OT と講演者という 3 つの立場の関係性の中に将来が見えてきた】

F 氏は、「当事者セラピストで段々こう自分の中に生活の張の部分と、作業療法士っていうとこと、身体障害難病っていうところが、上手に三角形になってきたのがここ数年で」、「将来性がこの三角形の中に見えてきたので、ちょっと落ち着いているかもしれない」と話し、【患者と OT と講演者という 3 つの立場の関係性の中に将来が見えてきた】との認識を持っている。

＜精神科に勤めたことで障害と仕事が切り離れ、生活がうまくいった＞

F：ただその、僕、身体障害分野じゃないですか、障害で言ったら、身体障害者分野で身体障害の仕事はできないので、だから最初、破綻したんだと思う、で、精神科に行って、障害と仕事を切り離したら、うまく行ったんですよね僕は生活が

＜患者と OT と講演者という 3 つの立場の関係性の中に将来が見えてき＞

F：ただ、お金が発生してないから、生活ってとこが飛んじゃって、結局、生活は生活で、作業療法士をやっていて、こういう二つに分離しちゃったりとかして、障害と患者会、OT と生活みたいな、ここがなくなっちゃう、それがここ 10 年ぐらい、凄く疲弊していた、OT と生活、障害と患者会、そうするとそこは何もリンクがなく、当事者セラピストで段々こう自分の中に生活の張の部分と、作業療法士っていうとこと、身体障害難病っていうところが、上手に三角形になってきたのがここ数年で、本が書けたとか、難病スターティングガイドの話とか、研究班の中で当事者セラピストのことを言われるようになったりとか、後は講演会関係がそういうものが増えてきた、っていうところで、将来性がこの三角形の中に見えてきたので、ちょっと落ち着いているかもしれない

【患者の経験があることでの発言を認められる】

F氏は精神科OTで働いていた時に患者から、「Fさんが一番、近いところに居てくれた」、「当事者さん達から、同じ病気っていうことではなくて、すごくその理解に近いところに居てくれた、他のセラピスト達が言わないことを常に言ってくれた」と言われ、【患者の経験があることでの発言を認められる】経験をした。

また、患者には「横に座るよとか、それこそさっきの一緒に転んであげるように近いっていうか、君と同じ経験をしたことないけど、近い経験はしたことあるから、こういう人も居るから、やってみたかったらやってみても良いよ」と伝えることをしており、「社会的な障壁のところへの共感を促すことは凄く出来た」、との認識を持っている。

＜患者から同じ病気ということではなくて、すごく理解の近いところに居てくれた、優しいことも厳しいことも両方言ってくれるのはFさんだけだったと言われた＞

F：Fさんが一番、近いところに居てくれたって凄く言われた、当事者さん達から、同じ病気っていうことではなくて、すごくその理解に近いところに居てくれた、他のセラピスト達が言わないことを常に言ってくれたってことをすごく言われたので、Fさんが一番やさしかったとか

Q：患者さんは、やっぱりそうやって皆、感じていたんですよね

F：優しいことも厳しいことも両方言ってくれるのはFさんだけだったとか

＜統合失調症やうつ病の症状とかではなく、社会的な障害や社会的な障害から感じたメンタルの共感は凄く出来た＞

F：社会との摩擦とか、疾病で共感することがなかなかなく、症状とか疾病ではなく、やっぱりその何だろうな、社会から受ける障害のとこ、社会的な障壁のところへの共感を促すことは凄く出来たな、統合失調症だから僕、働けないんだって言った人に対して、働けないかもしれんけど、実は僕こういう病気で、ちっちゃい頃、働けないと思っていたんだけど、やり方によっては何とかなったんだよって、だから他のセラピストが頑張れ頑張れとか、出来るよ出来るよって言うかもしれんけど、出来ないかもしれんし、出来るかもしれんし、こういう人もいるんだよって思ってよっていう使い方、うまくちょっと伝えられてないんだけど、凄くこの本当に隣に飛び込むっていうか、行こうぜ、頑張ろうぜっていうリーダーチックな感じではなく、もっとこう、本当に横に座るよとか、それこそさっきの一緒に転んであげるように近いっていうか、君と同じ経験をしたことないけど、近い経験はしたことあるから、こういう人も居るから、やってみたかったらやってみても良いよって選択肢の一つみたいな、なんだろう、そこまでうまく伝えられないのが、僕のダメなところなんですけど、そういうこと、そこが言語化できたら僕するっといけるんだけど、いつもスルっていけなくて

Q：僕の中では社会的障害を感じた経験っていうか

F：そこそこ、疾病体験と障害体験を分けるんだったら、疾病体験はさほど共感できない、癌の人とかだったら、癌っていう疾病体験とか治療体験で共感できるかもしれない

【自分の意識が変わることで障害が障害ではなくなる】

F 氏は、「環境でも変わるし、周りと自分とその原因の関係性が、それこそ ICF の中でグルグル回っていれば、障害が障害じゃなくなることってけっこうある」と、【自分の意識が変わることで障害が障害ではなくなる】と認識をしている。

＜疾病に関しては治療に頼らないといけない、障害に関しては自分の意識や環境で変わるし、障害が障害じゃなくなることはけっこうある＞

F：疾病体験は大概ね、要らないです、シンドイし、ネガティブな発想ばっかりになるんで、他人任せなところがあるじゃないですか、疾病に関しては、自己免疫力と、治療に頼らなければならない、障害ってやっぱ自分の意識でも変わるし、環境でも変わるし、周りと自分とその原因の関係性が、それこそ ICF の中でグルグル回っていれば、障害が障害じゃなくなることってけっこうあるので

【障害は疎ましい】

F 氏は、「障害あること自体は、障害っていうもの自体は、やっぱり疎ましいと思っています」と話し、【障害は疎ましい】と想っている。

【患者の経験があることでの発言を認められる】

F 氏は講演を聞いた看護部の先生から、「当事者としての F さんが言ったから、サラッと入っていたと想います」、「障害者って結構、被害者じみてるじゃないですかっていうのを、私達が言ったら大問題だけど、F さんはそういう経験があってのことだから、そこって当事者セラピストのストレングスなんですかね」と言われ、【患者の経験があることでの発言を認められる】経験をしている。

＜看護学部の先生から、私が言ったら大問題だけど、当事者としての経験がある F さんが言うからサラっと入ってくると言われた＞

F：あんなこと F さん以外が言ったら、あの、ブチ切れられますよみたいなことを、さらって言えるのは F さんだけだよねっていうことを言われて、何言ったかはちょっと覚えていないんだけど、その看護師達に向かって、あの皆さんこうでしょ、こういう時ありますよねっていうことを看護学部の私が言ったら大問題ですけど、当事者としての F さんが言ったから、サラッと入っていたと想います、逆に当事者の人を凄く悪く言うフリがありましたけど、あれも、ゾッとしますけど、でもあれ F さんだから言えますよね、障害者って結構、被害者じみてるじゃないですかっていうのを、私達が言ったら大問題だけど、F さんはそういう経験があってのことだから、そこって当事者セラピストのストレングスなんですかねっていうことを言われて、確かにってちょっと想ったかな

【患者に寄り添える感覚を医療従事者に持ってもらいたい】

・(前述した)。

【障害による経験や人の繋がりや感情というのは凄い宝物】

F 氏は、「障害に付随する経験とか人の繋がりっていうのは凄く宝物だと思う」、「障害から来る経験とか繋がりとか、感情っていうものは凄く財産だなって思う」と話す。

＜障害に付随する経験とか人の繋がりとか感情というのは凄く宝物だと思う＞

F : 障害あること自体は、障害っていうもの自体は、やっぱり疎ましいと思っています、障害に付随する経験とか人の繋がりっていうのは凄く宝物だと思う、障害だったら身体でも社会的なものでもない方が良いです、疎ましい、凄く疎ましいです、邪魔まで行かないけど、疎ましい、でもただ障害から来る経験とか繋がりとか、感情っていうものは凄く財産だなって思う

7）G 氏

（1）カテゴリーとコンセプト

G 氏の逐語録から抽出された 14 のカテゴリーと 34 のコンセプトを表 9 に示す。

表９．G 氏 カテゴリーとコンセプト

カテゴリー	コンセプト
1.声を掛けてもらい就職することができた	高校の時の仲が良かった先生が凄く心配をしてくれて、会社に話を通してくれて就職する
	車椅子をいつも頼んでいる業者の人に誘われて車椅子販売会社へ転職をする
	ボランティアの人達に対する講習会で当事者としての話をし、それを聞いたCILの人に凄く良かったと言いわれCILに誘われる
2.障害を持った人のために社会が変わらないといけない	障害を持っている人達の人権獲得というか、世の中は差別ばっかりだよねと世の中に対して訴えたい
	障害を持っていることで制限を受けたり、行動が変わってしまう世の中は間違っていると思う
	障害を持っているから出来ることを諦めるとか制限されるとかではなくて、社会が変わらないといけないと思う
	今の社会の基準で作られた街や常識では、障害を持っていることで、ダメだとか、嫌だとか、不の感情が生まれてしまう
	障害を持っている人達の権利を訴えることで、障害を持っている人達が負の感情を持たないで済むようにしたい、誰しもが思い通りになる世の中にしたい
3.波乱万丈の人生は楽しい	怪我をしてもそんなに落ち込まなかった、それはそれで、楽しい人生もあるんじゃないかと思った、事故はしょうがないと思った
	見た目が圧倒的に人と違うことで、人と比べなくて良いから気が凄く楽になった
	怪我をせずに生きていたら経験できないようなことを経験できている
	平凡じゃない、波乱万丈の人生を楽しいと思う
4.世の中に障害を持った人にとってのバリアがあることを諦める	使いにくいとか何かが出来ないとか、世の中にバリアがあることは仕方のないことだと思っていた
	身体の障害は色々とめんどくさいと思う
	街行く人の目が冷たかったり、道路が全然整備されていなかったり、これが世間なんだと感じた
	諦めや浮かばれない気持ちだった
5.人と違うことがしたい人と違う自分でいたい	人と違うことがしたい、人と違う自分でいたい
6.障害があってもやりたいことはできる	怪我をしてバンドはできないと思ったけど、その後、大道芸の人間関係の繋がりでバンドができたことから、思っていればやりたいことは出来ると思う
	車椅子販売会社で仕事をするようになり、社会に出る状態になった時に、もっとやりたいことが出来るじゃん、やりたいことがあるじゃんと思えた
7.障害を持った人の自立生活を支援するために自分の経験を伝える	地域で車椅子生活をしている自分の経験をCILでロールモデルとして伝えている
	自立支援の対象者から、あんなふうになりたいとか、あんなふうに出来るんだとか、人生楽しいじゃんとか思ってもらえる自分でいなければいけないと思っている
	自己選択、自己設定を自立生活の基本として支援をしている
8.中途障害としての経験や考えを中途障害者や健常者へ伝えることができる	中途障害の人は最初、皆そうだと思うんだけど、自立生活センターとか先天的な障害の人達っていうのは、ほんとに権利主張ばっかりで、苦手意識があると思う
	中途障害者としての経験を中途障害者に伝えることができる
	健常者の頃の気持ちも分かる中途障害の自分だからこそ、健常者が持つ障害に対する考え方と、障害を持った人が持つ障害に対する考え方の違いに気づき、指摘することができる
9.存在意義も価値もないと感じる経験は辛かった	職場でただそこに居るだけという、存在意義も価値もないと感じる経験は辛かった
10.家族の中での男手としての役割ができなくなり申し訳なく思った	家族の中での男手としての役割ができなくなり申し訳なく思った
11.怪我が自分の役に立っている	誰もが思い通りに生活できる世の中には、自分が生きている間にはならないだろうけど、そういうことになるための過程に自分が携われることは良かったと思う
	怪我をしたことで、人の気持ちや福祉のことを考えるようになり、人間的に凄く成長できたと思う、頚損という怪我が自分の役に立っていると思う
12.尊敬できる障害を持った人と働ける	機能障害を隠さずに存在をアピールするCILのメンバーから、生きる力を感じ、かっこいいと思った
	明日死んでもいいから俺は外にでると言う対象者がいるなど、対象者の姿をカッコイイと思う
	自分とは言葉の重みが違うCILにいる脳性麻痺の人達っていうのは、僕にとっての大スターだと思う
13.障害を持っていても普通の生活をしたい	障害を持っていても普通の生活をしたいよねという思いから、障害を持った人の成人式を対象に、美容師と貸衣装と着付けと写真撮影を一つのパッケージにした仕事を自ら立ち上げる
14.より良い福祉機器を提供したいけどお金が掛かり、対象者に負担が掛かってしまうことに悩んだ	より良い福祉機器を提供したいけどお金が掛かり、対象者に負担が掛かってしまうことに悩んだ

（2）障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

役割獲得に至る過程を 4 期に分節化し、各期における自己と他者・社会に関わる要点に表すマトリクスへのカテゴリーの配置を示した（図 9）。[発症前][発症後][役割獲得期][役割創造期]、各期における、出来事の詳細と配置されたカテゴリーについて説明をする。

			発症前	発症後	役割創造期	役割獲得期
自己	役割に対する願望		人と違うことがしたい人と違う自分でいたい			
	役割に対する認識	肯定				波乱万丈の人生は楽しい 障害を持った人の自立生活を支援するために自分の経験を伝える 中途障害としての経験や考えを中途障害者や健常者へ伝えることができる 尊敬できる障害を持った人と働ける
		否定		家族の中での男手としての役割ができなくなり申し訳なく思った	存在意義も価値もないと感じる経験は辛かった	
	障害に対する願望					
	障害に対する認識	肯定		波乱万丈の人生は楽しい	障害があってもやりたいことはできる 障害を持っていても普通の生活をしたい	波乱万丈の人生は楽しい 怪我が自分の役に立っている
		否定				
		中立				
他者社会	サポート	肯定・有			声を掛けてもらい就職することができた	
		否定・無				
	期待感	肯定			声を掛けてもらい就職することができた	
		否定				
	他者・社会への願望					障害を持った人のために社会が変わらないといけない
	他者・社会との関係	摩擦			世の中に障害を持った人にとってのバリアがあることを諦める より良い福祉機器を提供したいけどお金が掛かり、対象者に負担が掛かってしまうことに悩んだ	
		肯定				

図9. G氏の障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

［発症前］

＜出来事＞

・機械メーカーの営業職に従事。

＜カテゴリー内容の説明＞

【人と違うことがしたい人と違う自分でいたい】

G 氏は発症前からの自分の性格について、「人と違うことがしたいとか、違う自分でいたいとかそういう考えあるじゃないですか、もともとバンドやっているとかさ」と話し、障害を持ってからの自分については、「ホントにもう常に人と違う自分で居るから」、「良かったんじゃないですかね」と話す。

＜人と違うことがしたい、人と違う自分でいたい＞

G：楽観的っていうか、そういうのはあったんじゃないですかね、もともとっていうか誰しもそういうとこあると思うけど、人と違うことがしたいとか、違う自分でいたいとかそういう考えあるじゃないですか、もともとバンドやっているとかさ

Q：ちょっと変わっていたのですね

G：だから、ホントにもう常に人と違う自分で居るから

Q：そこは逆に

G：良かったんじゃないですかね

［発症後］

＜出来事＞

・急性病院に 3 ヶ月入院した後、リハビリ病院に 1 年入院する。

・リハビリ病院を退院後、職業訓練校で 1 年間の訓練を受ける。

＜カテゴリー内容の説明＞

【家族の中での男手としての役割ができなくなり申し訳なく思った】

G 氏は、「家族の中では一番下ですけど、男が 1 人しか居ない中で、その役割はできなくなったなっていう、母親を守るっていうね」と、【家族の中での男手としての役割ができなくなり申し訳なく思った】。

＜家族の中での男手としての役割ができなくなり申し訳なく思った＞

G：プライベートでっていうか家のことで、うち親父いないんですよ、兄弟は姉がいて、結局、家族の中では一番下ですけど、男が 1 人しか居ない中で、その役割はできなくなったなっていう、母親を守るっていうね

Q：その母親を守るっていう、その辺はどんな感情でした

G：申し訳ないなって言う

【波乱万丈の人生は楽しい】

G 氏は怪我をした最初の頃から「俺って歩くとか歩かないとかそういうところはあんまり問題じゃない人なんだな」、「それはそれで、楽しい人生もあるんじゃないのって思った」と話す。また、「眩むってことはそんなになかったですね、それに見た目で圧倒的に違うから人と変わっていたというか、だから気が凄く楽になった、比べなくていいから」とも話す。

＜怪我をしてもそんなに落ち込まなかった、それはそれで、楽しい人生もあるんじゃないかと思った、事故はしょうがないと思った＞

G：これも特殊だと思うんだけど僕ね、そんなに落ち込まなかったんですよ、最初、怪我して

Q：特殊ですね、まだ二十歳で若いですよね

G：感覚もないとか、足が動かないとかあって、ダメかもなって言うふうに思ったけど、そんなに落ち込まなかったよね、周りはものすごく本人以上に悲しんでいるって言うか、その時に自分の中で気づくって言うか、俺って歩くとか歩かないとかそういうところはあんまり問題じゃない人なんだなと

Q：最初からもうそんな感じだったんですね

G：っていう風に思って、なるほどって思って、それはそれで、楽しい人生もあるんじゃないのって思ったし

Q：それに何で何でということもなかったんですね、そうやって想ったんですもんね

G：うん、事故っちゃったものはしょうがないからね

＜見た目が圧倒的に人と違うことで、人と比べなくて良いから気が凄く楽になった＞

G：眩むってことはそんなになかったですね、それに見た目で圧倒的に違うから人と変わっていたというか、だから気が凄く楽になった、比べなくていいから

Q：そうなのですね

G：同世代の奴とか、ファッションだとか、そういうことに関してももう比べなくていいから、Going my Way でいけるから、気は楽になったよね

［役割創造期］

＜出来事＞

・地元の機械設計の仕事に就く。

・祭りのボランティアスタッフに対して、ノーマライゼーション講習会として障害者との関わり方を話す。

・車椅子販売業者へ転職する。

・障害者を対象として美容師の派遣等を 2 年程行う。

＜カテゴリー内容の説明＞

【存在意義も価値もないと感じる経験は辛かった】

G 氏は職業訓練校を出た後に就職をした機械設計の仕事に従事していた時のことについ

て、「最初に入った会社、そこでは酷かったですよね、僕の方見ないって言うか、頭越しに会話しちゃって」、「ただそこに居るだけっていうの、それは辛かったですね」、「存在意義も価値もないっていう」と話し、役割に対して否定的な認識を持った。

＜職場でただそこに居るだけという、存在意義も価値もないと感じる経験は辛かった＞

G：最初に入った会社、そこでは酷かったですよね、僕の方見ないって言うか、頭越しに会話しちゃって

Q：その時はふつうのお仕事って言うか

G：その時はね、機械設計の仕事、コンピュータ使ってこうやるやつなんですけど、ただそこに居るだけっていうの、それは辛かったですね

Q：辛かったですね

G：存在意義も価値もないっていう

【障害を持っていても普通の生活をしたい】

G 氏は、「障害を持ってとかしても普通の生活をしたいよね」、「誰もが経験する事、障害がなければ普通に経験できるよなってことをするべきだな」という想いから、障害を持った人の成人式を対象に、美容師と貸衣装と着付けと写真撮影を一つのパッケージにした仕事を自ら立ち上げた。

＜障害を持っていても普通の生活をしたいよねという思いから、障害を持った人の成人式を対象に、美容師と貸衣装と着付けと写真撮影を一つのパッケージにした仕事を自ら立ち上げる＞

Q：そういうことなのですね、それがもう 30 過ぎくらいの

G：そこに行ったのは 33 くらいのときか、30 から 33 くらいの間に自分で仕事を始めようかなっていうのもちょっとあって、全然気も乗らなかったけど、車椅子屋でいろいろ施設とか病院とか家とか周っている時に、やっぱり障害を持ってとかしていても普通の生活したいよねって思うじゃないですか、で、誰もが経験する事、障害がなければ普通に経験できるよなってことをするべきだなっていう想いはあったんですよ、その時に友達とか、美容師とか結構いて、施設とか行くと皆、女の子だろうが坊主とか短髪とかしゃれっ気がなくて、おかしいだろ、やっぱ女の子だったら髪もちゃんととかしたいし、髪染めたりとか、御洒落もしたいだろうなって思って、美容師を派遣する仕事をやったりとかして

Q：3 年間の間に

G：成人式、障害があってもなくても人生一回きりだからせっかくの記念をちゃんと残そうよっていうの、美容師と貸衣装と着付けと写真を一つのパッケージにして提供しようって言う仕事をやって、やり始めた、31 歳とか 32 歳くらいの時に

Q：ご自身が○○に居る時から

G：いや、車椅子屋に居る時から

Q：車椅子屋に居るときに思ったんですね

G：たまたま同級生に美容師が沢山いたとか、大道芸のボランティアやっているときに写真スタジオだったりだとか、貸衣裳の人達とか繋がりがあって、これはいけるなって、そういうのもあって、その人達とちょっとこんなことやりたいんだけどなんて話して協力してもらって、今でこそ七五三とか貸衣装と着付けセットでみたいなのが増えているけどその当時、自慢じゃないけど俺が最初だと思っているから

【障害があってもやりたいことはできる】

G 氏は、怪我をしてバンドはできないと思ったが、その後、大道芸の人間関係の繋がりでバンドができたことや、車椅子販売会社で仕事をするようになり、「もっと社会に出てくような状態になった時に、ああもっとやりたい事出来るじゃんとか、やりたいことあるじゃん」と、【障害があってもやりたいことはできる】との認識を持った。

＜怪我をしてバンドはできないと思ったけど、その後、大道芸の人間関係の繋がりでバンドができたことから、思っていればやりたいことは出来ると思う＞

G：それこそ健常者っていうかね、怪我してなかったら、それこそ、都会、東京に出て色んなことしてみたかったし、バンドとかやっていて、そういう音楽系の仕事をしたかったなってゆうのもありますし、そういうことしたかった、ただ、そういうことの期待っていうのは失ったっていうか変化したよね、だけど、それをその、大道芸の人間関係っていうか繋がりでまた音楽好きな人とであったりとかしてそういう人と友達になったりして、その人とバンドやったりして、その辺に関しては、思っていればやりたいこと出来るよねって思って

＜車椅子販売会社で仕事をするようになり、社会に出る状態になった時に、もっとやりたいことが出来るじゃん、やりたいことがあるじゃんと思えた＞

G：車椅子屋さんの仕事をやるようになって、その殻を突破したって言うか、なんかそう、刹那的っていうか

Q：刹那的

G：そうそう悲観はしてないけど、諦めているっていう、だから達観しちゃっているっていう、だけど、その車椅子屋で仕事するようになったりだとか、もっと社会に出てくような状態になった時に、ああもっとやりたい事出来るじゃんとか、やりたいことあるじゃんみたいな

Q：車椅子屋さんでやりながらこう、疑問が出てきたんですもんね、もっと、それは障害を経験している立場からこそ思った事でしょうね

G：気が付いたんでしょうね

【声を掛けてもらい就職することができた】

G 氏は職業訓練校を出た後に、機械設計の会社、車椅子販売会社の順で働いた。機械設計の会社には、高校の時の仲が良かった先生が凄く心配をして会社に話を通してくれたこと

で就職することができた。その後、転職をした車椅子販売会社には、自身の車椅子をいつも頼んでいる業者の人に誘われて就職した。そして、大道芸のボランティア実行委員会を行っている際に、他のボランティアの人達に対する講習会で当事者としての話をすることがあり、それを聞いた障害者自立支援センター（以下、CIL）の人に凄く良かったと言いわれ、CIL に誘われる。

このように、機械設計の会社と車椅子販売会社には、支援的な関わりで就職を果たしたが、CIL には、障害者目線での話が出来る人材として期待を受けて就職をした。

＜高校の時の仲が良かった先生が凄く心配をしてくれて、会社に話を通してくれて就職する＞

G：怪我した当時に高校の仲良かった先生が凄く心配してくれて、方々に聞いてくれて、会社にちょっと話を通してくれて、国立リハセンター出た後にその会社で受け入れてくれる話になって、そこに就職しましたね

＜車椅子をいつも頼んでいる業者の人に誘われて車椅子販売会社へ転職をする＞

Q：そこから何年くらい勤めたのですか

G：そこから 3 年くらいかな、その会社もちょっと傾き始めて、で、リストラというか、そういう話も聞こえてきてちょうどそのタイミングの時に、当然車椅子を乗っていてその車椅子をいつも頼んでいる業者の人が同じ車椅子の人で、その人に誘われて来ないかってことでその車椅子屋さんに

＜ボランティアの人達に対する講習会で当事者としての話をし、それを聞いた CIL の人に凄く良かったと言いわれ CIL に誘われる＞

Q：鉄工所で働きながら始めていたってことですよね

G：友達の繋がりで始めたことなんですけど、その大道芸のボランティアを実行委員会でやっているときに、お客さんに対してのノーマライゼーション講習会っていうのをやるわけですよ、スタッフがどうゆうことをするんだよっていう、で、障害を持った人たちに対してこうしましょうねって言うみたいな、当日はボランティアの人達に対する講習会で当事者側からの話をするってことで、僕結構喋ったりしていたんだけど、でその話を聞いた人がいやーすごくよかったと、で、いやうちにこないかということで今の CIL の話

【世の中に障害を持った人にとってのバリアがあることを諦める】

G 氏は、「世の中にバリアとか使いにくいとか何かが出来ないとか、仕方がないなって思っちゃうんですよ、バスがね、混んでいて乗れないとか、どこか行くにも連絡して、向うの都合付けてもらわないとなかなか行動できないとかあるとか、でもこっちが障害持っているから仕方がないよね」と想っていた。また、「街ゆく人の目が冷たかったりとか、道路も全然整備されてなくて、世の中のレベルってこうなんだって思いました」、「諦めはありましたよ、もう浮かばれないって言うか、なんだよなって感じだった」と話す。

＜使いにくいとか何かが出来ないとか、世の中にバリアがあることは仕方のないことだと思っていた＞

Q：CIL に入る前はどんな風に思っていたのですか

G：世の中にバリアとか使いにくいとか何かが出来ないとか、仕方がないなって思っちゃうんですよ、バスがね、混んでいて乗れないとか、どこか行くにも連絡して、向うの都合付けてもらわないとなかなか行動できないとかあるとか、でもこっちが障害持っているから仕方がないよねって思うけど

＜身体の障害は色々とめんどくさいと思う＞

G：そうですね、よくよく考えるって言うか、そんなに落ち込みもしなかったけど、今でも思うのは障害ってめんどくさいなと思う、そう、歩けないこと自体って言うのはそういうのはどうでもいいんですよ、身体の障害のことについては、でもいろいろめんどくさい

Q：なにがめんどくさいですか

G：車乗るのにも、車椅子畳んで積んでだったりとか、今だに電車乗るのにも駅員に連絡してとか、そういうのってめんどくさいなって

＜街行く人の目が冷たかったり、道路が全然整備されていなかったり、これが世間なんだと感じた＞

G：怪我したとたんにもう病院入って、そこからそう約 3 年近くは社会に出てないっていうか、だけど、国立センターを出て、地元へ帰った時にこれが世間なんだってのを感じましたよ

Q：鉄工所 1 年しか働いていませんもんね

G：そう、街ゆく人の目が冷たかったりとか、道路も全然整備されてなくて、だって国立リハセンターって○○にあるんですけど、○○の街って物凄くバリアフリーなんですよ、リハセンターのある町、どこ行っても車椅子で行けるし、八百屋でもカラオケ屋にもスロープありましたからね、30 年近く前ですよ、それで、街の人も車椅子の人見ても普通だし、だってそれは、お客だから、街の人にとっては、商店街の人にとっては、で、普通に食材だったり、色んなものを買ってくれる、他のお客さんと変わらないお客さんだもんね、そこにスロープがないと来れないじゃないですか、だからそういった意味では素晴らしいところでしたね、で、そういうのを経験しちゃっているから、○○へ帰って来た時、何にもなってないじゃんっていう、そこで初めて、世の中のレベルってこうなんだって思いましたよね

＜諦めや浮かばれない気持ちだった＞

Q：変わらず、むしろ今までずっと変わらず

G：だけど諦めはありましたよ、もう浮かばれないって言うか、なんだよなって感じだったけど

【より良い福祉機器を提供したいけどお金が掛かり、対象者に負担が掛かってしまうことに悩んだ】

G 氏は車椅子販売会社で勤めている時に、「福祉系の仕事している人は絶対当たる壁だな

って思っているんだけど、こんなふうにしてあげたい、こんなのが良いのになっていう車椅子とか、福祉機器とかあるけどお金かかっちゃうじゃないですか、決してそういう人達ってお金持っている人ばっかりじゃないので、できればもっと安くとか、お金かかるから要らないよって思うけど、絶対この車椅子がいいなっていうのがあったりして、そういう福祉のことをお金で換算するっていうのが嫌で」と、より良い福祉機器を提供したいと考えるが、お金が多く掛かることで対象者に負担が掛かってしまうことに悩んだ。

＜より良い福祉機器を提供したいけどお金が掛かり、対象者に負担が掛かってしまうことに悩んだ＞

Q：その車椅子屋さんにそこから行くんですね

G：そこにも 3 年いたんですけど、そこで福祉というか、障害を持った人たちと関わっていくんですけど、結局、車椅子屋さんですから、商売ですよね、車椅子だけじゃなくて、福祉機器だったりだとか、色んな病院とか施設周って、営業で周って売るんですけど、福祉とお金っていうのが

Q：仕事として変な感じですもんね

G：そうそうそう、これってこうゆう福祉系の仕事している人は絶対当たる壁だなって思っているんだけど、こんなふうにしてあげたい、こんなのが良いのになっていう車椅子とか、福祉機器とかあるけどお金かかっちゃうじゃないですか、決してそういう人達ってお金持っている人ばっかりじゃないので、できればもっと安くとか、お金かかるから要らないよって思うけど、絶対この車椅子がいいなっていうのがあったりして、そういう福祉のことをお金で換算するっていうのが嫌で

Q：そういう壁があったのですね、その福祉をしてお金を貰うっていうのが嫌なパターンもありますよね

G：結局そういうこともありますけど、なんかなっていう

Q：なるほど、良いことしようと思ったらお金がついてきちゃうっていうのが

G：結局それでね、これのが良いですよって言っていても、いいねって言っていてもこれくらいプラスにかかっちゃうよってことになっちゃうと、何か気持ち的にっていうのでやめて

［役割獲得期］

＜出来事＞

・CIL に勤務。

＜カテゴリー内容の説明＞

【波乱万丈の人生は楽しい】

G 氏は、「CIL の仕事をしていると、こうゆう自分じゃないと絶対できないようなことが出来る、例えば、全国の CIL の仲間と厚生労働省、厚生省に交渉に行くとか、大臣に会うとか、だって一般人だったらそんなこと出来ないじゃん」と、怪我をせずに生きていたら経験できないようなことを経験するこができている。

また、「人生楽しいですよ、全然平凡じゃないし、波乱万丈そのものじゃないですか」と障害を含んだ自身の人生を楽しいと感じている。

＜怪我をせずに生きていたら経験できないようなことを経験できている＞

G：この CIL の仕事をしていると、こうゆう自分じゃないと絶対できないようなことが出来る、例えば、全国の CIL の仲間と厚生労働省、厚生省に交渉に行くとか、大臣に会うとか、だって一般人だったらそんなこと出来ないじゃん、厚労省に行くとかないでしょ

Q：どこにあるのですか、霞ヶ関

G：霞ヶ関にあるけど、日比谷公園のところに、大臣に会って普通に対等に話ができるとか、そういうことって経験できないなって思うと、すげーなって思うよね

Q：凄いですね

G：だから、怪我せずにそのまま生きていたら絶対経験出来ないようなことを出来ているんだね

＜平凡じゃない、波乱万丈の人生を楽しいと思う＞

G：人生楽しいですよ、全然平凡じゃないし、波乱万丈そのものじゃないですか

【障害を持った人の自立生活を支援するために自分の経験を伝える】

G 氏は CIL での仕事について、「僕なんかそういうロールモデルじゃないですか、地域でこうやって車椅子生活しているよっていって、その自分が経験したことを伝えていって」、「あんなふうになりたいなとか、あんなふうに出来るんだとか、そういう自分でいなきゃいけないと思っている」、「人生楽しいじゃんってことを伝えて行かないと」と話す。

＜地域で車椅子生活をしている自分の経験を CIL でロールモデルとして伝えている＞

Q：ピアカウンセリング、ロールモデル

G：そうそう、僕なんかそういうロールモデルじゃないですか、地域でこうやって車椅子生活しているよっていって、その自分が経験したことを伝えていって、こうやっぱりそういう人たちの地域生活が、先天性の人達って言うのは、良く言えば守られてきたけど、悪く言えばすべての経験を奪われてきた人達なんですよ、経験しさせてもらえなかった、失敗すること、チャレンジする事、そういうのを自立支援プログラムで沢山経験していっぱい失敗しなさいみたいな、まずはやってみようよってことをしながら、自分に自信を付けて行って、CIL 的に言うと、自信を取り戻すって言うんですけど

＜自立支援の対象者から、あんなふうになりたいとか、あんなふうに出来るんだとか、人生楽しいじゃんとか思ってもらえる自分でいなければいけないと思っている＞

Q：自立支援をする対象者の人からは、期待というか、どんなふうな存在であったりするんですか

G：だから、その人達から見て、凄くかっこいいなって思ってもらう

Q：御自身も思ったように

G：そうそうそう、あんなふうになりたいなとか、あんなふうに出来るんだとか、そういう自分でいなきゃいけないとは思っている

Q：もうだから、それこそ一人で生活して、何でも好きなことやってとか

G：そう、それって楽しいよって、人生楽しいじゃんってことを伝えて行かないと

＜自己選択、自己設定を自立生活の基本として支援をしている＞

Q：自立支援をする対象者の人からは、期待というか、どんなふうな存在であったりするんですか

G：だから、その人達から見て、すごくかっこいいなって思ってもらう

Q：御自身も思ったように

G：そうそうそう、あんなふうになりたいなとか、あんなふうに出来るんだとか、そういう自分でいなきゃいけないと思っている

Q：もうだから、それこそ一人で生活して、何でも好きなことやってとか

G：そう、それって楽しいよって、人生楽しいじゃんってことを伝えて行かないと

【中途障害としての経験や考えを中途障害者や健常者へ伝えることができる】

G 氏は、中途障害者に対しては、「僕が言えるのは、中途障害での、だから中途障害の人が過ごしてくるであろうサイクルの、怪我してショックを受けて、適応して、順応して、また落ち込んでみたいな、そのサイクルがあるし、それは仕方がないことだよって、何度も落ち込んでいいんですよ、別に、それは全く悪いことじゃない」と伝えることができる。

また、健常者に対しては、健常者の頃の気持ちも分かる中途障害の自分だからこそ、健常者が持つ障害に対する考え方と、障害を持った人が持つ障害に対する考え方の違いに気づき、指摘することができている。

＜中途障害の人は最初、皆そうだと思うんだけど、自立生活センターとか先天的な障害の人達っていうのは、ほんとに権利主張ばっかりで、苦手意識があると思う＞

G：最初これみんな中途障害の人、みんなそうだと思うんだけど、一回かどうかはまあ、自立生活センターとか、先天的な障害の人達っていうのは、ほんとに権利主張ばっかりで、だから、苦手意識があったりするんだけど、実際僕もそうでしたよ、なんにもしないのに～みたいな

Q：何にもしないのにとは

G：仕事とかね

＜中途障害者としての経験を中途障害者に伝えることができる＞

G：僕が言えるのは、中途障害での、だから中途障害の人が過ごしてくるであろうサイクルの、怪我してショックを受けて、適応して、順応して、また落ち込んでみたいな、そのサイクルがあるし、それは仕方がないことだよって、何度も落ち込んでいいんですよ、別に、それは全く悪いことじゃない

＜健常者の頃の気持ちも分かる中途障害の自分だからこそ、健常者が持つ障害に対する考え方と、障害を持った人が持つ障害に対する考え方の違いに気づき、指摘することができる＞

G：カッコよく言えば唯一無二の自分っていうか、そういう風な思いはあるから、それだけであるんだ

ろうなって思うけど、一つ先天性の人達より得しているなって思うのがあって、僕二十歳の時まで健常者で生きていたじゃないですか、そっから障害を持った生活になって、両方分かる感覚が、そこが得しているなって思うね

Q：だから健常の気持ちも分かるってことですよね、健常者が思うこともなんとなくわかるっていうか

G：そう、分かって、そういうもんだよって思っていたけど、それが違うぞって今は言えるよね

Q：だから、改めて健常者とは違うって言える、自分もそう思っていたから

G：そうそうそう、お前ら違うぞ、浅いぞって

Q：ホントに違っていたって経験をしたっていう、それ深いですね、だから中途じゃないと出来ないこともあるっていう

G：だから健常者っていうかね、そういう人たちに対してそれは言える

Q：健常の人にですね

G：それは中途の僕が出来る役割かなって

Q：前は君たちみたいに思っていたけど

G：それは浅いぞっていう

【尊敬できる障害を持った人と働ける】

G 氏は仕事を通じて、機能障害を隠さずに存在をアピールする CIL のメンバーから生きる力を感じ、かっこいいと思うなど、尊敬できる障害を持った人と働くことができている。

＜機能障害を隠さずに存在をアピールする CIL のメンバーから、生きる力を感じ、かっこいいと思った＞

G：なんていうのかな、なんかね、CIL に入って、そういう全国の集まりだったり、そういう所にいくわけですよ、デモ行進とか行った時に、パワーって言うか、凄く感じるよ

Q：それどうゆう、社会へのパワーって言うか

G：生きる力っていうか

Q：生きるんだって力

G：そうそうそう

Q：それを見てどんなふうに G さんが感じるものがあったのですか

G：うーん、やっぱかっこいいなって思ったよね

Q：そういう感覚になったんですね

G：そういう自分の障害で、機能障害があるってさらけ出してここに居るんだってアピールしながら

＜明日死んでもいいから俺は外にでると言う対象者がいるなど、対象者の姿をカッコイイと思う＞

Q：そうですね、死ぬかもしれんって出てきて

G：明日死んでもいいから俺やるっていうような人結構いましたね

Q：そういった方、病院とか施設とか周ってお話し聞いたりして

G：そういう人達の姿見ていてもすげーなーって思うし

Q：それをまた他の人に伝えたりですよね

G：そういう姿もカッコイイなと思うもん

Q：G さんの中ではその、カッコイイって人っていうかカッコイイ現場なんですね

G：かっこいいね

＜自分とは言葉の重みが違う CIL にいる脳性麻痺の人達っていうのは、僕にとっての大スターだと思う＞

Q：かっこよければいいのかも分からないけど

G：いや、僕にとって CIL にいる脳性麻痺の人達っていうのは大スターなんですよ

Q：大スター、凄いですねそれ、忌野恭四郎みたいな

G：そうそうそう、だって、同じこと言っても重みが違うもん、僕が言うのと、その重度な機能障害持ちながら、伝えていくその熱量と気持ちがあるんでしょうね、伝わり方が全く違うからね

【怪我が自分の役に立っている】

G 氏は、誰もが思い通りに生活できる世の中には、自分が生きている間にはならないだろうけど、そういうことになるための過程に自分が携われることは良かったと思うことや、「障害持っていろんな 30 年近くやってきて人を思いやる気持ちとか、人の事を思う気持ちだったりとか、福祉のこと考えるとか、世の中のバリア考えるとか、そんなこと怪我してなかったら絶対考えてないから、だから人間的に凄く成長できたと思うの、だから役に立っているの自分に、この頚損っていう受傷が、だから自分にとっては必要な怪我って言うか」と、【怪我が自分の役に立っている】との認識を持っている。

＜誰もが思い通りに生活できる世の中には、自分が生きている間にはならないだろうけど、そういうことになるための過程に自分が携われることは良かったと思う＞

Q：そこに G さんが身を置くことはどんな感覚なんですか、G さんが自分に対してこう、期待するっていうんですかね、やりながら自分に対してはどんな

G：自分が生きている間には多分絶対にそういう世の中にはならないだろうけど、そういうことになるときのための過程に居られるのは良かったなって思う、それは続けてやっていかないと、絶対にそういうふうにはならないし、例えば僕らも呼ばれて小学校とか中学校とかに、福祉の授業とかで行ったりするんですよ、こうゆう話をして、差別って世の中にあるよねって話をするけど、そういうのって積み重ねなんですよ、もうすべての年代、0 歳から 100 歳くらいまでの年代の人達がずっとそういうことを何度も繰返してやって行って、全ての世代の考え方が変わってきたとき、あるとき世の中って劇的に変わると思うんだよね、今も CM とかいろいろやってね、高齢者とか障害を持った人たちに優しくしましょうとか、24 時間テレビとかやっているけど、あんなままだと 50 年くらいやらないと変わらないと思うけどね

＜怪我をしたことで、人の気持ちや福祉のことを考えるようになり、人間的に凄く成長できたと思う、頚損という怪我が自分の役に立っていると思う＞

G：これも結果論だけど、これも障害持っていろんな 30 年近くやってきて人を思いやる気持ちとか、人の事を思う気持ちだったりとか、福祉のこと考えるとか、世の中のバリア考えるとか、そんなこと怪我してなかったら絶対考えてないから、だから人間的に凄く成長できたと思うの、だから役に立っているの自分に、この頚損っていう受傷が、だから自分にとっては必要な怪我って言うか、何だろうなって思う

Q：それっていつ位から思えたのですか

G：でもね、これはね自慢じゃないけど直ぐにそう思いましたよ

【障害を持った人のために社会が変わらないといけない】

G 氏は CIL の活動を通じて、「日本の社会に対してとか、世の中に対して障害を持っている人達の人権獲得っていうか、世の中って差別ばっかりだよね」、「なんで障害持っているとわざわざそういう制限を受けたりとか、行動が変わってしまうの」、「障害を持って諦める、持っているから諦めるとか制限されるとかではなくて、変わるのは社会だよ」、「(今の社会の基準で作られた常識では)、障害を持っているといろんなダメだとか、嫌だとか、不の感情が生まれちゃう」との考えを持つようになる。

そして今後も、障害を持っている人達の権利を訴えることで、障害を持っている人達が負の感情を持たないで済むようにしたい、誰しもが思い通りになる世の中にしたいと考えている。

＜障害を持っている人達の人権獲得というか、世の中は差別ばっかりだよねと世の中に対して訴えたい＞

Q：G さんみたいに職員側に中途の人がいるのはちょっと珍しい

G：たくさんいますけど、僕はどんなにやっても、主役は、脳性麻痺の、先天性の人達だと思っているんですよ、そうじゃないと訴えてく力っていうか、それも違うし、勿論、そういう風にして地域で暮らしてくっていうのもやっているけど、やっぱり日本の社会に対してとか、世の中に対して障害を持っている人達の人権獲得っていうか、世の中って差別ばっかりだよねっていうのは、やっていきたいしね、それは CIL 入ってそういう考え方がみえてきたって言うか

＜障害を持っていることで制限を受けたり、行動が変わってしまう世の中は間違っていると思う＞

G：でも世の中ってそうじゃないよねっていうことなんですよ、なんで障害持っているとわざわざそういう制限を受けたりとか、行動が変わってしまうの

＜障害を持っているから出来ることを諦めるとか制限されるとかではなくて、社会が変わらないといけないと思う＞

Q：G さん自身も考え方が変わった

G：そうだね、やっぱり障害を持って諦める、持っているから諦めるとか制限されるとかではなくて、変わるのは社会だよって、そっち側だって、だって歩けないとかさ、車椅子で不便だって思っちゃうのはさ、なんでそう思っちゃうのって言うことですよ

＜今の社会の基準で作られた街や常識では、障害を持っていることで、ダメだとか、嫌だとか、不の感情が生まれてしまう＞

Q：向うの基準、社会の基準

G：考え方っておかしいよなって思ったわけですよ、どこにでも行きたいときに行きたいように行けて、車椅子だろうがどんな障害であろうが配慮がされていれば困らないし、そういう世の中だったらそんなふうに思わなくなるよね、でも今、そういう基準で街とか常識が作られてないから、障害を持っているといろんなダメだとか、嫌だとか、不の感情が生まれちゃうわけ

＜障害を持っている人達の権利を訴えることで、障害を持っている人達が負の感情を持たないで済むようにしたい、誰しもが思い通りになる世の中にしたい＞

Q：障害を持たれている方がですよね

G：そういう風になっていなければ負の感情を持たずにいけるのになって思って、そういう世の中にしていこうねっていうことを運動としてやっているわけ、それってかっこいいなって思うわけですよ、そのやっぱり誰しも人権があって、人として、誰しも同じように価値のある人間としてね、思うようになる世の中っていうかさ、僕が一番かっこいいなって思ったのが、ある CIL、東京の方のセンター行ったときに、脳性麻痺の人が言ったわけですよ、それこそ日本の障害者運動の先頭走っていた人なんですけど、僕ら車椅子の連中、いわゆる肢体不自由の連中が権利主張しているのが障害者運動じゃないんだよ、それは違う、障害者運動の本丸って言うのは、重度の知的障害者の、自分の思いを自分の声で伝えられない人、知的障害だったりとか、発達障害だったりとか、そういう自分の思いを声に出して外に向けられない人の人権を守るために、一番分かりやすい車椅子の俺たちが前に出てやるんだってことを言っていたんですよ、それをもうむちゃかっこいいなって思って、車椅子の自分達が見た目で一番分かりやすいし、目を引くから、自分たちが先頭走ってみんなの目を引くんだと、そこでちゃんとその、障害を持っている人達の権利を訴えていって獲得していく、その本丸は重度の知的だっていう

Q：CIL の人達としては、脳性麻痺の人が中心なんだけど、障害を持っている方全般の代弁をしている立場でいいんですか

G：そうですね、いわゆる障害とかを越えて、社会的弱者と言われている人達、その話聞いてカッコイイなって

8）H 氏

（1）カテゴリーとコンセプト

H 氏の逐語録から抽出された 19 のカテゴリーと 46 のコンセプトを表 10 に示す。

表１０．H 氏 カテゴリーとコンセプト

カテゴリー	コンセプト
1.社会の認識との違いで生じる将来に対する不安	見えなくなった時に何をすれば良いのか、どう生きれば良いのか、一応自分なりには建設的に作戦を考えるけども、結局は単なる不安でしかなくて、その不安はある日、急に襲ってくる
	視野が狭くなってきているなっていうのを感じると、1、2週間はかなりの不安で、それを抜け出すまでは2カ月、3カ月ぐらいは不安な状態がずっと続くような生活が25歳までであった
	目が悪くなることで、自分が気付かないうちにうつ病の状態にあったのだと思う
	目が悪くなることでの不安は目が見えないことよりも、社会の認識との違いで生じる将来に対する不安が大きかった
2.その時その時を必死で頑張った	いい鍼灸師になるためには鍼灸だけを知るよりも、人間学、心理学を知る必要があると本に書いてあり、鍼灸で食べていくしかないので、心理学を学ぶために大学へ行く
	ルーペを見つけ、自分の目で漢字を見ることができたことで、本当にもうこれで人生をかえられると思って勉強した
	二度と就職活動はしたくないと他の視覚障害が言う中、そういう場合は私はちょっと違くなるので、もうちょっと頑張ってみようと思って、結局あれこれ100社以上受けた
	今ここで博士課程にチャレンジしないと一生逆サラリーマンで終わるし、今の会社も不安定でいつかはつぶれるか、首になるか、一生涯ここで働ける保証は見えてこないと思っている時に、友人と話したことを切っ掛けに博士課程へ進む
	次に繋げるためにこつこつやるかどうか、それはちょっと難しい、自分なりには、その時その時を必死で頑張っていると思う
3.視覚障害が進んでも不安を一切感じない	最近は視覚障害が進んでも不安を一切感じない
4.視覚障害者の立ち場から開発中の商品に対して言いたいことを言い仕事上での人間関係が壊れる	就職した会社が開発していた点字の製品は点字を読む利点を活かせていなくて、むしろマイナスが多いと思い、これ売ったら詐欺になる売らないほうがいいですと言って、言いたいことを言って、いきなり嫌われ始める
	点字を全く知らないマスコミ関係者、盲学校の関係者、福祉の関係者、視覚障害を持つ親だったりは、素晴らしい商品が出たと喜んだが、当事者からすれば何これ、使えないだろうと思った
	批判のレポートを出すなど、言いたいことを言う性格であることもあって、誤解を受けてしまうことがあり、人間関係を修復することに苦労したことから、期待を受けているとはあまり思わなかった
5.仕事上での期待をずっと受けていると思わなかった	批判のレポートを出すなど、言いたいことを言う性格であることもあって、誤解を受けてしまうことがあり、人間関係を修復することに苦労したことから、期待を受けているとはあまり思わなかった
	売り上げがコンスタントに上がることはなかったため、ずっと期待されるほど、仕事ができたとも言えない
6.盲人として生きたくない	マッサージ師、鍼灸マッサージ師は私が最も望まない仕事の一つで、やらざるを得ないから頑張って勉強をしたものの、その仕事自体が魅力を持っているとか、やりたい仕事ではなかった
	自分は他の盲人を教えるとか、変な言い方で支配する存在だと思っていた、ところがまた盲学校へ行くことで、同じ盲人になってしまうと思い悩んだ
	盲学校って甘えてそこに順応してしまうと、食べ物が出てくる等、何も心配はいらないから、ものすごく楽な生活になる、しかしここで甘えてしまったら終わりだと葛藤が生まれ、甘える自分をなんとか抑えた
	弱視者は普通の世界で生きたいと思う人や、自分が視覚障害の世界にいたことを隠したい人が多く、実際に自分もそうだった
	他の視覚障害者と同じ立場で一緒にやっていくつもりはなかった
7.視覚障害を通じた経験を必要とされて就職する	全盲ではない点字が読める視覚障害者を探している企業を紹介され採用される
	知り合いから、どうもHさんのような支援機器も使える、Hさんのような人を募集しているようなにおいがすると、視覚障害者の友人から教員採用の試験を受けることをすすめられる
8.仕事上で意見を求められる人間関係が出来たことで視覚障害者として意見が言えることに自信がついた	最初は仕事をやっている意味合いを持てなかったが、意見を求められることで、ちゃんと仕事をしていると思える人間関係が出来、だんだんと視覚障害者として意見が言えることに自信がついた
9.障害による差別が嫌だ	一般社会に出れば指導員と対等で張り合えるのに、盲学校の宿舎では指導員のことを先生と呼ばないといけないし、指導員は私のことを子ども扱いしてくる、それがすごく嫌でたまらなかった
	障害を不安に思うことはなくなっているけど、障害があって差別されることは常にあるので、からんでくるときはいっぱいある
10.視覚障害を理由に進路希望先の大学や会社から進路を断たれる	大学を出て仕事をしたくても100社ぐらいは落ちた
	心理学の楽しさもあるけれど、就職が出来ず、もう大学院しか行くところがなくて大学院の試験を受ける
	これだけ行きたいと思っている大学に、目が悪いことで受験さえできない私ってなんなのよと思い、ものすごく泣いた、大人になってから初めて泣いた
	就職試験の願書の受け取り自体も難しいと、〇〇社から障害者枠の採用でも言われ、大学に入るときに願書を引き返されたのに会社でも同じかと思い、ものすごい嘆きというかショックを受けた
	博士課程への進学を希望するが、英語ができないことや実験ができないことから、落とされてしまう
11.職場内での支援があることで働ける	私は何も言ってないのだけど、会議でHさんの支援をそろそろ本格的に考えないといけないんじゃないでしょうかというのがあって、その結果、支援者を付けましょうということが、あっという間に決まった
	支援がなかったら、私はもう今のような仕事はできなかっただろうし、本当にいい時代に生まれた
12.友人の一言で価値観が変わり自分自身を視覚障害者と位置づけて生きていくことにした	全盲の研究者の友人に、盲世界をばかにせずにしっかりとお付き合いして生きていくのであれば、それほど心配せず食べていけると言われ、その話を信頼しきって自分自身を視覚障害というふうに位置付け始めた
	見本となる全盲の教授がいて、ある意味その教授に盲の世界に来いと言われ、障害についてポジティブに捉えられるようになった、価値観が変わった、そして普通の人として生きていたかったけど、弱視として生きていくことにした
	〇〇さんの、盲世界をばかにせずにこつこつ生きてれば何とかなるよという、あの無責任な一言が私を形づけた
13.比較優位に立てる現状を利用しない手はないと思い利用した	経済用語で比較優位という言葉があるけど、自分が優位に立っている、自分の立場を利用しないわけにもいかないのだなっていうことが、視覚障害者という立場を利用した研究を自らが行ったことで、結論として出てきた
	視覚障害を通して自分だけが感じたこと、そういうことを研究テーマとしたほうが、比較優位に立てる現状があって、それを利用しない手はないなと思って利用している
	会社に入る時は、〇〇にいた人達と会話は通じるだろうかと不安で、違う世界の人のようにしか思えなかったけど、入ってみれば、もともと経済が好きといのもあって、何を話しても、負けるものがなくて、私のほうが全然詳しいなと思って、経済が好きだった自分の趣味を活かせつつ働くことができた
	自分しか点字が読めないこと、商品に対するアドバイスはまったく自分しかできないことを特殊能力だと思った
	触覚と脳科学の研究に本当は興味があって、そういった研究をしたかった
14.博士課程の研究内容を大学の先生達からすごく興味を持たれた	博士課程の研究内容であるアシスティブテクノロジーについて、当時は研究をしている人が少なく、大学の先生達からものすごく興味を持たれた
15.障害を持った人が学校にいるだけで学生にとっては良いことだという人事職員の発言を聞き社会の成熟を感じた	人事の職員から、Hさんがいるだけで学生にとってはものすごくいい、それ自体がいい勉強になっていると言われ、それをある程度私も信じ込まざるを得ない社会になったと感じ、社会の成熟を感じた
16.母は目が見えなくなることを受け入れられずいろんな病院へ連れて行った	母は目が見えなくなることを受け入れられず、いろんな病院へ連れて行った
17.視覚障害があることで自分の話に説得力があるとプラス面を感じるようになってきたことに自分でも驚いている	視覚障害があることで自分の話に説得力があるだろうと、プラス面を感じるようになってきたことに自分でもびっくりしている
18.視力が急激に落ちることに対して周期的に不安が襲ってくる	中学2年生ながらいろんな焦りが渦じっていた
	視力が急激に落ちることに対して周期的に不安が襲ってくる、それは30歳を越えた辺りまで続いた
19.当事者である自分に助言を求められることがいっぱいある	障害があることで、例えば教育相談だったり学生だったりに対する発言力が高くなるというか効果がある、本では分からないことがあって、当事者である自分に助言を求められることがいっぱいある

（2）障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

役割獲得に至る過程を 4 期に分節化し、各期における自己と他者・社会に関わる要点に表すマトリクスへのカテゴリーの配置を示した（図 10）。[発症前][発症後][役割獲得期][役割創造期]、各期における、出来事の詳細と配置されたカテゴリーについて説明をする。

			発症前	発症後	役割創造期	役割獲得期
自己	役割に対する願望			盲人として生きたくない	盲人として生きたくない	
	役割に対する認識	肯定				仕事上で意見を求めらる人間関係が出来たことで視覚障害者として意見が言えることに自信がついた
		否定				
	障害に対する願望					
	障害に対する認識	肯定			友人の一言で価値観が変わり自分自身を視覚障害者と位置づけて生きていくことにした 比較優位に立てる現状を利用しない手はないと思い利用した	視覚障害があることで自分の話に説得力があるとプラス面を感じるようになってきたことに自分でも驚いている
		否定		視力が急激に落ちることに対して周期的に不安が襲ってくる	視力が急激に落ちることに対して周期的に不安が襲ってくる	
		中立				視覚障害が進んでも不安を一切感じない
他者社会	サポート	肯定・有				職場内での支援があることで働ける
		否定・無		視覚障害を理由に進路希望先の大学や会社から進路を断たれる 母は目が見えなくなることを受け入れられずいろんな病院へ連れて行った	視覚障害を理由に進路希望先の大学や会社から進路を断たれる	
	期待感	肯定			視覚障害を通じた経験を必要とされて就職する	博士課程の研究内容を大学の先生達からすごく興味を持たれた 障害を持った人が学校にいるだけで学生にとっては良いことだという人事職員の発言を聞き社会の成熟を感じた 当事者である自分に助言を求められることがいっぱいある
		否定				仕事上での期待をずっと受けていると思わなかった
	他者・社会への願望				障害による差別が嫌だ	
	他者・社会との関係	摩擦		その時その時を必死で頑張った 社会の認識との違いで生じる将来に対する不安	その時その時を必死で頑張った 社会の認識との違いで生じる将来に対する不安	視覚障害者の立ち場から開発中の商品に対して言いたいことを言い仕事上での人間関係が壊れる
		肯定				

図10. H氏の障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

［発症前］

＜出来事＞

・H 氏は生まれ育った韓国の小学校に通う 5～6 年生の頃に急激に視力が落ち始める。

＜カテゴリー内容の説明＞

カテゴリーなし。

［発症後］

＜出来事＞

・日本の盲学校 2 年生の時に、自分の目に合うルーペを見つけ、「一生字は読めないと想っていたけど、漢字がきれいに見えた、これで人生が変えられると想って、熱心に勉強した」と云う。そして、書籍に「良い鍼灸師になるためには、人間学、心理学を学ぶ必要がある」と書いてあったことから、心理学を学ぶために大学受験を試みる。しかし、兼ねてより憧れていた大学へ入学願書を提出しに行くが、視覚障害を理由に受け取ってもらえなかった。この時 H 氏は帰宅後、「これだけ行きたいと想っているのに、受験さえできない私って、これなんなのよ」と、大人になってはじめて泣いた。翌年、心理学学科を含む 4 校を受験。4 校とも受かる。そしてその中で、心理学学科を合格した大学へ進学を決める。

・H 氏は大学 4 年生で既に 30 歳。就職試験を受けようとするが、30 歳で新卒ということもあって「障害者雇用枠の採用であっても難しい」と、ここでも願書すら受け取ってもらえないことがあった。この時、就職を検討した会社は 100 社近くに及んだが、全社、採用に繋げることはできなかった。

・就職できなかった H 氏は、○○大学の大学院へ進み触覚に関する研究を行った。大学院卒業時には、「どうせ、就職は難しい」と博士課程への進学を希望するが、コンピューターを使ったプログラミングや、英語が苦手なこともあり、先生から「どうしようもないからやめなさい、もっと他の道を探すなりしなさい」と言われ、博士課程へは進めなかった。

＜カテゴリー内容の説明＞

【盲人として生きたくない】

H 氏は、「弱視はどっちかというと、願望としても普通の世界に生きたいわけです、できるだけ、自分が視覚障害の世界にいたっていうことを隠したい人も多いし、できることなら自慢にもならないんで言いたくないわけです、私はどっちかといえば、同じ、そこら辺の普通の弱視だったわけです」、「自分はこう、他の盲人をこうその教えるとか、変な言い方で支配する的な存在だと思っていた、ところがまた（二度目の盲学校へ行くことで）同じ盲人になっちゃう的な、ものすごいそこで悩んだ覚えがある」と、【盲人として生きたくない】想いがあった。

＜マッサージ師、鍼灸マッサージ師は私が最も望まない仕事の一つで、やらざるを得ないから頑張って勉強をしたものの、その仕事自体が魅力を持っているとか、やりたい仕事ではなかった＞

H：その韓国にもう日本 10 年ぐらい住んでしまうと帰りたくもなくなってしまったわけです、韓国帰ったらマッサージ師、鍼灸マッサージ師やらなきゃいけないのと、最も私が望まない仕事の一つでもあるので

Q：そこはそうなのですね

H：そりゃそれしかないのでやらざるを得なくて頑張ってやったものの、その仕事自体が魅力を持っているとか、やりたい仕事ではなかったわけです

＜自分は他の盲人を教えるとか、変な言い方で支配する存在だと思っていた、ところがまた盲学校へ行くことで、同じ盲人になってしまうと思い悩んだ＞

H：私の妙なプライドの中で、自分のそこらへんの盲人とは違う妙なプライド持っていたんです、自分はこう、他の盲人をこうその教えるとか、変な言い方で支配する的な存在だと思っていたわけです、そういう変な自分をこう位置付けていたわけ、ところがまた同じ盲人になっちゃう的な、ものすごいそこで悩んだ覚えがあるんです

＜盲学校って甘えてそこに順応してしまうと、食べ物が出てくる等、何も心配はいらないから、ものすごく楽な生活になる、しかしここで甘えてしまったら終わりだと葛藤が生まれ、甘える自分をなんとか抑えた＞

H：まるで私のところ刑務所以外のなんでもなくて、刑務所生活、その朝になるとおはようとかいってね、みんなおはようございますとか言いながら降りてくんですよ、もう怖い先生がいてね、こう後ろに手こうやって立って、おはようって言うんですよ、そうするとみんなおはようございますって頭下げながら点呼するんですよ、まるでこれもう刑務所以外はなんでもないだろうっていうのを感じながら悩みが生じるんですよ、それでここでもう屈服じゃないけども甘えるとものすごく楽な生活になるんですよ、盲学校って甘えてそこに順応してしまうと、本当もう何も心配はいらないから、みんな食べ物は出るし、盲学校だと通帳に月にいくらか振り込まれるんですね

Q：そうなんですか

H：少ないけど 1 万円台なんとか、あるいは就学奨励費っていう形で振り込まれるし、食べ物が出されて住む所があって、ある程度こづかいあれば、なんの心配ないです、はっきり言って、もう極端に言えば布団買うお金とか、確かそういうのも出たんだと思います、そんなんで甘えてしまうと本当仲良くできるわけだし、そこで葛藤して、ここで甘えてしまったら終わりだなっていうのがなぜか思い始めるんです、なぜか思ってね、そこでもう甘える自分をなんとか抑えて抑えるんです、抑えてもう甘えないんです、甘えずに今まで自分がこう持っていた自分の自尊心を持ち続けようと思うと、ものすごくしんどい盲生活が始まるんですよ

＜弱視者は普通の世界で生きたいと思う人や、自分が視覚障害の世界にいたことを隠したい人が多く、実際に自分もそうだった＞

H：弱視はどっちかというと、願望としても普通の世界に生きたいわけです、できるだけ、自分が視覚障害の世界にいたっていうことを隠したい人も多いし、できることなら自慢にもならないので言いたくないわけです、私はどっちかといえば、同じ、そこら辺の普通の弱視だったわけです、できることなら

＜他の視覚障者と同じ立場で一緒にやっていくつもりはなかった＞

H：視覚障害というのは自分が指導をしたり自分が上に立つことはあり得るかもしれないけど、同じ立場で一緒にやっていくつもりもないし、でもないと思っていたわけです

【視力が急激に落ちることに対して周期的に不安が襲ってくる】

H 氏は、視力が急激に落ちることに対して周期的に不安が襲ってくることが、30 歳を越えた辺りまで続いた。

＜中学 2 年生ながらいろんな焦りが混じっていた＞

H：片目ずつ手術していくんだけど、片目終わって、また片目やってくんだけど、もう焦るんですね、私すごく勉強が遅れるのがすごく嫌で、勉強なんとかしたい、できるだけ勉強にもう、ものすごい欲求が高かったので、成績取りたいっていう欲求があったので、自分は本当は 3 年生になっているはずなのに、2 年生のまんま自分はもう 3 年生まだ上がってないから、本当は学校にいたら上がっているはずなんだけど、2 年生、自分の気持ちは 2 年生なんです、弟が二つの歳の差なんだけど、私もうちょっと弱かったので 1 年生 2 回やった関係で学年では 1 年の差だったんですね、よく考えると弟は 2 年生になっていると、私は年 2 歳上やのに私は 2 年生と弟も 2 年生になっちゃった、不思議なもうその焦りとですね、その焦りとか、あのときはもう精神的に中学 2 年生ながらいろんな焦りが混じって

＜視力が急激に落ちることに対して周期的に不安が襲ってくる、それは 30 歳を越えた辺りまで続いた＞

H：緑内障っていうのはほとんどの周りはもう激しく 1 年で私ぐらい見えていたのが、1 年間の間で急激に落ちて見えなくなるやつとか盲学校でいっぱい見ているので、私もああなるだろうなっていうので、これ周期的に不安が襲ってくるんです、周期的に、年に、今正確に覚えてないんだけども、もうそれは、それがなくなったのは 30 を越えた辺りだったと思うんですね

【視覚障害を理由に進路希望先の大学や会社から進路を断たれる】

H 氏は、「○○大学へ入りたいって言ったら、受けさしてくれないんですよ、目が悪いっちゅうんで」、「仕事したくても大学出て 100 社ぐらいは多分落ちている」と話し、【視覚障害を理由に進路希望先の大学や会社から進路を断たれる】経験をした。

＜大学を出て仕事をしたくても 100 社ぐらいは落ちた＞

H：仕事したくても大学出て 100 社ぐらいは多分落ちているんですよ

＜心理学の楽しさもあるけれど、就職が出来ず、もう大学院しか行くところがなくて大学院の試験を受ける＞

H：もうどこもみんな就職活動やっているんで私もやってみたものの受からないし、結局行くところ大学院しかない、それで勉強はそれほど嫌いでもないので大学に行ったっていうのが経緯なんですね、心理学の楽しさもあるけれどももう行くところそこしかなかったというのもあるんです

＜これだけ行きたいと思っている大学に、目が悪いことで受験さえできない私ってなんなのよと思い、ものすごく泣いた、大人になってから初めて泣いた＞

H：○○大学へ入りたいって言ったら、受けさしてくれないんですよ、目が悪いっていうことで

Q：もう大学のほうが

H：大学のほうが、受験させてくれないんですよ、それでしょうがないから心理学科は目が見えないものは難しいと言われて、で、結局受験をさせてくれなくて、初めて帰ってきて、その現場でもう、涙をなんとかして我慢したんだけど、帰ってきても涙が止まらなくて、一人でものすごい、大人なってから多分泣いたの初めて、そのときが初めてなんかもしれないですね、お父さん亡くなって泣いて以来、あまり泣かないんだけど、そのときに泣いたんですよ帰ってきて、行きたい、これだけ行きたいと思っているのに受験さえできない私ってこれなんなのよと思いながら、そのとき泣いたんですよ、ものすごく泣いて、それでもう大学でいろいろ調べたらここも駄目、ここも駄目っていうわけですよ

＜就職試験の願書の受け取り自体も難しいと、○○会社から障害者枠の採用でも言われ、大学に入るときに願書を引き返されたのに会社でも同じかと思い、ものすごい嘆きというかショックを受けた＞

H：30 歳というのは○○会社の中では最も仕事ができて、後輩を育てるような立場にいるのがもう 30 歳で、ところがあなたの場合本当申し訳ない話なんだけど、その入ってきてもらったところで新卒でもなく、中途採用としての役割も果たせない、もうはっきり言ってこれ非常に厳しい、これはもう本当申し訳ないけど、願書の受け取り自体もうこれ難しいと、○○会社から障害者枠の採用でもそれを言われたわけですよ、大学入るときも願書を引き返されたりね、会社でもかよと思いながら、ものすごいもう嘆きというか、ショック受けて

＜博士課程への進学を希望するが、英語ができないことや実験ができないことから、落とされてしまう＞

H：英語が弱い、実験ができない、そもそもの能力がない、もうどうしようもないわけですよ、博士課程行ったところで、先生としては本当はこれはあなたは行きたいとか言っているけど行ってもどうしようもないからやめなさいというわけですよ、もっと他の道を探すなりしなさいって言うんだけど、

でも行きたいですとか言って無理やりに、まさかそれでも落とさないだろうと思って取りあえず受けるんだけど、本当に落とされちゃうんですね

【母は目が見えなくなることを受け入れられずいろんな病院へ連れて行った】

H 氏は、「母は全く見えなくなることが受け入れられず、その病院を退院してからも、それから私の苦労が始まるんだけど、いろんな病院に連れて行くんですよ」と話す。

＜母は目が見えなくなることを受け入れられず、いろんな病院へ連れて行った＞

H：そういうときだった、母は母で全く見えなくなることが受け入れられず、その病院を退院してからも、それから私の苦労が始まるんだけど、いろんな病院に連れて行くんですよ、テレビで見て相談をするような、夏休みとかですね、なんとか病院の先生が出てくると、この先生なら治せるかもしれないって言ってね、またそこにも連れて行かれたり、次はモスクワに行くとかですね

【その時その時を必死で頑張った】

H 氏は、「頑張っておりました、それなりは、頑張ったんだけど、そのときどきつながっていると思ってないんです」、「こつこつってやるかどうか、それはちょっと難しいんですよね、自分なりには、私の場合は、必死で頑張っていると思うんですよ」と話し、大学受験、就職試験、点字会社での勤務等、【その時その時を必死で頑張った】。

＜いい鍼灸師になるためには鍼灸だけを知るよりも、人間学、心理学を知る必要があると本に書いてあり、鍼灸で食べていくしかないので、心理学を学ぶために大学へ行く＞

H：（鍼灸師に関する本に）何が書いてあったかと言うと、良い鍼灸師になるためには鍼灸だけ知ることよりも、その人間学、心理学、なんとか学を知る必要があるって書いてあるわけですよ、私も薄々そういうこと感じていたので、いい鍼灸師って口がうまいんだなってのはよく感じていたので、私こんな口下手じゃ駄目だなと思って、じゃあ私もちょっともうちょっとこう社会慣れするのと、そのいい鍼灸師になるために何がいいだろうっていろいろ、さらに言うとなお鍼灸で食っていくしかないので、役に立つのはなんだろうと思ったら臨床心理士っていうものがあるのかと思って、それで心理学選んだんです

＜ルーペを見つけ、自分の目で漢字を見ることができたことで、本当にもうこれで人生をかえられると思って勉強した＞

H：そのときにものすごいその勉強に燃えていたときで、あるルーペを見つけたんです、私 2 年生の終わり頃に、これで見ると私はもう、目で自分の目で漢字とか、そういうのをこう見ることはもう一生涯無理だと思っていたんです、もう一切見えないわけ、ところがそのルーペを使うと、ふとこうやって当てると漢字がきれいに見えたわけです、なんだこれはと思って、これはもうものすごい物を発見したっていうのでもうそれから急に漢字勉強するんですよ、これ面白くなって 2 週間もうご飯食べたら勉強、今人生の中でそんなに熱心に 2 週間も漢字勉強で、2 週間だけですけどね、朝晩ももう狂っ

たごとくのようにやった、覚えがないんです、あのとき本当にもうこれで人生変えられると思って勉強したときにたまたま彼がいつもその来ると、ばーんとドア開けると私が勉強して、帰るときぱっとドア開けると勉強して、その様子見てどこまで勉強すんねんみたいな、同じ歳だったんで、1 日あなた何を勉強してんねんみたいな、いろいろ私がむしろ関心持たれて言われたりして、

＜二度と就職活動はしたくないと他の視覚障害が言う中、そういう場合は私はちょっと強くなるので、もうちょっと頑張ってみようと思って、結局あれこれ 100 社以上受けた＞

H：時々視覚障害の方をそこで会うと、いやこんなん私もう就職しなくてもいいと、二度とこういうことを私はしたくないと言って、もうみんな 1 日でやめていく様子見て

Q：就職活動自体を

H：活動自体を他の視覚障害の方たちがね、そういう様子を見て、私がこれだけもう心臓が止まりそうで、これだけ嫌な感じを受けているのは、みんなもう二度としたくないぐらいのをやっているんだっていう納得がいったんです

Q：なるほど

H：自分をなんでここまでこう就職活動でこんなに嫌な気持ちになるのか理解ができなかったので、そういう友人の話を聞いたり、もうそもそも来なかったりするわけですよ、一回来たけども午前中帰ってしまったり、もう無理だと言ってですね、こんなに私嫌われるなら嫌だとか言ってですね、2、3 社受けてみて帰っちゃうんですよ、それを見て、そういう場合って私ちょっと強くなるんです、じゃあもうあんなんでやめていくなら私はもうちょっと頑張ってみようっていうんで、結局もうあれこれ 100 社以上受けましたね

＜次に繋げるためにこつこつってやるかどうか、それはちょっと難しい、自分なりには、その時その時を必死で頑張っていると思う＞

Q：そのときそのときは、リアルタイムではこつこつやっていると

H：感じない、リアルタイム、こつこつ、こつこつってやるかどうか、それはちょっと難しいんですよね、自分なりには、私の場合は、必死で頑張っていると思うんですよ

Q：必死で、そんときそんとき

H：頑張っておりました、それなりは、頑張ったんだけど、そのときどきつながっていると思ってないんです、どっちかっていえば、私が日本語の点字、韓国の点字、英語の点字が読める、日本語の漢字、仮名文字が読める、特に、点字が読めることに関する優位性だったり比較優位だったり、そのうちまったく読まなくなったし、何の値打ちも感じなかったのが、J 会社に入った途端、点字読むのって、こんなに役に立つときがあるんだっていうぐらい、ものすごく感動したし、さらに、それが K 会社があって、K 会社に入ったら入ったで、J 会社の時に誰も教えてくれるような人がいないので、自分で必死で悩んでつながるための、この機械どうすれば点字が出るんだとか自分でやるしかなかったんで、その苦労が K 会社へ行ったら、結局同じ悩みでみんな悩んでいたので役に立つ、知識は、もうお

のずとつながる、K 会社へ行って、博士号のテーマを視覚障害にすればもっと簡単に博士号取れるしあれなんだけど、そこはね、やっぱり嫌がることやるだけでも、申し訳ないのに、テーマを仕事と一致させてしまうと、本当なんか犯罪に近いなと思って

【社会の認識との違いで生じる将来に対する不安】

H 氏は、「将来に対する不安がやっぱり大きいんでしょうね、目が見えないそれよりも、視覚障害ってその、目が見えないそれ自体の問題じゃないですよ」、「目が見えなくなることで周りから受ける先入観と、その社会の認識との戦いと、その目が見えなくなることで出てくる障害、結局その大学に行けない、今障害の定義が変わったとはいえですよ、とは言っているけども実際にその大学が行けなくなるわけだし、行かなければやっぱりその次の障害として良い仕事就けない、これ現実ずっとあるわけだから」、「自分は何をして食っていこうっていうのが常に悩みだ」と話し、【社会の認識との違いで生じる将来に対する不安】を抱えた。

＜見えなくなった時に何をすれば良いのか、どう生きれば良いのか、一応自分なりには建設的に作戦を考えるけども、結局は単なる不安でしかなくて、その不安はある日、急に襲ってくる＞

H：30 で、最もひどかったのは 20、そうですね、25 歳ぐらいまでは周期的に不安が襲ってくるんです、そうすると 2、3 カ月間はその周期が襲ってくると長く 2、3 カ月間ぐらいはずっと自分が全く見えなくなったときのために何をすればいいのか、見えなくなったときにどう生きればいいのか、そのいろんなことを一応自分なりには建設的に作戦を立てる予定でいろいろ考えるんだけども、それは結局はただ単なる不安でしか過ぎなくて、もう不安にさいなまれるわけですね、それがね、不安が襲ってくるんですよ、それはある日、急に襲ってくるんです、急に例えばなんだけども、今でも覚えているのが日本来てからもそういう周期が何回か襲ってきていましたが、その例えば〇〇駅からなんかどっかへ行って帰りかな、その盲学校に近づいたときに、たまたまバスの一番後ろに座ったんですね、で、後ろに座ったときに（視野が狭くなってきたと不安を感じた）

＜視野が狭くなってきているなっていうのを感じると、1、2 週間はかなりの不安で、それを抜け出すまでは 2 カ月、3 カ月ぐらいは不安な状態がずっと続くような生活が 25 歳まであった＞

Q：視野もですね、はい

H：視野が狭くなってくるので、ぱーっと見たときにこの前まで一番後ろ、真ん中座るとバスの中が見渡せたつもりだったのに、なぜかバス全体が、中が見えないわけですよ、もう視野がさらにまた狭くなってきているなっていうのは急に感じちゃって、それからまたもう、それがきっかけでまた 1、2 週間はかなりの不安で、それはもう抜け出すまでは 2 カ月、3 カ月ぐらいは不安な状態がずっと続くような、そういう生活を 25 まで、30 過ぎちゃうと特に今となってはそういう時があったなっていうぐらいで、一切それがないんです

＜目が悪くなることで、自分が気付かないうちにうつ病の状態にあったのだと思う＞

H:そもそも目が悪くなることで、私は自分が気付かないうちにうつ病の状態というか、うつの状態にあったんだと思います、実際にその高 3 のときは神経症と診断されました

＜目が悪くなることでの不安は目が見えないことよりも、社会の認識との違いで生じる将来に対する不安が大きかった＞

H：目は一つ大きかったんだと思います、目が大きいのと、将来に対する不安がやっぱり大きいんでしょうね、目が見えないそれよりも、視覚障害ってその、目が見えないそれ自体の問題じゃないですよ、私いつも思うんだけど、目が見えなくなることで周りから受ける先入観と、その社会の認識との戦いと、その目が見えなくなることで出てくる障害、結局その大学に行けない、今障害の定義が変わったとはいえですよ、とは言っているけども実際にその大学が行けなくなるわけだし、行かなければやっぱりその次の障害として良い仕事就けない、これ現実ずっとあるわけだからですね、社会的に定義変わったからといってその現状が直ればいいのだけど、その現状は直らないわけだから、実際にそれがあるわけだから、そういう意味では自分は何をして食っていこうっていうのが常に悩みだし、答えが出ないですね、その答えが出ないというのがあって

［役割創造期］

＜出来事＞

・二度目の盲学校 2 年生の 10 月の時に、点字を読める弱視者を探している点字機器開発会社に誘われ就職が決まる。

・博士課程に進めず悩んでいる時に、H 氏は全盲の研究者に相談をした際、「盲世界をバカにせずにしっかりとお付き合いして生きていくのであれば、それほど心配はない、食っていけないことはないよ」と言われる。これを切っ掛けに、自分自身を視覚障害という様に位置付け、「経済用語で比較優位っていう言葉があるんだけど、視覚障害者という自分の立場を利用しないわけにもいかないんだな」と考えるようになった。

・その後、パソコンのプログラミングを習い、間を縫って英語の勉強をすれば、博士課程に再挑戦できるかもしれないと考え、2 度目の盲学校と寮に入る。

＜カテゴリー内容の説明＞

【盲人として生きたくない】

・(前述した)。

【友人の一言で価値観が変わり自分自身を視覚障害者と位置づけて生きていくことにした】

H 氏は博士課程の進学に失敗をして悩んでいたときに、全盲の研究者の友人から「盲世界をばかにせずにしっかりお付き合いして生きていくのであれば、それほど心配なく食っていけないことはないと思うよ」と言われたことで、「当時何を思ったのか、すごくその話

を信頼しきって、そうか私も普通の世界として人間として生きていこうと思った」、「自分のアイデンティティーというものを、ずっと弱視あるいは普通の世界と思っていたのを、自分自身を視覚障害というふうに位置付け始めるんですね」と当時の気持ちを話す。

＜全盲の研究者の友人に、盲世界をばかにせずにしっかりとお付き合いして生きていくのであれば、それほど心配せず食べていけると言われ、その話を信頼しきって自分自身を視覚障害というふうに位置付け始めた＞

H：それで、先ほども言ったように、博士課程を失敗して悩んでいたときに、ある全盲の研究者に、本当は研究者になりたいんだけど、やっぱり研究者って難しいんですかねっていうことを相談したところ、○○という友人なんですが、彼が言うのは、盲世界をばかにせずにしっかりお付き合いして生きていくのであれば、それほど心配なく食っていけないことはないと思うよというような、今となって考えると、すごい根拠もない無責任な話のように思うんだけど、当時何を思ったのか、すごくその話を信頼しきって、そうか私も普通の世界として人間として生きていこうと思ったんだけど、そうじゃなくてこんなちょっと尊敬できる立派なおっちゃんがいるんであれば、この人言うことをちょっと信じて生きていこうっていうこと、うっすらそのときに感じ始める、それで、そのうち自分のアイデンティティーというかものを、ずっと弱視あるいは普通の世界と思っていたのを、自分自身を視覚障害というふうに位置付け始めるんですね

＜見本となる全盲の教授がいて、ある意味その教授に盲の世界に来いと言われ、障害についてポジティブに捉えられるようになった、価値観が変わった、そして普通の人として生きていたかったけど、弱視として生きていくことにした＞

H：見本となる教授

Q：見本となる教授ですね

H：憧れで、そうなりたいようなですね

Q：その方、何て言うんですか、障害についてこうポジティブに捉えたと言ったらシンプルになっちゃうんですけど、価値観が変わったというか

H：もともと○○さんというのは、本もたくさん書いているし

Q：本当ですか

H：その○○さんというのは、京都大学初めて受かって、京都大学で博士号取った人なんだけど、その学歴自体がすごくかっこいいし、人がすごくまたいいんです、非常にフレンドリーで、まったく偉そうなところがないっちゅうところがあってですね、もう、非常に低姿勢な方で、そういう人間としてすごく尊敬できる面もあるし、だけどもその博士号取ったり、非常にハイレベルな活動をされていて、ある意味では非常に尊敬できる面があって、そういう憧れでもあるし、友達になりたい、一緒にいたい、そういう方から、ある意味この世界に来いよみたいな

Q：そういうことですか

H：イメージです、私からすれば、そうすると、私は弱視として生きていこうとしたんだけど

＜〇〇さんの、盲世界をばかにせずにこつこつ生きてれば何とかなるよという、あの無責任な一言が私を形づけた＞

Q：そのときは、〇〇さんが言った、何とかなるよって言われた、弱視のほうの世界に入っていったじゃないですか、その感覚と照らし合わせると、どんな、何とかなっているんだなみたいな感じなのですか

H：だから、それは、まさに何とかなったんです、そういう意味で

Q：何とかなっているっていう感じでいいんですか

H：何とかなっているんです、それは、だから、多分〇〇さんがいなければ、私も盲世界と縁切った可能性が高いし、切ってその辺で生きていたかも、だから、そうすると、まずそのK会社につながるJ会社の仕事は来なかっただろうし、J会社がなければK会社はないし、K会社がないと私は〇〇大学はないし

Q：すごいですね

H：K会社、〇〇大学がないと、ここがないです、全てがもう直結している、つながっているので、それはもう、もとをたどれば〇〇さんの、盲世界をばかにせずにこつこつ生きてれば何とかなるよという、あの無責任な一言が私を形づけた

【比較優位に立てる現状を利用しない手はないと思い利用した】

H氏は、「経済用語で比較優位っていう言葉があるんだけど、もうすでに自分が優位に立っている、自分の立場を利用しないわけにもいかないんだなっていうことは、だんだん結論として出てくるわけです」、「視覚障害に関する研究だったり、自分が一番よく知っている視覚障害を今まで見てきた自分だけが感じた、そういう内容というのはいっぱいあるので、そういうところを研究テーマとしたほうが、圧倒的に周りからすれば、すぐに上に立てるっていう現状があって、でも、それはもう比較優位を利用しない手はないなと思って、利用している状況ではある」、「点字は自分しか読めなくて、商品に対するアドバイスはまったく自分しかできないというのが、これは特殊能力だな」と、【比較優位に立てる現状を利用しない手はないと思い利用した】。

＜経済用語で比較優位という言葉があるけど、自分が優位に立っている、自分の立場を利用しないわけにもいかないのだなっていうことが、視覚障害者という立場を利用した研究を自らが行ったことで、結論として出てきた＞

H：そういうふうに位置付け始めると、そうするとその研究のときも、視覚障害だから視覚障害の研究っていうのは、もうできることなら本当はしたくない、関連研究はしたいけれども、おのずと触覚っていうのしたくないと言いながら、点字を読むときに触覚調べたほうが、視覚障害者連れてくる問題なり、いろんな意味で私しかできない問題がいっぱいあって、経済用語で比較優位っていう言葉があるんだけど、もうすでに自分が優位に立っている、自分の立場を利用しないわけにもいかないんだなっていうことは、だんだん結論として出てくるわけです、でもその一方、自分では本当はそれはした

くないんですよ、私もできることなら、こっから逃げたいっていうか、でも、結局そう言いながらも、研究はそういう方向をするわけなんですね、だから、するんだけど、そうするなら、ちょっと派手なじゃないけど、ちょっとかっこよく見えたいっていうのがあって

＜視覚障害を通じて自分だけが感じたこと、そういうことを研究テーマとしたほうが、比較優位に立てる現状があって、それを利用しない手はないなと思って利用している＞

H：それは付随的に、英語が必要だったり、その他の技能が必要だったりして、つまずくところがあったりするわけです、そういうのよりかは、これなら自分が得意としていてよくできるっていうのを、今むしろやろうとしているんですね、それが、やっぱり今おっしゃるような、視覚障害に関する研究だったり、自分が一番よく知っている視覚障害を今まで見てきた自分だけが感じた、そういう内容というのはいっぱいあるので、そういうところを研究テーマとしたほうが、圧倒的に周りからすれば、すぐに上に立てるっていう現状があって、でも、それはもう比較優位を利用しない手はないなと思って、利用している状況ではあるんですね

＜会社に入る時は、○○にいた人達と会話は通じるだろうかと不安で、違う世界の人のようにしか思えなかったけど、入ってみれば、もともと経済が好きといのもあって、何を話しても、負けるものがなくて、私のほうが全然詳しいなと思って、経済が好きだった自分の趣味も活かせつつ働くことができた＞

H：入ってみて、私そのときには正直にものすごく不安で、○○会社にいたって人たちと私に何ができるんだろうっていう、むしろもう不安だらけで、会話は通じるんだろうかとか、まったく違う世界の人間のようにしか思えなかったわけです、入ってみれば、私もともと経済が好きなんだっていうのもあって、まったく何話しても、私負けるものがなくて、私のほうが、全然詳しいなと思って、経済状況 SONY が何とかとか、どこがどのくらいの生産量で、もう私そういうのがもともと趣味のように好きな人間だったので、だから、もうヒューレット・パッカードの社長は女性になりました、ちょうどその話題で、ええ、そんなことないよとか言うんだけど、調べたら本当そうだったとか言って、謝らないといけないぐらい、そういうぐらいだったので、そういう経済が好きだった自分の趣味も活かせつつ

＜自分しか点字が読めないこと、商品に対するアドバイスはまったく自分しかできないことを特殊能力だと思った＞

H：点字は自分しか読めなくて、商品に対するアドバイスはまったく自分しかできないというのが、これは特殊能力だな

＜触覚と脳科学の研究に本当は興味があって、そういった研究をしたかった＞

H：本当は、ずっと私は触覚をやったので、触覚研究者とずっと会っているし、そこら辺の研究者より

も知識全然私のほうがあるわけだから、営業マンするには、それの医学部の先生に、これ買うとこんな研究できていいですよっていうのを、うまく言わないといけなかったんで、そういう意味ではそっちの研究やったほうが、私にとっては普通に研究に本当は興味があるし、そっちをやりたかった本当は、触覚と脳科学の関係

【視力が急激に落ちることに対して周期的に不安が襲ってくる】

・(前述した)。

【視覚障害を理由に進路希望先の大学や会社から進路を断たれる】

・(前述した)。

【視覚障害を通じた経験を必要とされて就職する】

H 氏は、「企業が新しい視覚障害者用の製品を作ったんだけど、全盲はいやだと、全盲は嫌だけど会社まで自分の足で歩いてくるんだけど点字が読める人を望んでんだけど」と、全盲ではない点字が読める視覚障害者を探している企業を紹介され採用される。

＜全盲ではない点字が読める視覚障害者を探している企業を紹介され採用される＞

H : 11 月 1 日から急に就職が 10 月に決まっちゃうんですが、9 月末に話が来て、急に来るんですよね、急に、○○の館長さんから電話が来て、あんた点字読めたよねとか言われてですね、点字普通に読めるわけです、ある企業が新しい視覚障害者用の製品を作ったんだけど、全盲はいやだと、全盲は嫌だけど会社まで自分の足で歩いてくるんだけど点字が読める人を望んでんだけど、そんな人が日本にはなかなかいないと、で、本当うちの○○にはそういう就職目指すための研修生がいっぱいおるので、うちの研修生を紹介したいところなんだが、そんな人が他にもうちの研修生どころか、探してもいなく、あなたは外国人だけど、あんたしかいないと、採用してくれるかどうか分かんないけど、ちょっと話聞きに行かないかとか言われて、企業に行ってみたところ私でいいって言うんですね、即もう採用、給料もその日に決まって、私もそのときなんも市場の価値知らないんで、給料どのくらいほしいと言われて、30 万超えればいいです、適当に言ったんだけど、よっしゃ 30 万とか言って

＜知り合いから、どうも H さんのような支援機器も使える、H さんのような人を募集しているようなにおいがすると、視覚障害者の友人から教員採用の試験を受けることをすすめられる＞

H : 知り合いから、こういう募集が出たんだけど、どうも H さんいいと思うんだけどなっていうのを、ここを目指したい視覚障害教育やっている友人が言うわけです、私ももちろん受けるけど、むしろ私よりもどうも H さんのような支援機器も使えて、H さんのような人をどうも募集しているようなにおいがすると、受けてみたらいいんじゃないみたいなこと言われて

【障害による差別が嫌だ】

H 氏は、「おまえバカだな的なこう、子ども扱いするわけですよ、それがすごく私は嫌で、その目が見えないからといってなぜかこの集団ではそういう扱いをされるのがもうたまらなくて」、「障害に不安になることはなくなっているだけであって、障害があってこう差別されることは常にあるので、かちんとなるときはいっぱいあります」と話す。

＜一般社会に出れば指導員と対等で張り合えるのに、盲学校の宿舎では指導員のことを先生と呼ばないといけないし、指導員は私のことを子ども扱いしてくる、それがすごく嫌でたまらなかった＞

H：盲人はつくられるっていう社会学の有名な本があるんですね、機会があればぜひその 1　冊読んでみてほしいのですが、そのとき私が悩むのがいわゆるその『盲人はつくられる』っていうんじゃないけど、その集団、その盲人が所属している集団の中に自分が○○大学の修士出ているんだけど、そこの盲学校の寄宿舎の指導員たちっていうのは短大だったり、高卒だったりするわけですよ

Q：盲学校

H：一般社会に出れば別に対等で張り合えるのに、なんか俺はこいつらを先生と呼ばなあかんし、こいつらは私のことをおまえとか言うわけですよ、おまえバカだな的なこう、子ども扱いするわけですよ、それがすごく私は嫌で、その目が見えないからといってなぜかこの集団ではそういう扱いをされるのがもうたまらなくて

＜障害を不安に思うことはなくなっているけど、障害があって差別されることは常にあるので、かちんとなるときはいっぱいある＞

H：障害に不安になることはなくなっているだけであって、障害があってこう差別されることは常にあるので、かちんとなるときはいっぱいあります

【その時その時を必死で頑張った】

H 氏は、点字会社で働いている際、今ここで博士課程にチャレンジしないと一生涯サラリーマンで終わるし、今の会社も不安定でいつかは潰れるか、首になるか、一生涯ここで働ける保証は見えてこないと思っている時に、友人と話したことを切っ掛けに博士課程へ進むことを決める。

＜今ここで博士課程にチャレンジしないと一生涯サラリーマンで終わるし、今の会社も不安定でいつかはつぶれるか、首になるか、一生涯ここで働ける保証は見えてこないと思っている時に、友人と話したことを切っ掛けに博士課程へ進むことを決める＞

H：研究会に私も時々顔を出していて、そのときのメンバーでもあり友人でもある一人がサラリーマンになってからもそういう活動を一切してなかったんだけど、急に連絡来て、今度実は関東で、長野で障害学会あるから遊びに来てよって言われて、久しぶりに参加するわけです、2006 年の冬だか秋だかぐらいにですね、それで参加してですね、2006 年の冬に参加して、そうだ俺なんか本当は研究者を目指していたんだなと思って

Q：そこで、はい

H：そうだもう一回博士号取るとかなると、今ここでチャレンジしないと一生涯もうサラリーマンで終わるし、ここの会社も不安定でいつかは潰れるか、首になるか、一生涯ここで働ける保証はどうも見えてこないなと思って、不安もあって、そこで悩むんです、2006 年の冬に、悩んで、その頭ずっと持っていてなんかせなあかんやろなと話もして、その 2007 年の 3 月に、2 月の終わりだか 3 月の初め頃に視覚障害者の友人からから電話来て、身の上相談を相談されるわけですよ、私はそこで相談されて、そういう方がいるんだと、こんなんこんなんで話、その身の上話を 2 時間ぐらい聞かされて、んで、ついでに大学院っていうのはどんなものみたいな感じで、彼視覚障害で博士課程だったので、どんな感じってもう、○○さんっていうのが東京から仕事しながら土日だけ通っているから、H さんももし入りたいんであればいつでも大歓迎だよみたいなこと言うわけですよ、彼が、その次の日が私韓国に出張があって、出張の前の前日の夜だったんです、夜遅く、で、そういう話して、その話おもろいから願書まだ間に合うのとか言って、私なんにも勉強してないのに受かるんかねとか言って、そういう話をしているわけ、全然勉強してなくてもいいし、願書はまだ 1 週間ぐらいあるから大丈夫だし、全然 OK だと言う訳ですよ、彼が、めっちゃおもろいなとか言ってたいら先生にちょっと言っといてくれるみたいな感じで韓国 1 週間ぐらい行って帰ってきて、先生会いたいって言っているからってんで、さっさともう○○へ行って、会ったらいつでも入ってください的なこと言われるんで、それで急激にもう決めて試験といっても試験ってなんか確か面接だけだったかなんかで、受かるんです、受かって、それで 2007 年 4 月からいきなり博士課程の大学院生になるんです

【社会の認識との違いで生じる将来に対する不安】

・(前述した)。

［役割獲得期］

＜出来事＞

・点字機器製作会社に就職する。

・盲学校の先生を目指す学生の教育を行う。

＜カテゴリー内容の説明＞

【仕事上で意見を求めらる人間関係が出来たことで視覚障害者として意見が言えることに自信がついた】

H 氏は点字会社で働きはじめた際は、「最初はそれができても、何の意味が、自分にそれできることに対する意義、意味を持てなかったんです、点字読めるし言えるのは当然だし、別にこの仕事にかぎってできることだけであるから、何の自分が仕事やっている意味合いも持てないし、こんなんでいいのかなっていう感じだった」が、次第に、「だんだん周りから、私の話をまず聞こうとするし、これはどう、あれはどうみたいな、これはどう思うというのがなってくると、私ちゃんと仕事やっているんだっていうのと、ちゃんとみんなと会話

ができているんだ」と、【仕事上で意見を求めらる人間関係が出来たことで視覚障害者として意見が言えることに自信がついた】経験をした。

＜最初は仕事をやっている意味合いを持てなかったが、意見を求められることで、ちゃんと仕事をしていると思える人間関係が出来、だんだんと視覚障害者として意見が言えることに自信がついた＞

H：自分、私はもう、最初はそれができても、何の意味が、自分にそれできることに対する意義、意味を持てなかったんです、点字読めるし言えるのは当然だし、別にこの仕事にかぎってできることだけであるから、何の自分が仕事やっている意味合いも持てないし、こんなんでいいのかなっていう感じだった、ところが、だんだんそれが、意識が変わってくるんです、すごくだんだん周りから、私の話をまず聞こうとするし、これはどう、あれはどうみたいな、これはどう思うというのがなってくると、私ちゃんと仕事やっているんだっていうのと、ちゃんとみんなと会話ができているんだというのと、人間関係っていうのが国籍、年、今まで生きてきた環境があんまりにも違う学生しかやったことなかった等々が、それなりにここでも通じるんやなっていうのが、だんだん自信がついてくるわけです

【視覚障害があることで自分の話に説得力があるとプラス面を感じるようになってきたことに自分でも驚いている】

H 氏は、「なんか私話ものすごい説得力あるやろうなと思いながら、むしろプラス面を感じるようになってきたっていうところは自分でもちょっとびっくりなんだけど」と話し、仕事を通じて、【視覚障害があることで自分の話に説得力があるとプラス面を感じるようになってきたことに自分でも驚いている】。

＜視覚障害があることで自分の話に説得力があるだろうと、プラス面を感じるようになってきたことに自分でもびっくりしている＞

H：不安を感じないし、全く見えなくなっちゃったらあれだな、本当不便やろなっていうのは感じるんです、はっきり言うと、それは思うんだけど、でもなんか私話ものすごい説得力あるやろうなと思いながら、むしろプラス面を感じるようになってきたっていうところは自分でもちょっとびっくりなんだけど

【視覚障害が進んでも不安を一切感じない】

H 氏は、以前は視力が急激に落ちることに対して周期的に不安が襲ってきたが、現在は、「視野もだいぶもう今はもう難しくなってきて、目でなんか何か見てやる作業がなかなか難しくなってきているので、それで最近そうなってきているのにも不安を一切感じないんですよね」と話し、【視覚障害が進んでも不安を一切感じない】との認識を持っている。

＜最近は視覚障害が進んでも不安を一切感じない＞

H：進んできているので、視野もだいぶもう今はもう難しくなってきて、目でなんか何か見てやる作業がなかなか難しくなってきているので、それで最近そうなってきているのにも不安を一切感じないんですよね

【職場内での支援があることで働ける】

H 氏は教育大学の職場の環境について、「私実は支援者が付いたんです」、「支援も受けつつですね、これが、いわゆるちょうど私が本当に今思っているのが、それこそ差別禁止法だとか障害者権利条約を日本が批准してなく、あるいはこういうのがない時代に生きているんだったらば、私はもう今のような仕事はできなかっただろうし、本当時代を、うまくいい時代に生まれたなっていう、それに関する感謝が私の場合は普段大きいんです」と話し、【職場内での支援があることで働ける】と想っている。

＜私は何も言ってないのだけど、会議で H さんの支援をそろそろ本格的に考えないといけないんじゃないでしょうかっていうのがあって、その結果、支援者を付けましょうということが、あっという間に決まった＞

H：もう、これ 10 年、20 年前だと、そういう話で、そんなにあんまり通じないですね、20 年前だと、ん、みたいな、今だからこそなるし、今隣には私実は支援者が付いたんです、今年から、支援の方が、目が見えないっていうことで、それも差別解消法だったり禁止法だったり、障害者権利条約を批准して、そういう日本の特別な法律ができることで、その法律っていうのは、今まで基本福祉っていうのは申請主義っていうか、いくらいい福祉があっても、こんなんがあるんだけど使いますかではなくて、本人が申請しないかぎり、年金も福祉サービスも何ももらえんのが、日本の福祉の特徴なんです、僕ら、障害者権利条約あるいは差別禁止法の場合、一項に情報提供しないといけない項目がどうもあるらしいんですよ、例えば、同じ教職員の中に、どうしても障害があって、支援を必要とする人に対して情報提供しなければ、それも違反になるという条項がある、そのせいなのか、会議で私何も言ってないんだけど、うちの講座会議でまず、H さんの支援をそろそろ本格的にちょっと考えないといけないんじゃないでしょうかっていうのが、講座の会議としてなったっていうのが、その会議を受けて、じゃあ話し合いをした結果、多分教職員に対しては人事だろうということで、人事にじゃあ私のほうで聞いてみますっていうので、人事に相談したところ、支援者を付けましょうということが、あっちゅう間に決まったんです、私の目が見えない部分に対して、これも例えばこういうの書いてくださったり

＜支援がなかったら、私はもう今のような仕事はできなかっただろうし、本当にいい時代に生まれた＞

H：支援も受けつつですね、これが、いわゆるちょうど私が本当に今思っているのが、それこそ差別禁止法だとか障害者権利条約を日本が批准してなく、あるいはこういうのがない時代に生きているんだったらば、私はもう今のような仕事はできなかっただろうし、本当時代を、うまくいい時代に生まれたなっていう、それに関する感謝が私の場合は普段大きいんです、自分より早くても同じような私のような人間があっても、日韓関係ももっと悪いし、日本の教育大学の教員にはまずなれないし、なったところで支援を受けられないし、実際に、全盲で教育大の教員になったけど、去年辞めた教授がいるんですよ、全盲で、盲目の先生がやっていたんだけど、教授になって、理由は分かんないけど、はっきり言うと、私はもう多分、その方は結局終わるまで支援者が付かなかったみたいで、大学の教授

で支援者付かないと、もう多分務まらないだろうなっていうのは、正直に思いました、相当、苦労されたんだろうなって

【博士課程の研究内容を大学の先生達からすごく興味を持たれた】

H 氏は、「すごく積極的に、いきなり入ったとたん講演会をさせてくれたり、アプローチしてきた先生もいるぐらいすごい当時としてはその分野でアシスティブテクノロジー研究っていうのはしている人も少なく、興味持たれたんですよ、ものすごく」と話し、【博士課程の研究内容を大学の先生達からすごく興味を持たれた】との認識を持った。

＜博士課程の研究内容であるアシスティブテクノロジーについて、当時は研究をしている人が少なく、大学の先生達からものすごく興味を持たれた＞

H：アシスティブテクノロジーっていう分野で、その当時アソシスティブテクノロジーがなぜか知らないけど〇〇大学の中でちょっと話題になってきているときに私は企業に勤めているっていうで、その研究したいっていうんで、私のそのなんちゅうんだろう、面接官に私は〇〇先生に入りたいって言ったのだけど、もっと興味持った先生がものすごく積極的に、いきなり入ったとたん講演会をさせてくれたり、アプローチしてきた先生もいるぐらいすごい当時としてはその分野でアシスティブテクノロジー研究っていうのはしている人も少なく、興味持たれたんですよ、ものすごく

【障害を持った人が学校にいるだけで学生にとっては良いことだという人事職員の発言を聞き社会の成熟を感じた】

H 氏は人事の職員から、「もう H さんがいるだけでも、学生にとってはものすごいいい、それ自体がいい勉強になっていると、こういうふうに見えない先生が、文字も見えない先生が教えているその様子を見ながら、その学生たちは果たして盲学校の教員になったときに、あんたたちは見えなくても大学の先生もなれるよと、その頭があって教えるのと、この子らは何がなれるんだろうかって、何も知らずに教えるのと全然違うよ」と言われ、「私が気分いいように言っただけなんかもしれないけど、嘘でもそう言える、それをある程度私も信じ込まざるを得ない社会になった」と想ったと話す。

＜人事の職員から、H さんがいるだけで学生にとってはものすごくいい、それ自体がいい勉強になっていると言われ、それをある程度私も信じ込まざるを得ない社会になったと感じ、社会の成熟を感じた＞

H：これはそれこそ社会がだんだん成熟した社会になっていくことで、障害者を雇うそれ自体が、言ってみれば人事がそういうことをおっしゃるんですが、人事の職員が、もう H さんがいるだけでも、学生にとってはものすごいいい、それ自体がいい勉強になっていると、こういうふうに見えない先生が、文字も見えない先生が教えているその様子を見ながら、その学生たちは果たして盲学校の教員になったときに、あんたたちは見えなくても大学の先生もなれるよと、その頭があって教えるのと、この子らは何がなれるんだろうかって、何も知らずに教えるのと全然違うよっていうのを、うちの人事の方、

ある方がそれをおっしゃっていました、それ私も、そこまで考えたことないんだけど、それ言われてありがたいし、なるほど立派だなと思って、そう思ってくれる、私が気分いいように言っただけなんかもしれないけど、嘘でもそう言える、それをある程度私も信じ込まざるを得ない社会になったっていうのがですね、社会自体が、ものすごく成熟したんだろうなというのを、感じながらですね

【当事者である自分に助言を求められることがいっぱいある】

H 氏は、障害があることで、例えば教育相談だったり学生だったりに対する発言力が高くなるというか効果がある、本では分からないことがあって、当事者である自分に助言を求められることがいっぱいあるとのに意識を持っている。

＜障害があることで、例えば教育相談だったり学生だったりに対する発言力が高くなるというか効果がある、本では分からないことがあって、当事者である自分に助言を求められることがいっぱいある＞

H：一つは、障害があることで、例えば教育相談だったり学生だったりに対する、私、発言力が高くなるというか効果としてあるのと、やっぱり特にここの分野っていうのは、その当事者じゃないと、なかなかこう本の中で研究したり読んだだけでは分かんない分野がいっぱいあるんですね、そういう分野がいっぱい出てくるので、そういうところは必ずうちの先生方が私に対して、これはこれで合ってそうですか的な、やっぱり必ず助言を求めるって場面っていうのはいっぱいあるわけだし、そういう意味では、それなりに役割がある

【仕事上での期待をずっと受けていると思わなかった】

H 氏は、「(点字機器製作会社に勤めて）最初すごく期待されたんだけど、20～30 枚、30 枚ぐらいかな、批判のレポート出した瞬間、もう研究員、最後にはもうみんな私の話を聞かざるを得ないんで、戻ってきて仲良くなりますけど、そこで誤解を受けてしまって、何だこいつはなって、人間関係を修復するのにものすごく苦労した」、「会社嫌がるような研究ずっと続けるっていう意味では、途中からはそう（期待があるわけ）でもなかった」、「ずっと期待されるほど、仕事ができたとも言えないですね」と話し、【仕事上での期待をずっと受けていると思わなかった】との認識を持っていた。

＜批判のレポートを出すなど、言いたいことを言う性格であることもあって、誤解を受けてしまうことがあり、人間関係を修復することに苦労したことから、期待を受けているとはあまり思わなかった＞

Q：周りからお仕事就かれてから、すごい期待を受けていたという実感は、ずっとあると言ったらあれですけど

H：それはね、あんまりそうでもないですね、そういう傾向はあるんだけど、最初はめちゃくちゃ頑張るんですよ、J 会社入ったときも、最初すごく期待されたんだけど、20～30 枚、30 枚ぐらいかな、批判のレポート出した瞬間、もう研究員、最後にはもうみんな私の話を聞かざるを得ないんで、戻ってきて仲良くなりますけど、そこで誤解を受けてしまって、何だこいつはとなって、人間関係を修復

するのにものすごく苦労したし、K 会社へ行ったときも、高学歴だったしできる部分がすごくあったので、最初はすごく期待されたんだけど、そのうち私性格にして、大体言いたいこと言うところもあるし、会社嫌がるような研究をずっと続けるっていう意味では、途中からはそうでもなかったというのはあります

＜売り上げがコンスタントに上がることはなかったため、ずっと期待されるほど、仕事ができたとも言えない＞

H：ずっと期待されるほど、仕事ができたとも言えないですね、はっきり言うと、というのは、特に研究関連の仕事というのが、いつ作るか分かんないし、売り上げがコンスタントに上がるようなものじゃなかったので、前年度の人はいたのはいた、その人は 2 年半ぐらい売り上げゼロだったんですよ、それに比べると、私は全然、毎年 1000 万まではいかないけど、ちょっとそれなりの売り上げは上げていたんで、それよりかはたまたま運良く売れましたけど、でも、だからといって、本当に何らか期待をすごく受けたって、感じではないですね

【視覚障害者の立ち場から開発中の商品に対して言いたいことを言い仕事上での人間関係が壊れる】

H 氏は、「これ売ったら詐欺になりますから売らんほうがいいですとか言って、言いたいこと言っちゃうわけです、もういきなり嫌われ始めて」、「そこで誤解を受けてしまって、何だこいつはとなって、人間関係修復するのにものすごく苦労した」と話し、【視覚障害者の立ち場から開発中の商品に対して言いたいことを言い仕事上での人間関係が壊れる】経験をした。

＜就職した会社が開発していた点字の製品は点字を読む利点を活かせていなくて、むしろマイナスが多いと思い、これ売ったら詐欺になる売らないほうがいいですと言って、言いたいことを言って、いきなり嫌われ始める＞

H：入って製品を見たら、発売が後 2、3 カ月後というんだけど、これ売ったら詐欺になりますから売らんほうがいいですとか言って、言いたいこと言っちゃうわけです、もういきなり嫌われ始めてですね、ほんでもう当時私あんまり空気読まない人間なんで、言いたいこと言ったような人間なので、これもう詐欺になるから売らんほうがいい、なんでかっていうのをその理由書を 40 枚ぐらい書いて出したんです企業に、こうこう理由で、例えば機能で言えばこの機能はもう使えないし、この機能はいらないし、その全体的に言うとこういう製品はいらないっていうような

Q：そもそもいらないみたいな感じですね

H：そもそもいらない製品であると、そもそも向かない

Q：なるほど

H：点字には点字っていうのはこういう特徴があるんだけど、この製品は点字を読む利点を活かせてなく、むしろマイナスが多くて、企業が言う指を動かさなくても点字が読めるという、こういう特徴は

いらないという

＜点字を全く知らないマスコミ関係者、盲学校の関係者、福祉の関係者、視覚障害を持つ親だったりは、素晴らしい商品が出たと喜んだが、当事者からすれば何これ、使えないだろうと思った＞

H：有名だったんですよ、マスコミには取り上げられ、日本の海外の日本人に誇りたい 5 社だか、6 社に選べれて、またどっかが来てですね、正確に忘れたけどそのビデオ、当時はビデオ、まだビデオで、ビデオ制作して、私も 1 本いまだに持っているんですよ、ちらっとそこに私も映るんだけど、そういう紹介されるなど、いろんな紹介されるなど有名になるんだけど、点字を全く知らないマスコミ関係者だったり、盲学校の関係者だったり、福祉の関係者だったり、視覚障害を持つ親だったりはみんな喜ぶわけですよ、素晴らしい製品が出たなという、ところが当事者は分かる人からすればええ何これみたいな、これ使えんやろうっていうですね

＜批判のレポートを出すなど、言いたいことを言う性格であることもあって、誤解を受けてしまうことがあり、人間関係を修復することに苦労したことから、期待を受けているとはあまり思わなかった＞

Q：周りからお仕事就かれてから、すごい期待を受けていたという実感は、ずっとあると言ったらあれですけど

H：それはね、あんまりそうでもないですね、そういう傾向はあるんだけど、最初はめちゃくちゃ頑張るんですよ、J 会社に入ったときも、最初すごく期待されたんだけど、20～30 枚、30 枚ぐらいかな、批判のレポート出した瞬間、もう研究員、最後にはもうみんな私の話を聞かざるを得ないんで、戻ってきて仲良くなりますけど、そこで誤解を受けてしまって、何だこいつはとなって、人間関係修復するのにものすごく苦労したし、K 会社行ったときも、高学歴だったしできる部分がすごくあったので、最初はすごく期待されたんだけど、そのうち私性格にして、大体言いたいこと言うところもあるし、会社嫌がるような研究をずっと続けるっていう意味では、途中からはそうでもなかったというのはあります

２．８人を合わせた障害経験を活かした役割の獲得に至る過程

８人分の障害経験を活かした役割の獲得に至る過程を統合し、役割に対する願望・認識の変化の過程（図 11)、障害に対する願望・認識の変化の過程（図 12)、他者・社会のサポート・期待感の変化の過程（図 13)、他者・社会への願望・関係の変化の過程（図 14）ごとに呈示した。

文章中のカテゴリーは【】で表記し、【】内に記したカテゴリー名の後の（）に、ケース氏名を表すアルファベットと、カテゴリーとコンセプト表で示したカテゴリ番号を呈示した。

例えば、A 氏のカテゴリーとコンセプト表で示した、カテゴリー1.障害を持った人と関わりを持ちたい、というカテゴーリーであれば、【障害を持った人と関わりを持ちたい（A1)】と呈示した。

1）役割に対する願望・認識の変化の過程

役割に対する願望・認識の変化の過程（図 11）を見ながら、役割に対する願望・認識について説明をする。

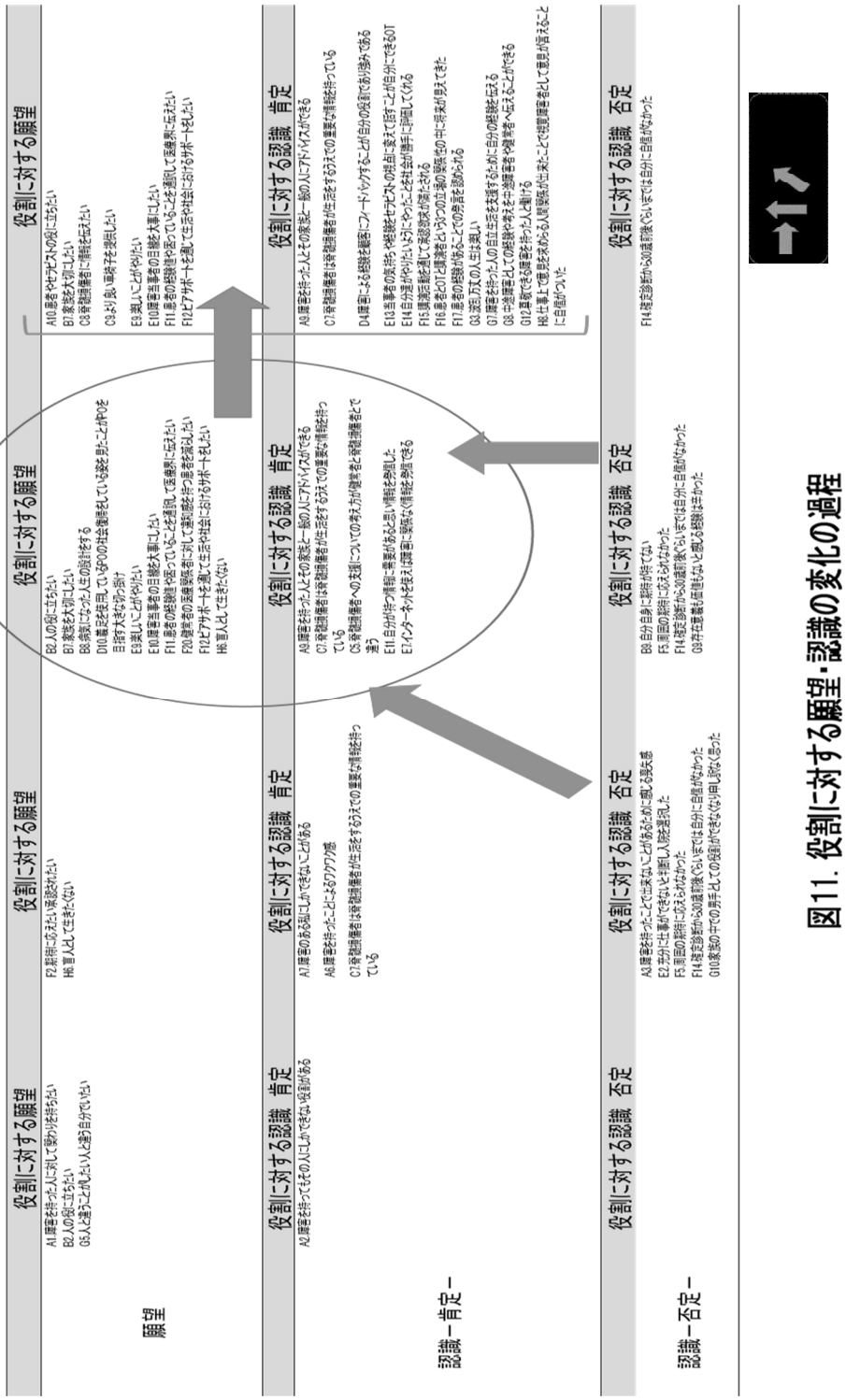


図11. 役割に対する願望・認識の変化の過程

障害経験を活かした役割の獲得過程における、役割に対する願望・認識の変化については、発症により役割に対する否定的な認識を持ちながらも、役割創造期において役割に対する肯定的認識や役割に対する願望を持ったことで、役割獲得に至っていたことがみられた。

説明を加えると、発症により、仕事や家事ができないこと、周囲からの期待に応えられないことから、自分に自信や期待を持てなくなったが、障害経験があることで出来ることがあると気づき、また、やりたいことがあると希望を持つことで、役割を創造するまでに至ったことが分かった。

以上のことから、役割に対する認識－否定－、役割に対する認識－肯定－、役割に対する願望に着目をして、以下に説明をする。

（1）役割に対する認識－否定－について

発症後

発症により、【障害を持ったことで出来ないことがあるために感じる喪失感（A3)】を持つことや、【周囲の期待に応えられなかった（F5)】ことから、【確定診断から 30 歳前後ぐらいまでは自分に自信がなかった（F14)】、【家族の中での男手としての役割ができなくなり申し訳なく思った（G10)】ことがあった。

また作業療法士であった E 氏は発症により、「自分が担当をしていたら、他の人がやった方が良くなるんじゃないかっていうのがあって、何か自分の中で続けていけられなくなっちゃって」と想い、【充分に仕事ができないと判断し入院を選択した（E2)】。

役割創造期

B 氏は病気の診断を受けてからの 2 年間は大学院への進学を考えるなど、自分に期待を持って働いていたが、できないことが増えることで、【自分自身に期待が持てない（B9)】と思うようになる。F 氏は、自らが立ち上げた CMT のインターネット掲示板に寄せられてくる質問に答えられず、【周囲の期待に応えられなかった（F5)】ことから引き続き、【確定診断から 30 歳前後ぐらいまでは自分に自信がなかった（F14)】。

また、G 氏は「最初に入った会社、そこでは酷かったですよね、僕の方見ないって言うか、頭越しに会話しちゃって」、「ただそこに居るだけっていうの、それは辛かったですね」、「存在意義も価値もないっていう」と話し、【存在意義も価値もないと感じる経験は辛かった（G9)】と、役割に対して否定的な認識を持った。

このように、発症後と役割創造期に役割に対する否定的な認識を持つが、役割創造期において、障害経験があることで出来ることがあると気づき、また、やりたいことがあると希望を持つことで、役割を創造するまでに至っている。

役割獲得期

役割を獲得した後の役割に対する否定的な認識に関するカテゴリーは、F 氏以外を除く 7 人にはみられなかった。この F 氏については確定診断から役割獲得後の 30 歳前後ぐらいまで、「大丈夫か、ダメかもしれない、でもやれるかもっていう、常にグルグルしていた、だめかも、だめかも、でもできるかも」と役割を行うことでの葛藤を抱え自分に自信を持てなかったが、【講演活動を通じて承認欲求が満たされる（F15)】等、次第に自信を持てるようになってきている。

（2）役割に対する認識－肯定－について

役割創造期

障害経験があることで出来ることがあると気づけたのは、【自分が持つ情報に需要があると想い情報を発信した（E11)】ことで、E 氏「何か自分が言っていることも役に立つんだなっていうのを思って、だから何か、もっと専門職とか、OT とか介護士さんとか仕事をしているレベルの人達に話したいな」等、自身が持っている障害を持った人としての経験により、【障害を持った人とその家族と一般の人にアドバイスができる（A9)】、【脊髄損傷者は脊髄損傷者が生活をするうえでの重要な情報を持っている（C7)】、と思ったからといえる。

また、C 氏「もう少しなんか、もうちょっと、俺やったらこうしてあげたいな」と、【脊髄損傷者への支援についての考え方が健常者と脊髄損傷者とで違う（C5)】と思い、自身が持っている障害を持った人としての経験によるアドバイスが健常者にはできない内容であると認識したことで、障害経験があることで出来ることがあると気づけたといえる。

そして役割を担う方法として、【インターネットを使えば障害に関係なく情報を発信できる（E7)】と気付けたことも、役割があると思えた背景にあった。

役割獲得期

実際に獲得した役割では、自身が持っている障害を持った人としての経験により、【障害を持った人とその家族と一般の人にアドバイスができる（A9)】、【脊髄損傷者は脊髄損傷者が生活をするうえでの重要な情報を持っている（C7)】、【障害による経験を顧客にフィードバックすることが自分の役割であり強みである（D4)】、【当事者の気持ちや経験をセラピストの視点に変えて話すことが自分にできる OT（E13)】、【障害を持った人の自立生活を支援するために自分の経験を伝える（G7)】、【中途障害としての経験や考えを中途障害者や健常者へ伝えることができる（G8)】と、同じ障害を持った人、障害を持った人の家族、一般の人、医療従事者へのアドバイスが行えている。

また、【自分達がやりたいようにやったことを社会が勝手に評価してくれる（E14)】、【患者の経験があることでの発言を認められる（F17)】、【仕事上で意見を求められる人間関係が出来たことで視覚障害者として意見が言えることに自信がついた（H8)】と、自ら創造し

た役割が社会から役割として認められるようになっている。

そして、【講演活動を通じて承認欲求が満たされる（F15)】、【患者と OT と講演者という 3 つの立場の関係性の中に将来が見えてきた（F16)】、【波乱万丈の人生は楽しい（G3)】、【尊敬できる障害を持った人と働ける（G12)】と、役割を通じて承認欲求が満たされることや、人生は楽しいと生活が豊かになることを感じている。

（3）役割に対する願望について

役割創造期

やりたいことがあると希望を持つことができたのは、障害を持ったことで自分自身に期待が持てなくなり、【病気になった人生の設計をする（B8)】ことで、【家族を大切にしたい（B7)】、【人の役に立ちたい（B2)】との考えに至ったことや、【義足を使用している PO の社会復帰をしている姿を見たことが PO を目指す大きな切っ掛け（D10)】と、同じ障害を持って社会復帰をしている方のようになりたいと目指す将来像を見たことが背景としてあった。

また、障害者としての経験から、【患者の経験値や困っていることを通訳して医療界に伝えたい（F11)】、【健常者の医療関係者に対して違和感を持つ患者を減らしたい（F20)】、【ピアサポートを通じて生活や社会におけるサポートをしたい（F12)】と、【障害当事者の目線を大事にしたい（E10)】と思えたことが、役割に対する希望となったといえる。

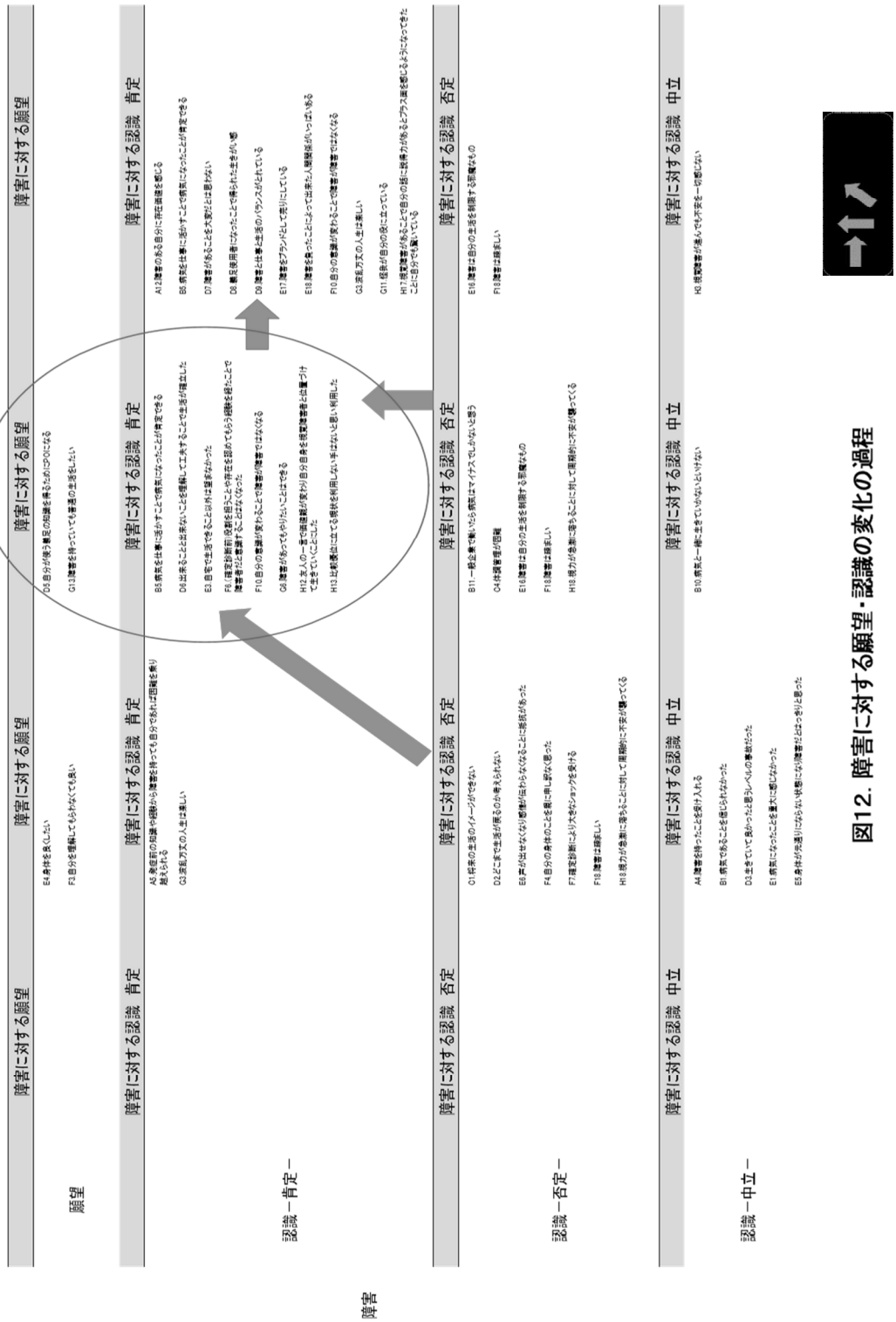
また、E 氏「(嚥下食が）本物のように出来るから楽しくなってきちゃって、何か工作感覚で、作っていても楽しいし」と、【楽しいことがやりたい（E9)】との想いを持つことや、H 氏「甘えずに今まで自分がこう持っていた自分の自尊心を持ち続けよう」、【盲人として生きたくない（H6)】との想いを持つ等、障害を持って生活をする中で自身の価値観が明らかになり、自身がどのようなことをしたいのかを自身で考えられるようになったことが希望を持てた背景にあった。

役割獲得期

実際に獲得をした役割を通じて、【患者やセラピストの役に立ちたい（A10)】、【家族を大切にしたい（B7)】、【脊髄損傷者に情報を伝えたい（C8)】、【より良い車椅子を提供したい（C9)】、【楽しいことがやりたい（E9)】、【障害者当事者の目線を大事にしたい（E10)】、【患者の経験値や困っていることを通訳して医療界に伝えたい（F11)】、【ピアサポートを通じて生活や社会におけるサポートをしたい（F12)】と、今後に向けた更なる希望を抱くことができている。

2）障害に対する願望・認識の変化の過程

障害に対する願望・認識の変化の過程（図 12）を見ながら、障害に対する願望・認識について説明をする。



障害経験を活かした役割の獲得過程における、障害に対する願望・認識の変化については、発症により障害に対する否定的な認識を持ちながらも、役割創造期において障害に対する肯定的認識や障害に対する願望を持ったことで、役割獲得に至っていたことがみられた。

説明を加えると、発症により持った障害に対して、障害は生活を邪魔する疎ましいもの、障害はマイナスでしかないものと否定的な認識を持つが、日々の生活やその葛藤の中で、障害を持っていても普通の生活をしたいと希望を抱き、また障害を利用しない手はないと想う等、次第に障害に対する肯定的な認識を持つようになる。そして獲得した役割を通じて、障害のある自分に存在価値を感じることや、障害が自分の役に立っていると想うなど、障害のある自己を認められるまでに至ったことが分かった。

以上のことから、障害に対する認識－否定－、障害に対する認識－肯定－、障害に対する願望に着目をして、以下に説明をする。

（1）障害に対する認識－否定－について

発症後

発症により障害を持つことで、【将来の生活のイメージができない（C1)】、【どこまで生活が戻るのか考えられない（D2)】、【声が出せなくなり感情が伝わらなくなることに抵抗があった（E6)】、【確定診断により大きなショックを受ける（F7)】、【視力が急激に落ちることに対して周期的に不安が襲ってくる（H18)】と、障害を持ったことで今後の生活に対して不安等を持つようになる。その結果、【障害は疎ましい（F18)】と、障害に対する否定的な認識を持つようになったといえる。

また、F 氏「僕の身体のことで親が喧嘩をするのはよく見ていた」、【自分の身体のことを親に申し訳なく思った（F4)】ことから、障害に対する否定的な認識とは自己だけに向けられるものではなく、家族等の周囲の者との関係上においても障害に対して否定的に認識される側面があるといえる。

役割創造期

C 氏は退院後、前職に復職するが、仕事の内容ではなく失禁・尿路感染・発熱をすることなど、【体調管理が困難（C4)】なこと、つまり障害を理由に仕事を続けることが困難になる。B 氏は、「一般企業で働いて病気だったら、マイナスでしかないんで、プラスにするには、病気で稼ぐしかないかな」、【一般企業で働いたら病気はマイナスでしかないと想う（B11)】と、障害を否定的に認識したことで、一般企業以外での働き方を模索することになる。このように障害を持った後の仕事において、障害があることは否定的な認識となっていた。また、【障害は自分の生活を制限する邪魔なもの（E16)】、【障害は疎ましい（F18)】、【視力が急激に落ちることに対して周期的に不安が襲ってくる（H18)】との想いは、役割を創造する中でも持ち合わせていることが分かった。

役割獲得期

役割を獲得した後の障害に対する否定的な認識に関するカテゴリーは、E 氏、F 氏以外を除く 6 人にはみられなかった。

F 氏は、「障害っていうもの自体は、やっぱり疎ましいと思っています」と話し、【障害は疎ましい（F18)】と想っている一方で、F 氏「障害ってやっぱ自分の意識でも変わるし、環境でも変わるし」と話す等、状況に応じて障害への認識は変わる側面があるといえる。

また E 氏は、役割以外での障害についての捉え方について問うと、「(障害は）自分の生活とかやりたいことを制限する邪魔なものっていう関係もある」、【障害は自分の生活を制限する邪魔なもの（E16)】との想いが聞かれ、F 氏と同様に、状況や立場に応じて障害への認識が変わる側面があるといえる。

このように、障害に対する否定的な認識は役割獲得後において少なくなっていた。しかし、障害に対する認識とは E 氏や F 氏から見て分かるように、状況や立場においては、障害経験を活かした役割を獲得した後においても、否定的な認識は継続することが分かった。

（2）障害に対する認識－肯定－について

役割創造期

発症により障害を持ったことで今後の生活に対して不安を持つ方が多かったが､D 氏は、【出来ることと出来ないことを理解して工夫することで生活が確立した（D6)】と、障害を含む生活に対しての否定的な認識は肯定的な認識に変化をした。また、E 氏は、「とりあえず家で生活が出来れば良いや」、【自宅で生活できること以外は望まなかった（E3)】と、障害がある生活を認めるようになる。

B 氏は病気になった自身の人生の設計をした結果、「病気になって悲しいじゃなくて、病気で稼ぐっていうのが出来たら、多分、自分も病気になったことを納得できる、ポジティブになれるんじゃないか」､「障害を上手く使うっていうところで、ポジティブってとこもありますし、肯定する、利用する、なっちゃったからもう利用する」と、【病気を仕事に活かすことで病気になったことが肯定できる（B5)】との認識を持つようになる。また H 氏は、【友人の一言で価値観が変わり自分自身を視覚障害者と位置づけて生きていくことにした（H12)】ことを切っ掛けに、H 氏「視覚障害に関する研究だったり、自分が一番よく知っている視覚障害を、今まで見てきた自分だけが感じた、そういう内容というのはいっぱいあるので、そういうところを研究テーマとしたほうが、圧倒的に周りからすれば、すぐに上に立てるっていう現状があって、それはもう比較優位を利用しない手はないなと思って、利用している状況ではある」と、【比較優位に立てる現状を利用しない手はないと思い利用した（H13)】。

F 氏は、【(確定診断前）役割を担うことや存在を認めてもらう経験を経たことで障害者だ

と意識することはなくなった（F6)】、F 氏「障害ってやっぱ自分の意識でも変わるし、環境でも変わるし、周りと自分とその原因の関係性が、それこそ ICF の中でグルグル回っていれば、障害が障害じゃなくなることってけっこうある」と、【自分の意識が変わることで障害が障害ではなくなる（F10)】と認識するようになる。

G 氏は、怪我をしてバンドはできないと思ったが、その後、大道芸の人間関係の繋がりでバンドができたことや、車椅子販売会社で仕事をするようになり、「もっと社会に出てくような状態になった時に、もっとやりたい事出来るじゃんとか、やりたいことあるじゃん」と、【障害があってもやりたいことはできる（G6)】との認識を持つようになる。

このように、役割創造期に障害に対する肯定的な認識を持った背景として、生活の工夫をすることや自分の置かれている環境で障害への意識が変わったこと、障害を上手く利用したいと思うことや障害を持って生きていくことを受け入れることで、もっとやりたいことが出来る等、現状だけではなく、障害のある今後の生活を認めることができたことがあった。

役割獲得期

実際に獲得をした役割を通じて、【障害のある自分に存在価値を感じる（A12)】、【障害をブランドとして売りにしている（E17)】、【義足使用者になったことで得られた生きがい感（D8)】がある、【障害を負ったことによって出来た人間関係がいっぱいある（E18)】、【怪我が自分の役に立っている（G11)】、【波乱万丈の人生は楽しい（G3)】、【視覚障害があることで自分の話に説得力があるとプラス面を感じるようになってきたことに自分でも驚いている（H17)】と、障害を持ったことで得られたことがあるとの認識を持つようになっている。

また獲得をした役割を通じて、【病気を仕事に活かすことで病気になったことが肯定できる（B5)】、【障害があることを大変だとは思わない（D7)】、【障害と仕事と生活のバランスがとれている（D9)】と、障害があることを自身で認めるようになる。

F 氏は役割を獲得した後も「疾病体験は大概ね、要らないです、シンドイし、ネガティブな発想ばっかりになるんで」と話すが、「障害ってやっぱ自分の意識でも変わるし」と、【自分の意識が変わることで障害が障害ではなくなる（F10)】との認識を持っている。

（3）障害に対する願望について

役割創造期

D 氏は今後の発症による障害を持った生活について、どこまでの生活が出来るようになるか考えられず不安を抱えるが、「自分の扱う義足だから、自分が知識を持っていないとうまくコントロール出来ないだろう」、「勉強して自分の体の方向にフィードバックできる」、【自分が使う義足の知識を得るために PO になる（D5)】と、義肢装具士になることで自分

の障害に関する知識を得たいと希望を持つようになる。

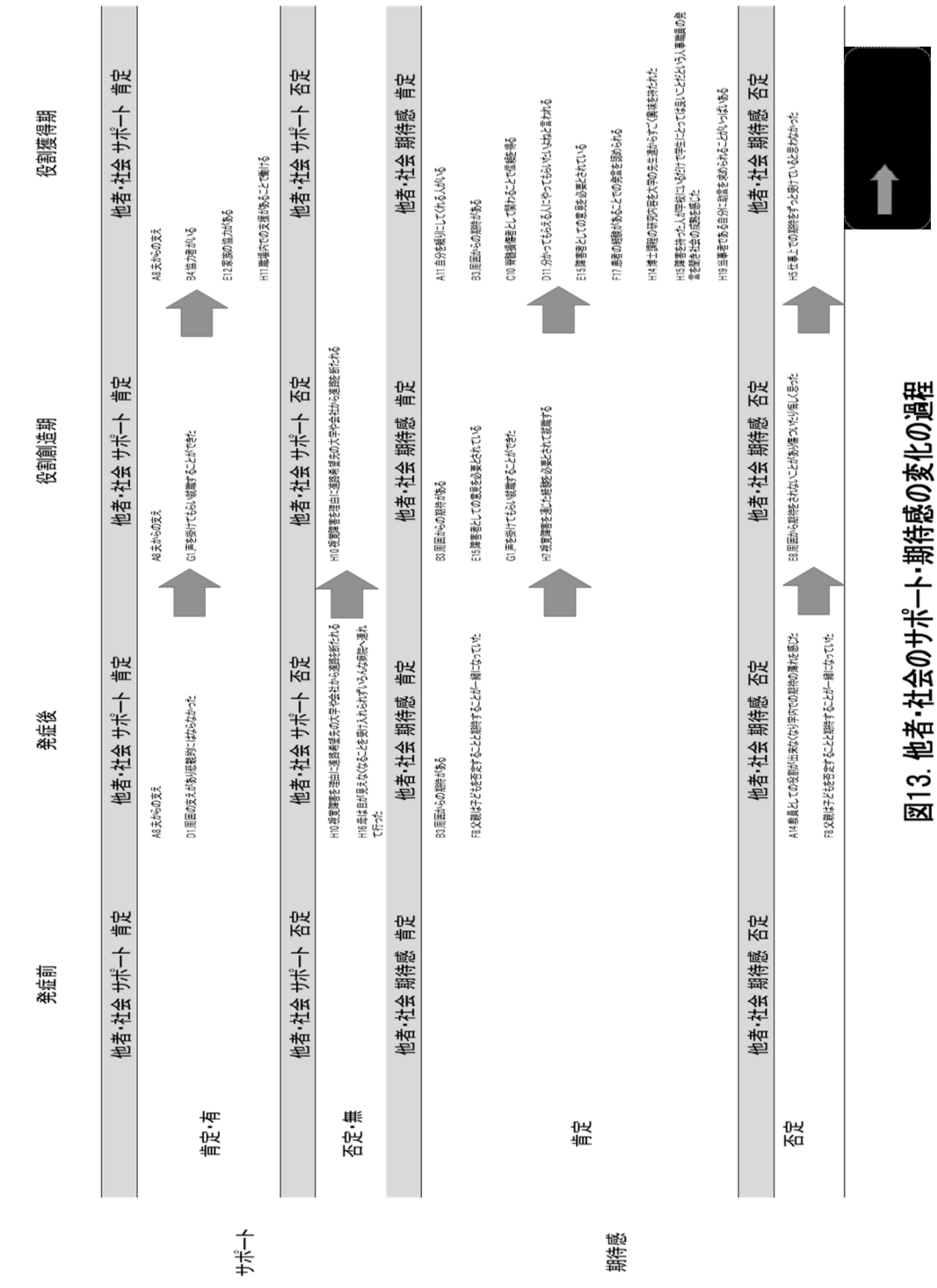
G 氏は、【障害を持っていても普通の生活をしたい（G13)】、「誰もが経験する事、障害がなければ普通に経験できるよなってことをするべきだな」という想いから、障害を持った人の成人式を対象に、ヘアーメイクと貸衣装と着付けと写真撮影を一つのパッケージにした仕事を自ら立ち上げた。

役割獲得期

役割獲得期において、障害に対する認識－肯定－のカテゴリーが増えた一方で、障害に対する願望に関するカテゴリーはみられなかった。

3）他者・社会のサポート・期待感の変化の過程

他者・社会のサポート・期待感の変化の過程（図 13）を見ながら、他者・社会のサポート・期待感の過程について、サポートー肯定ー・有、サポートー否定ー・無、期待感ー肯定ー、期待感ー否定ーごとに以下に説明をする。



（1）サポートー肯定・有ーについて

発症後

D 氏は、友人や家族の怪我に対する受け入れが良かったこと、入院中に他患者と悩みを共有することができたことから、「鬱になっちゃうとか、絶望的だとかって、悲観的な状況にはならなかった」と、【周囲の支えがあり悲観的にはならなかった（D1）】。また A 氏は、【夫からの支え（A8）】を受けていた。

役割創造期

G 氏は高校の時の仲が良かった先生が凄く心配をして機械設計の会社に話を通してくれたことで就職することができた。その後、転職をした車椅子販売会社には、自身の車椅子をいつも頼んでいる業者の人に誘われて就職をした。そして、大道芸のボランティア実行委員会を行っている際に、他のボランティアの人達に対する講習会で当事者としての話をすることがあり、それを聞いた CIL の人に凄く良かったと言いわれ、CIL に誘われる。このように、機械設計の会社と車椅子販売会社には、支援的な関わりを受けることで就職を果たしたが、CIL には、障害者目線での話が出来る人材として期待を受け、【声を掛けてもらい就職することができた（G1）】。また、引き続き A 氏は【夫からの支え（A8）】を受けていた。

役割獲得期

A 氏は夫に対して、「遠いところには車で連れて行ってくれたり、講演の時にはセットアップをしてくれたり、色んなことをしてくれているので、私に対する期待は高いと思います」と話し、自身の役割に対する、【夫からの支え（A8）】を感じている。また E 氏も同様に家族に対して、「口出しはしてこないけど、どっか行かなきゃいけない時に、介助者がいなかったら、付いてくれるし、協力はしてくれていると思う」と、自身の役割に対する、【家族の協力がある（E12）】との認識を持っている。

役割に対する家族以外のサポートとしては、【協力者がいる（B4）】、【職場内での支援があることで働ける（H11）】と、役割に対して他者からサポートを受けているとの認識がある。H 氏はこの役割に対するサポートについて、「私実は支援者が付いたんです」、「支援も受けつつですね、これが、いわゆるちょうど私が本当に今思っているのが、それこそ差別禁止法だとか障害者権利条約を日本が批准してなく、あるいはこういうのがない時代に生きているんだったらば、私はもう今のような仕事はできなかっただろうし、本当時代を、うまくいい時代に生まれたなっていう、それに関する感謝が私の場合は普段大きいんです」と話す。

（2）サポートー否定・無ーについて

発症後

H 氏は、「母は全く見えなくなることが受け入れられず、その病院を退院してからも、それから私の苦労が始まるんだけど、いろんな病院に連れて行くんですよ」と、【母は目が見えなくなることを受け入れられずいろんな病院へ連れて行った（H16)】と話す。また、H 氏「○○大学へ入りたいって言ったら、受けさしてくれないんですよ、目が悪いっていうので」と話し、【視覚障害を理由に進路希望先の大学や会社から進路を断たれる（H10)】経験をした。

役割創造期

H 氏は、「仕事したくても大学出て 100 社ぐらいは多分落ちている」と話し、【視覚障害を理由に進路希望先の大学や会社から進路を断たれる（H10)】経験をした。

役割獲得期

役割獲得期におけるサポートー否定・無ーに関するカテゴリーはみられなかった。

（3）期待感ー肯定ーについて

発症後

B 氏は発症によって出来なくなったことは多いが役割は変わらない、親以外からの期待に変化はないと発症後も、【周囲からの期待がある（B3)】との認識を持っていた。

また F 氏は、【父親は子どもを否定することと期待することが一緒になっていた（F8)】との認識を持っていた。

役割創造期

役割創造期において、【障害者としての意見を必要とされている（E15)】、【声を掛けてもらい就職することができた(G1)】、【視覚障害を通じた経験を必要とされて就職する(H7)】と、他者からの期待を受けたことが役割に就く切っ掛けとなっていた。

E 氏は栄養士や ST から、「嚥下食を利用者の立場で作っている人って、あんまりいないから、じゃあそれを発信したら」と言われたことを切っ掛けに、嚥下食の情報を発信するブログを開始する。また、担当の相談員さんに E さんが在宅の生活とか話すことで、こういう人もいるよって知る切っ掛けになるから、NPO の活動を通じて、どんどん外に行って活動をして欲しいと、【障害者としての意見を必要とされる（E15)】。

G 氏は、大道芸のボランティア実行委員会を行っている際に、障害当事者として他のボランティアの人達に対する講習会で話をすることがあり、その講習会を聞いた CIL の人に凄く良かったと言いわれ、CIL に誘われる。

H 氏は、比較優位に立つことができる障害を持った立場を利用しない手はないと思っている中で、「企業が新しい視覚障害者用の製品を作ったんだけど、全盲は嫌だけど会社まで自分の足で歩いてくるんだけど点字が読める人を望んでいるのだけど」と、全盲ではない点字が読める視覚障害者を探している企業を紹介され採用される。

このように、障害経験を活かした行動をとっていることや、障害のある立場を活かしたいと考えていることに、他者が期待を寄せたことで役割に就く切っ掛けとなっていることが分かった。

また B 氏は引き続き、【周囲からの期待がある（B3)】との認識を持っていた。

役割獲得期

実際に獲得をした役割を通じて、【自分を頼りにしてくれる人がいる（A11)】、【脊髄損傷者として関わることで信頼を得る（C10)】、【分かってもらえる人にやってもらいたいよねと言われる（D11)】、【障害者としての意見を必要とされている（E15)】、【患者の経験があることでの発言を認められる（F17)】、【博士課程の研究内容を大学の先生達からすごく興味を持たれた（H14)】、【障害を持った人が学校にいるだけで学生にとっては良いことだという人事職員の発言を聞き社会の成熟を感じた（H15)】、【当事者である自分に助言を求められることがいっぱいある（H19)】と、障害経験があることで行う役割に対して、他者が期待を寄せていることが分かった。

（4）期待感－否定－について

発症後

A 氏は発症により、要職にあり活動に脂が乗っていたといえる教育者や研究者としての役割を失ったことで、【教員としての役割が出来なくなり学内での期待の薄れを感じた（A14)】。F 氏は、「自分の子どもを否定するのと期待するのが一緒になっていた」、「父親はその足が可哀想だからっていう前提の話ばっかり」と、【父親は子どもを否定することと期待することが一緒になっていた（F8)】との認識を持っていた。

役割創造期

E 氏は、父親の主治医や地域の人から、娘や家族の中でのキーパーソンとしての機能が果たせないと思われ、イラっとしたり、悔しかったりした。また、家族が自分のことを近所の人に「知られたくないっていうか、合わせたくないっていう気持ちがあっただろうし」と想うなど、「（自分が）勝手に想って傷ついていたりはけっこうあるんだと想うな、お母さんに対してもそうだし、ヘルパーさんだったり、看護師さんだったり」と話し、【周囲から期待をされないことがあり傷ついたり悔しく思った（E8)】。

役割獲得期

H 氏は、「（点字機器製作会社に勤めて）最初すごく期待されたんだけど、20～30 枚、30 枚ぐらいかな、批判のレポート出した瞬間、もう研究員、最後にはもうみんな私の話を聞かざるを得ないんで、戻ってきて仲良くなりますけど、そこで誤解を受けてしまって、何だこいつはなって、人間関係修復するのにものすごく苦労した」、「会社が嫌がるような研究ずっと続けるっていう意味では、途中からはそう（期待があるわけ）でもなかった」、「ずっと期待されるほど、仕事ができたとも言えないですね」と話し、【仕事上での期待をずっと受けていると思わなかった（H5)】との認識を持っていた。

4）他者・社会への願望・関係の変化の過程

他者・社会への願望・関係の変化の過程（図 14）を見ながら、他者・社会への願望・関係の過程について説明をする。

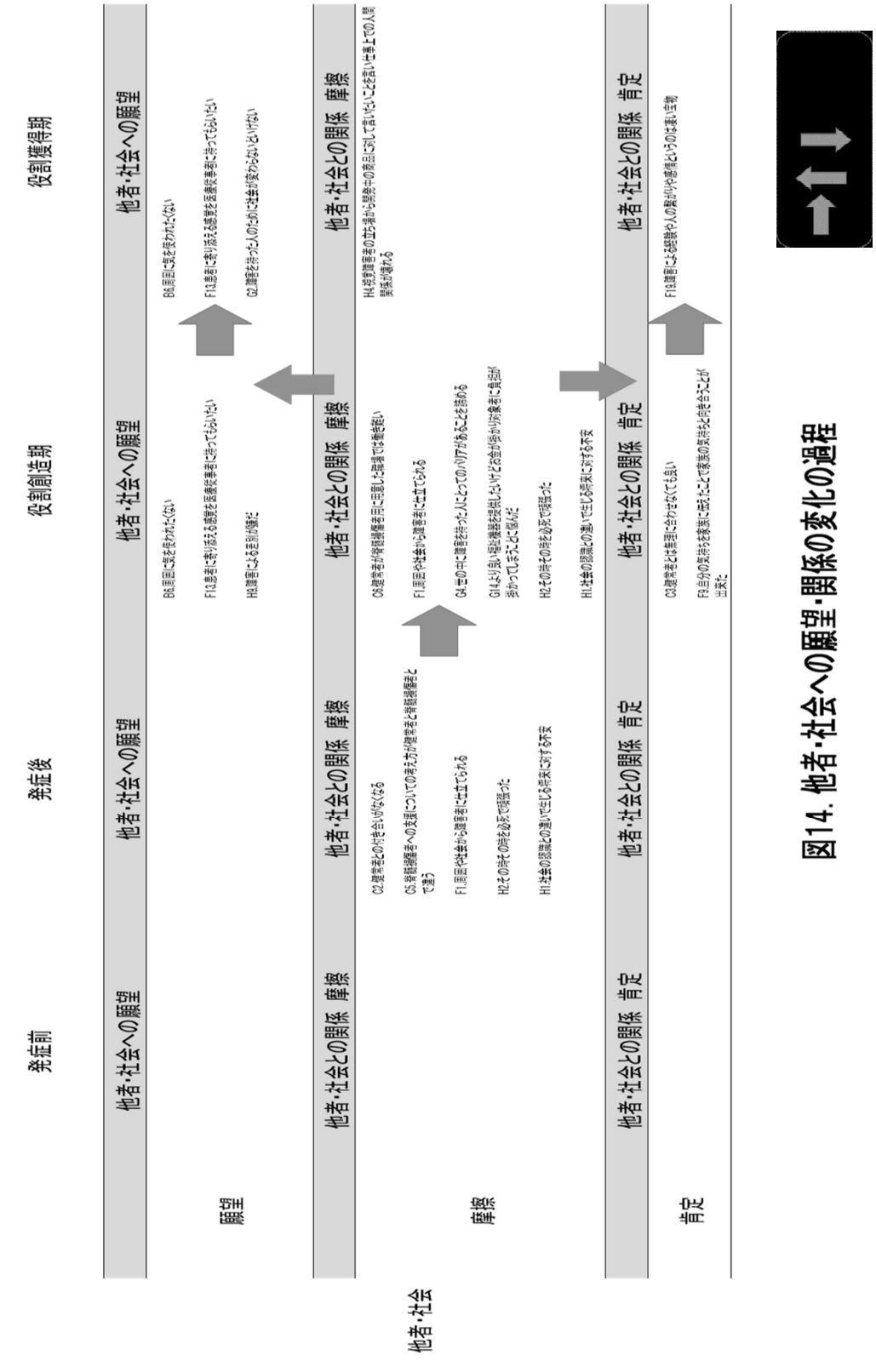


図14. 他者・社会への願望・関係の変化の過程

障害経験を活かした役割の獲得過程における、他者・社会への願望・関係の変化については、発症後と役割創造期において、障害を持った自分と健常者との考え方が違うことや、障害を持った人にとってのバリアがあることに悩む等、社会との認識の違いに悩むことがあった。しかし、その違いの中から、障害を持った人の気持ちを健常者に知ってもらいたい等、他者や社会に対して希望を抱くようになる。そして役割獲得後は、役割を通じて、障害を持った人のために社会が変わらないといけないと想う等、社会が変わって欲しいとの希望を持つようになったことが分かった。

以上のことから、他者・社会への願望、他者・社会との関係－摩擦－、他者・社会との関係－肯定－について、以下に説明をする。

（1）他者・社会との関係－摩擦－について

発症後

C 氏は、「どっかに飲みに行くにしても、常に人の手を借りなければいけないとか、そういうので、自然とやっぱ離れて行きますかね」、「付き合いがどうしても制限されていっちゃうので、排尿、排便があるじゃないですか、そういうことを、理解してもらうってのは、なかなか、やっぱり難しいです」と、復職後に、【健常者との付き合いがなくなる（C2）】経験をする。また C 氏は会社の人に対して、「会社の人は割りと冷静に、大丈夫だからちゃんと面倒をみるから」と言うが、「なんとかなるよって、何がなんとかなるの、何をどう面倒みるの、何も具体的じゃないし」と、【脊髄損傷者への支援についての考え方が健常者と脊髄損傷者とで違う（C5）】と感じ、素直に会社が言うことを聞くことはできなかった。

F 氏は、「身体の違和感は障害だって思ってなかったけど、障害を持っている奴だって言われた時に、障害を持っているのかもしれないって想ったかな、人に名札貼られた感じ」、「（障害を）意識していくようになったのは、手術も終わって、やっぱり皆と同級生と同じことができないなって想い始めたぐらい」と話し、【周囲や社会から障害者に仕立てられる】との認識を持った。

H 氏は、「視覚障害ってその、目が見えないそれ自体の問題じゃないですよ」、「目が見えなくなることで周りから受ける先入観と、その社会の認識との戦いと、その目が見えなくなることで出てくる障害、結局その大学に行けない、今障害の定義が変わったとはいえですよ、とは言っているけども実際にその大学が行けなくなるわけだし、行かなければやっぱりその次の障害として良い仕事就けない、これ現実ずっとあるわけだから」と、【社会の認識との違いで生じる将来に対する不安】を抱えたことで、「自分なりには、私の場合は、必死で頑張っていると思うんですよ」と話し、大学受験、就職試験等、【その時その時を必死で頑張った】。

このように障害を持ったことで、周囲や社会から障害者に仕立てられることや、健常者と

の考え方の違いや付き合い方に悩む等、社会の認識との違いで生じる不安を抱えていたことが分かった。

役割創造期

C 氏は職業安定所で紹介された職場について、「法律上で、何パーセントか雇用をしなきゃいけないとか、決まっているから、しかたなしにやってますよってのがけっこう、みえみえっていうか、積極的じゃないなって、別に良いんだけど、何かその辞めてもらっても良いよみたいな、なんかそういうのが、みえみえっていうか、そういうのを感じることがけっこうありましたね」と、【健常者が脊髄損傷者用に用意した職場では働き難い（C6)】との認識を持った。

F 氏は「(身体障害者手帳をとって）ここで社会から障害者って初めて言われる、手帳を取ったのが切っ掛けだったけど、社会が僕を障害者に仕立て上げてくるなって違和感もあって」と話し、【周囲や社会から障害者に仕立てられる（F1)】との認識を持った。

G 氏は、「世の中にバリアとか使いにくいとか何かが出来ないとか、仕方がないなって思っちゃうんですよ、バスがね、混んでいて乗れないとか、どこか行くにも連絡して、向うの都合付けてもらわないとなかなか行動できないとかあるとか、でもこっちが障害持っているから仕方がないよね」、「諦めはありましたよ、もう浮かばれないって言うか、なんだよなって感じだった」と、【世の中に障害を持った人にとってのバリアがあることを諦める(G4)】経験をした。

また G 氏は車椅子販売会社で勤めている時に、【より良い福祉機器を提供したいけどお金が掛かり対象者に負担が掛かってしまうことに悩んだ（G14)】経験をした。

H 氏は発症後から引き続き、【社会の認識との違いで生じる将来に対する不安（H1)】を感じ、【その時その時を必死で頑張った（H2)】との認識を持っていた。

役割獲得期

役割を獲得した後の他者・社会との関係－摩擦－に関するカテゴリーは、H 氏以外を除く 7 人にはみられなかった。その一方で、役割創造期より他者・社会への願望を持つようになっていることから、他者・社会との関係に悩み続けるのではなく、障害を持った人のために社会が変わらないといけない等、社会の変革を望むように認識が変化したことが分かった。

役割獲得後に他者・社会との関係に摩擦を感じた H 氏については、H 氏「これ売ったら詐欺になりますから売らんほうがいいですとか言って、言いたいこと言っちゃうわけです、もういきなり嫌われ始めて」、「そこで誤解を受けてしまって、何だこいつはとなって、人間関係修復するのにものすごく苦労した」と話し、【視覚障害者の立ち場から開発中の商品に対して言いたいことを言い仕事上での人間関係が壊れる（H4)】経験をしていた。つまり、

障害経験に基づいた発言であっても、状況に応じては他者・社会との関係に摩擦が生じることが分かった。

（2）他者・社会への願望について

役割創造期

F 氏は周囲や社会から障害者に仕立てられると認識をした一方で、F 氏「当事者として、当事者の F、CMT 患者の F が、あなたたちが僕に関わってくれた時に、僕は助かるし、僕以外の人達もきっと助かると思うから、僕らのような人達に、ありきたりな言い方だけど、寄り添えるような、感覚を持って欲しい」、【患者に寄り添える感覚を医療従事者に持ってもらいたい（F13)】との認識を持つようになる。

H 氏は社会の認識との違いで生じる将来に対する不安を抱える中で、H 氏「おまえバカだな的なこう、子ども扱いするわけですよ、それがすごく私は嫌で、その目が見えないからといってなぜかこの集団ではそういう扱いをされるのがもうたまらなくて」、「障害に不安になることはなくなっているだけであって、障害があってこう差別されることは常にあるので、かちんとなるときはいっぱいあります」、【障害による差別が嫌だ（H9)】と、他者・社会に対して差別をしてほしくないとの認識を持つようになる。

B 氏は常に誰かが自分を気にしているとの認識があることから、【周囲に気を使われたくない（B6)】と、極力、他者と関わりを少なくしたい、出掛けることを面倒くさいと想っている。

役割獲得期

実際に獲得をした役割を通じて F 氏は、【患者に寄り添える感覚を医療従事者に持ってもらいたい（F13)】との想いを持って講演活動を行っている。

また G 氏は CIL の活動を通じて、「日本の社会に対してとか、世の中に対して障害を持っている人達の人権獲得っていうか、世の中って差別ばっかりだよね」、「なんで障害持っているとわざわざそういう制限を受けたりとか、行動が変わってしまうの」、「障害を持って諦める、持っているから諦めるとか制限されるとかではなくて、変わるのは社会だよ」、「(今の社会の基準で作られた常識では)、障害を持っているといろんなダメだとか、嫌だとか、不の感情が生まれちゃう」との考えを持つようになり、【障害を持った人のために社会が変わらないといけない（G2)】との認識を持つようになる。

役割獲得後も B 氏は常に誰かが自分を気にしているとの認識があることから、【周囲に気を使われたくない（B6)】と、極力、他者と関わりを少なくしたい、出掛けることを面倒くさいと想っている。

（3）他者・社会との関係－肯定－について

役割創造期

C 氏は脊髄損傷者への支援についての考え方が健常者と脊髄損傷者とで違うと認識をした一方で、「離れて行くっていうか、自然に関係が違ってくるので、お互い合わせるのも、無理するのも、無理しなくていいんじゃないって逆に思っちゃうんですよね」と、【健常者とは無理に合わせなくても良い（C3)】との認識を持つようになる。

F 氏は CMT の確定診断後の休学をする時に、「はじめて実は今までシンドかった」と、18 年間で初めて親に告白した。そして父親から、「自分の子どもを追い込んでしまったことが悪かったから、ちょっと仮面を外して楽になってくれて、助かったっていうか、良かった、辛いことを辛いって言ってくれて親として凄く安心した、だからこれからは楽に生きて欲しい」と言われる。F 氏はこの時、「はじめて父親の優しさ、始めてじゃないけど父親のやさしい所をちゃんと、僕も向き合えたかな」と、【自分の気持ちを家族に伝えたことで家族の気持ちと向き合うことが出来た（F9)】との認識を持った。

役割獲得期

F 氏は役割を通じて、「障害に付随する経験とか人の繋がりっていうのは凄く宝物だと思う」、「障害から来る経験とか繋がりとか、感情っていうものは凄く財産だなって思う」と、【障害による経験や人の繋がりや感情というのは凄い宝物（F19)】との認識を持っている。

5）8 人を合わせた障害経験を活かした役割の獲得に至る過程のまとめ

障害経験を活かした役割の獲得に至る過程まとめ（図 15）を見ながら、障害経験を活かした役割の獲得に至る過程における、役割、障害、サポート・期待感、他者・社会それぞれの関係を以下に説明する。

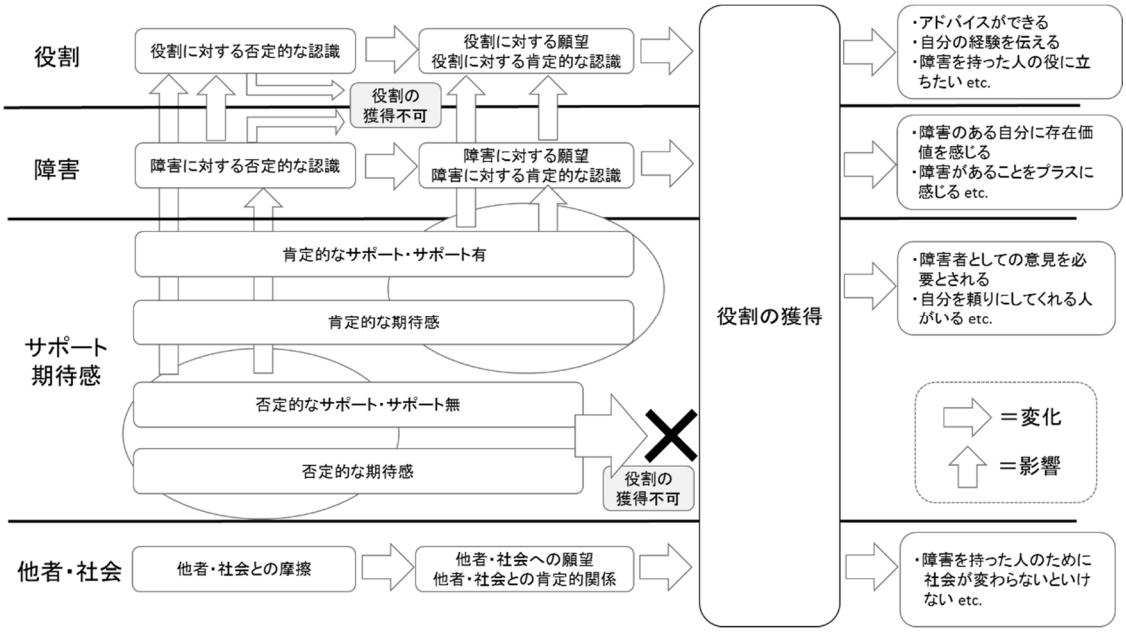


図 15. 障害経験を活かした役割の獲得に至る過程まとめ

１．役割に対する否定的な認識が、役割に対する願望や肯定的な認識に変化し役割の獲得に至ったことについて

障害経験を活かした役割の獲得過程における、役割に対する願望・認識の変化については、発症により役割に対する否定的な認識を持ちながらも、役割に対する願望や肯定的な認識に変化したことで、役割獲得に至っていたことが分かった。この役割に対する願望や肯定的な認識に変化した背景には、【自分が持つ情報に需要があると想い情報を発信した（E11)】など、障害経験があることで出来ることがあると気づいたこと、【患者の経験値や困っていることを通訳して医療界に伝えたい（F11)】など、やりたいことがあると希望を持てたことがあった。

また、役割に対する願望や肯定的な認識に変化した背景には、【障害があってもやりたいことはできる（G6)】と、障害に対する肯定的な認識や願望を持てたこと、【声を掛けてもらい就職することができた（G1)】と、肯定的なサポートを受けたこと、【障害者としての意見を必要とされている（E15)】と、肯定的な期待感を受けたことがあった。

このように、役割に対する否定的な認識が、役割に対する願望や肯定的な認識に変化し役割の獲得に至ったのは、発症により役割に対する否定的な認識を持ちながらも、役割に対する願望や役割に対する肯定的な認識を持てたこと、またその背景として、障害に対する願望や障害に対する肯定的な認識を持てたこと、肯定的な期待感や肯定的なサポートを受けたからであったといえる。

一方、【視覚障害を理由に進路希望先の大学や会社から進路を断たれる（H10)】【教員としての役割が出来なくなり学内での期待の薄れを感じた（A14)】等、サポートが無いことや否定的な期待感が、役割に対する否定な認識に影響を与えていることが分かった。

獲得をした役割を通じては、【障害を持った人とその家族と一般の人にアドバイスができる（A9)】等、同じ障害を持った人、障害を持った人の家族、一般の人、医療従事者へのアドバイスが行えている。また、【患者やセラピストの役に立ちたい（A10)】、【より良い車椅子を提供したい（C9)】、【ピアサポートを通じて生活や社会におけるサポートをしたい（F12)】等、今後に向けた更なる希望を抱くことができている。

２．障害に対する否定的な認識が、障害に対する願望や肯定的な認識に変化し役割の獲得に至ったことについて

障害経験を活かした役割の獲得過程における、障害に対する願望・認識の変化については、発症により障害に対する否定的な認識を持ちながらも、障害に対する願望や肯定的な認識に変化したことで、役割獲得に至っていたことが分かった。

この障害に対する願望や肯定的な認識に変化した背景には、【出来ることと出来ないことを理解して工夫することで生活が確立した（D6)】と、生活の工夫が出来たこと、【自分の意識が変わることで障害が障害ではなくなる（F10)】と、自分の置かれている環境で障害への意識が変わったこと、【病気を仕事に活かすことで病気になったことが肯定できる（B5)】と、障害を上手く利用したいと思ったこと、【友人の一言で価値観が変わり自分自身を視覚障害者と位置づけて生きていくことにした（H12)】、【障害があってもやりたいことはできる（G6)】と、障害を持って生きていくことを受け入れることで、もっとやりたいことが出来る等、現状だけではなく、障害のある今後の生活を認めることができたこと、【障害を持っていても普通の生活をしたい（G13)】と、想ったことがあった。

また前述の通り、【病気を仕事に活かすことで病気になったことが肯定できる（B5)】、【障害があってもやりたいことはできる（G6)】等の認識があったことが、役割に対する願望や肯定的な認識を持てた背景にあった。

そして獲得した役割を通じて、障害のある自分に存在価値を感じることや、障害が自分の役に立っていると想うなど、障害のある自己を認められるまでに至っている。

３．肯定的なサポートや期待感が、役割や障害に対する肯定的な認識へ影響を与えていたことについて

前述の通り、障害者目線での話が出来る人材として期待を受け、【声を掛けてもらい就職することができた（G1)】等、他者からの肯定的なサポートがあったこと、【障害者としての意見を必要とされている（E15)】と、他者からの肯定的な期待感があったことが、役割に対する願望や肯定的な認識を持つ背景にあった。

また G 氏のように、大道芸のボランティア実行委員会を行っている際に、他のボランティアの人達に対する講習会で当事者としての話をすることがあり、それを聞いた CIL の人に凄く良かったと言いわれ CIL に誘われたことや、H 氏のように、比較優位に立つことができる障害を持った立場を利用しない手はないと思っている中で、全盲ではない点字が読める視覚障害者を探している企業を紹介されて採用されたことから、障害経験を活かした行動をとっていることや、障害のある立場を活かしたいと考えていることに、他者が期待を寄せたことが役割に就く切っ掛けとなっていることが分かった。

そして獲得した役割を通じて、【障害者としての意見を必要とされている（E15)】、【患者の経験があることでの発言を認められる（F17)】、【当事者である自分に助言を求められることがいっぱいある（H19)】等、障害経験があることで行う役割に対して、他者が期待を寄せていることが分かった。

４．否定的なサポートや期待感が、役割の獲得へ与える影響について

今回の結果では、【視覚障害を理由に進路希望先の大学や会社から進路を断たれる(H10)】ことや、【教員としての役割が出来なくなり学内での期待の薄れを感じた（A14)】ことがみられた。これらの否定的なサポートや期待感が、役割の獲得や、役割や障害に対する肯定的な認識へ与える影響は無く、むしろ役割や障害に対する否定な認識に影響を与えていることが分かった。

この役割や障害に対する否定な認識は、役割の獲得過程において肯定的な認識へ変化することが求められることから、役割獲得においては必要のない認識であるといえる。

つまりは、否定的なサポートや期待感とは、役割の獲得において必要のない、むしろ役割

獲得を阻害するものであるといえる。

５．他者・社会との摩擦が、他者・社会への願望や他者・社会との肯定的な関係に変化したことについて

障害経験を活かした役割の獲得過程における、他者社会への願望・関係の変化については、発症により、【脊髄損傷者への支援についての考え方が健常者と脊髄損傷者とで違う（C5)】と、障害を持った自分と健常者との考え方が違うことや、【世の中に障害を持った人にとってのバリアがあることを諦める（G4)】と、障害を持った人にとってのバリアが社会にあることに悩む等、社会との認識の違いに悩むことがあった。しかし、その違いの中から、【患者に寄り添える感覚を医療従事者に持ってもらいたい（F13)】等、他者や社会に対して希望を抱くようになったことが分かった。

そして役割獲得後は、役割を通じて【障害を持った人のために社会が変わらないといけない（G2)】と想う等、社会が変わって欲しいとの希望を持つようになったことが分かった。

第４章　考察

１．はじめに

本研究は、「障害経験を活かした役割活動」に至った人を対象とし、障害を持つ以前の生活からはじまり、障害を持ち、障害経験を活かした役割活動に至るまでの語りを聴取し、その結果を分析することで、「障害経験を活かした役割の獲得」に至る過程を明らかにし、障害を持った人の役割獲得の支援方法についての考察を行うことを目的とした。

そして障害経験を活かした役割の獲得を分析した結果、障害を持った人は発症により役割に対する否定的な認識を持ちながらも、役割に対する願望や役割に対する肯定的な認識を持つことで役割の獲得に至っていたことが分かった。また、役割に対する願望や役割に対する肯定的な認識を持つようになる背景には、障害に対する願望や障害に対する肯定的な認識を持てたこと、他者・社会から肯定的な期待感や肯定的なサポートを受けていたことが分かった。一方、障害を持った人が障害経験を活かした役割を獲得することを困難にする背景として、障害に対する否定的な認識や、他者・社会からのサポートが無いこと、他者・社会から否定的な期待があることが分かった。

これらの結果は、序論で述べた、役割獲得とは自己と他者・社会との関係から生まれ、その双方が持つ意図の調和から成るものであると言える、作業療法学における役割獲得の概念だけでは説明のできない、新たな視点であったといえる。

この新たな視点について説明を行うために、本研究の結果を Heard(1977)の作業役割獲得モデルにおける内的期待と外的期待に当てはめた役割の獲得過程（図 16）を示す。

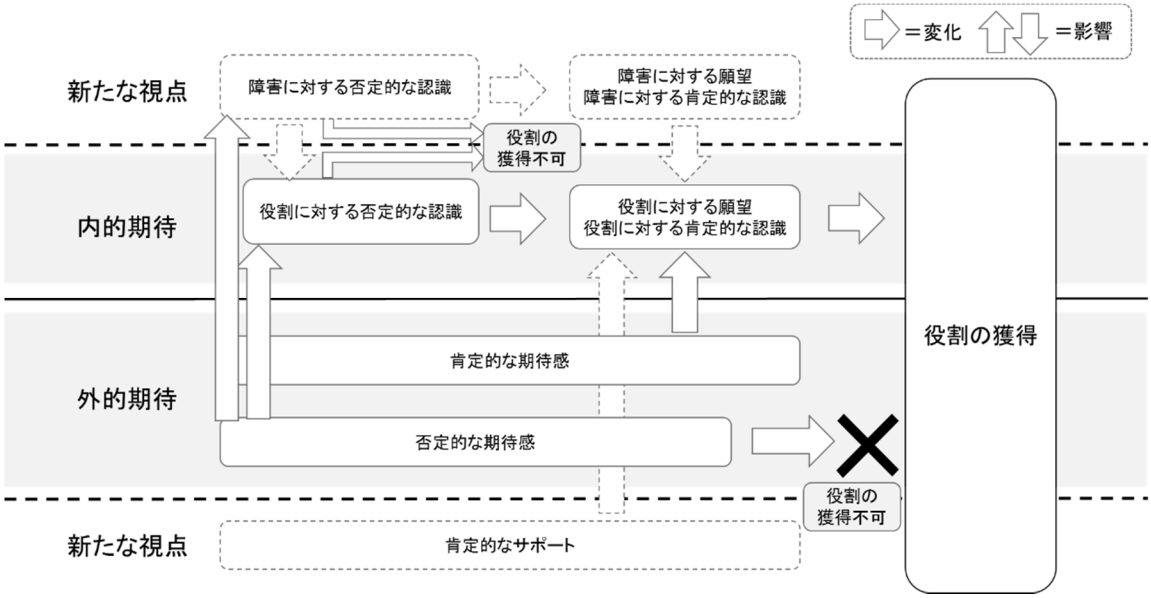


図 16. 本研究の結果を内的期待と外的期待に当てはめた役割の獲得過程

内的期待とは個人が自らに求める期待（Heard, 1977）であることから、内的期待には役割に対する否定的な認識、役割に対する願望、役割に対する肯定的な認識が該当する。そして、外的期待とは社会や他者からの期待（Heard, 1977）であることから、肯定的な期待感、否定的な期待感が該当すると考えた。そこで、本研究の結果に内的期待と外的期待の概念を当てはめた役割の獲得過程が（図 16）である。

（図 16）から分かることとして、障害を持った人の役割獲得の過程における要点が下記の通り 2 点浮かび上がった。

＜外的期待が低いことで内的期待が高まらず役割を獲得することが困難になる＞

他者・社会からの否定的な期待感が役割や障害に対して否定的な認識を与えること、つまり外的期待が低いことで内的期待を高めることが困難になること、外的期待が低いことで障害に対する否定的な認識を肯定的な認識へ変えることが困難になっていた。

＜低い外的期待に照準を合わせず、内的期待を高めることで役割獲得が可能となる＞

内的期待を下げる背景には、障害に対する否定的な認識があること、内的期待が高まる背景には障害に対する願望や障害に対する肯定的な認識と他者・社会からの肯定的なサポートがあった。

そこで本考察では、上述の 2 つの視点から、障害を持った人の役割獲得の支援方法について考察を行う。

考察の流れとしては、外的期待が低いことで内的期待が高まらず役割を獲得することが困難になることについてと、低い外的期待や障害に対する否定的な認識の影響を受けずに内的期待を高めるためにはどのようにしたら良いかについての考察を行い、その上で障害を持った人の役割獲得に向けて、作業療法士はどのような視点を持って支援を行う必要があるのかについて述べることにする。

そして最後に、障害を持った人が充実感を持って生活をするために、障害経験を活かした役割を持つことが一つの方法であることを述べる。

２．低い外的期待に照準を合わせないことが役割獲得において必要なのではないか

Heard（1977）は、外的期待は社会の規範や義務を反映するものであり、役割行動をとる場合、時に明確にあるいは暗黙のうちに外から求められるものとした。そして内的期待と外的期待の葛藤を調整、意志決定をすることによって、新しい作業役割遂行がなされると考えた。つまりは、社会の規範や義務の内容に応じて変化する外的期待と、個人が自らに求める期待である内的期待との調整を図り、役割は獲得されるということである。

そして外的期待に反映をされる規範とは、「行動や判断の基準」（大辞林，1988，p604）であることから、外的期待が低くなる背景には、社会や組織が持つ判断基準や、個人、あるいは個人間の関係性の上に生成された判断基準があるといえる。

また障害を持った人に対して社会が持つ判断基準については、Parsons（1951）が次のように述べていることが一般的な内容ではないだろうか。「病人は、病気の状態それ自体を望ましくないものと考え、できるだけ早く病気の状態から回復しようとするよう期待されている。例えば病人は、病気の状態のまま無理して仕事を続けたり、遊びに出掛けたりしてはならないのである」（Parsons，1951　佐藤勉訳，1974）。

つまり、社会は障害を持った人や病気の人に対して、障害や病気が改善しない限り、障害や病気を改善すること以外は、期待をしていないのではないだろうか。

あらためて今回の結果をみてみると、G 氏は「最初に入った会社、そこでは酷かったですよね、僕の方見ないって言うか、頭越しに会話しちゃって」、「ただそこに居るだけっていうの、それは辛かったですね」、「存在意義も価値もないっていう」と話し、【存在意義も価値もないと感じる経験は辛かった（G9）】と、会社や会社社員が持つ判断基準による低い外的期待を受け入れてしまったことで、役割に対して否定的な認識を持ったといえる。

同じく A 氏の場合も、要職にあり活動に脂が乗っていたといえる教育者や研究者としての役割を失ったことで【教員としての役割が出来なくなり学内での期待の薄れを感じた（A14）】ことを寂しく想ったと話し、社会が持つ教育者や研究者としての基準を自身が満たしていないと感じたことで、役割に対して否定的な認識を持ったといえる。

また B 氏は、直接的に他者からの外的期待の低下は感じていないのだが、自らが感じ取った社会の基準を基にした、外的期待の低下を意識したことで、【一般企業で働いたら病気はマイナスでしかないと想う（B11）】と、役割や障害に対する否定的な認識が今後の生活にも継続されるだろうと、人生に対してある種の閉塞感を抱いたといえる。

このように、社会が持つ低い外的期待との調整を図り、低い外的期待に照準を合わせてしまうことで内的期待が低まり、障害や役割に対して否定的な認識を持ってしまうことは、役割獲得の阻害因子となっているのではないだろうか。

そして今回の結果として、障害や役割に対する否定的な認識が、役割獲得に結び付くことはなかったことからも、社会が持つ低い外的期待との調整を図り、低い外的期待に照準を合わせないことが、役割獲得に必要なのではないだろうか。

３．内的期待を高めるためにはどのようにしたら良いか

結果から、内的期待が高まる背景には役割に対する否定的な認識が役割に対する願望や肯定的な認識に変わること、障害に対する否定的な認識が障害に対する願望や障害に変わること、他者・社会からの肯定的なサポートや肯定的な期待感があることが分かった。

つまり、低い外的期待や障害に対する否定的な認識の影響を受けずに、種々の方法により内的期を高めることで、役割獲得に至ったといえる。では、どのようにしたら内的期待を高めることができるのであろうか。

そこで以下に、役割を獲得するために、内的期待を高めるためにはどうしたら良いかという視点に立ち、本研究結果をこの内的期待と外的期待に当てはめた役割の獲得過程（図 16）をみながら、1）障害や役割に対する否定的な認識が肯定的な認識に変わり内的期待が高まること、2）他者・社会からの肯定的サポートや肯定的な期待感があることで内的期待が高まることについて考察を行う。

１）障害や役割に対する否定的な認識が肯定的な認識に変化することについて

今回の結果から、障害や役割に対する否定的な認識が肯定的な認識に変わり内的期待が高まった背景には、障害をもったことによる経験そのものに価値があると気づけたことがあったのではないだろうか。

障害と価値に関することについて、上田（1980）は、「障害の受容とはあきらめでも居直りでもなく、障害に対する価値観の転換であり、障害を持つことが自己の全体としての人間的価値を低下させるものではないことの認識と体得を通じて、恥の意識や劣等感を克服し、積極的な生活態度に転じることなのである。」（上田，1980）と述べており、これは障害があっても人間としての価値は変わらないと認識することで生活を取り戻していくという考えであるといえる。

一方、今回の結果を価値という視点からみてみると、障害や役割に対する否定的な認識が肯定的な認識に変わる背景には、障害をもったことによる経験そのものに価値があると気づき、障害や役割に対する肯定的な認識が生まれたことで、障害を持った人自らが障害経験を活かした役割を創造し、役割を担い、他者から期待を受けるようになっていたといえる。つまり、障害経験による価値が内的期待を高め、障害経験を活かした役割を行うことで人間的価値を高める可能性があるといえるのではないだろうか。

では、この障害経験による価値とはどのようなものかの考察を続ける。今回の結果からみえてきた障害経験による価値とは、障害経験による知識を他者へ伝えアドバイスができることがあったといえる。更にもう一つ、障害経験による価値には、障害経験による想いをもとに他者・社会に変革を起こせる可能性があることがいえる。

障害経験による知識を他者へ伝えアドバイスができる価値とは、【自分が持つ情報に需要があると想い情報を発信した（E11）】、【障害を持った人とその家族と一般の人にアドバイスができる（A9）】、【脊髄損傷者は脊髄損傷者が生活をするうえでの重要な情報を持っている（C7）】、【障害当事者の目線を大事にしたい（E10）】等、障害経験による知識が情報として活用できると思えたことで生まれたものだといえる。また、【脊髄損傷者への支援についての考え方が健常者と脊髄損傷者とで違う（C5）】と思い、自身が持っている障害を持った人としての経験によるアドバイスが健常者にはできない内容であると認識したことでも、障害経験による知識が情報として活用できる価値となることに気付けた背景にあったといえる。

また、実際に獲得をした役割を通じて、【障害者としての意見を必要とされている（E15）】、【患者の経験があることでの発言を認められる（F17）】、【当事者である自分に助言を求められることがいっぱいある（H19）】ことからも、障害経験による知識は情報として他者へ伝えることでアドバイスになる価値となっているといえる。

ここで、経験と知識の関係を整理すると、社会学の経験主義の立場においては、「知識の唯一の源泉は経験である」（N. Abercrombie, S. Hill, B. S . Turner　丸山哲央訳 2005.p136）とされていることからも、障害を持った人としての経験による知識とは、その経験を通じてこそ得られる知識であり、他の者が持つことのない、経験をした人だけが持つ唯一無二の知識であるといえる。実施に A 氏は唯一無二の知識が持てることに対して、【障害のある私にしかできないことがある（A7）】と感じたことから、【障害を持ったことによるワクワク感（A6）】を抱いていたことからも、障害を持った人としての経験による知識とは、障害を経験した当人だけが持つ知識としての価値になる可能性があるといえる。

次に、障害経験による想いをもとに他者・社会に変革を起こせる可能性の価値とは、【健常者の医療関係者に対して違和感を持つ患者を減らしたい（F20）】、【患者の経験値や困っ

ていることを通訳して医療界に伝えたい（F11)】、【障害を持った人のために社会が変わらないといけない（G2)】と、障害経験による想いを基に、障害を持った人の周囲や社会に対して、障害を持った人が生活をしやすい社会になるために行動できることであるといえる。

そして他者・社会には、この障害を持った人の想いや、想いを基にした行動を汲み取り、役割として期待することが、障害を持った人の障害経験による価値を活かすために求められることだといえる。

以上のことから、内的期待を高め、障害や役割に対する否定的な認識が肯定的な認識に変わるためには、障害経験による知識を他者へ伝えアドバイスができることや、障害経験による想いをもとに他者・社会に変革を起こせる可能性があることに価値を見出せることが効果的であるといえる。そしてこの価値をもとに起こす行動こそが役割であり、その役割を行うことを通じて、他者・社会から期待を受けることで、更に内的期待を高めることができる好循環が生まれると考える。

また役割が、その人の内的期待を受け入れその内的期待を満たす機能を持っていることからも、あらためて作業療法士は障害を持った人の生活を豊かにするためにも、役割獲得を支援する必要があるのではないだろうか。

2）他者・社会からの肯定的サポートや肯定的な期待感があることについて

次に、内的期待が高まるもう一つの要素である、他者・社会からの肯定サポートや肯定的な期待感があることで、内的期待が高まることについて述べる。

結果から、【障害者としての意見を必要とされている（E15)】、【声を掛けてもらい就職することができた（G1)】、【視覚障害を通じた経験を必要とされて就職する（H7)】と、他者からの期待を受けたことが役割に就く切っ掛けとなっていたことが分かった。

各々の過程をみると、E 氏の場合は、栄養士や ST から、「嚥下食を利用者の立場で作っている人って、あんまりいないから、じゃあそれを発信したら」と言われたことを切っ掛けに、嚥下食の情報を発信するブログを開始する。また、担当の相談員さんに E さんが在宅の生活とか話すことで、こういう人もいるよって知る切っ掛けになるから、NPO の活動を通じて、どんどん外に行って活動をして欲しいと、【障害者としての意見を必要とされる（E15)】。G 氏の場合は、大道芸のボランティア実行委員会を行っている際に、他のボランティアの人達に対する講習会で当事者としての話をすることがあり、それを聞いた CIL の人に凄く良かったと言いわれ、CIL に誘われる。視覚障害を持つ H 氏の場合は、障害があることで比較優位に立つことができることを利用しない手はないと思っている中で、全盲ではない点字が読める視覚障害者を探している企業を紹介され採用されている。

このように、他者・社会からの肯定的サポートや肯定的な期待感を受ける背景には、障害を持った人が障害経験を活かした行動を実際にとっていることや、障害を持った人が障害のある立場を活かしたいと考えていることに、他者が期待を寄せ、サポートをしていることが分かる。そして他者・社会が期待を寄せ、サポートをするためには、前述した通り、他者・社会が障害を持った人の想いや、想いを基にした行動を汲み取り、役割として期待すること、障害を持った人の障害経験に価値があることを知っていることが求められる。

あらためて役割とは、社会集団の地位に応じて期待されて行う行動様式（大辞林, 1989）であることから、障害を持った人の地位（社会集団における立場、身分）が期待をできるものであるとの認識がないことや、障害を持った人が行える行動様式について他者・社会が認識をしていなければ、肯定的なサポートや肯定的な期待感を寄せることは困難である側面があるといえる。

つまり、障害を持った人は障害経験による価値を持った人としての地位（社会集団における立場、身分）にあること、そしてその地位（社会集団における立場、身分）を他者・社会が認識をしていることで、他者・社会からの肯定的サポートや肯定的な期待が生まれ、障害を持った人がその期待を受け入れることで内的期待が高まり、役割獲得に至るといえるのではないだろうか。

４．作業療法士が行う役割獲得に向けた支援方法について

ここまでは、障害を持った人の役割獲得について、外的期待が低いことで内的期待が高まらず役割を獲得することが困難になるという視点と、低い外的期待に照準を合わせず内的期待を高めることで役割獲得が可能となるという視点に立ち考察を行ってきた。そして考察の中から、障害を持った人と他者・社会それぞれの立場において、障害を持った人が役割を獲得するために必要な視点がみえてきた。

そこで、作業療法士が行う役割獲得に向けた支援方法についての考察を行うために、前述してきた障害を持った人が役割を獲得するために必要な視点を、作業療法士が行う役割獲得に向けた支援に必要な視点（図 17）として示した。

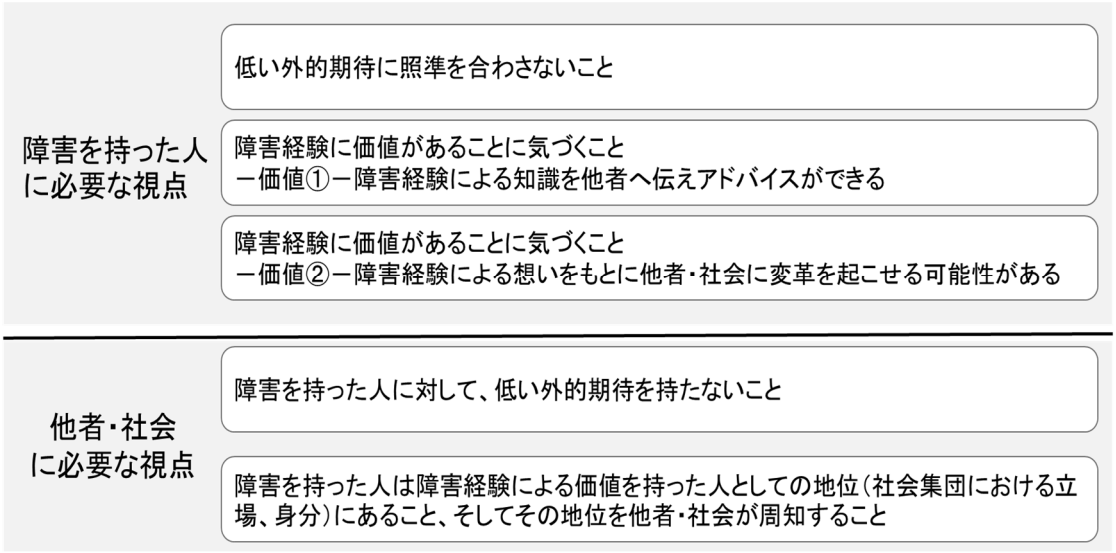


図１７．作業療法士が行う役割獲得に向けた支援に必要な視点

ここからは、作業療法士が行う役割獲得に向けた支援に必要な視点（図 17）をみながら、以下に考察をすすめる。

１）障害を持った人が役割を獲得するために、作業療法士が行う障害を持った人に向けた支援について

障害を持った人が役割を獲得するために、作業療法士が行う障害を持った人に向けた支援としては、障害を持った人が低い外的期待に照準を合わせないように支援をすること、障害を持った人が障害経験に価値があると気づけるように支援をすることではないだろうか。

前述の通り、外的期待に反映をされる規範とは、行動や判断の基準（大辞林，1988）であることから、外的期待が低くなる背景には、社会や組織が持つ判断基準や、個人、あるいは個人間の関係性の上に生成された判断基準があるといえる。つまり、低い外的期待に照準を合わせないように支援をすることとは、この社会や組織が持つ判断基準や、個人、あるいは個人間の関係性の上に生成された判断基準に合わせないように支援をすることになる。

C 氏は、「離れて行くっていうか、自然に関係が違ってくるので、お互い合わせるのも、無理するのも、無理しなくていいんじゃないって逆に思っちゃうんですよね」と、【健常者とは無理に合わせなくても良い（C3)】、【脊髄損傷者への支援についての考え方が健常者と脊髄損傷者とで違う（G5)】との認識を持つようになる。つまり、外的期待の低下を感じながらも、健常者とは考え方が違うのだから無理に健常者とは合わせなくても良いと想えたことで、外的期待に合わせずに済んだのだといえる。

このように、低い外的期待に悩む障害を持った人を作業療法士が支援する際は、決して健常者と障害を持った人の考え方の全てを分けるのではないことを前提に置いた上で、障害を持った人の考えや想いは健常者には分からないのだから、健常者の考えに無理に合わせる必要はないことを伝えると良いのではないだろうか。その上で、その健常者の考え方の違いには価値があることを伝えることで、低い外的期待に照準を合わすことなく内的期待を高めることに繋がるのではないだろうか。

さらに障害を持った人が障害経験に価値があると気づけるように支援をすることについては、障害経験による知識を他者へ伝えアドバイスができること、障害経験による想いをもとに他者・社会に変革を起こせる可能があることを、障害を持った人に伝えることだといえる。

障害経験による知識を他者へ伝えアドバイスができることとは、障害を持った人・障害を持った人の家族・一般の人に、障害経験により得た知識や情報をもとに種々のアドバイスができることだといえる。そこで、作業療法士が障害を持った人が障害経験に価値があると気づけるように支援をする方法として考えられることは、障害を持った人がアドバイスをできる環境を創造することではないだろうか。この環境とは、患者会をはじめとした、障害を持った人同士やその家族が交流できる場であったり、A 氏・E 氏・F 氏らのように一般の方や医療関係者に講演する場が挙げられる。またデイサービス等であれば、サークル活動を創造し、臼田（2003）のように、片麻痺者で調理を行えるようになった経験を活かして、他の片麻痺者に自身が獲得した調理方法を教示する環境等を提供すると良いのではないだろうか。

次に、障害経験による想いをもとに他者・社会に変革を起こせる可能があることとは、E 氏が、「障害者にとって住みやすい街にするってことは、高齢者だったり、怪我している人だったり、子育て中の両親だったりとか、そういう怪我している人とか、誰にとっても住みやすい街になるってことだなと想う」と想うことから、NPO の活動を通じて、バリアフリーの社会の実現に向けた発信をしたいと考えていること等、障害を持った人の想いを他者・社会に伝えることで、障害を持った人や、その周囲の人が、より生活をしやすい社会に変えていけることだといえる。そのために作業療法士が出来る支援とは、障害を持った人の想いを汲み取り、その想いを社会に発信する関わりを持つこと、つまりは障害を持った人の想いを発信できる活動の創造や支援を行うことではないだろうか。

2） 障害を持った人が役割を獲得するために、作業療法士が行う他者・社会に向けた支援について

障害を持った人が役割を獲得するために、作業療法士が行う他者・社会に向けた支援としては、他者・社会が障害を持った人に対して、低い外的期待を持たないこと、障害を持った人は障害経験による価値を持った人としての地位（社会集団における立場、身分）にあること、そしてその地位（社会集団における立場、身分）を他者・社会が認識できるように支援をすることがあるのではないだろうか。

これらを支援するためには、社会が持つ障害に対する否定的な価値を変えなければならない。しかし、その社会が持つ障害に対する否定的な価値を変えることは容易ではないことから、他者・社会が障害に対する肯定的な価値を認識するために、まず作業療法士は障害を持った人が障害経験の価値を見つけ出す支援を行い、役割に結びつけていくことで、次第に社会全体が有する障害に対する否定的な価値を肯定的な価値に変えていくことが重要ではないだろうか。実際に F 氏は、障害経験による役割として行った講演を聞いた看護部の先生から、「当事者としての F さんが言ったから、サラッと入っていたと想います」、「障害者って結構、被害者じみてるじゃないですかっていうのを、私達が言ったら大問題だけど、F さんはそういう経験があってのことだから、そこって当事者セラピストのストレングスなんですかね」と言われ、患者の経験があることでの発言を認められており、障害に対して肯定的な価値があることを社会から認められている。

このようなことから、作業療法士には、障害を持った人の障害経験による価値を見出し、役割に結びつける支援を行うことで、社会全体が障害に対して肯定的な認識を持てるようになること、そしてその結果、障害を持った人に対して低い外的期待を持たない社

会、つまりは障害経験による価値を認識した社会となることで、障害を持った人が豊かに暮らせる社会となることを目指すことが望まれるのではないだろうか。

５．障害を持った人が充実感を持って生活をするために、障害経験を活かした役割を行うことが一つの方法として良いのではないか

結果から、障害経験を活かした役割を獲得した後においても、障害経験を活かした役割を通じて障害に対する肯定的な認識を持つことができていた。そしてその内容は、【障害のある自分に存在価値を感じる（A12)】、【障害をブランドとして売りにしている（E17)】、【義足使用者になったことで得られた生きがい感（D8)】がある、【障害を負ったことによって出来た人間関係がいっぱいある（E18)】、【怪我が自分の役に立っている（G11)】、【波乱万丈の人生は楽しい（G3)】、【視覚障害があることで自分の話に説得力があるとプラス面を感じるようになってきたことに自分でも驚いている（H17)】と、障害を持ったことで得られたことがあるとの内容であった。つまりは、障害経験を活かした役割を通じた効果には、否定的な認識となりやすい障害に対して肯定的な認識が持てるだけではなく、障害を持った人としての生活においてある種の充実感を得られることがあるのではないだろうか。

また獲得をした役割を通じて、【患者やセラピストの役に立ちたい（A10)】、【脊髄損傷者に情報を伝えたい（C8)】、【より良い車椅子を提供したい（C9)】、【楽しいことがやりたい（E9)】、【患者の経験値や困っていることを通訳して医療界に伝えたい（F11)】、【ピアサポートを通じて生活や社会におけるサポートをしたい（F12)】と、今後に向けた更なる希望を抱くことができていた。つまりは、障害経験を活かした役割を通じた効果には、その場だけの充実感に留まるのではなく、今後の役割においても挑戦したいことがあると、障害を持った今後の自分に対して希望を持てることがあるのではないだろうか。

このように、障害経験を活かした役割には、障害を肯定的に捉えられることに加え、障害を持った人としての生活において充実感を得られることや、障害を持った今後の自分に対して希望を持つことがきると考えられることから、障害を持った人が現在そして未来に対して充実感を持って生活をするための方法として、障害経験を活かした役割を持つことが一つの方法として良いのではないだろうか。

６．リハビリ職の経験のある人と、リハビリ職の経験のない人とで分けた障害経験を活かした役割の獲得の特徴から

リハビリ職の経験がある 4 名のうち 3 名の障害経験を活かした役割に講演活動があった。この講演活動の役割を通じて関わる人は、医療業界の人、学生、患者、家族、一般の人と対象の幅が広いといえる。この背景には、障害経験に加えてリハビリ職の経験があったからではないだろうか。なぜなら、【当事者の気持ちや経験をセラピストの視点に変えて話すことが自分にできる OT（E13)】等、障害経験とリハビリ職の双方の経験を踏まえたことで、障害に関する新な視点を持つことができ、どちらかの経験しかない人やその周囲の人が持ち合わせない情報を発信したいと考えたからであるといえる。また、当然ではあるが、リハビリ職は障害を持った人と関わる職種であり、リハビリ職の経験と障害経験は結びつきやすい。言い換えれば、リハビリ職の経験、もしくは医療や介護職としての経験があることで、障害経験を活かし易くなるいといえるのではないだろうか。

一方、リハビリ職の経験のない 4 名のうち 3 名は、前述のリハビリ職の経験がある人とは異なり、障害経験のみを活かした役割といえる。この場合、役割の種類や数が限定的になってしまうのではないだろうか。つまり、障害経験を活かすだけでは、障害を持った全ての人が獲得できるだけの役割の数には限りがあるといえる。

このように、障害経験だけを活かした役割にはその種類や数に限りがあるが、他方で障害経験を活かした役割の獲得に繋がる他の経験があることが考えられる。本研究の限界に通じることであるが、この他の経験について等、障害経験を活かした役割に関する更なるデータを収集することで、障害を持った人の多くが役割を獲得できるように、今後は障害経験を活かした役割の種類についての検討が必要であると考える。

７．本研究の限界

本研究は、質的研究法を研究デザインとして採用し、障害経験を活かした役割獲得の過程を明らかにするために、8 名の障害を持った人のインタビュー調査を行い、役割獲得の過程の仮説生成を行った。しかし、事例数が 8 名であったこと、対象者の障害種別についても全員が身体障害をもった人であり、精神障害や発達障害など、他の障害は対象ではなかったため、データに偏りがある。

また、A 氏、B 氏、E 氏、F 氏の 4 名は、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士のいずれかのリハビリ職の経験者であり、発症前から障害を持った人の生活を支援する経験があったことになる。これにより障害を持つことや障害を活かすことに対して、肯定的な認識を持ちやすい傾向にあったと考えられる。また、C 氏、D 氏、G 氏、H 氏が獲得した障害

経験を活かした役割については、自身と同じ障害を持った人をサポートする役割であり、役割の内容は限定的であるといえる。そのため、今後、さらに、データ数を増やしつつ、障害種別や年齢、発症時期、障害程度、役割の内容、発症前の経験等から、幅広くデータを収集し、仮説の精度を高める必要がある。

特に、筆者が臨床で対象としている高齢者については、本研究の結果をそのまま適用することには限界があると考えている。なぜなら、本研究の事例は、多くが講演活動や相談業務など、主体的で積極的な役割活動をしており、意欲や活動性の低下が見られるようになる高齢者には適用が難しいと考えるからである。今後、本研究結果をヒントにしつつ、障害経験を活かした役割獲得の方法を臨床において模索し、事例検討を積み上げていくことで、本研究結果の一般化が目指せると考える。

第５章　結論

障害経験を活かした役割の獲得に至る過程を明らかにすることを目的とし、障害経験を活かした役割を持つ 8 名の方を対象に、障害を持つ以前の生活から障害経験を活かした役割獲得に至るまでの語りを聴取し分析を行った。

分析の結果、障害経験を活かした役割の獲得に至る過程において、以下の事項が明らかになった。

１．役割に対する否定的な認識が役割に対する願望や肯定的な認識に変化し役割の獲得に至る
２．障害に対する否定的な認識が障害に対する願望や肯定的な認識に変化し役割の獲得に至る
３．肯定的なサポートや期待感が役割や障害に対する肯定的な認識へ影響を与えていた
４．サポートが無いことや否定的な期待感が役割の獲得の阻害要因になっていた
５．他者・社会との摩擦が、他者・社会への願望や他者・社会との肯定的な関係に変化していた

以上の知見から、低い外的期待に照準を合わさないこと、低い外的期待や障害に対する否定的な認識の影響を受けずに内的期待を高めることで、障害を持った人が役割を獲得できることが提案された。また内的期待を高めるには、障害をもったことによる経験そのものに価値があると気づけること、他者・社会からの肯定サポートや肯定的な期待感を受けることが必要であることが提案された。障害を持ったことによる経験の価値とは、障害経験による知識を他者へ伝えアドバイスができることや、障害経験による想いをもとに他者・社会に変革を起こせる可能性があることだと考えた。

作業療法士が障害を持った人の役割獲得に向けた支援を行う際は、障害を持った人の障害経験による価値を見つけ出し、役割に結びつける支援を行うことが望まれると考えた。

そしてその結果、社会全体が障害に対して肯定的な認識を持てるようになることで、障害を持った人に対して低い期待を持たない社会、つまりは障害経験による価値を認識した社会となることで、障害を持った人が豊かに暮らせる社会となることを目指すことが望まれると考える。

そして、障害を持った人が充実感を持って生活をするために、障害経験を活かした役割を持つことが一つの方法として良いのではないかと考えた。

謝辞

ご多忙中の中、障害経験という語り辛い内容であるにも関わらず、インタビューに快く応じてくださった皆様、そして、インタビューに協力下さる方をご紹介下さいました皆様には心から御礼申しあげます。

本研究を進めていくにあたり、時に暖かく、時に厳しく、最後まで貴重なご助言を下さいました、聖隷クリストファー大学大学院リハビリテーション科学研究科地域作業療法開発学領域 教授 田島明子先生、同じゼミで共に学んだ岩田裕美様に心から感謝いたします。

また、常に応援をしてくれた家族、暖かく見守ってくださった職場の皆様に心から感謝いたします。

文献

安藤喜久雄、児玉幹夫：わかりやすい社会学－一問一問.学文社,1990.

B.Rosaline Johanna Miller,KayW.Sieg,Ferol Menks Ludwing,Susan Denegan Shortridge,Julia Van Deusen.Aspen publishers.Inc,1988.（＝岩崎テル子監訳：作業療法実践のための 6 つの理論－理論の形成と発展.協同医書出版,1995.p165）

Erving Goffman：Stigma Notes on the Management of Spoiled Identity,Prentice-Hall,Inc,1963.（＝石黒毅訳：スティグマの社会学－烙印をされたアイデンティティ.せりか書房,2001）

岩田若子：「役割」概念の再検討－E,Goffman における役割距離の合意.慶応技術大学大学院社会学研究科紀要.NO.28.11-21,1998.

Heard C : Ocuupational role acquisition-a paerspective on the chronically disabled.Amer J Occup Ther 31.243-247,1977.

一般社団法人 日本作業療法士協会：作業療法ガイドライン実践指針（2013 年度版）

石渡和美：「当事者主体」の視点に立つソーシャルワーク―はじめて学ぶ障害者福祉.みらい,2007,p58.

萱間真美：質的研究実践ノート－研究プロセスを進める clue とポイント.医学書院,2007.

Kielhofner G：A Model of Human Occupation Theory and Application Fourth ed.Philadelphia：The F.A.Davis,2009.（＝山田孝監訳：人間作業モデル.第 4 版.協同医書出版社,2012,p56,p65）

小林幸治 : 脳卒中患者は社会的・家庭内役割変化の程度によって主観的回復の回復プロセスに違いがあるか.日本作業療法学会抄録集 47th.35-35,2013.

厚生労働省：平成 27 年度介護報酬改定に関する審議報告 社会保障審議会介護給付費分科会（平成 27 年 1 月 9 日）. http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/0000070816.html＜URL：アクセス日.20160309＞

松村明：大辞林.三省堂,1989,p604,p1528,p2427.

宮前珠子、水流聡子：自我の三次元モデルによる作業と役割の理解.作業療法 16 巻 5 号.192-196,1997.

N.Abercrombie,S.Hill,B.S.Turner：THE PENGUIN DICTIONARY OF SOCIOLOGY. Penguin Books,2006.（＝丸山哲夫監訳：新版新しい世紀の社会学中辞典.ミネルヴァ書房,1996.p136）

Talcott Parsons : The Social System.Quid Pro,LLC,1951（＝佐藤勉訳 : 社会体系論.青木書店,1974）

上田敏：障害の受容－その本質と諸段階について：総合リハ,8 巻第 7 号,515-521,1980.

梅崎敦子：役割再獲得が成功するための要因－一症例の検討.日本作業療法学会抄録集 35th.399,2001.

臼田喜久江：なんでもできる片麻痺生活のくらしが変わる知恵袋.青海社,2003.
吉川ひろみ・宮前珠子・水流聡子・石橋陽子・近藤敏：作業療法における役割概念.作業療法 19 巻 4 号.305-314,2000.

資料

１．研究協力依頼文書（対象者様用）
２．同意書（対象者様用）
３．同意者（研究者用）
４．インタビューガイド

資料１．研究協力依頼文書（対象者様用）

研究協力のお願い

対象者様 宛

研究テーマ：障害を持った人の役割獲得に向けた支援方法についての一考察
―障害経験を活かした役割を持つ人へのインタビューを通じて―

今回、上記研究テーマに関するインタビュー調査を行いたいと考えております。下記の本研究に関する確認事項をお読み頂き、ご協力が頂ける場合には、同意書に署名を頂きたく、よろしくお願い申し上げます。

1.研究の目的・意義

障害をもった人にとって、障害が生じたことによる役割の喪失は、心理面への影響のみならず人生へも大きく影響するため、作業療法において、障害をもった人が役割（＊1）を獲得していくことは治療の対象となっています。予備研究より、「障害経験（＊2）を活かした役割の創造」が、障害当事者にとって自己効力感を持てる最良の方法であると考えました。そこで本研究では、「障害経験を活かした役割活動」に至った人を対象とし、障害を持つ以前の生活からはじまり、障害を持ち、障害経験を活かした役割活動に至るまでをインタビュー調査させて頂き、その結果を分析することで、「障害経験を活かした役割の創造」に至る過程を明らかにし、障害を持った人の役割獲得の支援方法についての考察を行うことを目的としています。

用語の定義

＊1 役割：社会集団の地位に応じて期待されて行う行動様式(大辞林,1989)

＊2 障害経験：疾病等により身体や精神に障害を持つことで経験する、身体的・精神的経験

2.研究の方法・手順について

データの収集方法については、インタビューガイド（資料 1）を基にして、半構造的面接法による個別インタビュー調査を実施します。インタビュー内容は IC レコーダーにて音声を録音します。また筆記による記録も併せて行います。分析方法については、録音した音声の逐語録を作成した後、逐語録を比較検討し、本研究の目的に沿ってデータ抽出や概念化を行い、「障害経験を活かした役割の創造」に至る過程を明らかにします。

研究期間については、倫理審査承認後から研究を開始し、平成 30 年 3 月までを研究期間とします。

3.対象者への予測される利益・不利益について

予測される利益としては、ご希望の場合、本研究の結果をお送りさせていただきます。

予測される不利益には次の 3 つがあります。①障害のご経験について伺うため、プライバシー保護の問題、②ご自身の経験をお話しなさることの精神的負担感、③1 時間程度の時間拘束による身体的負担感です。

4.予測される不利益に対する安全対策について

上記①につきましては、音声の録音、音声データの逐後録化、筆記による記録を行いますが、研究データにつきましては。研究の目的以外では一切使用せず、研究中、また、研究成果の公表にあたり、個人が特定できないような記載を行い、研究終了後は 5 年間保存後、廃棄をいたします。上記②につきましては、話したくない内容を無理にお話しされる必要は全くありません。上記③につきましては、インタビュー時間は最大 1 時間以内となるよう配慮をいたします。またインタビュー途中であってもお申し出により中止をいたします。

5.参加は本人の自由意志であることについて

本研究の参加は自由意志でお決めください。

6.同意した後でも、同意を撤回できることについて

同意を頂きました後でも、その同意を撤回し研究の参加を中止することが可能です。

7.個人情報・プライバシーが守られていることについて

・インタビュー調査時の個人のプライバシー保護の方法として、プライバシーが守られる個室の環境でインタビュー調査を実施します。
・研究中の研究データの取り扱いについては、研究責任者の所有するインターネット環境に接続不可能な PC にて保管し、研究作業を行います。そのパソコンには ID とパスワードを設定します。
・研究終了後の研究データは、申請者の所有するインターネット環境に接続不可能で ID とパスワード設定を行った PC にて 5 年間保存後、破棄します。また筆記にて記録した紙媒体のデータについては 5 年間の保存後、シュレッダーにて破棄をします。録音データについては 5 年間の保存後、破棄をします。

8.研究結果の公表について

なお本研究の研究結果は、平成 30 年 3 月の修士論文にて提出し、またその後、関連学会、関連する学術雑誌にて公表する予定です。

公表に際して、匿名化して記述し、個人および関係施設が特定されないよう配慮します。

9.研究について自由に質問できること

どのような点でも、ご納得いくよう自由に質問をして頂けます。また、本研究の結果をご希望の方にはお渡しします。

問い合わせ先
所属：聖隷クリストファー大学　リハビリテーション科学研究科
研究責任者氏名：神田太一
携帯電話番号：〇〇〇-×××-△△△△

資料２．同意書（対象者様用）

対象者様用

同　意　書

研究テーマ：障害を持った人の役割獲得に向けた支援方法についての一考察
―障害経験を活かした役割を持つ人へのインタビューを通じて―

１．　研究の目的・意義
２．　研究の方法・手順（使用機器の説明を含む）
３．　対象者への予測される利益・不利益（心身の負担）
４．　予測される不利益に対する安全対策
５．　参加は本人の自由意志であること
６．　同意した後でも、同意を撤回できること
７．　個人情報・プライバシーが守られること
８．　研究結果の公表について
９．　研究について自由に質問できること

会話の録音　　□同意します　　□同意しません

私は上記内容について、＿＿＿＿から説明を受けて納得し了承しましたので、この研究に参加することに同意します。

対象者（署名）　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
代諾者（署名）　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
署名年月日　　平成　　年　　月　　日

私は本研究について上記項目を説明し同意が得られたことを認めます。

説明者（署名）　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
説明年月日　　平成　　年　　月　　日
研究者（署名）　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
署名年月日　　平成　　年　　月　　日

資料３．同意書（研究者用）

研究者用

同　意　書

研究テーマ：障害を持った人の役割獲得に向けた支援方法についての一考察
―障害経験を活かした役割を持つ人へのインタビューを通じて―

１．　研究の目的・意義
２．　研究の方法・手順（使用機器の説明を含む）
３．　対象者への予測される利益・不利益（心身の負担）
４．　予測される不利益に対する安全対策
５．　参加は本人の自由意志であること
６．　同意した後でも、同意を撤回できること
７．　個人情報・プライバシーが守られること
８．　研究結果の公表について
９．　研究について自由に質問できること

会話の録音　　□同意します　　□同意しません

私は上記内容について、＿＿＿＿から説明を受けて納得し了承しましたので、この研究に参加することに同意します。

対象者（署名）　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
代諾者（署名）　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
署名年月日　　平成　　年　　月　　日

私は本研究について上記項目を説明し同意が得られたことを認めます。

説明者（署名）　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
説明年月日　　平成　　年　　月　　日
研究者（署名）　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿
署名年月日　　平成　　年　　月　　日

資料４．インタビューガイド

１．インタビューガイド

1）障害を活かした役割を獲得する前について
・障害を持った時、その障害についてどのように感じましたか
・発障により失ってしまった役割はありますか
・発障により失ってしまった役割がある場合、失ったことをどのように感じましたか

2）障害による認識の変化について
・発障によって、貴方が貴方自身に対する期待に変化はありましたか
・発障によって、社会が貴方に対する期待に変化はあったと思いますか
・発障によって、社会が貴方に対する期待に変化があった場合、変化をどのように感じましたか

3）障害を活かした役割の創造について
・障害を活かした役割を始めた理由は何ですか
・障害を活かした役割に貴方が期待するものは何ですか
・障害を活かした役割を獲得した後、社会が貴方に対する期待に変化はありましたか

4）障害観について
・障害を活かした役割における障害の価値について、貴方はどのように考えますか
・障害を活かした役割活動をする以外で、普段、貴方にとって障害の価値はどのようなものですか

２．インタビューの方法

１のインタビューガイドをもとに、半構造的面接法にてインタビュー調査を行う。

３．記録方法

音声録音とともに、備忘録として発言の記録を筆記にて取る予定である。

用語の定義
役割：社会集団の地位に応じて期待されて行う行動様式(大辞林,1989)
障害経験：疾病等により身体や精神に障害を持つことで経験する、身体的・精神的経験